

第24図 集石22号

集石22号 (第24図)

H-12区のVb層上面で検出された。礫は約170×100cmの範囲に広がっており、密度はあるが特に集中する部分はない。構成礫は57個で、1点が凝灰岩で、他はすべて砂岩である。平均の重さは157gであり、掘り込みはみられず、小型の破碎礫は高さもほぼ均等である。炭化物や遺物は出土していない。

集石23号 (第25図)

H・I-12・13区のVb層上面で検出された。礫はほぼ300cm四方に円形に散在しており、すべての集石の中で一番広がりがあるが、特に集中している部分はない。構成礫は124個で、すべて砂岩である。平均の重さは98gであり、多くが100g以下で、小型の破碎礫を主体とする。掘り込みはみられない。炭化物は出土しておらず、土器は3点出土している。

29は深鉢の胴部で、外面に貝殻条痕文、内部にケズリの痕がみられる。

集石24号 (第26図)

H-13区のVb層上面で検出された。礫は約250×180cmの範囲に広がっており、特に集中している部分はない。構成礫は55個で、凝灰岩が3点で、他はすべて砂岩である。平均の重さは129gであり、円礫が破碎した小型のものが主体である。掘り込みはみられなかった。炭化物は出土しておらず、土器は1点出土している。

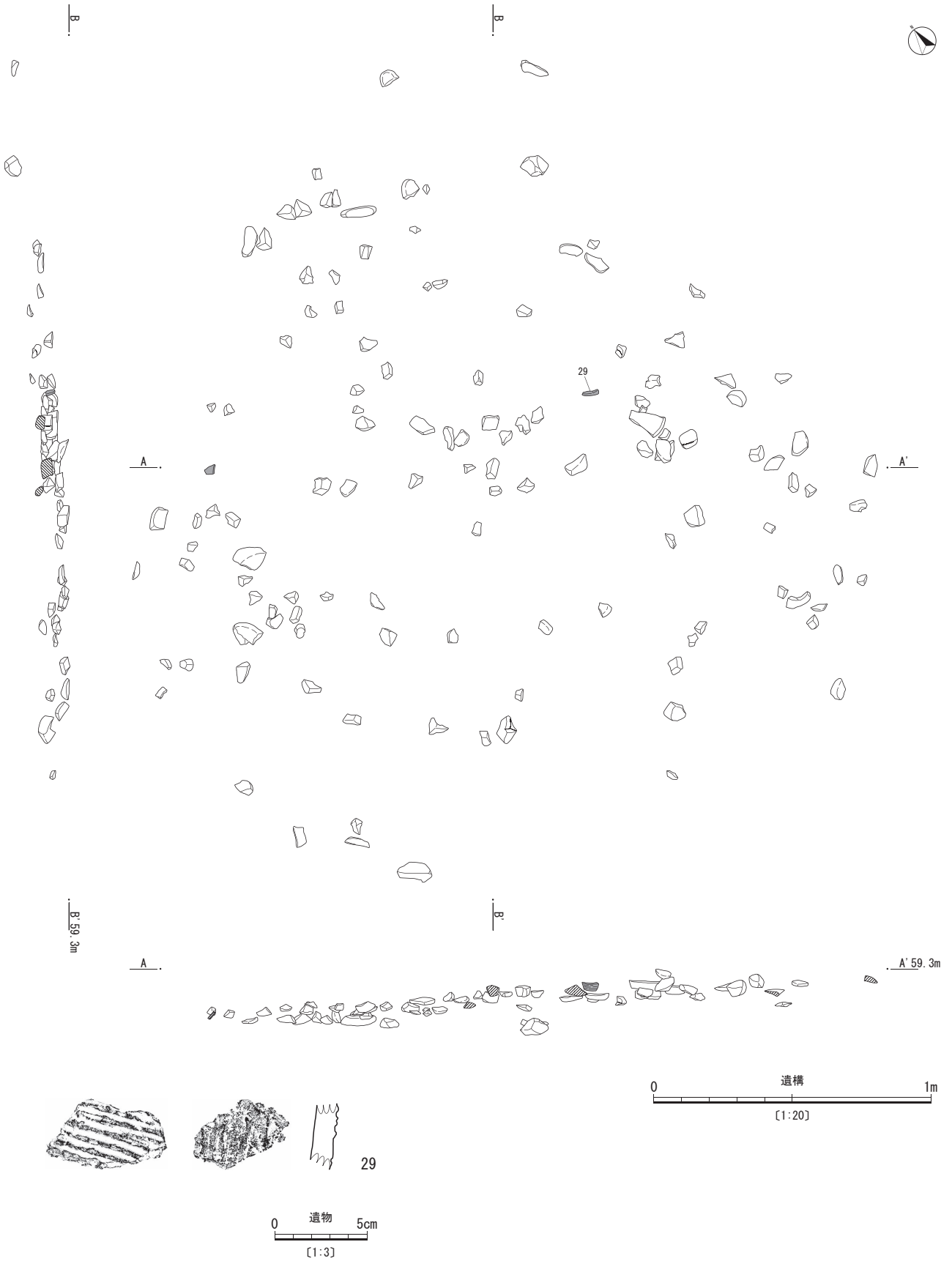
30は深鉢の胴部で、外面に斜方向の貝殻条痕文がみられる。

集石25号 (第27図)

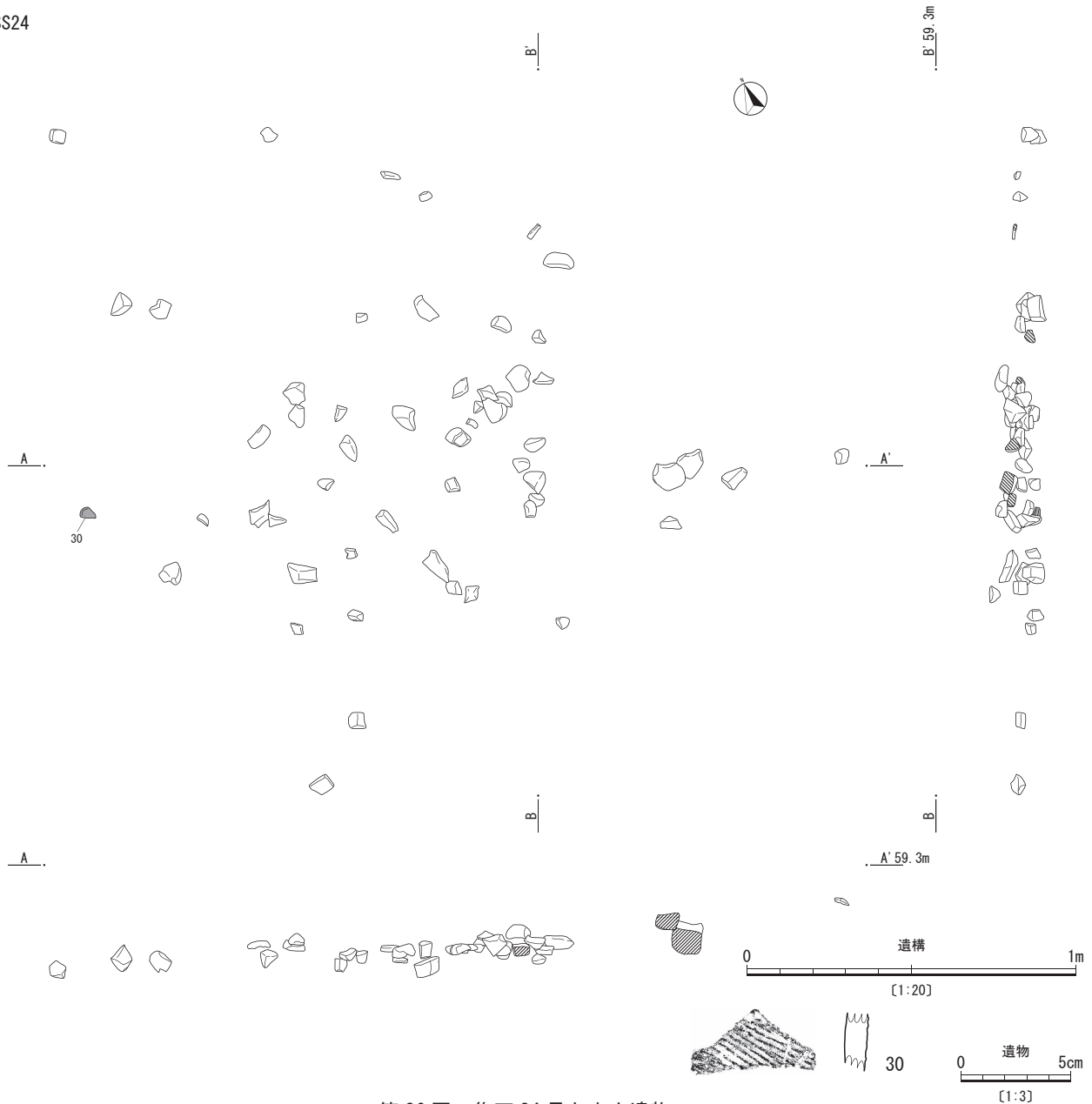
J-13区のVb層上面で検出された。礫は約280×170cmの範囲に広がっており、特に集中している部分はない。構成礫は72個で、凝灰岩が2点、花崗岩が1点で、他はすべて砂岩である。平均の重さは77gであり、100g以下の小型のものが主体である。赤色化し、被熱したと考えられる礫が半数以上を占める。炭化物は中心付近より1点出土している。

31は深鉢の胴部で、外面に斜方向の貝殻条痕文がみられる。

SS23



第 25 図 集石 23 号と出土遺物



第26図 集石24号と出土遺物

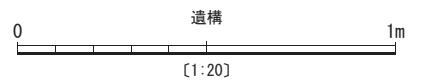
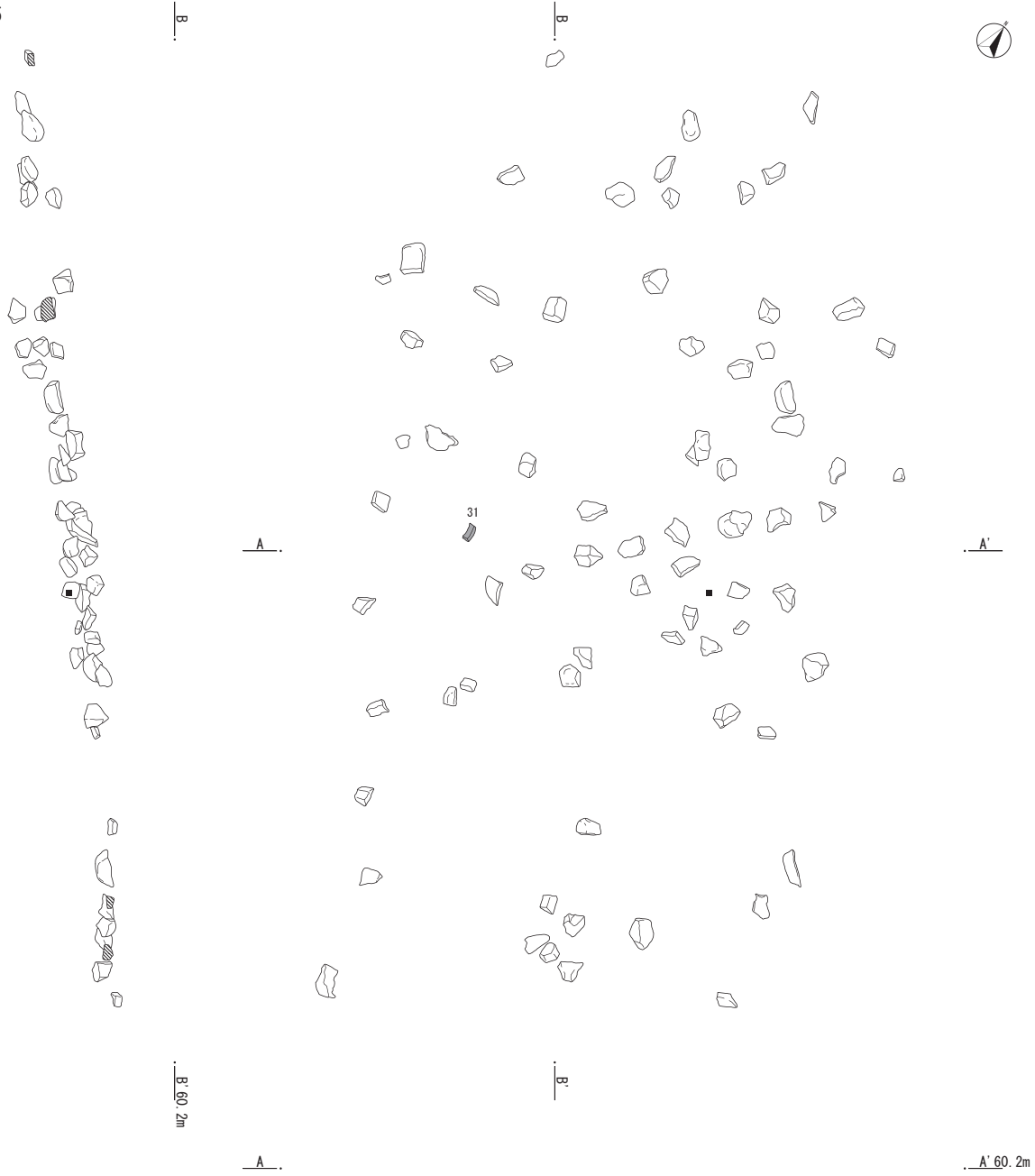
集石26号 (第28図)

I・J-13区のVb層上面で検出された。礫は約150×140cmの範囲に広がっており、特に中心部の約60×30cmに集中している。構成礫は30個で、頁岩が2点、凝灰岩が1点で、他はすべて砂岩である。角礫が破碎したものがほとんどで、赤色化したものも一部見受けられるが、明瞭な炭化物はみられない。平均の重さは90gであり、100g以下で小型のものが7割を占める。石材の構成比率や大きさ等が似ており、近いことから、集石25号と関連があると考えられる。土器等の遺物は出土していない。

集石27号 (第28図)

I・J-14区のVb層上面で検出された。礫は約250×200cmの範囲に広がっており、特に中心部の約60×60cmに集中している。中心部付近はわずかに凹むが、掘り込みはみられない。構成礫は115個で、頁岩が1点、凝灰岩が2点、安山岩が1点で、他はすべて砂岩である。角礫の破碎したものがほとんどで、赤色化したものや、ススの可能性のあるものが付着したものも一部見受けられるが、明瞭な炭化物は出土しなかった。平均の重さは60gであり、100g以下の小型のものが8割を占める。西側に集石28号が近接しており、石材の構成や大きさ等が似ており、関連があると考えられる。土器等の遺物は出土していない。

SS25

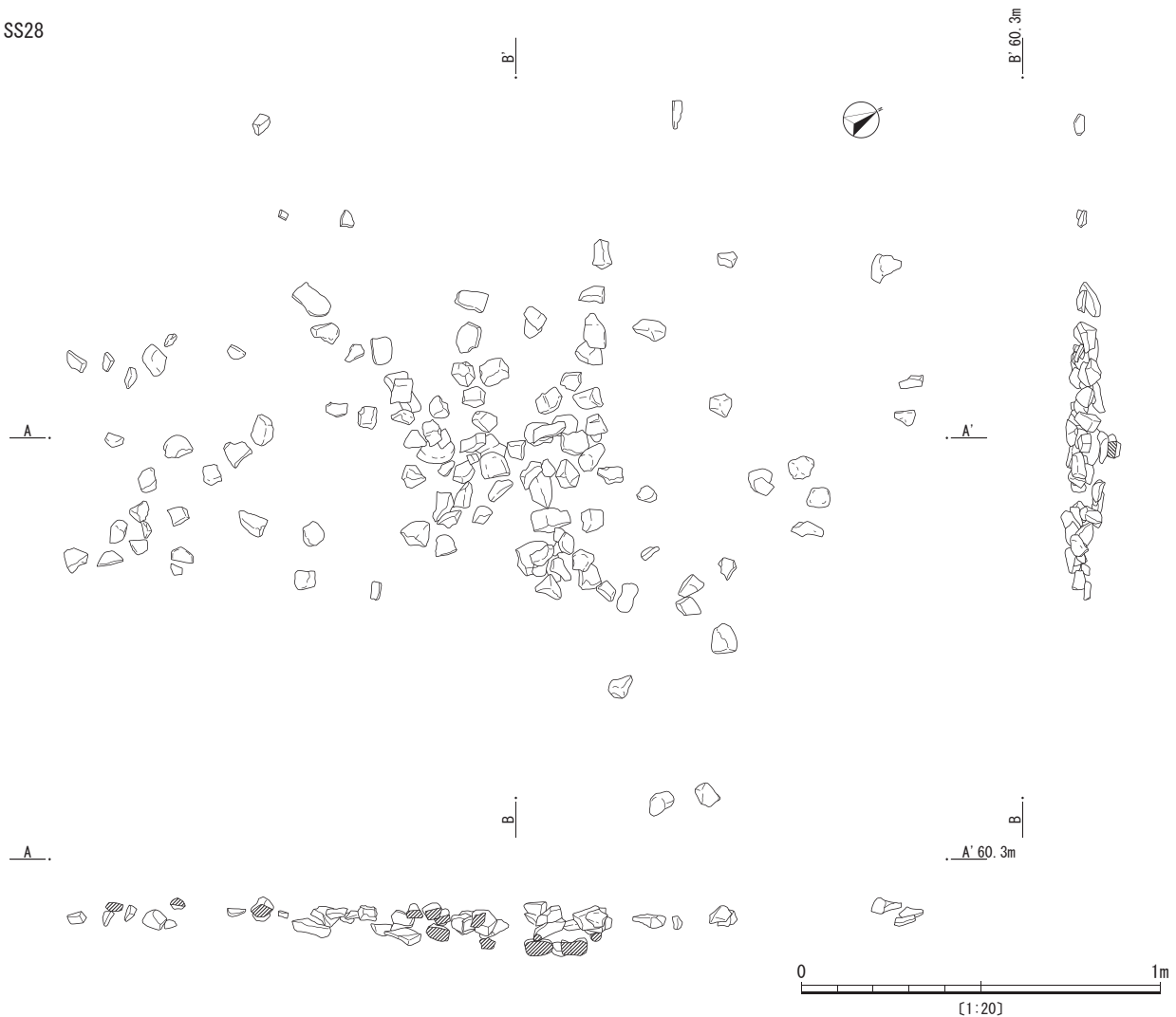


— 凡例 —
■ 炭化物

第 27 図 集石 25 号と出土遺物



第28图 集石26号・27号



第29図 集石 28号

集石 28号 (第29図)

I-14区のV b層上面で検出された。礫は約230×160 cmの範囲に広がっており、特に中心部の約50×50 cmに集中しているが、掘り込みはみられない。構成礫は119個で、頁岩が2点、凝灰岩が2点、安山岩が1点で、他はすべて砂岩である。角礫の破碎したものがほとんどで、約半数は赤色化している。炭化物は出土していない。平均の重さは84gであり、150g以下の小型のものが8割を占める。東側に集石27号が近接しており、石材の構成比率や大きさ等が似ており、関連があると考えられる。土器等の遺物は出土していない。

集石 29号 (第30図)

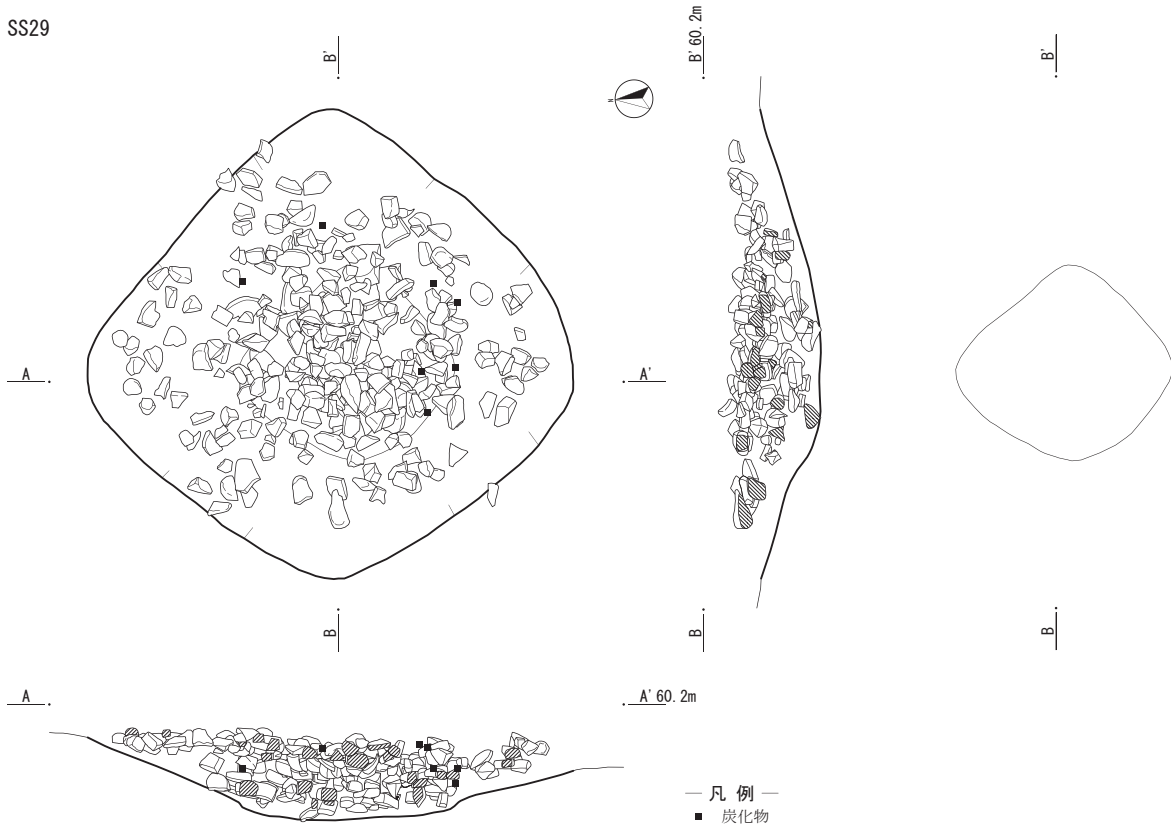
I-14区のV b層上面で検出された。礫は約110×100 cmの範囲に密にまとまっている。平面形や掘り込みは方形状となる。掘り込みの規模は検出面で100×100 cm、床面で50×50 cmであり、埋土は炭化物を含んだ、少量の黄色粒・白色粒を含む粘性の強い黒色土である。

構成礫は292個で、凝灰岩が2点、安山岩が2点、他はすべて砂岩である。平均の重さは51gであり、100g以下の破碎礫が9割を占める。炭化物は7点、礫間等より出土し、AMS年代測定を行ったところ、2σ暦年代範囲で7589calBC-7526calBC (95.4%)の結果が得られた。土器は出土していない。

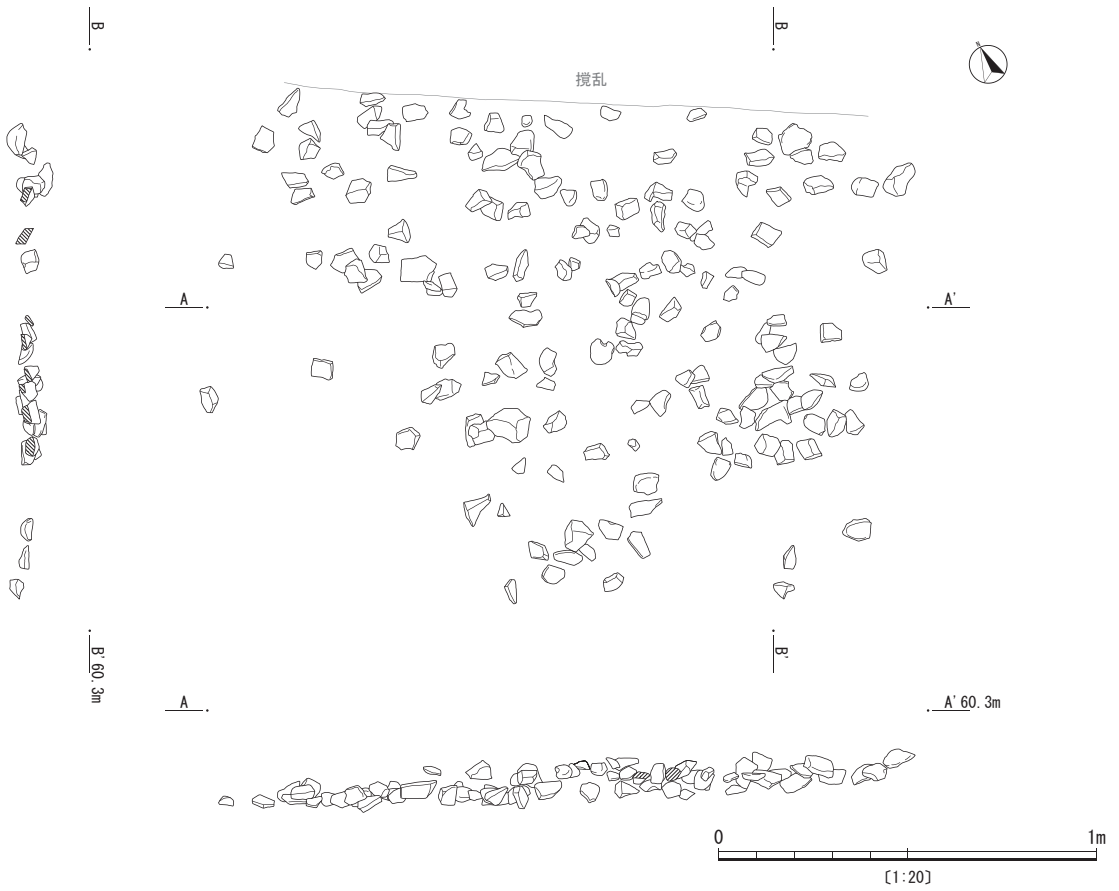
集石 30号 (第30図)

I-14区のV b層上面で検出された。東西方向に約200 cm、南北方向には約130 cm広がっているが、北側は攪乱を受けていたため、本来は更に広がりがあったものと推測される。礫が他の集石と比較して密である。掘り込みは検出されていない。構成礫は153個で、凝灰岩が1点、安山岩が2点で、他はすべて砂岩である。平均の重さは54gであり、角礫が破碎した小型のものがほとんどで、約7割は赤色化している。東側にある集石27～29号と近接しており、この付近は構成礫の数が多い集石が集中する。炭化物や遺物は出土していない。

SS29

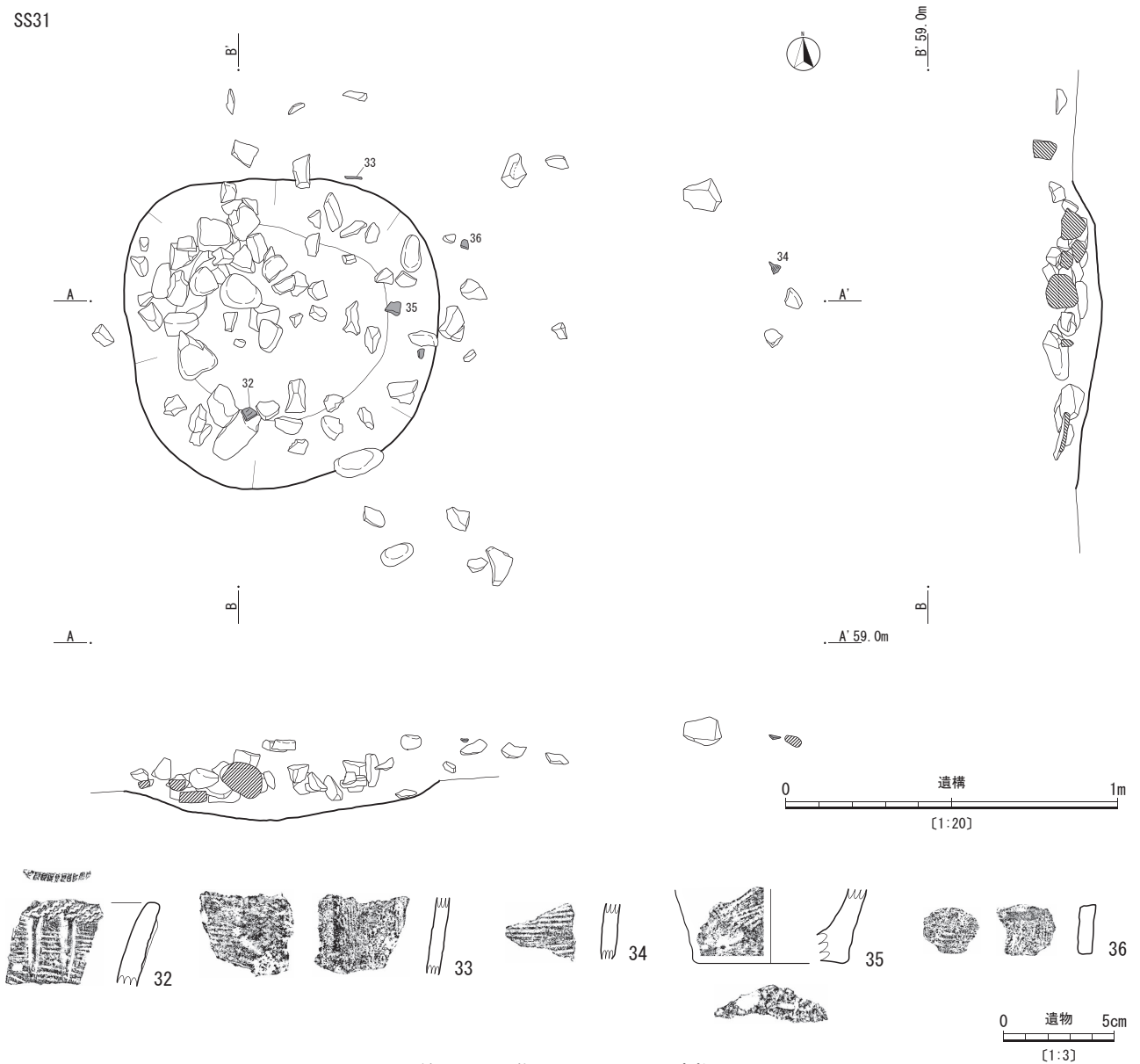


SS30



第 30 图 集石 29 号・30 号

SS31



第31図 集石31号と出土遺物

集石31号 (第31図)

F-15区のVb層上面で検出された。礫は約180×140cmの範囲に広がっている。礫の集中部には約80×80cmの隅丸方形を呈する掘り込みがみられ、埋土は白色粒・黄色粒や微細な炭化物を含む黒色土である。構成礫は81個で、すべて砂岩である。平均の重さは190gであり、円礫や垂角礫が破碎したものが主体を占める。明瞭な炭化物は確認されなかったが、土器が6点出土している。

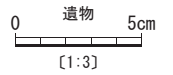
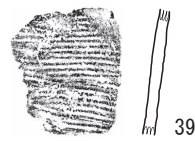
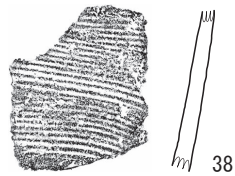
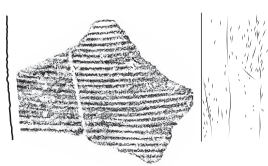
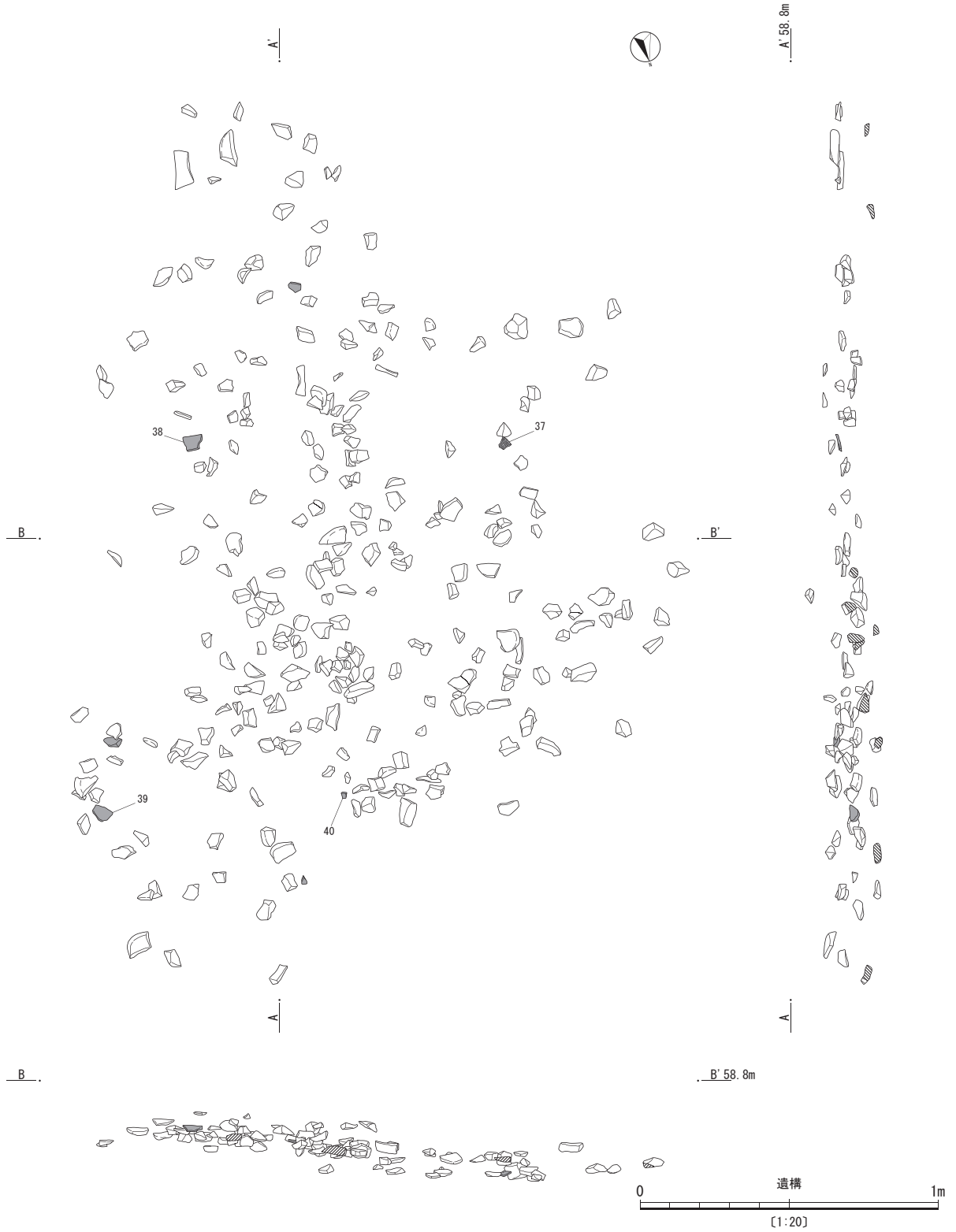
32～35は深鉢である。32は口縁部で、口唇部や口縁上端に貝殻刺突による刻み目が入り、その下に楔形突帯がみられる。33・34は胴部で、横方向の貝殻条痕が入る。35は底部で、外面は横方向にナデ、その上から貝殻条

痕を施している。36は胴部片を再利用した円盤形土製品である。

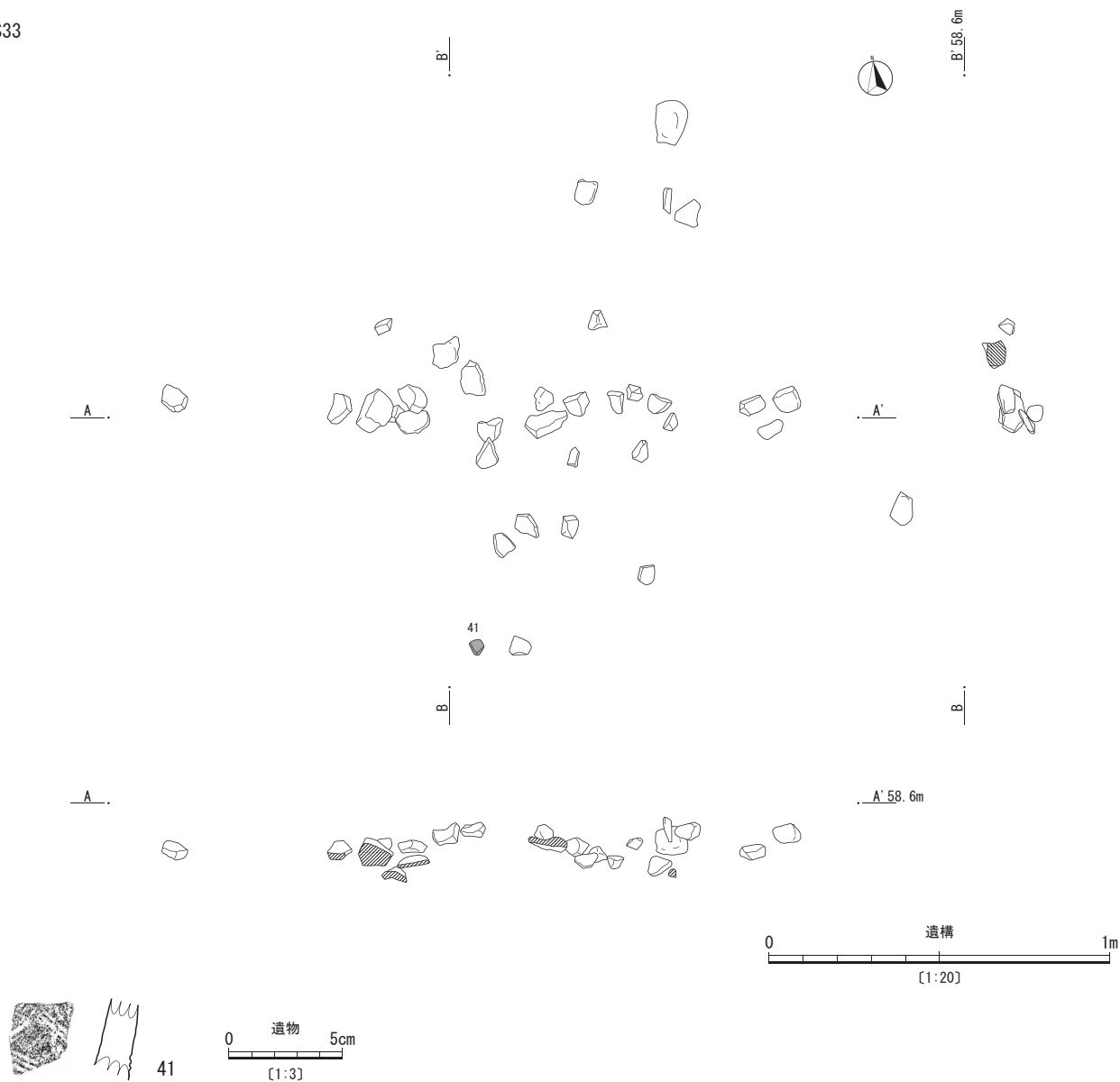
集石32号 (第32図)

F-15区のVb層上面で検出された。礫は約300×200cmの範囲に広がっている。礫が密になっている部分があるが、掘り込みはみられない。構成礫は254個で、すべて砂岩である。平均の重さは68gであり、200g以下の破碎礫がほとんどである。微細な炭化物は点在するが、明瞭なものは出土していない。集石31号に近接しており、関連があるものと考えられる。土器は7点出土している。

37～40はすべて深鉢の胴部であり、横方向の細かい貝殻条痕が施され、同一個体の可能性がある。



第32図 集石32号と出土遺物



第 33 図 集石 33 号と出土遺物

集石 33 号 (第 33 図)

E・F-17 区の V b 層上面で検出された。礫は約 200 × 140 cm の範囲に散在している。掘り込みはみられない。構成礫は 34 個で、すべて砂岩である。平均の重さは 136g であり、やや大きめの角礫もみられる。他の

集石と距離があるが、調査区西側境に近く、調査区外に関連する礫が広がる可能性がある。炭化物の出土はなく、土器が 1 点出土している。

41 は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕が施される。

(2) 土坑 (7基)

土坑1号 (第34図)

H-6区のVII層上面で検出された。唯一調査区北側の集石群近くに位置する。検出面における平面形は約75×65cmの正円に近い楕円形を呈する。深さは検出面より35cm程度で、床面は約55×40cmの楕円形となる。埋土は色調等からVI層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

土坑2号 (第34図)

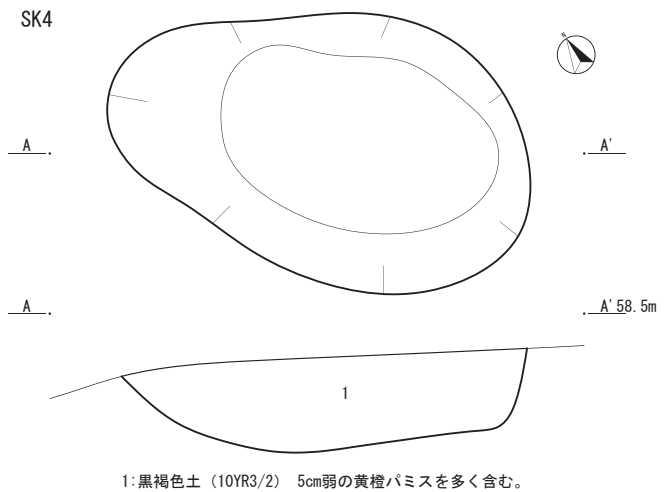
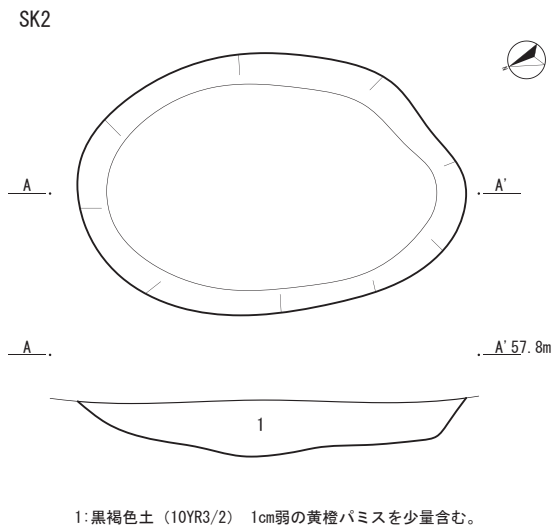
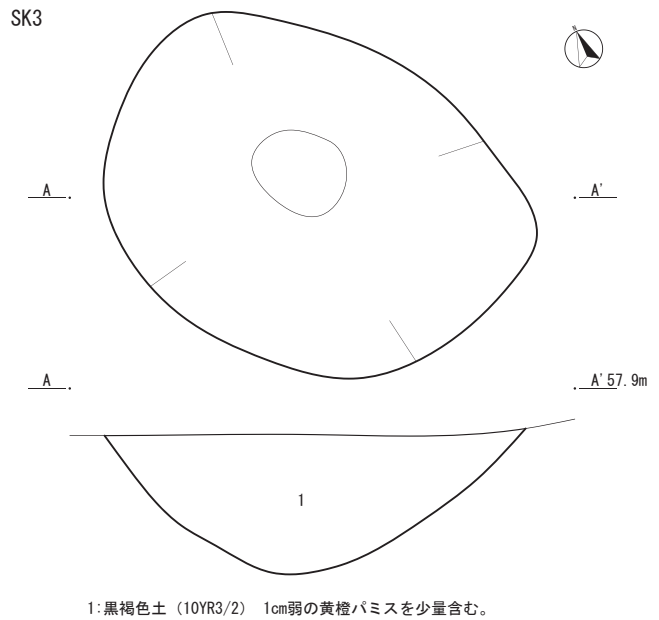
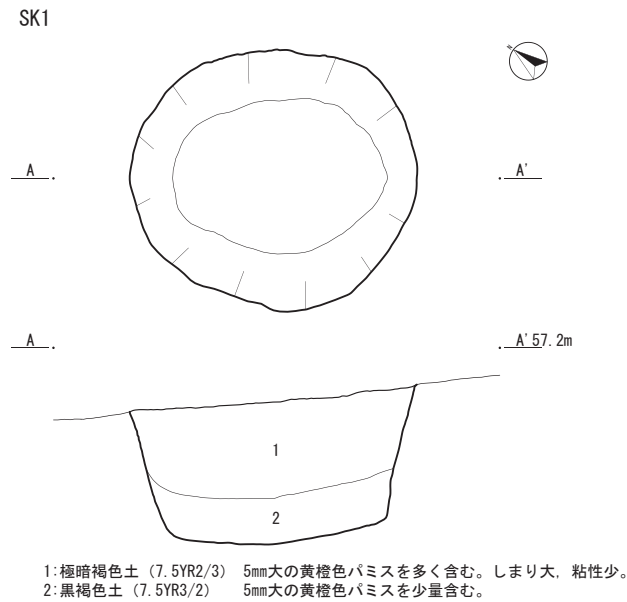
F-12区のVII層上面で検出された。集石18号の下位に位置しており、関連が考えられるが、礫等は出土していない。検出面における平面形は約100×70cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは15cm程度で、床面はやや凹凸のある楕円形となる。埋土は色調等からVI層土主体と考えられる。

土坑3号 (第34図)

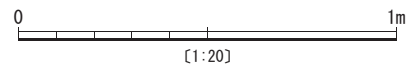
F-12区のVII層上面で検出された。検出面における平面形は約110×90cmの隅丸方形を呈する。深さは検出面より35cm程度である。掘り込みの角度は緩く、床面は約20×20cm程度で他の土坑と比較し極めて小さい。埋土は色調等からVI層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

土坑4号 (第34図)

G-13区のVII層上面で検出された。検出面における平面形は約115×75cmの楕円に近い不整形を呈する。深さは検出面より25cm程度で、床面は約75×45cmの楕円形となる。埋土は色調等からVI層土主体と考えられる。遺物は出土していない。



第34図 土坑1号~4号



土坑5号 (第35図)

H-12区のVII層上面で検出された。検出面における平面形は約165×85cmの楕円に近い不整形を呈する。深さは検出面から15cm程度で、床面は平坦で約125×45cmの楕円に近い不整形となる。埋土は他の土坑の埋土より黒色が弱く、どの層由来の土かは不明である。遺物は出土していない。

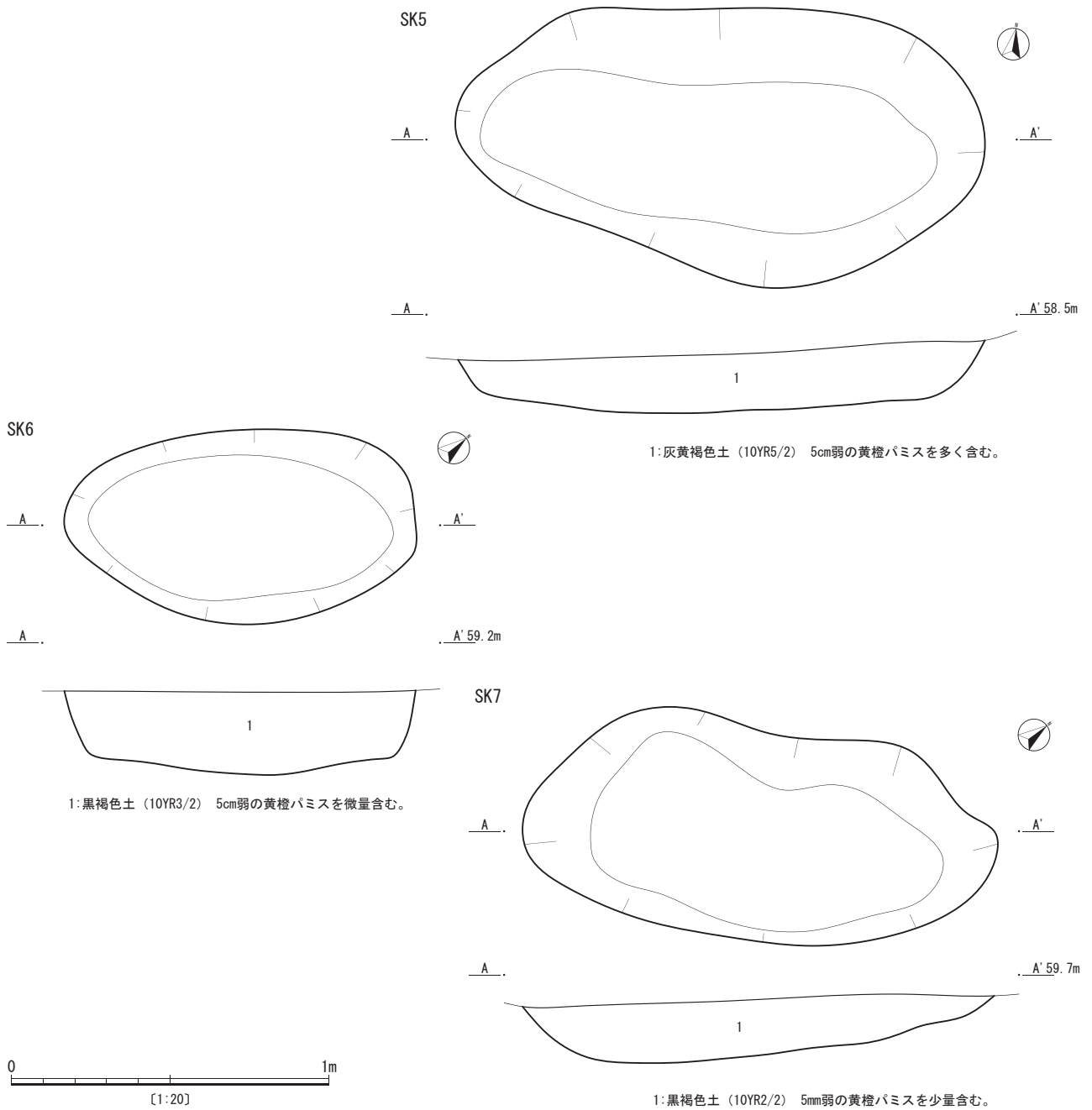
土坑6号 (第35図)

H-13・14区のVII層上面で検出された。検出面における平面形は約110×60cmの楕円形を呈する。深さは

検出面から25cm程度で、床面はやや凹凸がある約95×45cmの楕円形となる。埋土は色調等からVI層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

土坑7号 (第35図)

I-14区のVII層上面で検出された。検出面における平面形は約150×70cmの不整形を呈する。深さは検出面より20cm程度で、床面は平坦であるが、西側に向かってやや深くなる。埋土は色調等からVI層土主体と考えられる。遺物は出土していない。



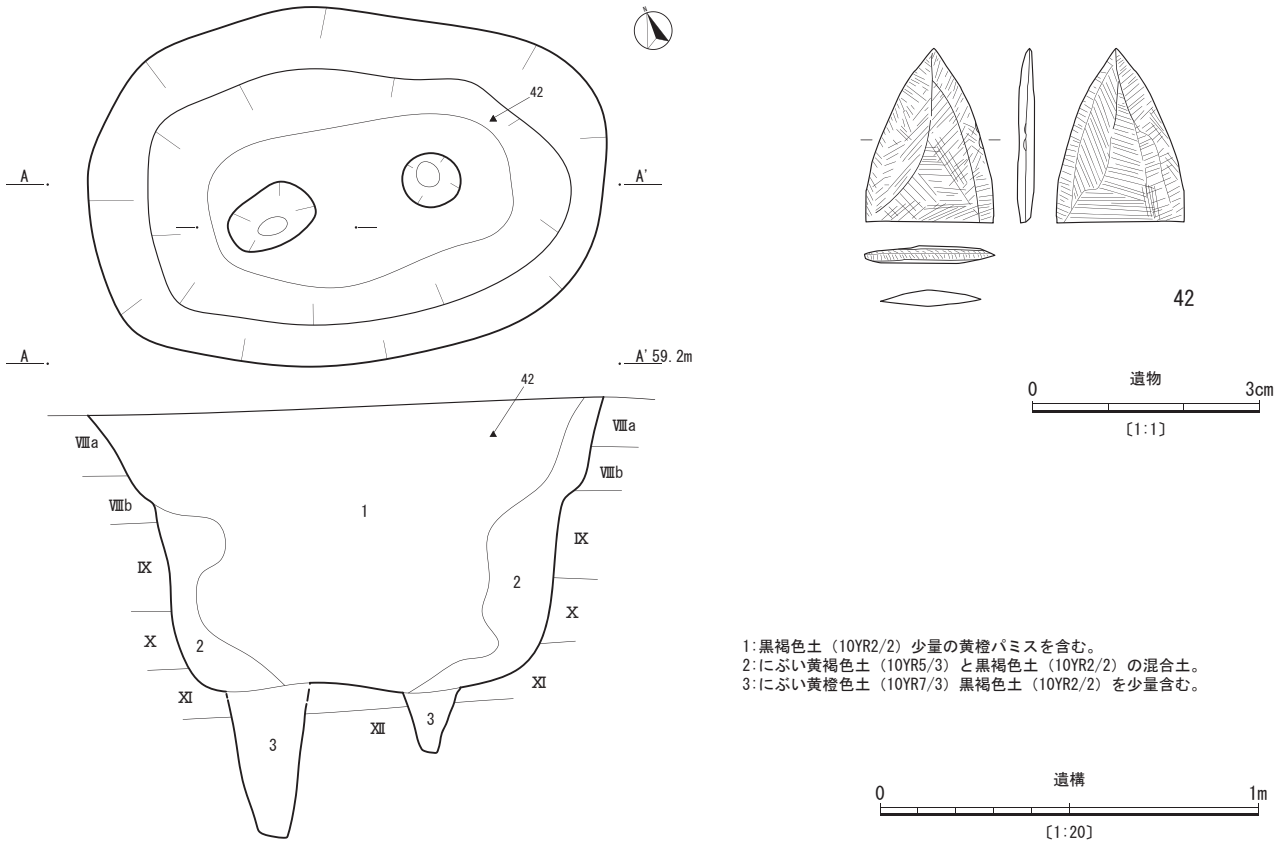
第35図 土坑5号～7号

(3) 落とし穴 (1基)

H-13区のⅧa層上面で検出された。検出面における平面形は約135×95cmの隅丸方形を呈する。検出面からの深さ約25cm付近で段が付き、その下位は床面までほぼ垂直に掘り込まれている。床面はⅪ層で、約80×40cmの隅丸方形を呈し、平坦である。2つの明瞭な逆茂木痕がみられる。西側の逆茂木痕の深さは40cm程度、東側は15cm程度である。埋土に関しては、2及び3から、1の順に堆積したものと推定され、他の土坑と

比較し黒色が強いことからⅤ層土と考えられる。埋土1中、検出面から10cm程度の深さで磨製石鏃が出土している。

42は磨製石鏃である。石材は頁岩で、厚さは2mm程度である。全体を磨き薄く仕上げている。鏃の中心から先端及び基部両端を結ぶ線を基準に、左右の側面をやや弧状となるように研磨し、二等辺三角形状に仕上げている。抉りはみられない。



第36図 落とし穴と出土遺物

第4表 遺構番号振替表

縄文時代早期							
集石						土坑	
掲載番号	調査番号	掲載番号	調査番号	掲載番号	調査番号	掲載番号	調査番号
SS1	SS8	SS12	SS3	SS23	SS24	SK1	SK6
SS2	SS11	SS13	SS9	SS24	SS21	SK2	SK9
SS3	SS13	SS14	SS31	SS25	SS22	SK3	SK8
SS4	SS12	SS15	SS30	SS26	SS20	SK4	SK13
SS5	SS10	SS16	SS29	SS27	SS16-2	SK5	SK12
SS6	SS7	SS17	SS32	SS28	SS16-1	SK6	SK14
SS7	SS1	SS18	SS27	SS29	SS14	SK7	SK11
SS8	SS6	SS19	SS28	SS30	SS15	落とし穴	SK10
SS9	SS5	SS20	SS26	SS31	SS17		
SS10	SS2	SS21	SS25	SS32	SS19		
SS11	SS4	SS22	SS23	SS33	SS18		

中世	
大型土坑・土坑	
掲載番号	調査番号
大型土坑1	SX1
大型土坑2	SH1
SK8	SX2
SK9	SK7
近世	
土坑	
掲載番号	調査番号
SK10	SK3
SK11	SK2
SK12	SK5
SK13	SK4

3 包含層出土の土器

(1) 概要

包含層のV a層・V b層・VI層で出土している早期土器は1201点あり、うち371点を図化した。前葉から後葉まで多種あるが、主体となるのは円筒形を呈し、貝殻の条痕や押圧文が胴部にみられる前平式土器と志風頭式土器・加栗山式土器・小牧3 A式土器・札ノ元VII類土器など前葉の土器である。型式分類のできなかつた破片が170点あり、この大半は前平式土器で、一部札ノ元VII類土器が含まれていると思われる。

前平式土器は円筒形土器で、胴部に貝殻条痕を施している。条痕は斜位(I類)と、横位(II類)、縦位と横位の2種あるもの(III類)とがある。口縁断面はI類が三角形、II類・III類は矩形あるいは円形を呈している。口縁端近くに押圧文が付されるが、I類には1段のものが多く、II類になるとほとんど2段である。

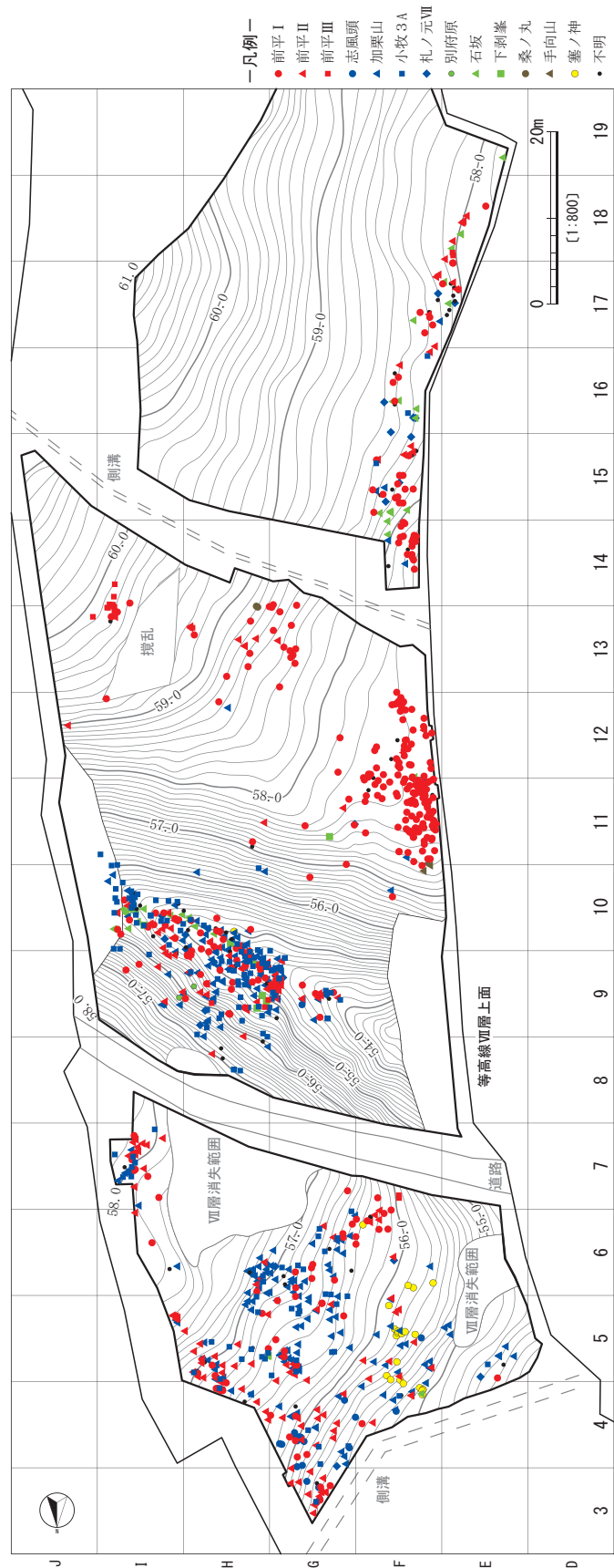
志風頭式土器は胴部に貝殻条痕の後、縦あるいは斜方向沈線文や二枚貝貝殻(以下、貝殻を省いて二枚貝と略す)押圧文を施した角筒土器である。

加栗山式土器には円筒土器と角筒土器とがある。胴部に貝殻条痕のあと、二枚貝腹縁押圧文を縦方向に施したもので、口縁部に楔形突帯が貼り付けられている。小牧3 A式土器は楔形突帯を貼り付けるなど加栗山式土器と似ているが、角筒土器はなく、胴部の条痕を消したあと貝殻押圧文が付されない。札ノ元VII類土器は、小牧3 A式土器と似ているが、条痕が浅い。貼付突帯は短かつたり、細く、周辺は調整をしないものも多い。

他に中葉から後葉の別府原式土器、石坂式土器、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器、押型文土器、手向山式土器、塞ノ神A a式土器、塞ノ神A b式土器などが少量ずつ出土している。

別府原式土器は口縁端が丸みをおび、条痕は蛇行ぎみの横方向である。貼付突帯はない。石坂式土器は胴部条痕が綾杉状を呈するものである。下剥峯式土器と桑ノ丸式土器は分厚い作りで、下剥峯式土器は貝殻を連続して横方向に押し、桑ノ丸式土器は斜方向の短い条痕が施される。

前平式土器I類はF・G-6・7区にもやや集中しているが、G・H-13区と、F-11~15区など南半に多く出土している。II類は谷部にもあるが、7区以北に集中し、III類はI-13・14区付近に集中している。志風頭式土器は北側のF・G-3・4区に多い。加栗山式土器はE~H-4~6区の北側に多く出土しており、前平式土器に次いで多い。小牧3 A式土器は谷頭に多い。



第37図 縄文時代早期の土器分布図

(2) 出土土器

① 前平式土器 (第 38 図～第 46 図)

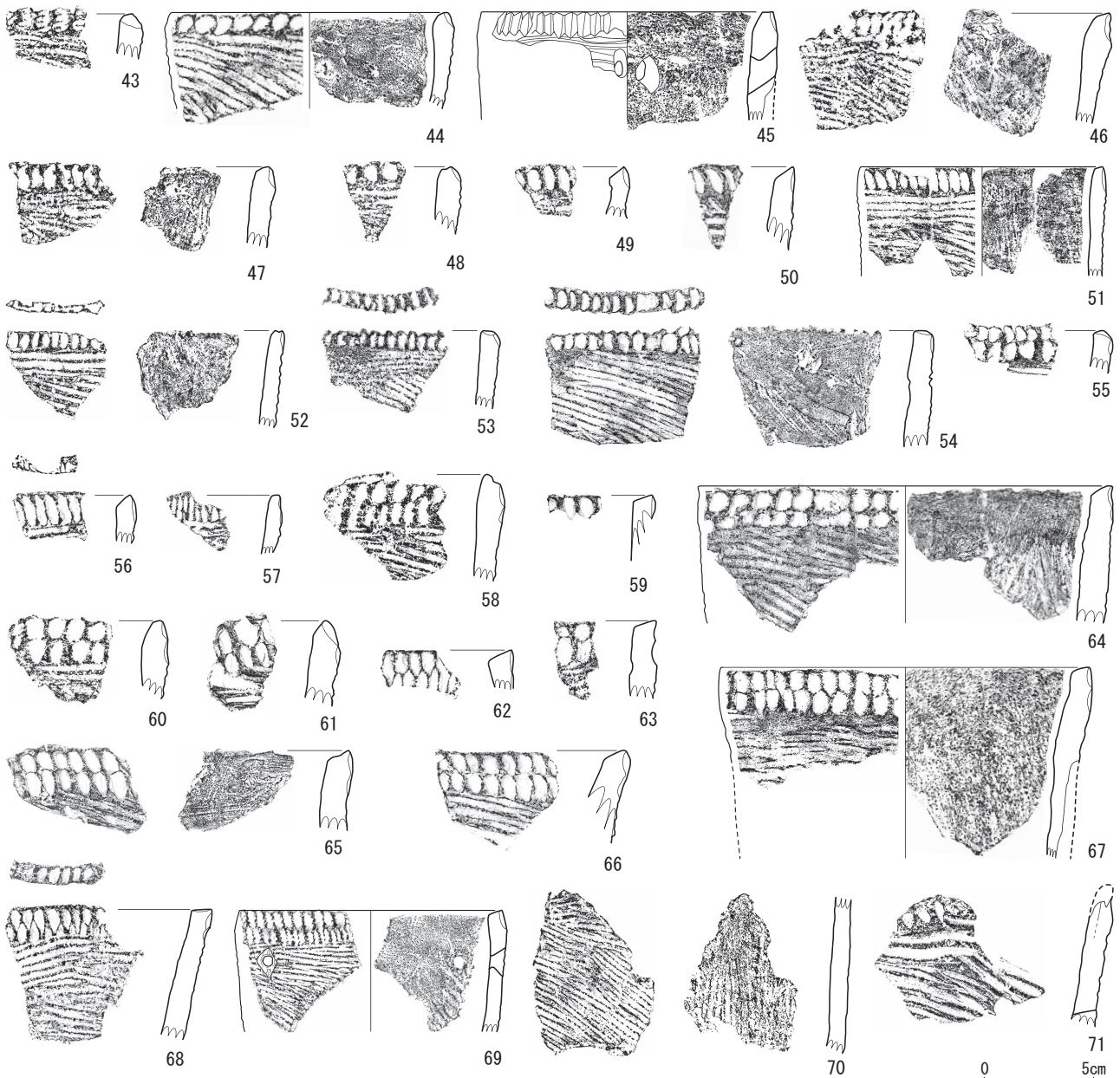
胴部に二枚貝腹縁条痕がある円筒形の土器である。口縁部は、外面から貝殻によって押圧しているが、そのまま内面が直立して三角形断面をなすものと、内面を三角形状にナデて頂部が尖っているもの、内面を直にして平坦な口唇部を作り、そのままにしたものと、口唇部に押圧のあるものがある。胴部条痕は斜方向のものと、横方向のものがあるが、条痕幅の狭いものもある。底は安定した平底である。内面調整は縦方向のケズリが多いが、ミガキに近い丁寧なもの、ナデ調整のものもある。

I 類 (第 38 図～第 41 図 43～110)

外面条痕が斜位となるものである。口縁端は三角形状

を呈するものが多いが、矩形を呈し、口唇部に押圧文のあるものもある。口縁部は口唇部に貝殻腹縁を押圧するもの、外面から内側に押圧し、断面三角形を呈するもの、押圧が一段のものと二段のもの、外面に押圧したあと口唇部を平らにし、そこに刻みを施すものがある。図化した 80 点の他に 210 点の破片が出土している。

17 は集石 14 号でも出土しているため、実測図は第 19 図に掲載した。口径 21.8 cm、底径 14.8 cm、高さ 34.2 cm の直に近い円筒形をしている。口縁端は平坦で、胴部は右下がりの傾斜の強い条痕だが、底部近くはそのあと横にナデている。条痕のあと口縁部に縦方向の貝殻押圧が 1 段みられる。内面は斜位の貝殻条痕のあとケズリに



第 38 図 縄文時代早期の土器 (1)

[1:3]

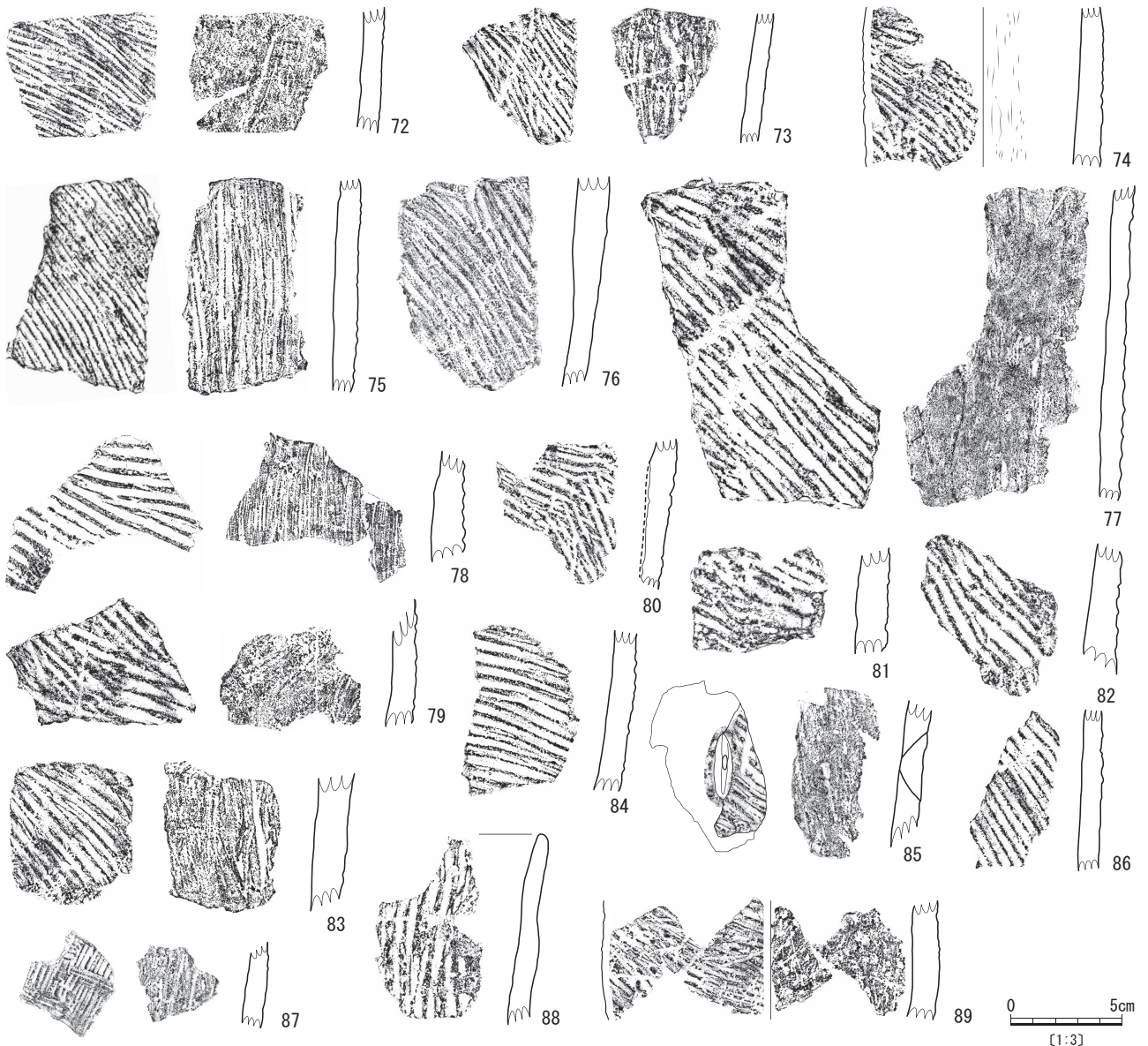
よって仕上げ、口縁近くでは部分的に貝殻条痕が残り、胴部の一部にも条痕がみられる。胴部から底部へは丸みをもって移り、底は丁寧にナデている。

43 は内面横ナデ、外面横条痕のあと口唇部に二枚貝腹縁押圧を施すものである。

44～56 は外面に条痕を施したあと、口縁端に一段押圧文を施している。小型のものが多い。押圧文は木の実様の丸いものを押したものと、二枚貝腹縁を押したもの(46・47)、枝状の細いものを押したものとがある。口径は44が12.8 cm、45が13.0 cm、51が11.0 cmと小型である。口縁端断面は三角形に近いが、51や52のようにやや矩形を呈するものもある。条痕は概して粗い調整である。胴部内面は縦方向のケズリだが、口縁近くは横ナデ調整をしている。45 は内面口縁端近くを横方向に丁寧にナデ、口縁端を断面三角形にしている。外面は広く

剥脱し、口縁端近くに補修孔がある。外面から擦切孔を穿っているが、分厚いためか、内面からも擦切孔を穿っており、すれ違いの孔となっている。胎土にやや多くの茶石が含まれている。49・50・56の口縁内面は強くナデているために断面が三角形を呈している。52～56は口縁端断面が矩形となり、口唇部に刻みが施されている。52・56の押圧は浅いが、53～55は深くしっかりしている。53は口縁端外面に二枚貝押圧文、口唇部に刻みが施されている。54・55は外面口縁端近くと口唇部に木の実様の丸いものの押圧文が施される。54の内面は斜方向のケズリで調整しているが、口縁近くは横方向に丁寧にナデている。

57～71は口縁端の押圧文が2段になるものである。押圧文は木の実様の丸いものと、巻貝殻頂のもの、二枚貝腹縁のものがある。口縁端内面は丁寧にナデて、口

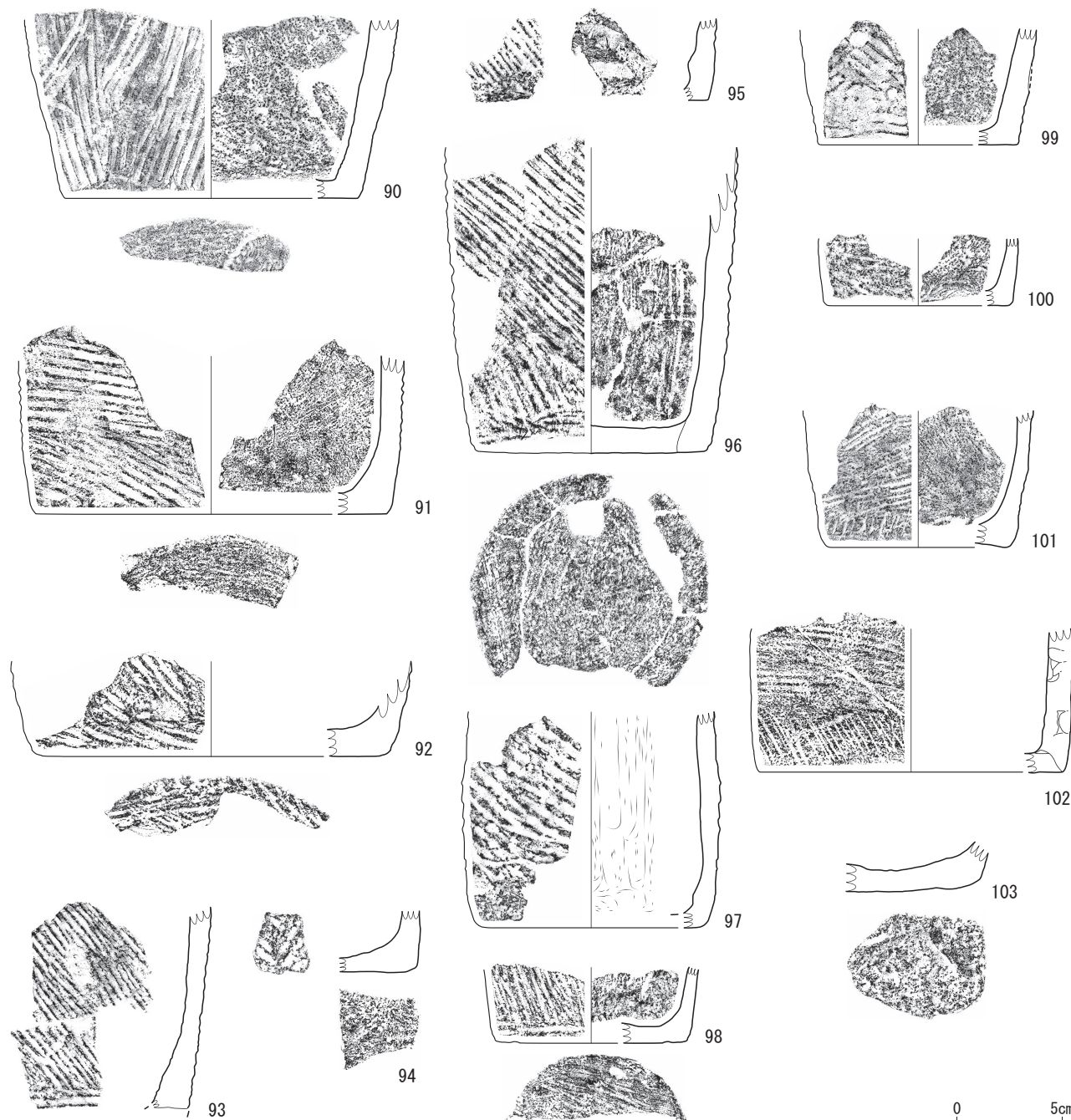


第39図 縄文時代早期の土器(2)

縁端部の断面を三角形に作っている。64の口径は19.0 cm, 67の口径は17.0 cmと中型である。67の焼成度は良いが、外面剥脱が目立つ。68は外面押圧が2段になっているが、押圧は上段から下段へとし、そのあと条痕を施しているため下段の押圧文下部は消えている所がある。破片の右下部に擦切技法による補修孔がある。69は口縁端近くでやや内弯する器形で、外面には細い右下がり、横方向の条痕が施されている。口縁端近くには縦方向の貝殻押圧が2段に施され、そのあと口唇部は丁寧にナデている。内面は横あるいは斜方向の丁寧なナデ整形である。口縁付近に補修孔がある。外面から擦切り

によって孔をあけ、そのあと円形に整えている。70・71は口縁端が欠けている。

胴部(72~89)の外面は多くが右下がり条痕である。78・84のように横位に近いものと、75・76のように縦位に近いものもある。72~76・86などは幅狭で浅いが、77~85は幅広で深い条痕である。特に77は深い。内面は浅い縦方向のケズリ調整が多いが、74・76のように深い段となるものもある。74・76は硬質で、74は直径が10.5 cmほどである。87は左下がりの細い条痕のあと、部分的に右下がり条痕がみられる。88は白色石や長石・雲母などを多く含む硬質の土器で縦方向条痕であ



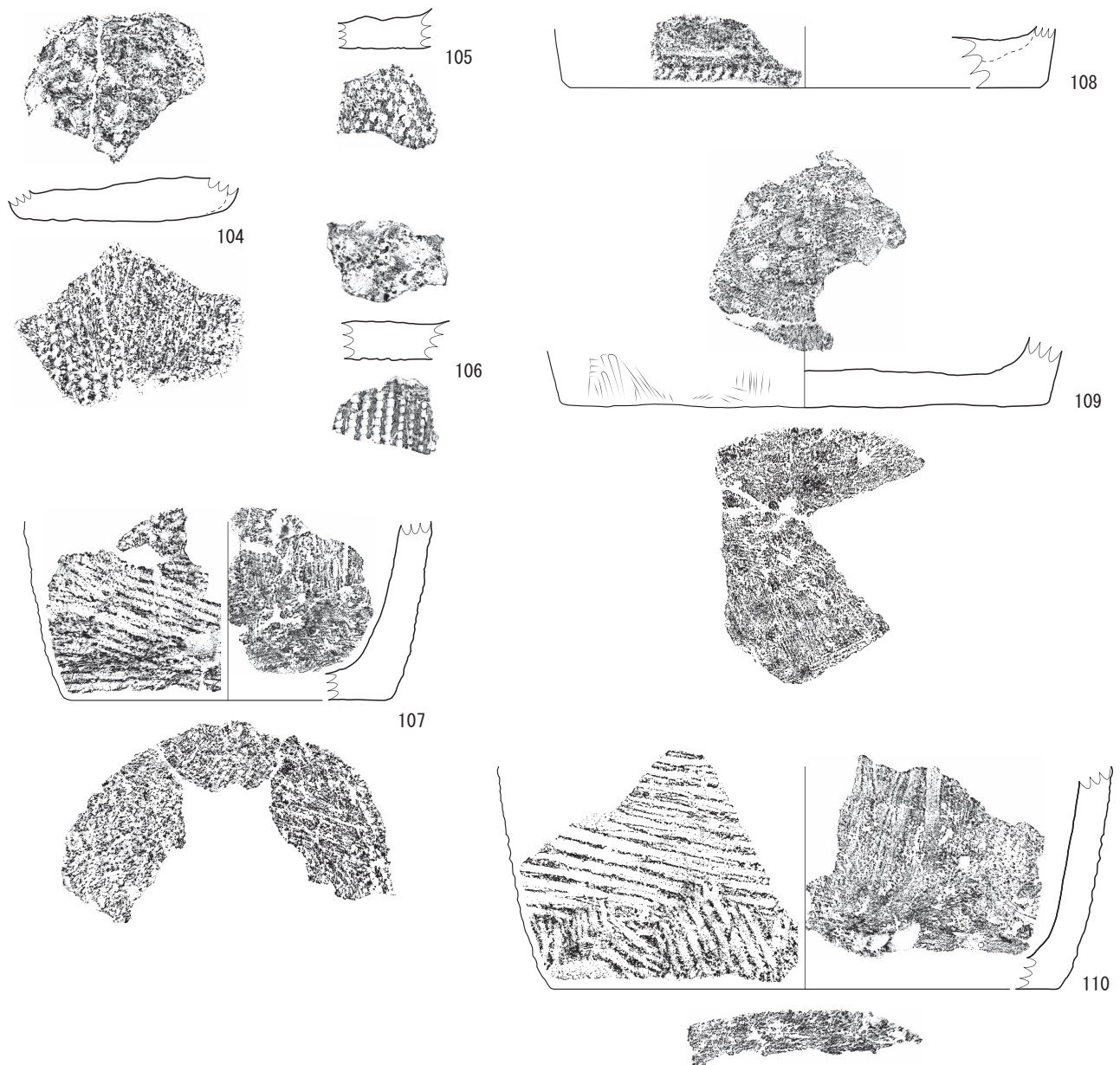
第40図 縄文時代早期の土器(3)

る。内面は一部剥脱しているが、オコゲが付着している。89は底に近い破片で、直径が14.5cmほどである。

90～110は底部あるいは底部近くの破片である。底部は安定した平底で、胴部からやや丸みをおびて移っている。底径は8.5～17.0cmと大小様々である。90～94は底部まで条痕が施され、92の底は網代状圧痕のあと条痕様のナデである。95～102は底部近くを横方向にナデている。95の胴部外面は幅の広い条痕であるが、底近くは丁寧にナデている。96の胴部外面は深い右下がり条痕だが、底部近くは横方向の条痕となる。円盤状の底部と、筒状の胴部を貼り付ける製作法である。胴内面の剥脱が目立ち、内面にはオコゲが付着している。底

はハケ目状ナデである。97は幅広の条痕である。98は内外とも磨滅している。外面は幅狭の条痕で、底近くに横方向の2条条痕がある。底には圧痕があるが、丁寧にナデ消している。101の胴部外面は浅くて幅の狭い右上がり条痕で、底近くに縦方向の刻み目がある。102は右下がりの細沈線が施されている。103の外底は網目状圧痕で、白粉が付着している。104・105の内底には指頭状圧痕があり、底は格子状圧痕のあと繊維状ハケナデで仕上げた分厚い底である。106の外底には格子状圧痕が付いている。

107～110は大型の円筒土器である。107は底径15.0cmの胴部下半から底部の破片で、外面は底近くまで斜方



第41図 縄文時代早期の土器（4）

向だが、底近くは横方向の幅広条痕である。底部は貝殻で調整したあと、丁寧にナデている。ややすれている。胴部内面は縦方向のケズリで、底は丸くナデている。白色石粒が多く含まれている。108は内外摩耗した破片で、分厚い底である。外面の底近くは横方向となり、底との角に貝殻押圧が施されている。109の底部は底径22.4cmで丁寧にナデて仕上げ、内面には指頭圧痕がみえる。110も107と似た内部整形、胎土だが、外面の底部近くは縦あるいは右下がりの短い条痕を施している。底径は23.4cmである。

Ⅱ類（第42図～第45図111～175）

外面条痕が横方向となる類である。口縁端断面形は矩形を呈し、多くの口唇部には押圧文が施されている。底近くは右下がりの条痕となる。210点出土している。

111は大型のもので口縁端断面がやや内傾している。口縁端近くの押圧は木の実様のもので2段に押し、口唇部には棒状のもので押している。112～115は口唇部に刻み目がない。112・113は1段の口縁押圧である。112の内面は丁寧にナデ整形だが、そのあと口縁部近くをケズって口唇部を幅狭くしている。茶石を多く含む胎土である。113は薄い矩形となっており、114は口唇部が薄くなっている。114・115は2段の押圧である。

116～118は口縁端に1段の押圧のあるもので、119～136は口縁端近くに2段の押圧がある。口唇部に押圧文が施されている。口唇部の押圧文はほとんどが直に押しして浅い。119～122の押圧は上段が直、下段が左下がりであるが、123の押圧は上段が直、下段が右下がりになっている。

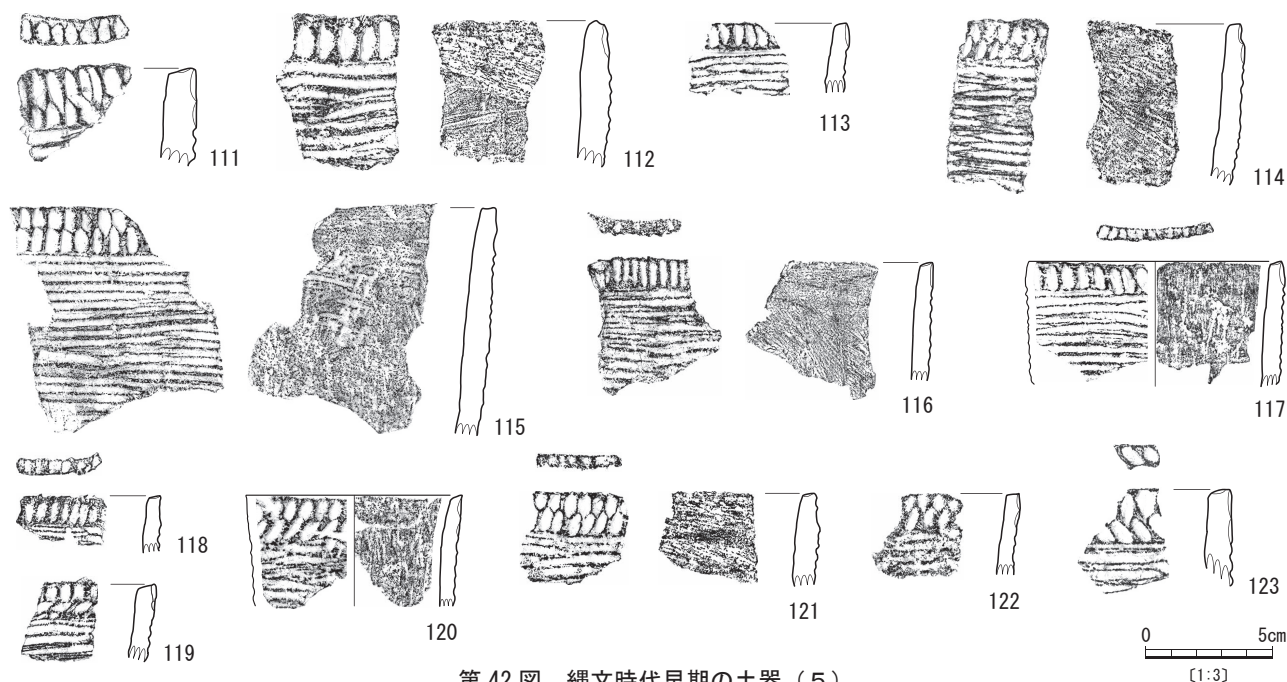
124は口径20.2cmで口縁近くに2段の幅広押圧が巡っ

ている。幅広条痕のあと上段から下段の順に押圧を施しているが、下段に比べて上段のほうが幅広である。内面は縦方向のケズリだが、口縁近くは斜方向から横方向へ移っていく。ケズリの施文具は幅7～9cm程で、外面にスガが付着している。125は焼成度の良い破片だが、内面・外面とも一部剥離している。口縁の押圧は下段から上段の順に押し、口縁部端の調整をしている。128は小型の土器で内面が剥離しており、口縁下部に擦切技法による補修孔がある。133は口縁部から胴部の破片で、焼成度が良く、外面の厚さ半分ほどが広く剥離している。口縁断面は矩形を呈し、口唇部と外面には木の実状の押圧痕がある。口唇部の圧痕は斜位に施され、外面は剥離のため1段しか残っていないが、2段になると思われる。内面は幅5～8mmほどの施文具で縦方向に丁寧なケズリがみられるが、口縁近くのナデがないため、部分的に段となる所もある。

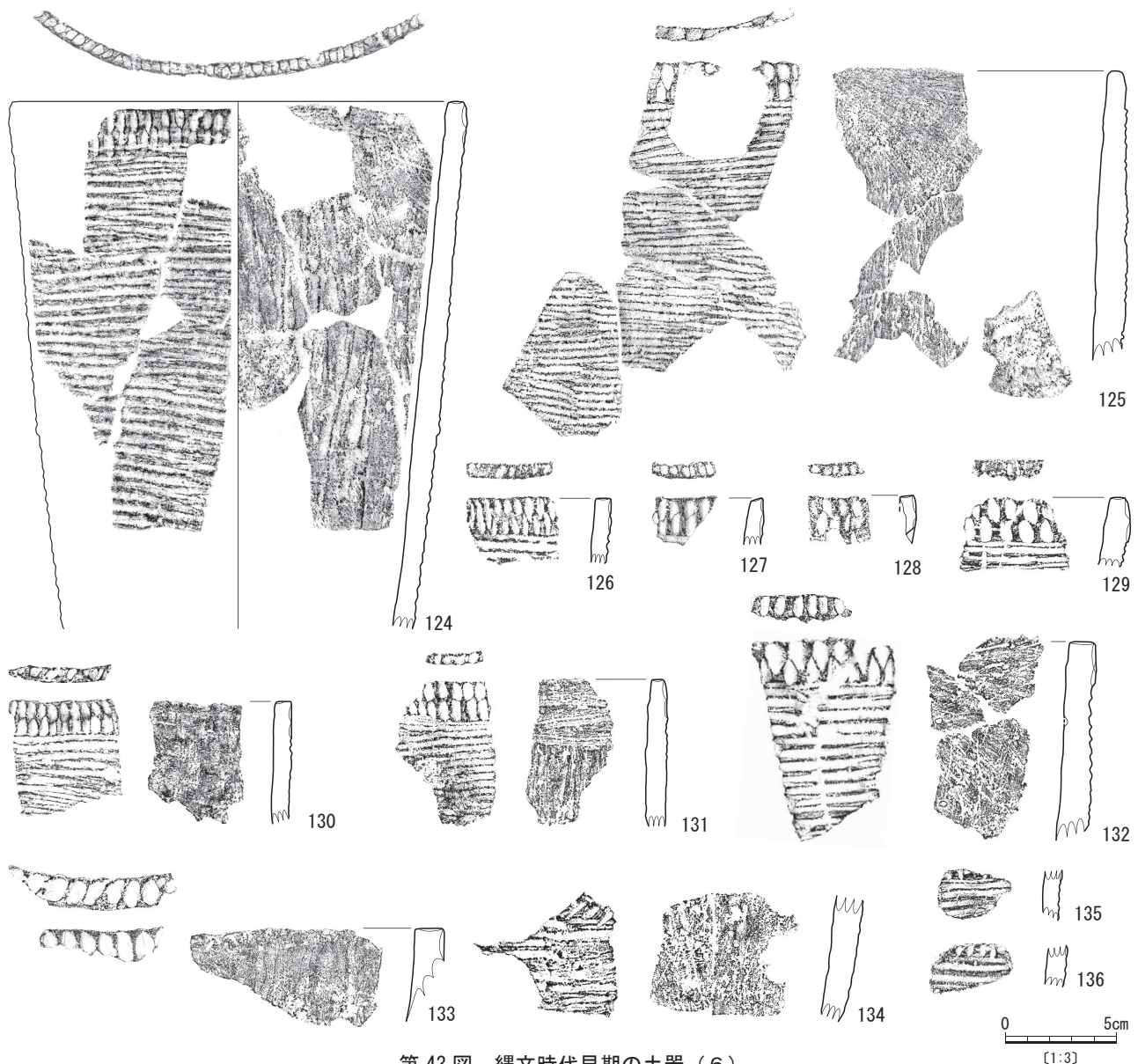
134～136は口縁端が欠損している。134は内外とも表面が剥離している。

137～160は胴部で、条痕幅の狭いものと広いもの、深さの浅いものと深いものがある。内面調整は多くが縦方向のケズリだが、152などのように幅の狭い筋状となるものもある。137の内面にはぶい橙色を呈しているが、まだらに赤色っぽい筋がみられる。160は胴下部から底部の破片で、外面条痕は横方向だが、底部近くは右下がり条痕となる。上から下への条痕仕上げである。

底部（161～175）は安定した平底で、丁寧にナデられている。底径は8.0cmのものから14.4cmのものまである。胴部の横方向条痕が底まで至るものと、底近くは斜方向になるものがある。161は小型の薄いもので、



第42図 縄文時代早期の土器（5）

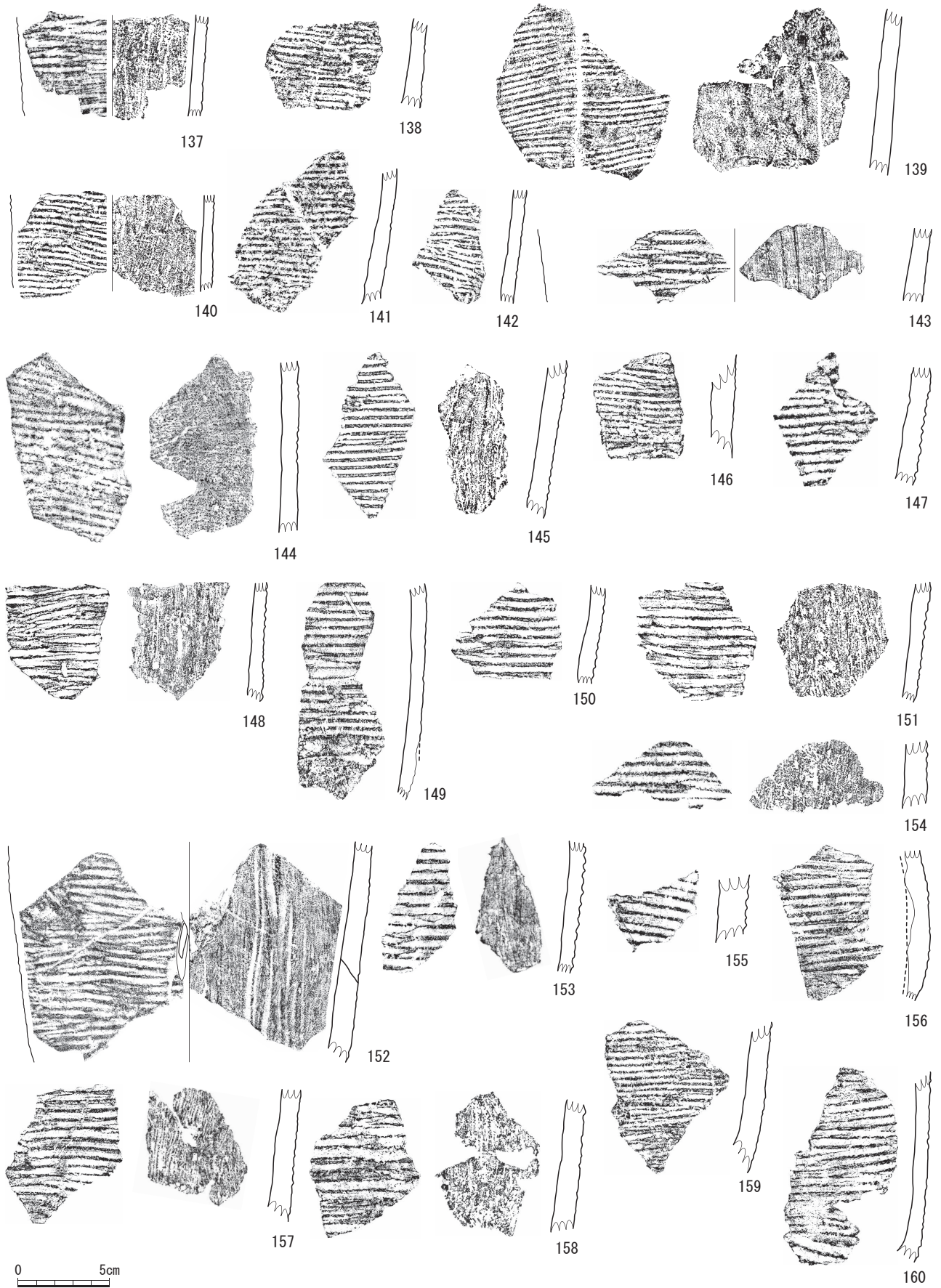


第43図 縄文時代早期の土器（6）

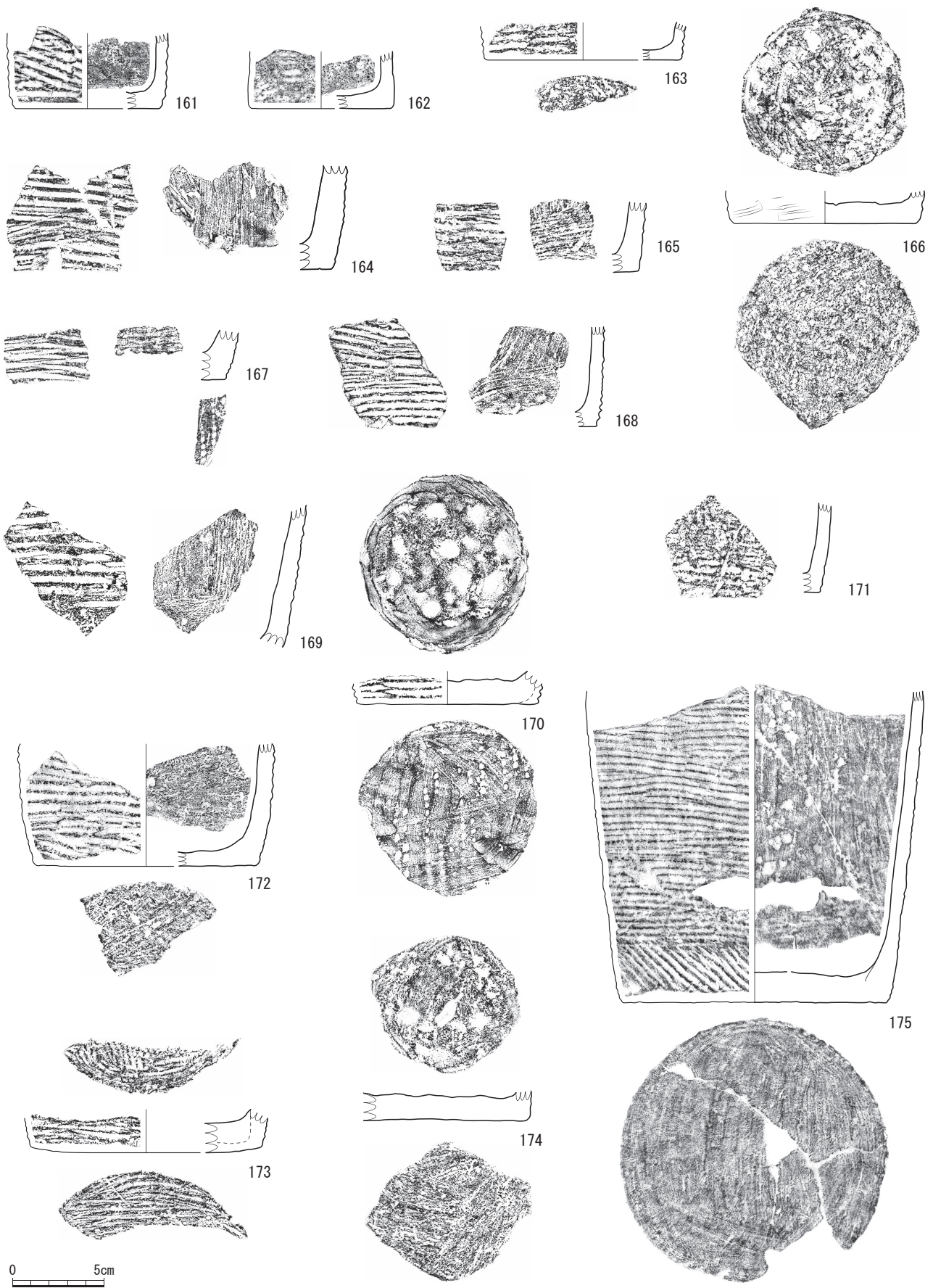
横方向条痕だが、一部分は底近くに斜方向条痕がみられる。162の外表面は底近くを条痕のあとナデている。165・168の底には白粉がある。166の底は敷物痕を丁寧にナデ消しており、内底は押したあとナデて消している。169は底部近くをナデている。170は円盤状底部のまわりに円筒状の胴部を貼り付けている。外底には圧痕があり、そのあとナデ消している。内底には指頭状押圧痕があるが、その中には繊維様圧痕らしきものもみえる。172の外表面底近くは右下がり条痕となっている。内面にはオコゲが付着している。173は分厚い底で、外底・内底とも条痕様ナデである。174の内底にも押圧痕がある。作りは170と同じである。175の底径は14.4 cmとやや大型である。筒状の胴部と円盤状の底部を貼り付けており、底部内面は広く剥脱している。底部近く外表面は斜位条痕となる。

Ⅲ類（第46図176～178）

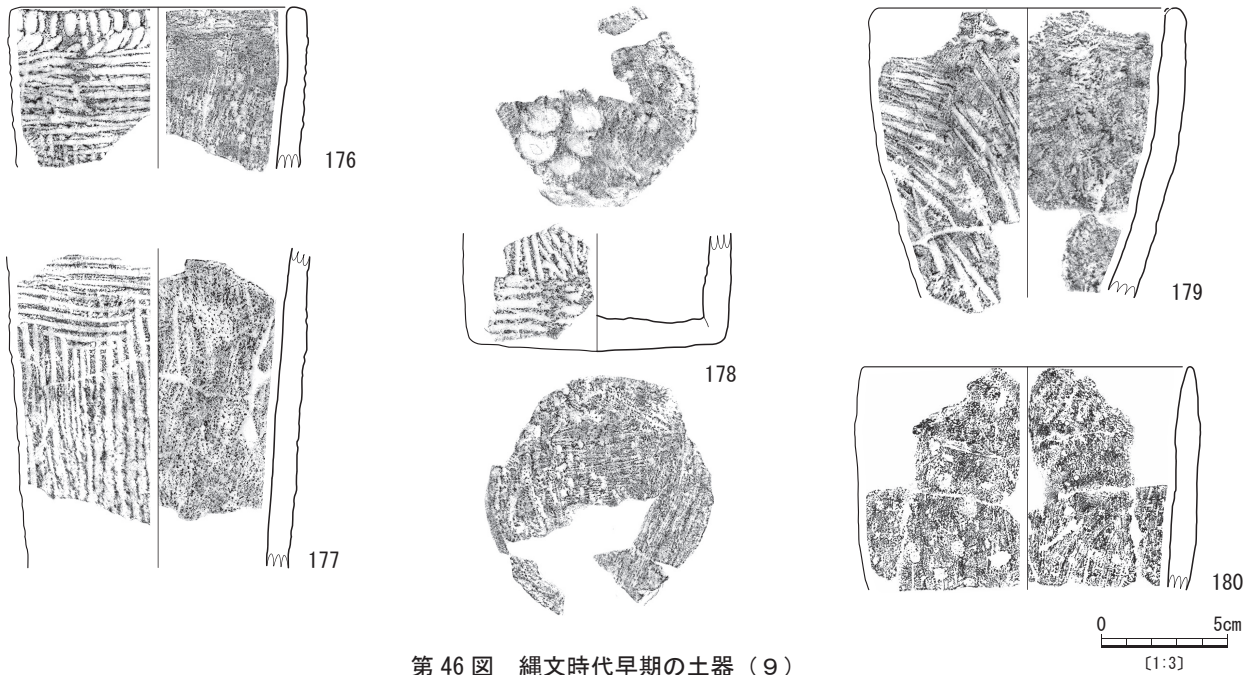
胴部条痕の上方が横方向、下方が縦方向となるものである。接合はできないが、器形・大きさ・色調・胎土などから同一個体と思われる。口径11.6 cm、底径9.5～10.0 cmと小型のもので、高さは20 cm前後かと思われる。口縁端の断面は矩形を呈しているが、口唇部の平坦整形はしていない。口縁端近くに2段の木の实様の押圧文が施されているが、上段が縦方向、下段が右上がり方向である。上段から下段へ、下段は右から左へ押している。口縁端から6 cmほどは横方向、その下は縦方向条痕だが、底部近くは再び横方向の条痕である。底部外面は格子状圧痕を繊維状のものでナデ、白粉が付着している。外面上部にはススが付着している。内面は丁寧に縦方向のケズリ様ナデだが、口縁近くは丁寧にナデ仕上げである。円盤状底部に筒状の胴部を接合する作りで、接合部がや



第44図 縄文時代早期の土器（7）



第 45 図 縄文時代早期の土器 (8)



第46図 縄文時代早期の土器(9)

やくぼんで、ここにオコゲが付着している。底部内面全体に指状の押圧痕がみられる。底部を作る時にナデてから指で仕上げたものと思われる。

鉢形土器(第46図179・180)

口縁が内傾し、低い器形である。88も同様のものの可能性がある。179は口径12.0cmで、口縁端は丸みをおびている。外面は右下がり条痕だが、横あるいは縦に近い角度のものもある。口縁端近くに横向きの二枚貝押圧文が1条ある。180は口径13.0cmの筒状となり、口縁端は細くなっている。内外とも粗い縦ナデ・ケズリ仕上げだが、内側がやや丁寧である。雑な作りである。

② 志風頭式土器(第47図181～192)

地文が横あるいは斜方向の貝殻条痕文で、その上に沈線文や二枚貝押圧文を施す二重施文の土器で、いずれも角筒土器である。口唇部には刻みがある。多くの外面にススが付着している。

181～185は口縁端近くに二枚貝押圧文を施すものである。181・182は同一個体である。丸みをおびた土器で、地文は斜方向貝殻条痕である。口縁端近くに縦方向の貝殻押圧をしたあと、その下に二枚貝腹縁による押圧文を施している。胴部は角部に巻貝殻頂の押圧があり、その間には2条の二枚貝腹縁によるX字状などの斜方向押圧文と、貝殻押圧文がある。183は角部の破片で、口縁端近くに斜方向の、角近くに縦方向の二枚貝押圧がある。184も斜方向条痕を地文とする破片で、口縁端近くに縦方向の貝殻押圧を施したあと、その下に横方向の細い貝殻押圧が施されている。角には縦方向に竹管様押圧が連続して施され、角から斜方向に二重の二枚貝押圧が施さ

れている。185は口縁端近くに横方向の二枚貝腹縁押圧を3段に施している。地文は右下がり方向の貝殻条痕で、その上に縦方向の鋸歯状沈線文を引いている。内面は縦方向のケズリだが、口縁端近くは横方向にケズっている。

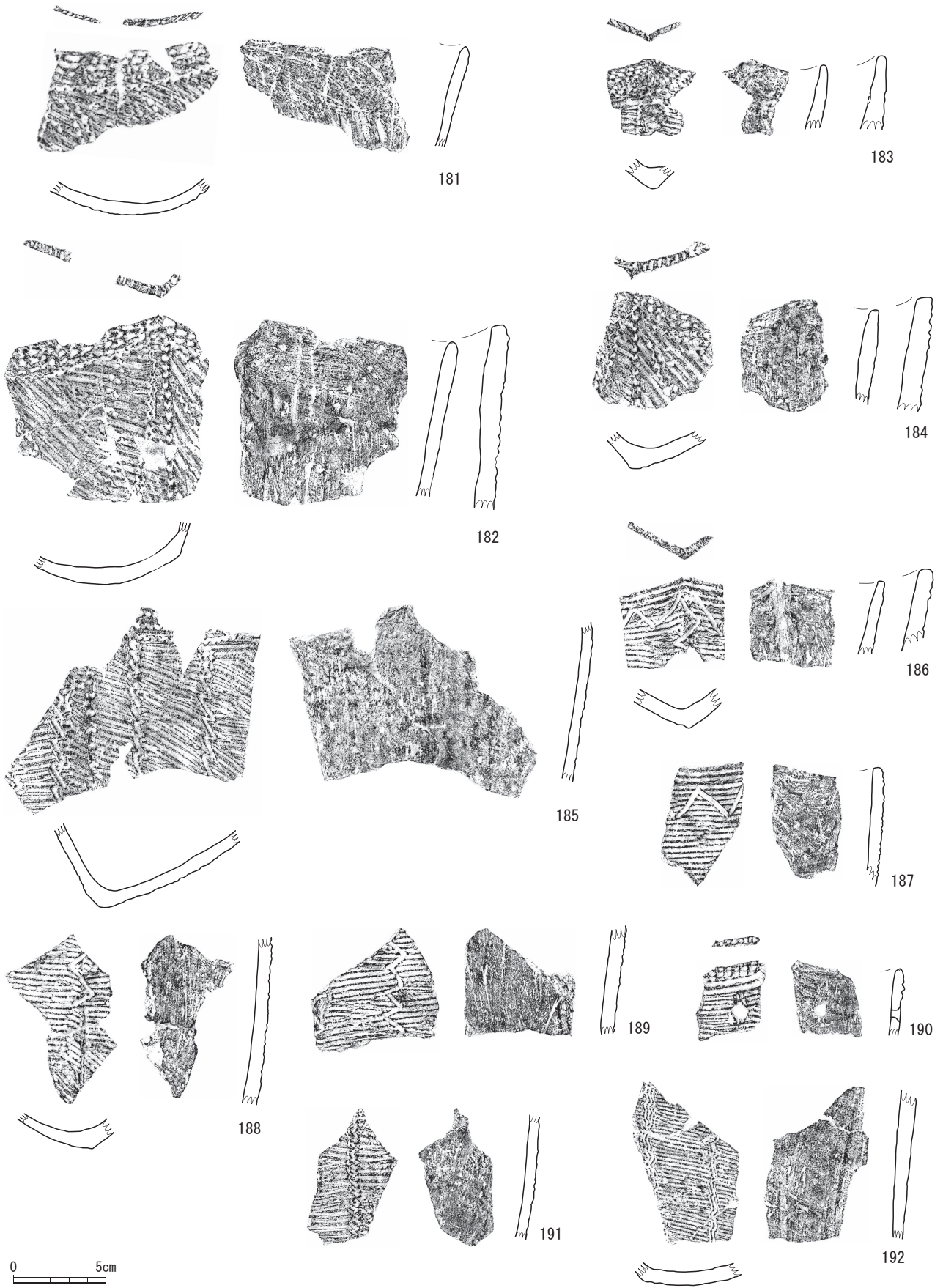
186～189は横方向の貝殻条痕のあと、口縁端近くに1条の横方向鋸歯文を引き、角と中央付近に1条の縦方向鋸歯文を引いている。188の縦方向鋸歯文は上半のみである。内面は丁寧な縦方向ケズリで、口縁近くはそのあとナデている。187はやや丸みをおびているが、角となる186と188は矩形を呈する。187の口唇部はナデているが、186の口唇部には浅い刻みがみられる。

190の口縁端近くは縦方向二枚貝押圧のあと、2条の横方向沈線を引き、口縁下に直径3mmの円形補修孔がある。

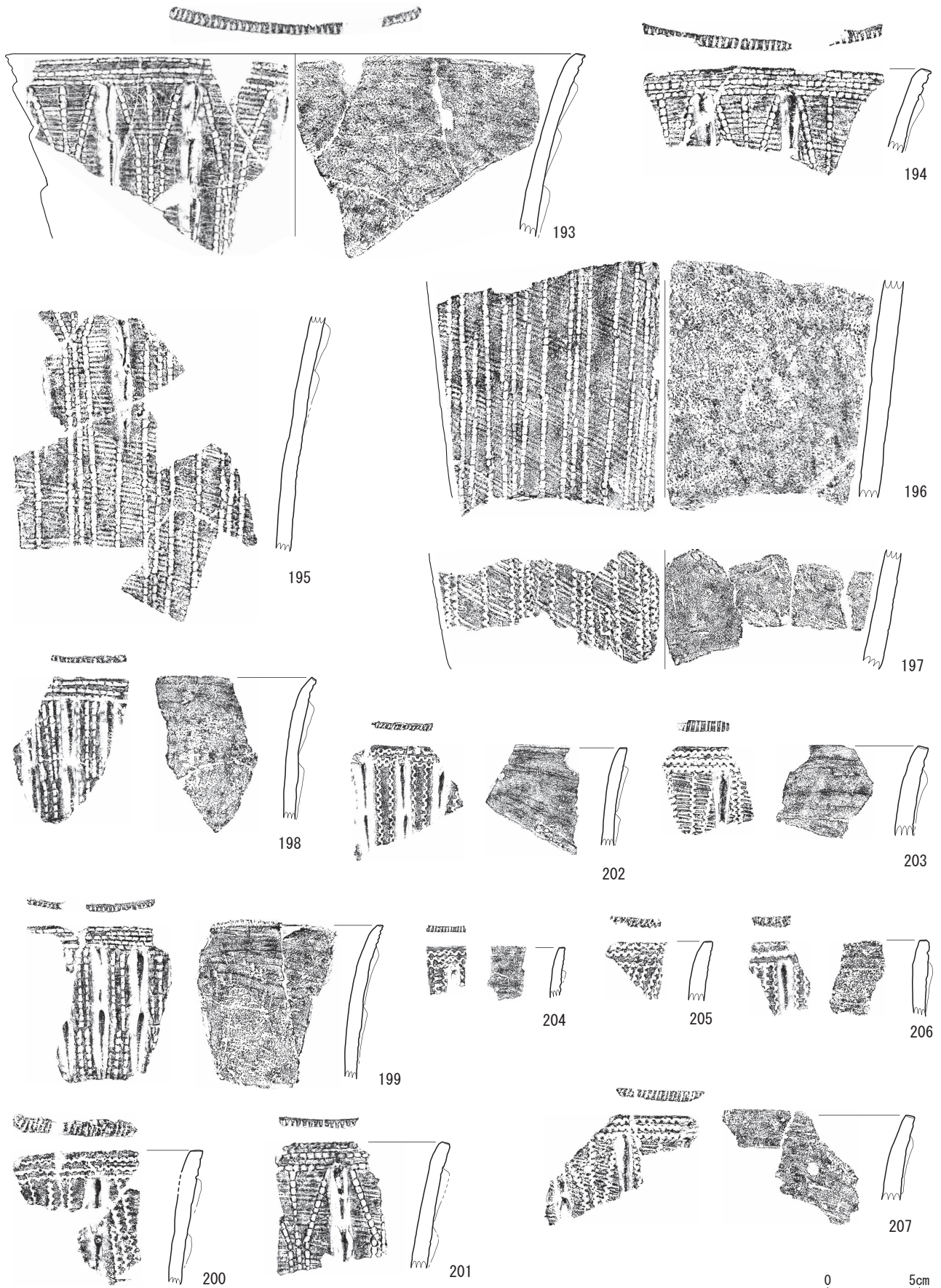
191・192はやや丸みをおびた胴部である。191は横方向条痕の上に二枚貝腹縁をくっつけて2列に押している。192は細い斜方向条痕の上に角と中央に3列の櫛描状沈線が縦方向に描かれている。

③ 加栗山式土器(第48図～第53図193～275)

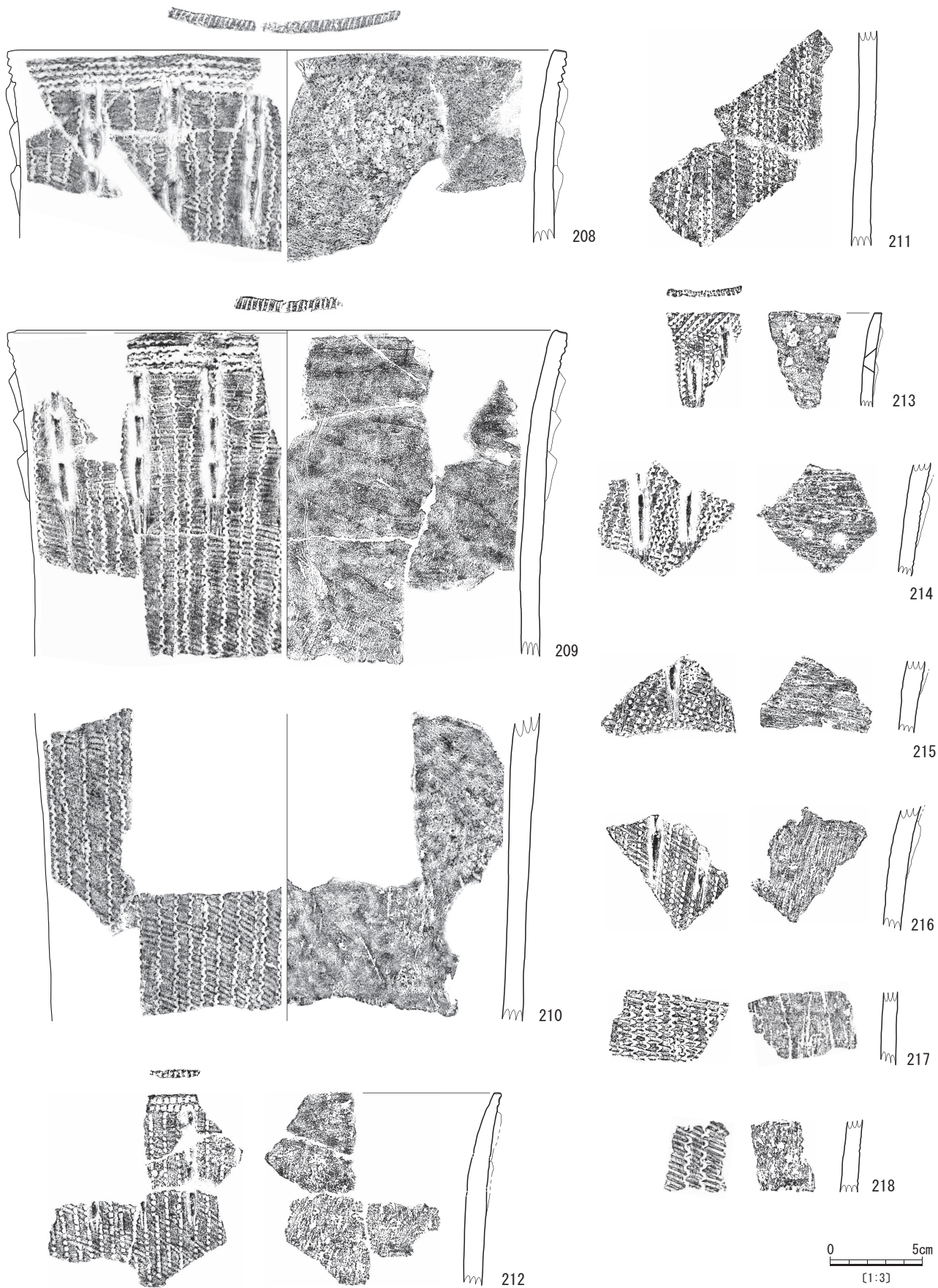
安定した平底からやや外傾して立ち上がり、口縁部はまっすぐ伸びるものと、外反するものがある。円筒形のものが多く、角筒形のものもある。胴部は斜方向、あるいは横方向の貝殻条痕で、そのあと二枚貝腹縁押圧を縦方向に連続して施している。口縁部には楔形の突帯を2～3段ほど貼り付けており、楔形突帯間の貝殻押圧はY字状となるものもある。口唇部には刻みがある。底近くの外面には縦あるいは斜方向の沈線が施され、底部の調整は丁寧である。内面調整は縦あるいは斜位のケズ



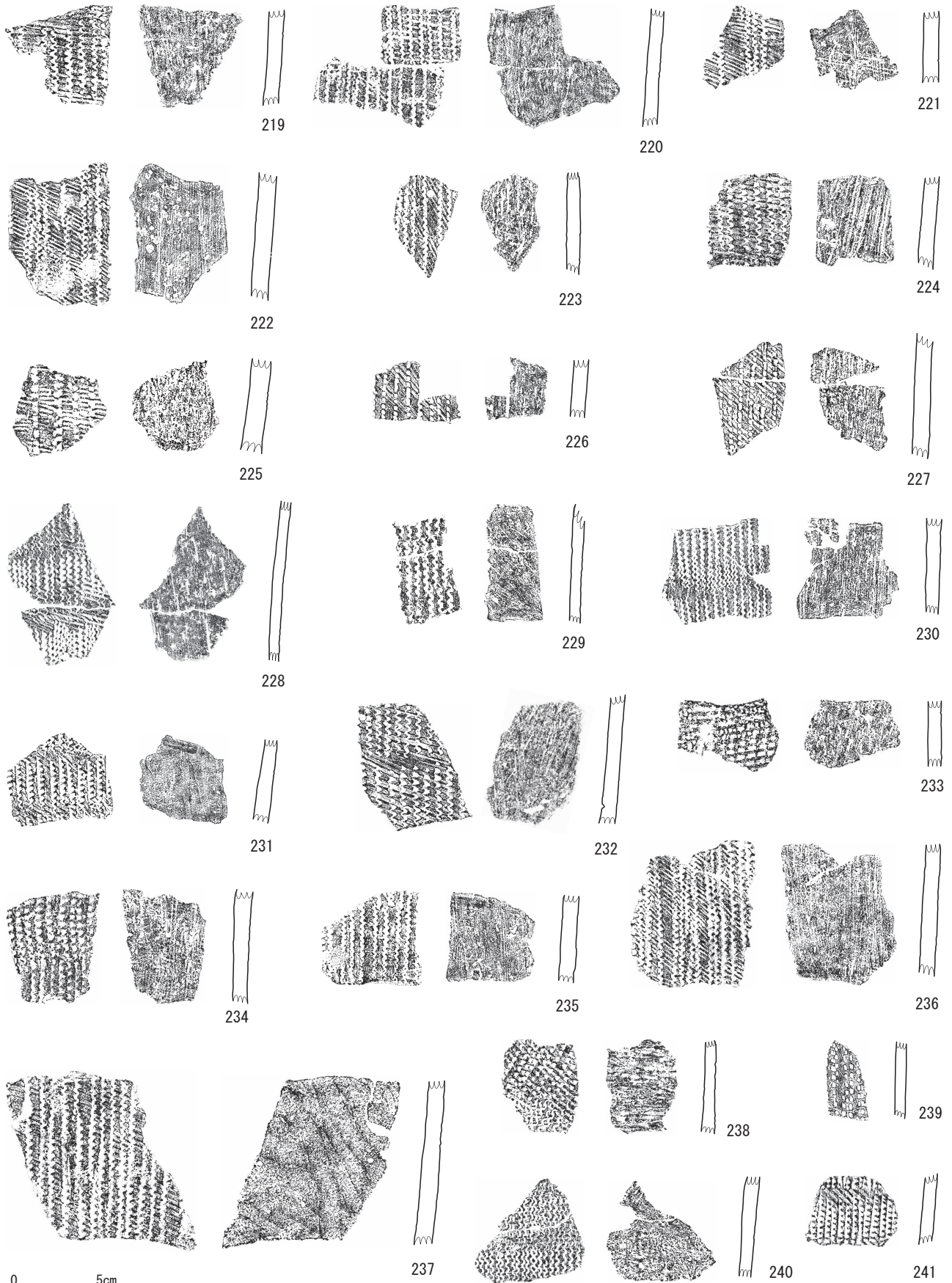
第47図 縄文時代早期の土器 (10)



第 48 図 縄文時代早期の土器 (11)



第 49 図 縄文時代早期の土器 (12)



第 50 図 縄文時代早期の土器 (13)

りだが、丁寧にナデたものもある。口縁近くは横ナデとなっている。

193～196は接合できないが、器形・文様・大きさ・色・胎土などから同一個体と思われる。口径は31.6cmで、外へ開きながら立ち上がっている。口縁端には3段の横方向二枚貝腹縁押圧文が施され、そのあと3段の短い楔形突帯の貼付文が付される。上端の楔の上は貝殻で押し、両側面はナデている。腹縁押圧文は寝かせて押し、口縁部近くはY字状を呈しているが、胴部はまっすぐ押ししている。

197は大型の胴部で、縦方向押圧が直に押されている。

198～207は口縁端近くに3段の二枚貝腹縁押圧文のある口縁部破片である。198・199のようにやや外反するものと、200～207のようにまっすぐ外へ開きながら伸びるものがある。楔形突帯は長いものと、短いものがある。楔形突帯の側面はナデているものが多いが、200や202・206はナデていない。楔形突帯間の狭いものは縦方向貝殻押圧がまっすぐ押されているが、201・203・207は上の方がY字状に押されている。貝殻腹縁押圧は直に押すものと、198・199・201のようにやや寝かせて押すものがある。内面は横ナデ調整である。204は小型の深鉢で、器厚も薄い。205は小破片のため楔形貼付文の有無が定かでないが、胴部押圧は左下がりの斜

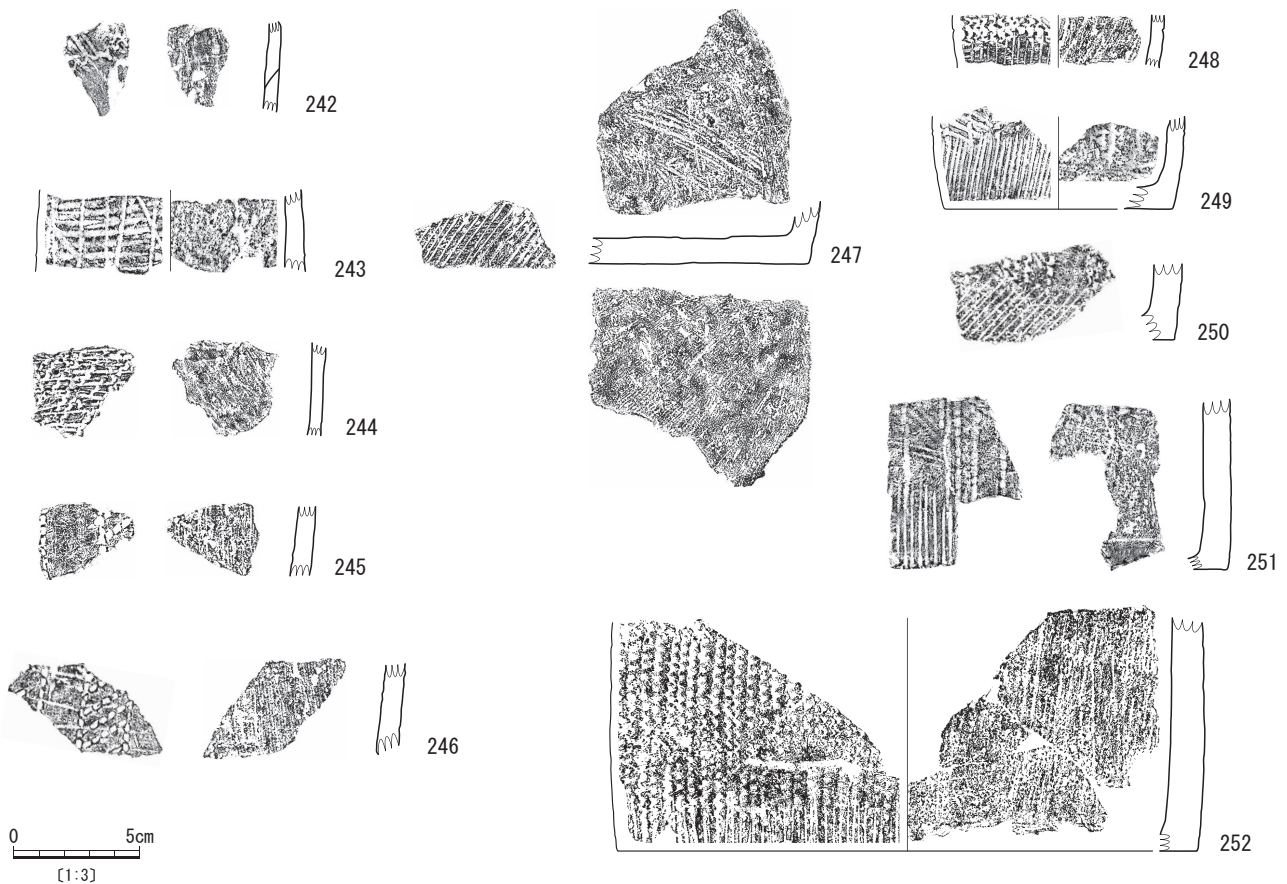
方向で、口唇内面がやや丸みをおびている。

208～211は接合できないが、器形・文様・大きさ・色・胎土などからみて同一個体と思われる。口径は30.4cmで、やや外反ぎみに立ち上がっている。口縁端近くに4段の横方向二枚貝腹縁押圧文が施され、そのあと3段の短め楔形貼付文が付されるが、貼付文の側面はナデられ、上端は二枚貝を押ししている。楔形突帯を貼り付けたあと、楔形突帯間に3列、楔の下に1列の二枚貝腹縁を直に押ししているが、楔形突帯間押圧の口縁端近くはやや外へ開いている。この押圧のあと楔形突帯の側面調整をしている。

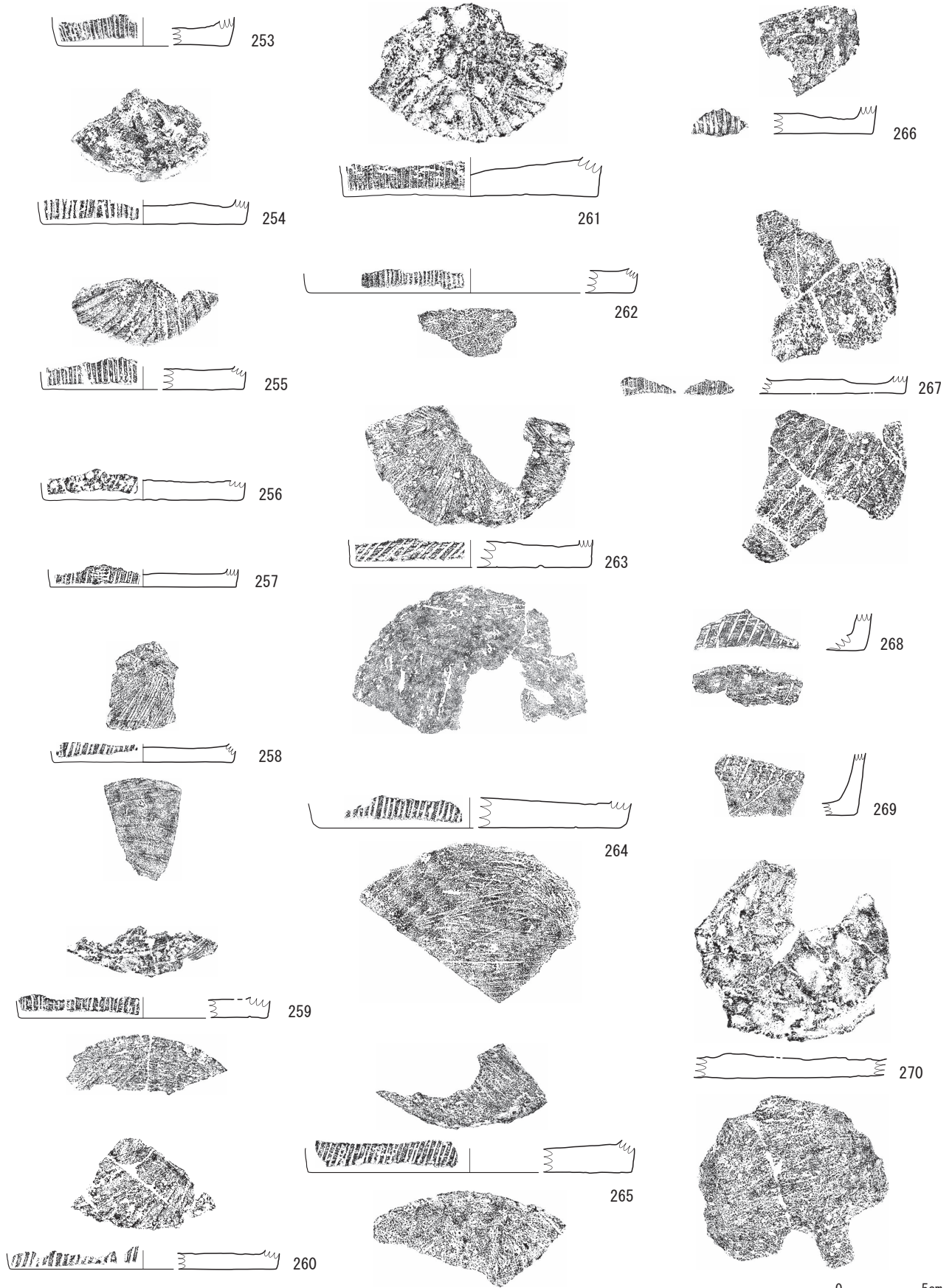
212はやや外反する口縁部だが、胴部の厚さに比べて口縁端は薄くなっていく。口縁端近くに二枚貝腹縁を寝かせて横方向に2段押圧している。斜方向条痕のあと、短い楔形突帯を3段貼り付け、突帯間に3列、突帯下に1列、二枚貝腹縁を寝かせて縦方向に押圧している。

213は小型の土器で、口縁端近くに左下がり方向の二枚貝腹縁押圧文があり、その下には縦方向に二枚貝腹縁押圧が密に付され、そのあと短い楔形突帯が幅狭く、割と雑に貼り付けてある。口縁近くに擦切りによる補修孔がある。

214～216は楔形貼付文のある胴部上半の破片である。214は二枚貝腹縁を斜方向に密に押し、そのあと楔形突



第51図 縄文時代早期の土器 (14)



第 52 図 縄文時代早期の土器 (15)

帯を貼り付けている。215も斜方向条痕のあと、二枚貝腹縁の押圧を施しているが、口縁近くは直に、その下は寝かせて押し、そのあと突帯のまわりをナデている。216は斜方向条痕のあと、長めの楔形突帯を貼り付け、そのあと突帯間に3列、突帯下に1列の二枚貝腹縁を押ししている。そのあと楔形突帯のまわりをナデている。

217～246は胴部破片で、斜方向条痕のあと、二枚貝腹縁を直に押ししたもの、寝かせて押ししたものがある。縦方向に並行して等間隔に近く押すものと、1列と3列に交互に押すもの(221～223)などがある。218は大型の貝殻を深く押ししている。228・231・232・241は押圧が途切れている。228・231の原体は長さが2.5～3.0cm程である。228は2.5cmの間に8ほどの肋がある。225～227は寝かせて、231は斜方向に押ししている。234は内外とも摩耗している。238の押圧は上の方が寝かせ、下の方が直と向きを変えている。242は薄手の土器で、擦切りによる補修孔が穿たれている。243は横方向条痕のあと、斜格子の沈線が引かれている。径10.5cm程と小型である。244は薄手の土器で、横方向条痕のあと斜方向の二枚貝腹縁押圧がみられる。245・246は縦方向押圧で区画し、そのあと左下がり押圧を施す部分と丁寧にナデた無文部を交互にしている。

247～252は底近くの破片である。縦あるいは斜方向の二枚貝腹縁押圧のあと、底近くに斜方向・縦方向の沈線が引かれる。胴内面は縦方向の丁寧なケズリで仕上げられており、底も丁寧にナデている。248は胴部外面の押圧が密な小型土器である。249も底径9.0cmと小型である。252は底径23.0cmと大型で、密な二枚貝腹縁押圧のあと、縦方向の沈線が施されている。

253～270は平坦な底部である。底径は9.2～11.0cmの小型のもの(253～258)と、13.0～17.6cmの大きなもの(259～265)とがある。立ち上がり部分には沈線が引かれているが、直立するものと、斜位のものがある。269はナデて押圧文を消したままにしている。底部は丁寧にナデたものが多く、254・263・266などは一部にミガキも見える。264・270は繊維状ハケナデである。内底部は254・261・270のように指様圧痕を残しているものもあるが、多くは丁寧にナデている。262は

白石を多く含むなど胎土・色調が異質である。

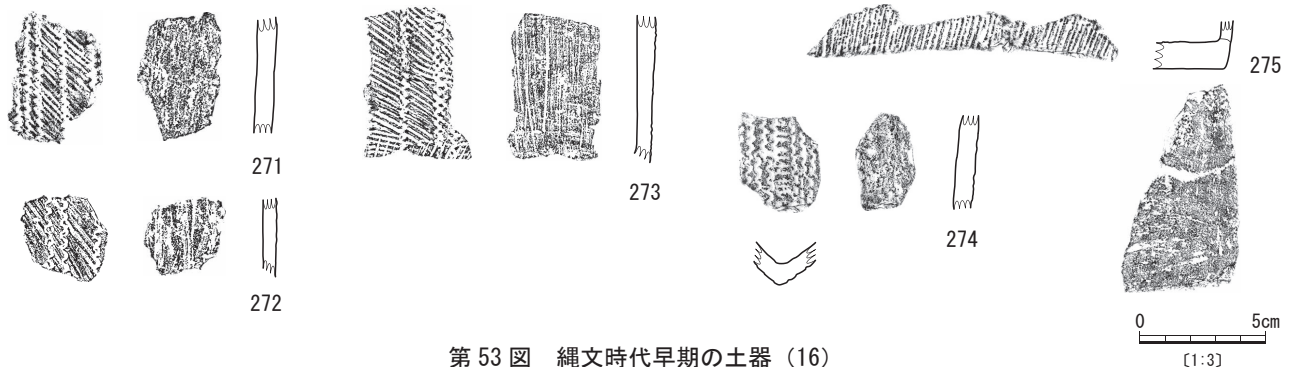
271～275は角筒土器である。胴部(271～273)は右下がり条痕のあと、二枚貝腹縁を縦方向に押圧している。272はやや丸みをおびている。273は下に左下がり沈線が施された底部近くの破片で、274は角に横方向の細沈線が施された角の破片である。275の底近くは縦に近い左下がり沈線が施される。底は丁寧にナデられ、白粉が付着している。

④ 小牧3A式土器(第54図・第55図276～313)

安定した平底からやや外傾しながら立ち上がり、外反しながら口縁端部に至る器形をしている。口縁部には二枚貝腹縁押圧文が横方向に巡り、その下に楔形の突帯文が貼り付けられている。口唇部には刻みが、胴部には縦方向の二枚貝腹縁押圧文が密に施されている。内面は縦方向のケズリだが、口縁付近は横方向である。図化していない破片が他に121点ある。

276～299は口縁部付近の破片である。276は口縁端近くに3段の浅い横方向貝殻押圧が、胴部には縦方向の二枚貝腹縁押圧文が付されるが、押圧文は直に深く押すものと、浅く押すものが交互にされる。その幅は1.5～3.0cmほどで、上方から下へ押されている。そのあと長い楔形突帯が貼り付けられ、上端は押圧され、側辺はナデられている。内面は下半が縦方向、上半が横方向の丁寧なナデ整形である。277・278の外面は丁寧にナデたあと、やや広めの貝殻腹縁押圧が施され、そのあと楔形突帯が貼り付けられている。突帯の側面は丁寧にナデ、上も貝殻で押している。279～281の突帯は細く、頂部は二枚貝、あるいは巻貝殻頂部で突き刺している。279の押圧文は細く密である。280の口径は17.4cmと小さい。

282～285は接合できないが、二枚貝押圧が似ており、内面が明赤褐色とにぶい黄橙色の縞状になっていることから同一個体と思われる。口縁端近くには3段の横方向押圧文があり、胴部には角のはっきりした矩形押圧文が縦方向に付されている。その上に2段以上の楔形突帯が貼り付けられ、頂部は刺突されている。口縁直径は22.2cmで、口縁部周辺にはススが付着している。底部近くは右上がり沈線が施されている。



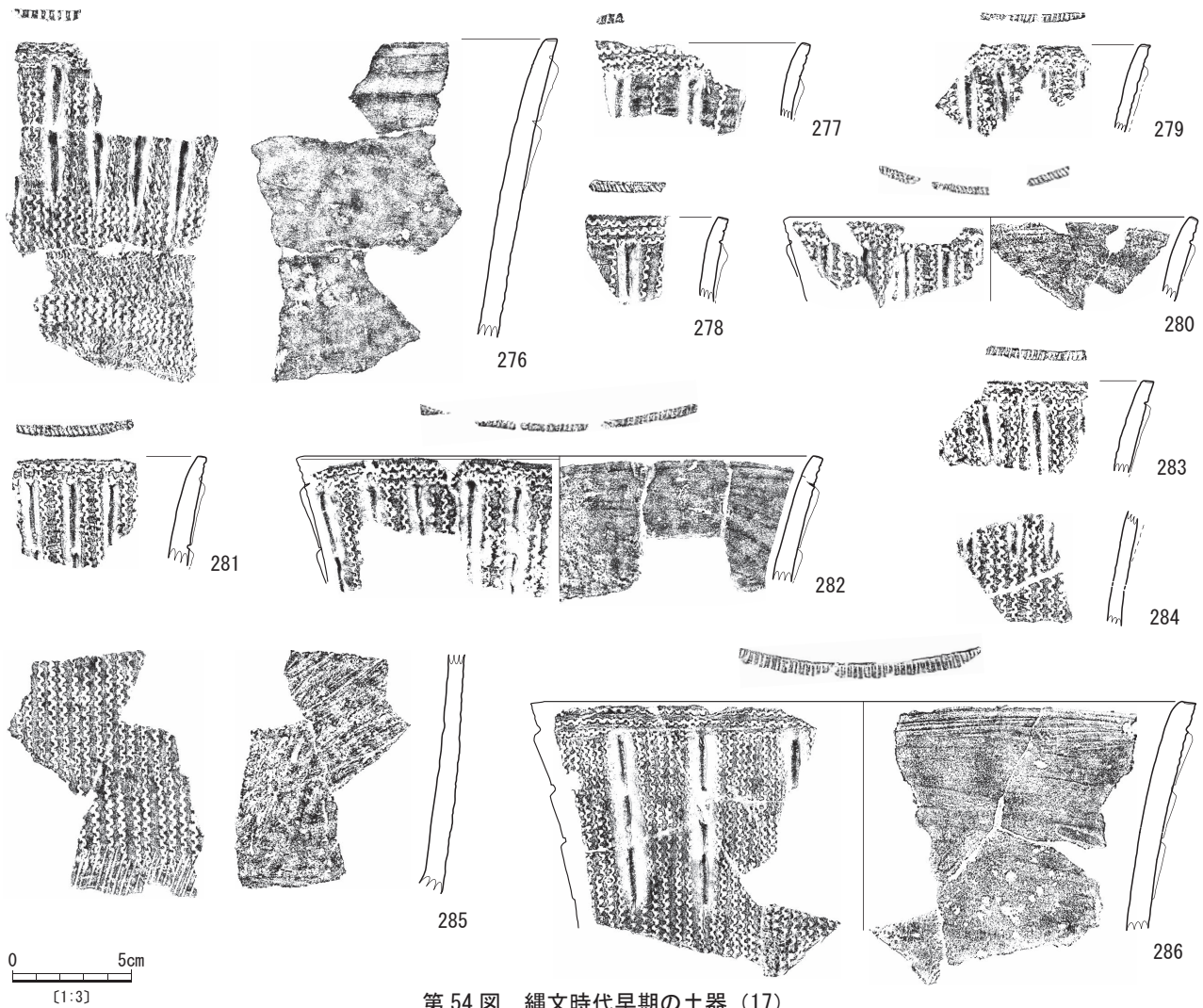
第53図 縄文時代早期の土器(16)

286 は口径 28.0 cm と大きな土器で、3 段の楔形突帯が貼り付けてある。楔形突帯の頂部は押されているが、周囲の調整はない。外面にはススが付着している。内面調整は丁寧で、口縁近くはミガキに近い。

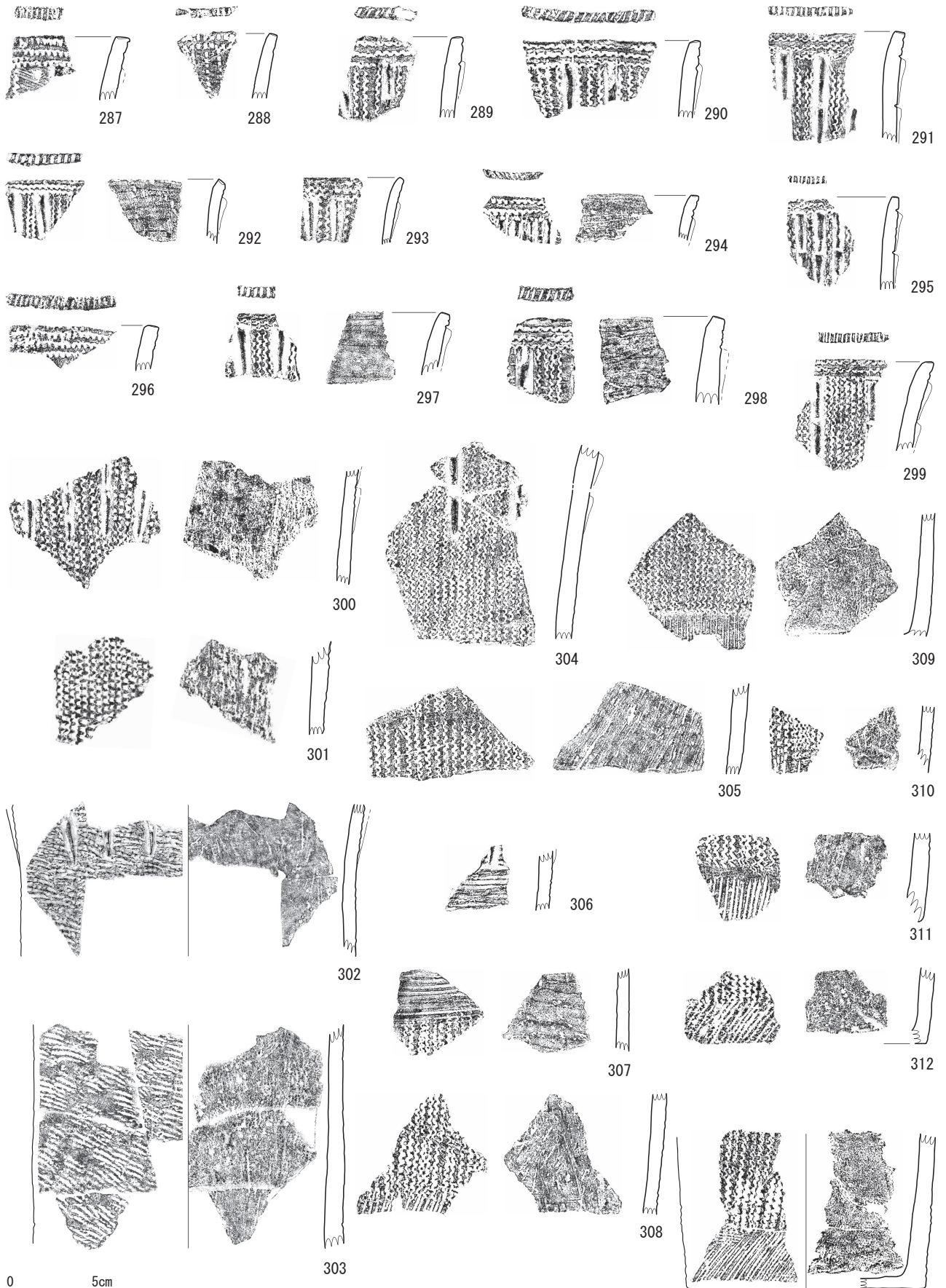
287・288 は寝かせた押圧である。288 は小破片のために貼付突帯の様相が不明で、口縁端押圧は 2 段である。289・290 の口縁端押圧は直に押しであり、楔形突帯は長いが、突帯周辺の調整はない。291 の外面押圧は直で浅い。貼付突帯の上端は丁寧に押ししているため、重なる突帯の下端は楔形をしていない。口唇部や内面調整は丁寧である。292～295 の貼付突帯は細かったり、短く、密に付いている。頂部は押ししている。292 の押圧はくっきりしているが、293～295 は押圧のあとナデており、押圧文がはっきりしない。296 は口縁端の破片で、貼付突帯の様相は不明である。横方向の 3 段押圧は下から押し上げるように押ししている。297～299 は分厚い破片で、大型のものかと思われる。いずれも内面調整は丁寧である。297 の貼付突帯は太めで、上を押ししている。押圧は浅めで、特に下の方は細かい。298 は橙色がかった色を

呈して、突帯のまわりは丁寧にナデている。299 の突帯は器厚の割に細く、突帯内の貝殻押圧はぎっしりと詰まっている。

300～307 は胴部である。300 と 301 はにぶい黄橙色を呈する硬質の破片で、同一個体と思われる。300 は上部の破片で、直に押しした貝殻押圧が密にみられる。スマートな楔形突帯が貼り付けてあり、上を押ししている。301 はやや下の破片と思われる、押圧が寝かせて押ししている。内面は縦方向のケズリだが、上の方はそのあと丁寧にナデている。302 は径が 18 cm ほどで、貝殻押圧が横方向に押しである。突帯は鋭い楔形を呈し、両側縁は丁寧にナデている。303 は弧状の貝殻押圧が横あるいは右下がり方向に押しされ、直径が 17 cm ほどである。304 は外へ開く器形をした大型の土器である。楔形突帯は短く、楔形突帯間には押圧がある。305 は内面が明赤褐色とにぶい黄橙色の縞状になっていることから 282～285 などと同一個体の可能性がある。外面にはススが付着している。306・307 は外面が黒色がかった色を呈し、縦方向の密な細かい貝殻押圧を施した後、浅い横位貝殻条痕で押圧



第 54 図 縄文時代早期の土器 (17)



第55図 縄文時代早期の土器 (18)

313

文を部分的に消している。細い楔形突帯を貼り付けている。

308～312は底近くの破片で、いずれも密に貝殻押圧を施し、端部近くには縦方向、あるいは斜方向の沈線が引かれている。311は底近くの押圧文をナデ消した後、沈線を施している。

313は底径が13.0cmで、底近くの貝殻押圧は深く押しているが、浅くナデ消した部分と、そのまま残したところがあり、文様に段がある。底近くの斜方向沈線は押圧文を完全にナデ消した後、下から上へ丁寧に引いている。底は丁寧にナデしており、底の厚さは薄い。

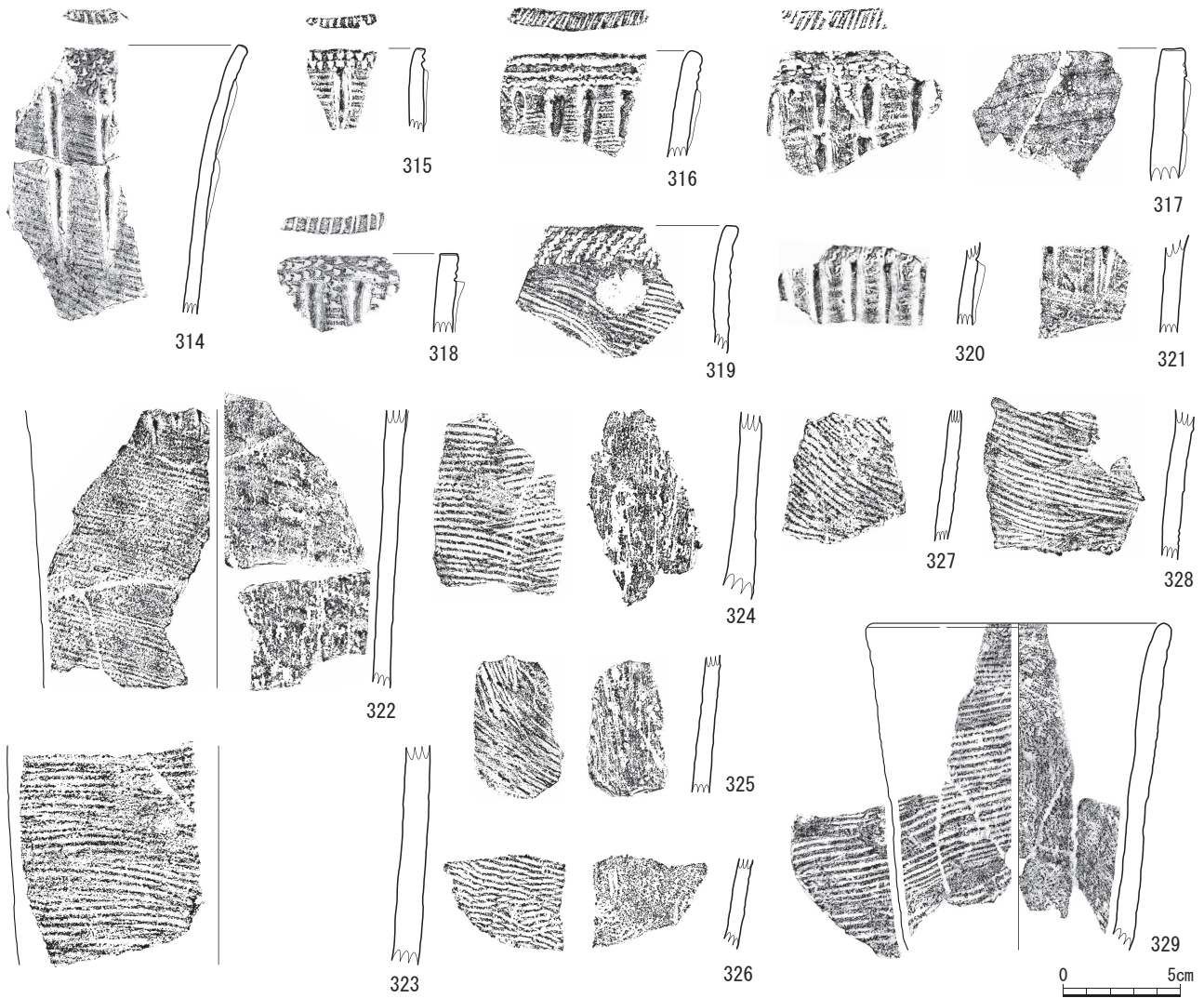
⑤ 札ノ元Ⅶ類土器 (第56図314～328)

底部からやや外へ開きながらまっすぐ伸び、口縁部はやや外反するか、そのまま伸びる。口縁部に横方向の二枚貝腹縁押圧文が2～3条施されるが、斜方向あるいは二枚貝背部の押圧を施すものもある。胴部は斜位、あるいは横位の貝殻条痕が施してある。条痕幅が狭く、浅い

ものである。口縁部下には押圧文、条痕のあと楔形、あるいは長楕円形の突帯が2段ほど貼り付けてある。口唇部には刻みが施されている。内面調整は縦ケズリだが、口縁近くは横方向にナデている。29点出土している。

314～318は口縁部で、314は外反しているが、315～318はまっすぐ伸びている。胴部の条痕は314が斜方向、他は横方向で浅い。口縁部の押圧は314が斜位、315・316・318が横位だが、315は2段、316は3段、318は4段である。317は二枚貝背部を押している。突帯文は概して短く、密に貼り付けてあるが、314はやや長い楔形を呈している。317・318は頂部を押しており、314・315・318は側辺をナデているが、316は貼り付けたままで調整をしていない。317は分厚い。

319は口縁部近くに新しい欠損のある破片である。口縁部近くでやや内反し、端部近くでは外反する器形をし、口唇部は丸みをおびた矩形を呈し、刻みはない。口唇部の一部に貝殻押圧らしき痕跡がみられる。外面の条痕は弧状を呈した所もあるが、やや右下がりである。口



第56図 縄文時代早期の土器 (19)

縁端近くに連続する左下がりの貝殻腹縁押圧が施されている。内面はミガキに近い丁寧な横ナデ調整である。

320～322は口縁近くである。320は口縁端近くに斜位の二枚貝腹縁押圧があり、その下の条痕はナデ消された後、やや長い楔形突帯を密に貼り付け、頂部には巻貝殻頂の刺突がある。上方の側辺は軽くナデている。321・322は楔形突帯を貼り付けており、321は両側辺をナデている。条痕はともに浅い。322の径は15cmほどである。

323～328は胴部で、右下がり斜位のものが多いが、弧状のもの、横位に近いものもある。焼成度は甘いものが多いが、324・325は硬質である。323は径17cmほどとやや大型である。324の内面ケズリはやや深い。328は上半に近い破片で、上端近くの条痕がナデである。

⑥ 別府原式土器 (第56図329)

1点のみの出土である。筒状だが口縁近くでわずかに外反する器形で、口縁端は丸みをおびている。口径13.0cmで高さは14.5cmほどの小型品である。外面はやや蛇行する8条ほどの横方向条痕で、底近くはナデ消している。内面は縦・斜め方向のケズリ整形だが、口縁近くは横方向のナデとなる。外面にはススが付着している。

⑦ 石坂式土器 (第57図330～348)

図化していない破片9点を含めてE・F-14～18区周辺で28点出土している。やや外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部と、口縁部へやや開きながらまっすぐ伸びる胴部から成る。

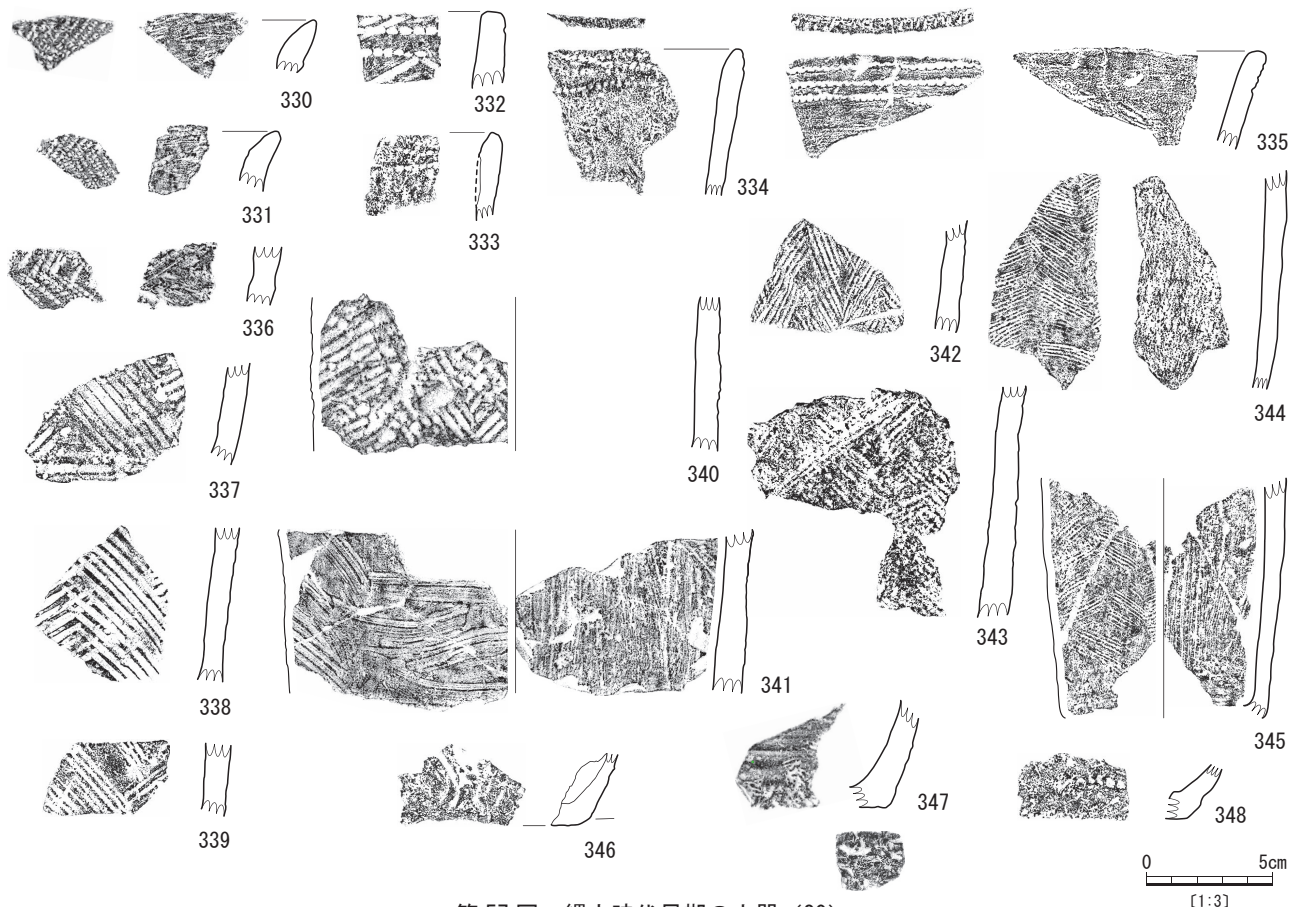
330・331は端部近くが外反し、細くなっている口縁端で、外面に綾杉状の貝殻押圧文がある。

332は直立して立ち上がる口縁部で、口唇部は平坦である。外面はナデたあと、斜方向の条痕を施し、そのあと2段に横方向の二枚貝押圧を施す。内面は丁寧なナデ整形である。

333・334はやや外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部で、口縁端近くに二枚貝押圧文が横あるいは斜位に施され、その下に綾杉状の条痕文が施されている。口唇部には刻みが施されている。内面は縦方向ケズリだが、口縁近くは丁寧にナデている。ともに磨滅が目立つ。

335は口径の大きな破片である。外面は丁寧な横ナデ調整で、口縁端近くに3段の二枚貝腹縁の浅い押圧文がみられる。口唇部はやや丸みをおびており、刻みが施されている。内面は横方向の丁寧なナデ仕上げである。

336～343は外面が綾杉状条痕の胴部である。条痕幅は337・338などが広いのに対して、342は狭い。内



第57図 縄文時代早期の土器 (20)

面は338などが繊維状の丁寧な斜ナデであるのに対し、342などは縦方向ケズリのあと、一部ナデ仕上げがみられる。338の外にススが、342の内にオコゲが残っている。

344・345は接合できないが、同一個体の底近くの胴部破片である。図化しなかった5点の破片も含めI-10区(1点のみH-10区)で出土している。底径は8.0cmで、やや外へ開きながらまっすぐ伸びる胴部の最大径は9.8cm、残存高9.5cmの小型深鉢である。外面は縦方向のナデ整形のあと櫛目状細沈線条痕を綾杉状に施している。底部近くには施されていない。内面は丁寧な縦ケズリである。

346～348は丸みをおびた底部で、外面には斜条痕や巻貝殻頂刺突文がある。346の内側には赤土が付着している。

⑧ 下剥峯式土器(第58図349～354)

分厚い作りで外へまっすぐ伸びる器形である。谷頭やF・G-11区で8点出土しており、349～351は同一個体と思われる。口唇部は平坦で、外面には横方向の二枚貝腹縁押圧を連続して押している。底部近くは横方向の条痕で仕上げている。内面は下半が縦方向のケズリ、上半は丁寧な横方向のケズリである。

352～354はやや丸みをおびた器形をし、集石18号で出土している28と同一個体と思われる。外面は二枚貝の貝殻腹縁押圧が横方向に繰り返され、内面はミガキ調整である。焼成良好で、胎土に白色石が多く含まれる。

⑨ 桑ノ丸式土器(第58図355・356)

分厚い作りで、口唇部はやや内傾しているが、平坦である。H-13区で2点出土しているが、同一個体である。外面には右下がり・左下がり方向の短い条痕が施さ

れ、内面はミガキ調整である。胎土には白色石や石英などやや大きな石粒が多く含まれ、粗い。にぶい橙色を呈し、焼成良好である。

⑩ 押型文土器(第58図357)

G-3区で出土した。小粒な穀粒押型文で、内面は丁寧にナデている。外面は明赤褐色を呈しているが、内面はにぶい橙色である。石英・長石のほか、白色・黄白色・灰色・茶色の細石粒を多く含む砂質土を用いている。

⑪ 手向山式土器(第58図358～360)

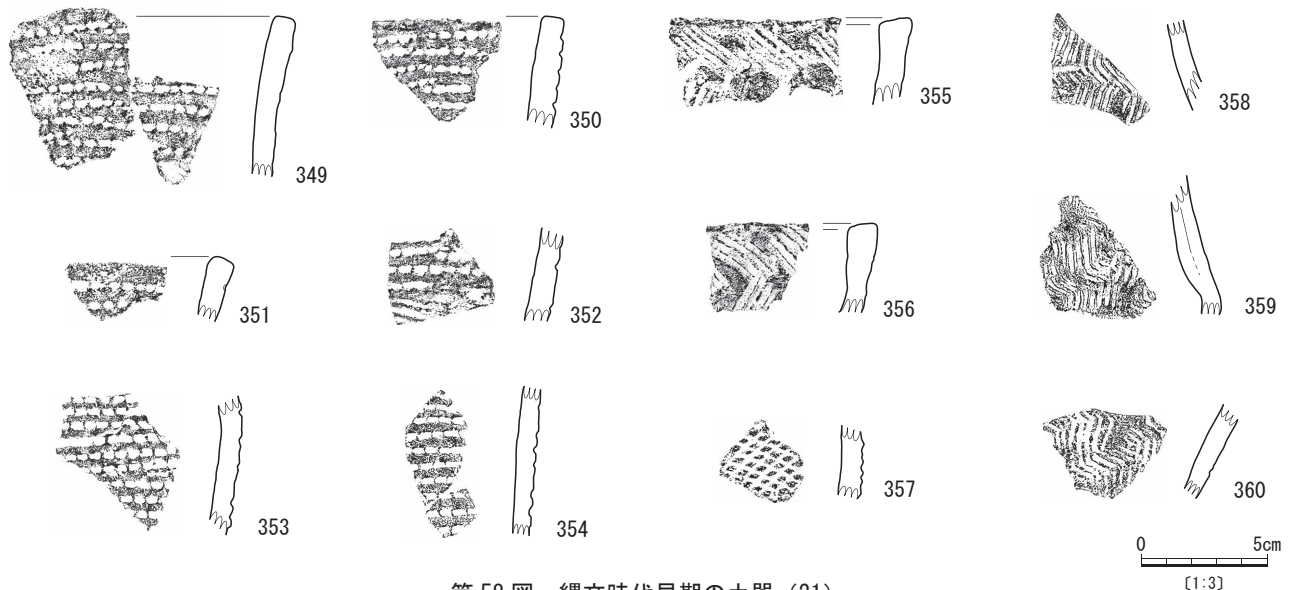
底から外傾して立ち上がり、やや丸みをおびて内傾している器形である。F-10・12区で3点出土し、同一個体と思われる。外面には山形押型文を横方向に転がしており、内面はナデ調整である。358は上半部破片で外面にススが付着している。359は屈曲部で、丸みをおびている。上半の内面には粘土を貼り付けて分厚くしている。屈曲部内面の下半にはオコゲが付着しているが、胴下半の破片である360にも内面にオコゲが付着している。

⑫ 塞ノ神A式土器(第59図361～373)

F-4～6区付近で36点出土している。

361は口縁端近くと、3cmほど下に横方向の連続押圧文があり、その間に横あるいは斜方向の5条ほどの凹線が引かれている。口唇部には上から押圧文が施され、内面は丁寧にナデられている。

362～369は同一個体と思われる破片で、同じような文様の施されている小破片が他に9点出土している。筒状の胴部から頸部で外傾し、ラップ状に開く口縁部へ至る器形をしている。口縁部外面には2～3条の凹線が横



第58図 縄文時代早期の土器(21)

方向に3段引かれ、胴部外面は縦位に網目状捺糸文が施されている。口縁外面は上から2条・2条・3条の横線が少しずつ離れて3段あり、363は上と2段目の途中に爪形の押圧文が施されている。丸みをおびた口唇部には内外から押圧文が矢羽根状に施されている。胴部には丁寧なナデ調整のあと縦位に1.2cm幅ほどの網目状捺糸文が施されている。網目状捺糸文を施したあと、口縁部の横線を引いている。内面はミガキに近い丁寧な横ナデ調整である。362～369は塞ノ神A a式土器である。

370・371は薄手の無文土器で、壺形の土器と思われる。370は平たい底からすぼまる口縁へ向かう胴屈曲部破片である。371は底に近く、底径は13cmほどである。内面は貝殻条痕のあとナデ調整し、外面は粗い横ナデ調整である。焼成良好で硬質となっている。

372は幅3cm足らずの縦位沈線間に斜方向縄文を施した胴部で、外にはススが付着している。373にも縄文がみられるが、沈線区画はみられない。この2点は塞ノ神A b式土器である。

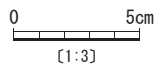
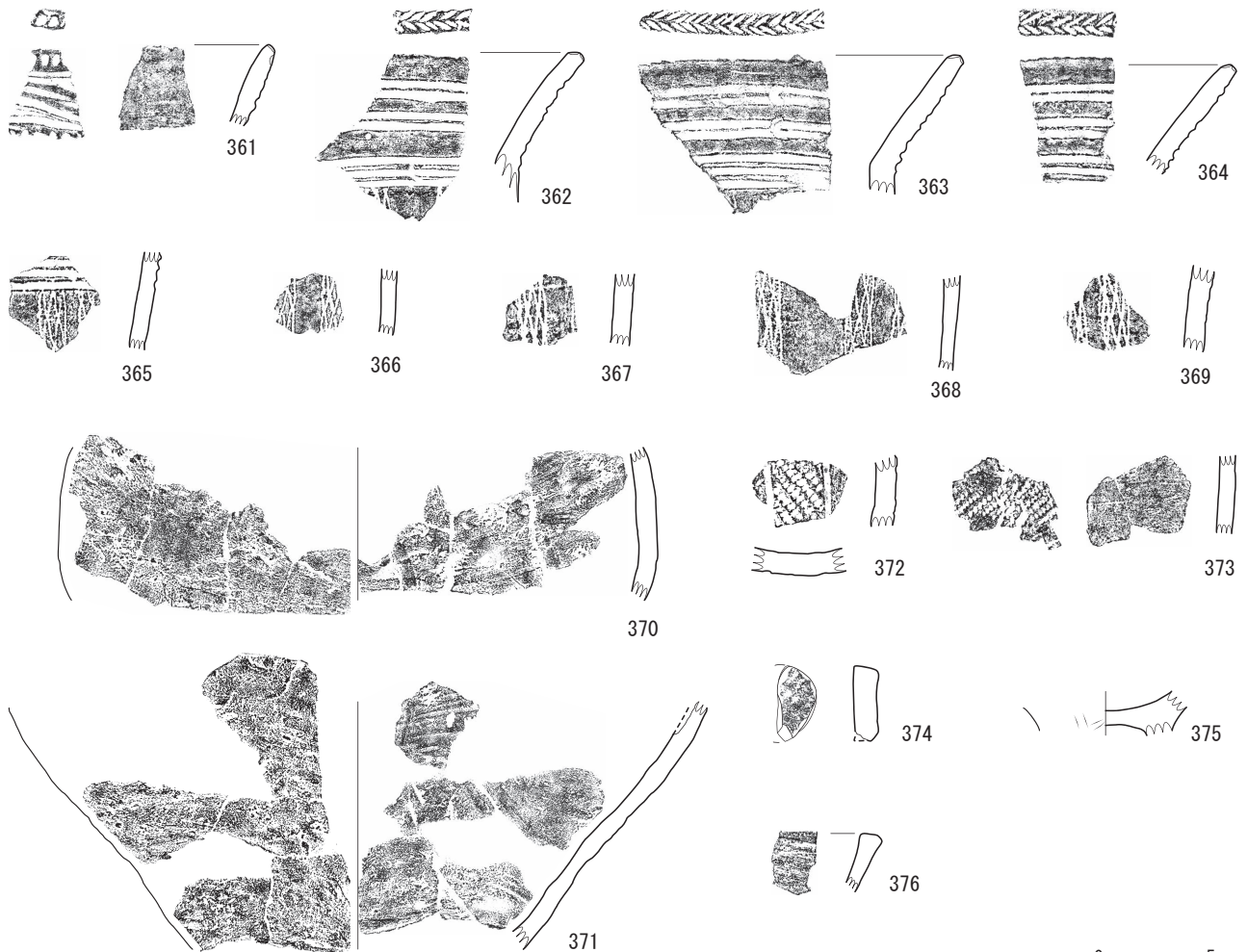
⑬ 土製品 (第59図374)

F-16区V a層で出土した円盤形の土製品である。直径3.2cm、厚さ1.0cmで、半分ほど残っている。周囲を丁寧に打ち欠いて円形にしている。文様等がはっきりしないため詳細不明だが、内外面の調整、胎土、焼成度などからして早期の土製品と思われる。

⑭ 時期不明の土器 (第59図375・376)

375は台付き深鉢の体部と脚台の接合部分で、直径は5.4cmほどである。鉢部と脚台はのちに貼り付けている。内外とも貝殻でナデているようである。白石・黄白石・灰石などの細石粒を多く含み、脚台付きの深鉢という器種から縄文時代後期の市来式土器と思われる。F-6区付近の溝状遺構2号で出土している。

376は玉縁状を呈する鉢の口縁部である。内外ともミガキに近い丁寧なナデ仕上げをしている。VI層で出土しているが、器形・調整など縄文時代晩期の土器の可能性もあることからここで扱った。



第59図 縄文時代早期の土器 (22)

4 包含層出土の石器

(1) 概要

当該期の遺構外出土石器は合計45点で、その殆どが包含層のVb・VI層から出土したものである。

分布状況は、調査区1から調査区2にかけて、緩斜面及び谷部に点在するものの、調査区1では集石の分布域にまとまりがみられる。調査区3からの出土はない(第60図)。

器種別の内訳は、包含層以外の出土石器を含めて、石鏃6点、削器1点、石核2点、小型石斧1点、剥片・碎片類13点、磨石・敲石類20点、石皿破片2点である。

剥片・碎片と石皿片を除き、ほか完形品をはじめ破片を合わせて、28点を図化した。また、石材鑑定は肉眼観察による。以下、個々の特徴について述べる。実測図の並びは調査区での分布状況に関係なく、順不同である。

(2) 出土石器

石鏃(第61図377～382)

6点図化した。377・378は局部磨製石鏃、379～382は打製石鏃である。377は上半部に肩をもち五角形を呈する。器体の表裏に広く縦方向の研磨を施して厚みを減じており、周縁部にのみ浅い調整剥離を加えている。頁岩製である。378は側縁を弧状として、挟入が深く発達した基部が形作られている。調整剥離は精密であり、裏面の中央稜線に横方向の研磨痕を残している。頁岩製である。379は比較的深い平坦剥離によって丁寧な形作られており、挟入の浅い窄まった基部を有する。短い脚部の一方を欠損している。玉髓製である。380は肥厚した器体に粗い調整剥離を留めた未成品とみられ、加工時に一方の脚部を破損した可能性がある。チャート製である。381は薄身にして挟入の深い基部が形作られ、一方の脚部を欠損している。チャート製である。382は薄手の剥片を用いて調整剥離を行っており、裏面中央に素材面を

残している。脚部を欠損する。石材は透明感のある黒曜石である。

削器(第61図383)

1点図化した。383は厚みのある剥片を素材とし、側縁及び基部に表裏両面から粗い調整剥離を施して、略二等辺三角形に整形されている。先端部に短く残置した素材縁に微小剥離痕が生じている。チャート製である。なお、一方で石鏃未成品といった可能性が残る。

石核(第61図384・385)

2点図化した。類似した384・385は斑晶の含有が目立つ黒曜石製のものである。打面転移を頻繁に行い、極限まで不定形剥片を剥離した多面体を呈する残核である。

石斧(第61図386)

1点図化した。386は長さ5.3cmと小型短冊形の局部磨製石斧である。器体の裏面に素材面を大きく残して整形剥離は最小限であり、主に刃部を磨製として、表裏両面から非常に丁寧な研磨が施されている。刃こぼれもなく、鋭く整った刃縁を呈する。頁岩製である。

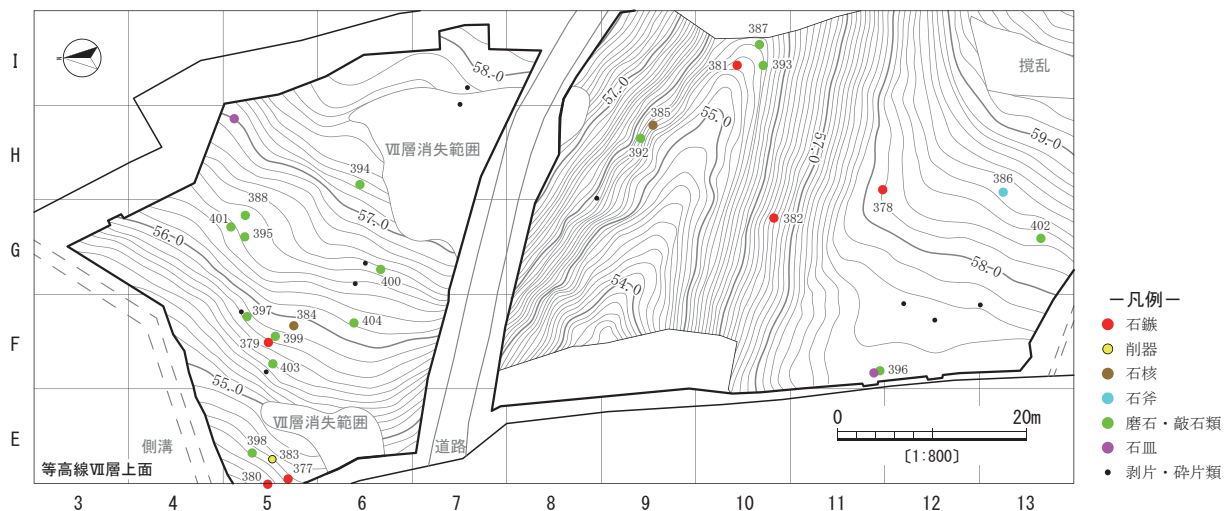
剥片・碎片類

図化は割愛した。13点あり、大きさ1～4cmの不定形で、2cm以下のものが多い。石材は、黒曜石9点の他、玉髓2点、チャートと頁岩が各1点である。

磨石・敲石類(第62図～第64図387～404)

20点中18点図化した。これらには、磨り痕・敲打痕・凹痕にみる各機能を併せ持ったものが存在することから、磨石・敲石・凹石を一括して扱った。以下に分類する。石材については、すべて砂岩を用いている。なお、被熱して赤化したものは、集石礫への利用がうかがわれる。

- 1類：磨り面のみで、片面か両面、全面に及ぶもの
- 2類：磨り面と敲打痕をもつもの
- 3類：磨り面と表裏中央に凹痕をもつもの
- 4類：磨り面と敲打痕、表裏中央に凹痕をもつもの



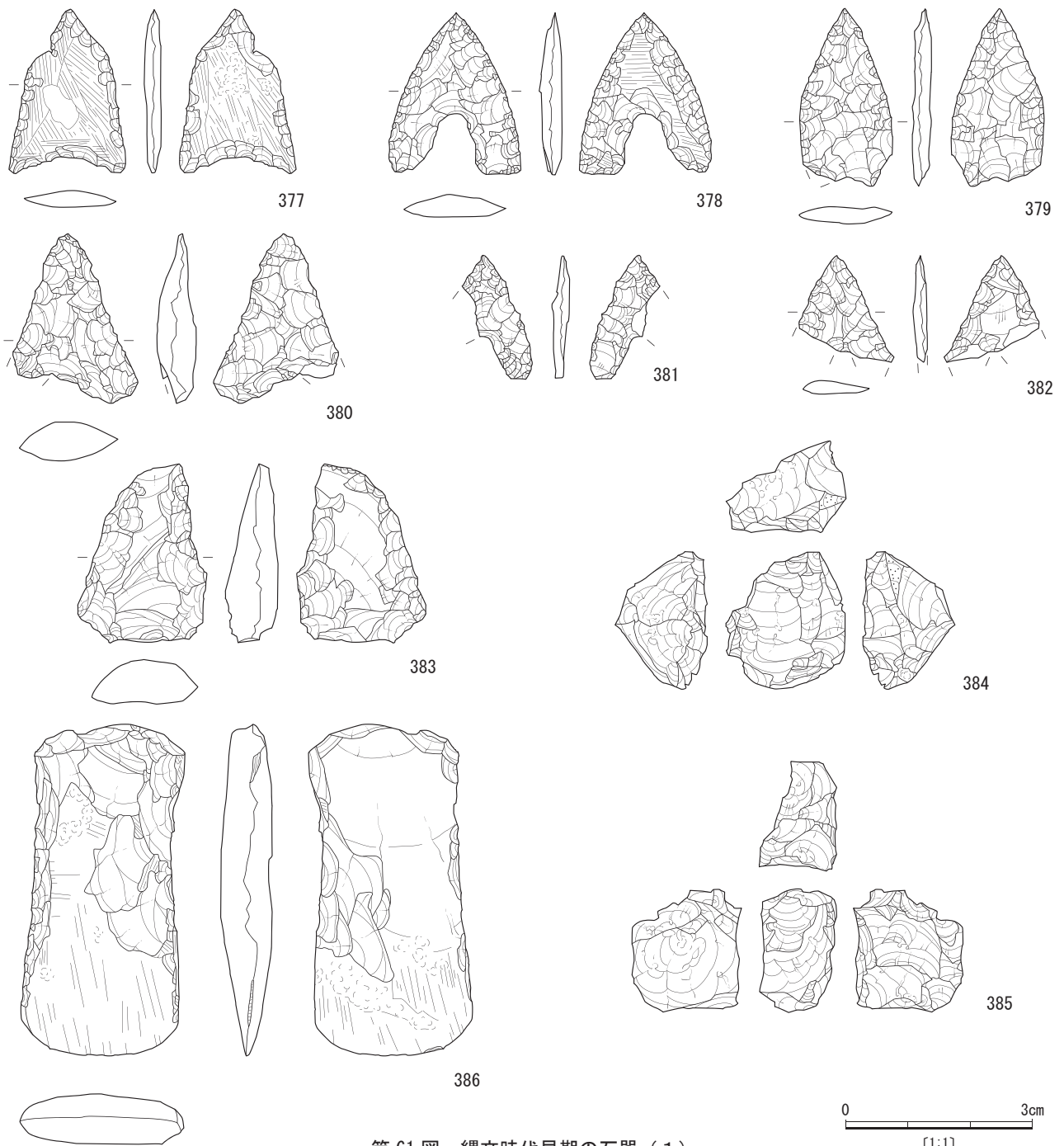
第60図 縄文時代早期の石器分布図

1類は、387・388の2点である。どちらも被熱赤化がみられるが、387は滑らかに光沢をおびた磨り面を有する。387は下半を、388は裏面を欠損する。2類は、389～397の9点であり主体をなす。このうち、389は裏面に広く作業面の再生とみられる敲打痕を有する。また特に、389・392では側面に筋状に窪んだ顕著な敲打痕が生じている。389・392・393・395・397には被熱赤化がみられ、391～397は器体の一端ないし半分ほどを欠損している。3類は、398・399の2点である。どち

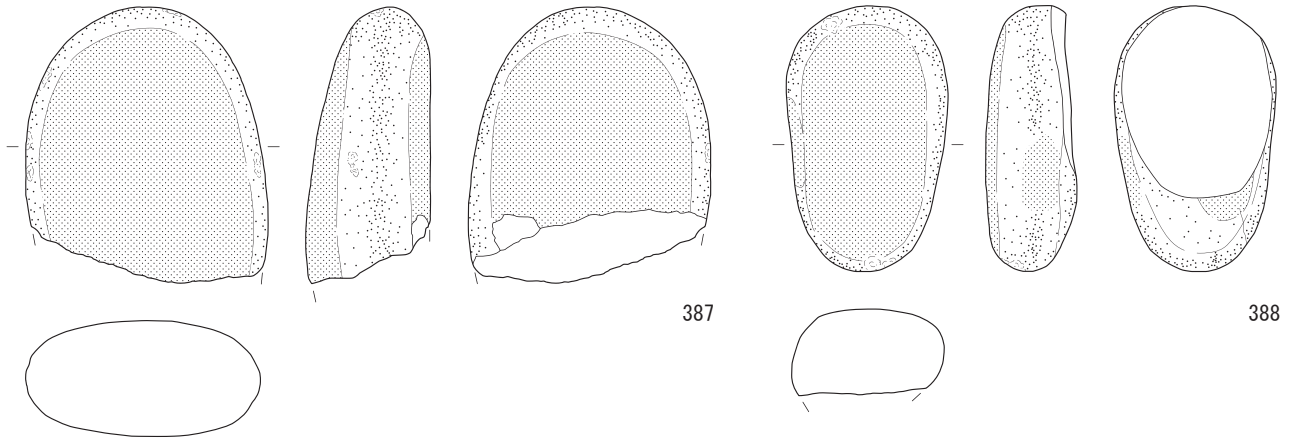
らも側面がやや平らとなり、石鹼形を呈して特徴的である。398には被熱赤化がみられ、399は下半を欠損している。4類は、400の1点のみである。400は自然礫の歪な形状を留めて、中央の凹痕がより顕著である。その他、401～404は小破片である。いずれも被熱赤化しており、401には敲打による剥離が生じている。

石皿

図化は小片のため割愛した。2点とも扁平石皿の表面とみられ、被熱赤化した剥片である。花崗岩製である。

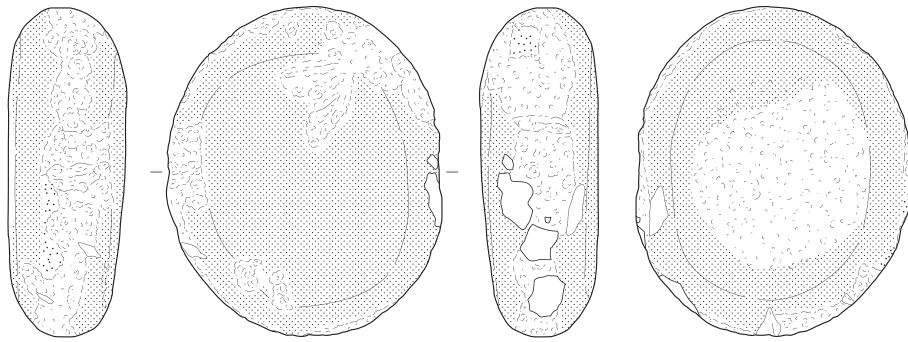


第 61 図 縄文時代早期の石器 (1)

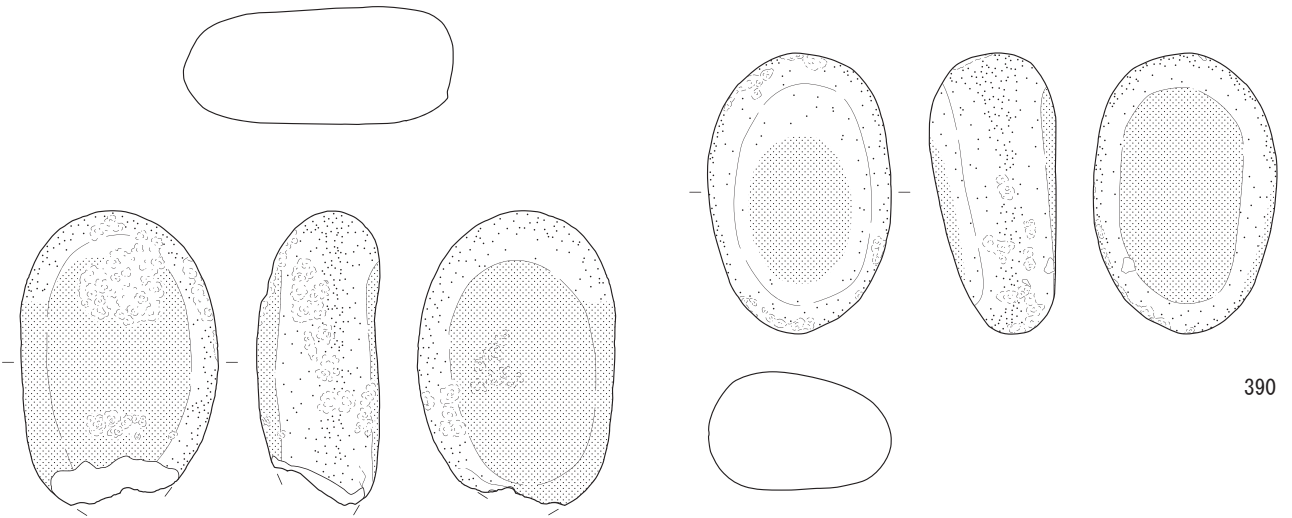


387

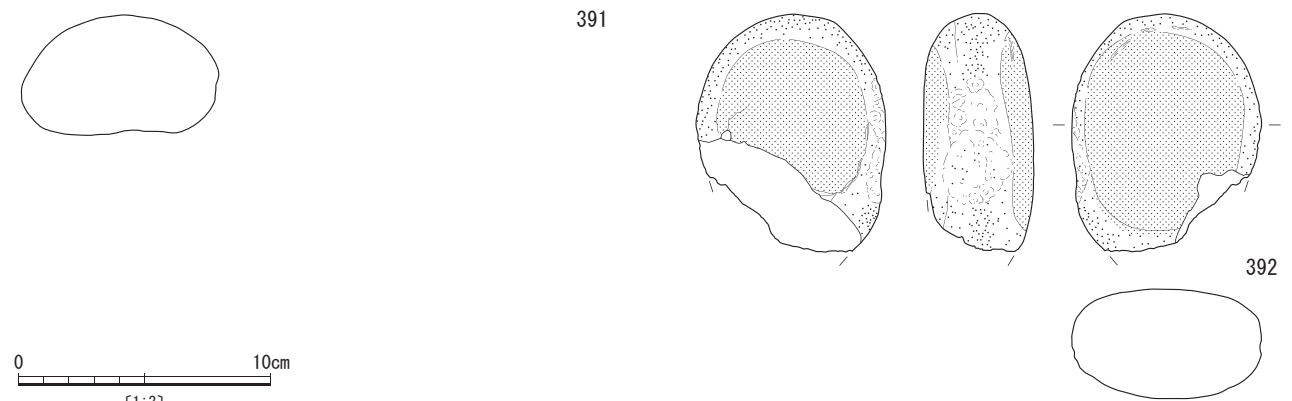
388



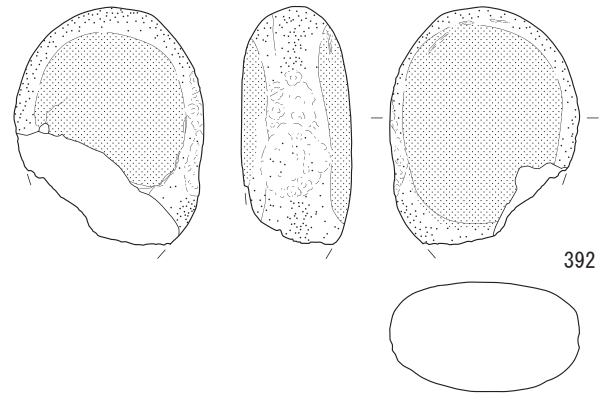
389



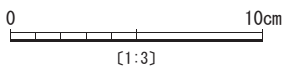
390



391



392



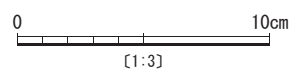
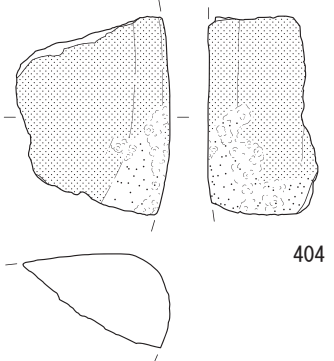
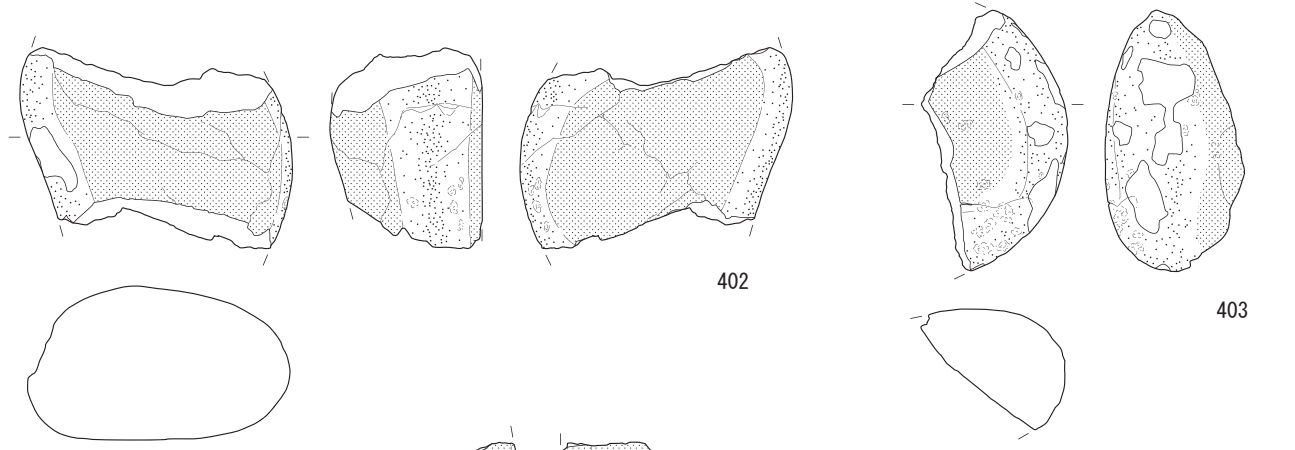
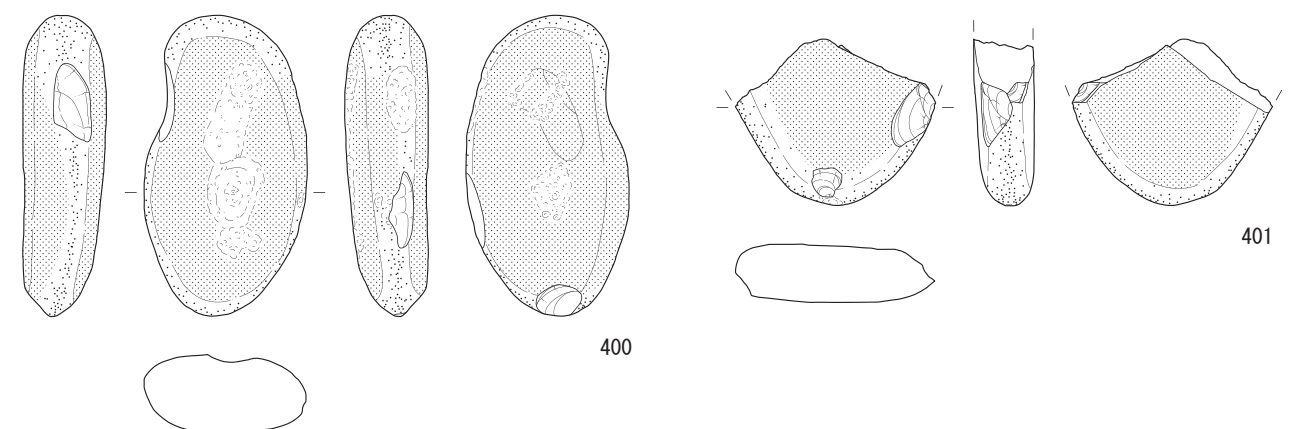
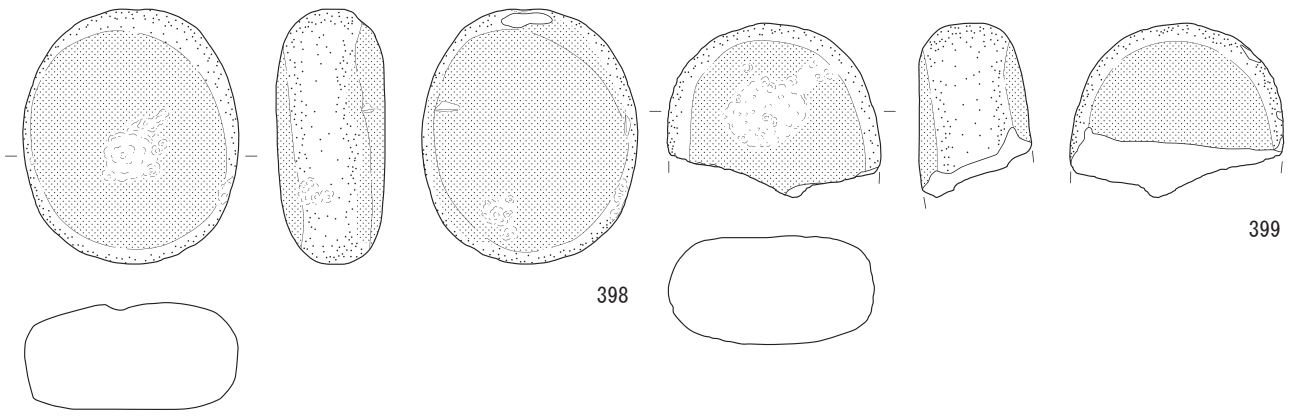
[1:3]

第 62 図 縄文時代早期の石器 (2)



第 63 図 縄文時代早期の石器 (3)

0 10cm
[1:3]



第 64 図 縄文時代早期の石器 (4)

第5表 縄文時代早期集石出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調整・文様)	口径 底器高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土							焼成	備考		
											外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石			灰石	
13	3	SS1	G3	-	1	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	-	丁寧な縦ケズリ	橙	橙	○	○								良好	
14	4	SS2	H4・5	-	2	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	-	丁寧なケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○	○			普通	
	5	SS2	H4・5	-	1	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	-	縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○	○			普通	
15	6	SS3	G4～6, H5	V b, VI	1	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧, 楔形突帯	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○	○		○		良好	
	7	-	F・G6	V b	70他	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧, 楔形突帯	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙			○		○	○	○			良好	
	8	-	G6	V b, VI	169他	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧, 底部上縦沈線	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙			○		○	○		○		普通	
16	9	SS5	G5	-	1	加栗山	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	橙	橙	○		○		○	○				普通	
	10	SS6	G・H6	-	2	加栗山	胴部	縦貝殻押圧	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○	○			○		○			普通	
	11	SS6	G・H6	-	1	加栗山	口縁部	口唇刻み 口縁に3段二枚貝横押圧	-	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	○				普通	
	12	SS7	H6	-	1	加栗山	胴部	横条痕・二枚貝押圧, 底部上縦沈線	-	丁寧な縦ケズリ	暗赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		○		○			良好	スス
17	13	SS7	H6	-	2	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧, 楔形突帯	-	縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○			○		○				良好	
	14	SS9	G6	-	1	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧, 底部上縦沈線	-	丁寧な縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○					良好	
18	15	SS12	E5	-	1	前平Ⅱ	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	赤黒	赤黒	○				○		○			良好	
19	16	SS14 SS15	F11	-	6	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	斜ナデ	赤	赤	○		○		○		○			普通	粗い土
	17	-	F11～13	V ab, VI, 攪乱	2他	前平Ⅰ	完形	口縁に1段の押圧斜条痕	21.8 14.8 34.2	下半縦ケズリ 上条痕	赤	赤		○	○		○		○			良好	
20	18	SS15	F11	-	7	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○		○		○			良好	
	19	SS15	F11	-	11	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ナデ	赤橙	にぶい橙	○	○			○		○			普通	部分的に下部はコケ
	20	SS16	F10	V a	1他	前平Ⅱ	口縁～胴部	口縁に2段の楕円形押圧 横条痕	14.2 -	横・斜ナデ	橙	にぶい橙			○	○	○		○			良好	スス, 補修孔
	21	SS16	F11	-	2	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ナデ	赤橙	灰黄褐	○	○			○	○				普通	
21	22	SS17	F12	-	2	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	赤褐	赤褐	○	○	○		○					良好	
	23	SS17	F12	-	4	前平Ⅰ	底部	-	-	外底: ナデ 内底: 丁寧なナデ	暗赤褐	赤褐	○		○		○		○			良好	
	24	SS17	F12	-	3	前平Ⅰ	底部	-	-	外底: 編布痕	赤	赤	○		○		○		○			良好	
22	25	SS18	F12	-	1	前平Ⅰ	胴部	縦・斜条痕	-	丁寧な縦ナデ	にぶい褐	にぶい褐			○		○	○		○		良好	
	26	SS18	F12	-	4	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○		○			普通	
	27	SS18	F12	-	5	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	○	○			普通	
	28	SS18	F12	-	2他	下剥峯	口縁～胴部	横二枚貝腹縁押圧	-	丁寧な横・斜ナデ	灰白	灰白	○	○			○		○			良好	
25	29	SS23	H・I 12・13	-	2	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	橙	橙	○	○	○		○	○	○			良好	
26	30	SS24	H13	-	1	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	斜ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○			○		○	○		普通	
27	31	SS25	H13	-	1他	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○				○			○		良好	
31	32	SS31	F15	-	6	札ノ元 Ⅶ	口縁部	口唇刻み 口縁に斜二枚貝押圧 横条痕・楔形突帯	-	縦ナデ 口縁は横ナデ	明赤褐	明赤褐	○		○		○	○				良好	
	33	SS31	F15	-	3	札ノ元 Ⅶ	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	橙	橙	○					○				普通	
	34	SS31	F15	-	1	札ノ元 Ⅶ	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○		○			普通	
	35	SS31	F15	-	4	札ノ元 Ⅶ	底部	斜条痕	-	横ナデ	明赤褐	赤灰	○				○		○			普通	底に白粉
	36	SS31	F15	-	2	円盤形 土製品	完形	-	2.8× 2.2	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○			○		○	○		普通	
32	37	SS32	F15	-	7他	札ノ元 Ⅶ	胴部	横条痕	-	縦ナデ	赤橙	赤橙	○		○		○		○			普通	
	38	SS32	F15	-	2	札ノ元 Ⅶ	胴部	横条痕	-	ナデ	橙	橙	○	○			○		○			普通	摩耗目立つ
	39	SS32	F15	-	6	札ノ元 Ⅶ	胴部	横条痕	-	縦ナデ 口縁は横ナデ	橙	橙	○	○			○		○			普通	
	40	SS32	F15	-	4	札ノ元 Ⅶ	胴部	横条痕	-	縦ナデ	橙	橙	○				○		○			普通	
33	41	SS33	E・F17	-	1	-	胴部	斜条痕	-	ナデ	橙	橙	○	○	○		○		○			普通	

第6表 縄文時代早期落とし穴出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	層	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
36	42	落とし穴	-	1	磨製石鏃	2.30	1.70	0.23	1.1	頁岩	

第7表 縄文時代早期土器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調整・文様)	口径 底径 器高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土						焼成	備考
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石		
43	F11	V b	4	前平 I	口縁部	口唇二枚貝押圧 横条痕	-	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○				普通		
44	G6	V b	133	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	(12.8) (口)	ケズリ 口縁横ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○	○		良好		
45	F11・12	V b, VI	1000 他	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	(13.0) (口)	ケズリ 口縁横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○		普通	補修孔	
46	F6	V b	46	前平 I	口縁部	口縁1段二枚貝腹縁押 圧 斜条痕	-	斜ケズリ 口縁ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○		○	○		普通		
47	F5	VI	39	前平 I	口縁部	口縁1段二枚貝腹縁押 圧 斜条痕	-	縦ナデ	にぶい橙	褐	○	○	○		○	○	普通		
48	G4	V b	278	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	-	斜ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○			○	○		普通		
49	I6	VI	360	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	-	横ナデ	浅黄	浅黄	○			○	○		良好		
50	F11	V a	800	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	-	縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○		良好		
51	H9・10	V b, VI	916 他	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	(11.0) (口)	縦ケズリ 口縁横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○		良好		
52	G4	V b	299	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	-	縦横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○		良好		
53	G11	V b	756	前平 I	口縁部	口唇刻み 口縁1段押 圧 斜条痕	-	縦ケズリ 口縁斜ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○		○	○		普通		
54	G3	V b	384	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	-	斜ケズリ 口縁横ナデ	橙	橙	○	○		○	○		良好		
55	F15	V b	-	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	-	横ナデ	にぶい褐	褐	○	○		○	○		普通		
56	G4	VI	-	前平 I	口縁部	口縁1段押圧 斜条痕	-	横ナデ	黒褐	にぶい褐	○	○		○	○		良好		
57	H10	VI	871	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	-	横ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	○			○	○		普通		
58	F14	V b	501	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	-	縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○			○	○		普通		
59	I10	T1	646	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	-	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○			普通		
60	G13	V b	1118	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	-	不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○		普通	磨滅	
61	G12	VI	761	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	-	縦ナデ 口縁横ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	○			○	○		普通		
62	F11	V b	1050	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	-	横ナデ	橙	にぶい赤褐	○			○	○		普通		
63	H13	V b	473	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	-	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○		普通	摩耗	
64	F12	V b	765 他	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	(19.0) (口)	縦ケズリ 口縁横ナデ後縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○		○	○		普通		
65	G6	V b	134	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	-	横ナデ後斜ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○		普通		
66	G12	V b	760	前平 I	口縁部	口縁2段押圧 条痕	-	斜・横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○		○	○		普通		
67	H10	V b, VI	922 他	前平 I	口縁 ~ 胸部	口縁2段押圧 条痕	(17.0) (口)	縦ケズリ 口縁横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○			普通		
68	I7	VI	444	前平 I	口縁 ~ 胸部	口縁2段押圧	-	丁寧な斜ナデ 口縁丁寧な横ナデ	浅黄橙~黒 褐	灰黄褐	○	○		○	○		良好	補修孔	
69	G11	V b	759	前平 I	口縁 ~ 胸部	口縁2段押圧 斜・横条痕	(12.0) (口)	横ナデ, 斜ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○			○	○		普通	補修孔	
70	F12	V b	486	前平 I	胸部	口縁2段押圧 条痕	-	丁寧な縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○		良好		
71	I10	VI	651	前平 I	胸部	口縁2段押圧 条痕	-	縦ケズリ	浅黄橙	にぶい橙	○	○		○	○		良好	補修孔	
72	F15	V b	897	前平 I	胸部	斜条痕	-	丁寧な縦ケズリ	橙	にぶい橙	○	○		○	○		普通	スス	
73	H・I10	VI, T1	663 他	前平 I	胸部	斜条痕	-	縦ケズリ	橙	褐灰	○	○		○	○		良好		
74	G4	V b	298	前平 I	胸部	斜条痕	-	丁寧な縦ナデ	橙	褐灰	○	○		○	○		普通		
75	G3	V b	393	前平 I	胸部	斜条痕	-	粗い縦ケズリ	灰褐	赤褐	○	○		○	○		良好		
76	F13	攪乱	-	前平 I	胸部	斜条痕	-	斜ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○		普通	全体磨滅	
77	F7, G5	V b, VI	9・154	前平 I	胸部	斜条痕	-	粗いケズリ	橙	橙	○	○		○	○		良好		
78	G13	V b	848 他	前平 I	胸部	斜条痕	-	縦ケズリ	黒褐	にぶい橙	○	○		○	○		良好	スス	
79	G6	V b, 攪乱	176 他	前平 I	胸部	斜条痕	-	縦ケズリ	橙	黒褐	○	○		○			普通		
80	G7	V b	57	前平 I	胸部	斜条痕	-	丁寧な縦ケズリ	橙	橙	○	○		○	○		良好		
81	G13	V b	843	前平 I	胸部	斜条痕	-	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○		普通	剥脱	
82	F12	V b	785	前平 I	胸部	斜条痕	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○		普通		
83	F12	VI	906	前平 I	胸部	斜条痕	-	丁寧な縦ケズリ	明黄褐	明黄褐	○	○		○	○		普通		
84	H9	VI	1225	前平 I	胸部	斜条痕	-	斜ケズリ	橙	橙	○	○		○	○		普通		
85	F11	V b	1059	前平 I	胸部	斜条痕	-	丁寧な縦ケズリ	浅黄橙	褐灰	○	○		○	○		普通	補修孔	
86	I9	V b	698	前平 I	胸部	斜条痕	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○		普通		
87	I10	VI	1084	前平 I	胸部	斜条痕	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○		良好		
88	H9	VI	1109 他	前平 I	胸部	斜条痕	-	縦ケズリ後ナデ	灰黄	灰黄	○	○		○	○		良好	コゲ	
89	H4	V b	327 他	前平 I	胸部	斜条痕	-	丁寧な縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○		○	○		良好		
90	F16	V b	587	前平 I	胸 ~ 底部	斜条痕	(14.0) (底)	縦横ケズリ	にぶい褐	にぶい橙	○			○	○		普通	摩耗	
91	F4	V b	10	前平 I	胸 ~ 底部	斜条痕	(16.6) (底)	斜ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○		普通		
92	F6	V b, VI	7・177	前平 I	底部	斜条痕	(17.0) (底)	外底：網代状圧痕後 条痕横ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○			○	○		普通		
93	H5, I7	V b, VI	358 他	前平 I	胸 ~ 底部	斜条痕	-	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○			○	○		普通		
94	F17	V b	575	前平 I	底部	斜条痕 底部上横条痕	-	不明	にぶい橙	にぶい黄橙	○			○	○		普通		
95	F12	V a	1035	前平 I	底部	斜条痕 底部上横条痕	-	斜ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○		○	○		良好	調整粗く 凹凸	
96	F11	V ab, VI	797 他	前平 I	胸 ~ 底部	斜条痕 底部上横条痕	11.0 (底)	縦ケズリ 外底：ナデ	明赤褐	にぶい橙	○			○	○		普通	コゲ	
97	F15	V b, VI	604 他	前平 I	胸 ~ 底部	斜条痕 底部上横条痕	(10.6) (底)	丁寧な縦ケズリ	赤灰	にぶい黄橙	○	○		○	○		普通		
98	G11	VI	1155	前平 I	底部	斜条痕 底部上横条痕	9.0 (底)	縦ケズリ 内底：ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○		普通		

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調整・文様)	口径 底径 器高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土						焼成	備考	
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石			長石
40	99	F15	V b	602	前平 I	胴～底部	斜条痕 底部上横条痕	(9.4) (底)	ケズリ 内底：ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○				○	○		普通	
	100	H9	VI	1005	前平 I	底部	斜条痕 底部上横条痕	(9.0) (底)	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 ～褐灰	○				○	○		普通	
	101	H9	VI	933	前平 I	胴～底部	斜条痕 底部上縦刻み	(8.5) (底)	縦ケズリ 内底：丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙		○			○	○		普通	
	102	F15	V b	605	前平 I	胴～底部	底部上斜沈線	(14.4) (底)	縦ナデ 外底：格子状圧痕 内底：指頭状圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○		普通	
	103	F17	V b	579	前平 I	底部	-	-	外底：網目状圧痕	にぶい黄橙	灰褐	○				○	○		良好	底部白粉
41	104	F11	V b, VI	1057 他	前平 I	底部	-	-	外底：格子状圧痕後 ハケナデ 内底：指頭状圧痕	にぶい褐	明赤褐	○	○			○	○		普通	
	105	I10	T1	642	前平 I	底部	-	-	外底：格子状圧痕後 ハケナデ 内底：指頭状圧痕	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○		○	○		普通	
	106	G4	V b	285	前平 I	底部	-	-	外底：格子状圧痕	黄灰	橙		○	○		○	○		良好	
	107	H5・9	V ab, VI	403 他	前平 I	底部	斜・横条痕	15.0 (底)	縦ケズリ後内底との 境に時計回りケズリ 外底：丁寧なナデ	明赤褐	明赤褐	○		○		○	○		良好	底部はや や楕円
	108	H9	VI	965	前平 I	底部	底部角に貝殻押圧	(21.4) (底)	外底：横条痕	浅黄橙	浅黄橙	○				○	○		普通	
	109	I7	VI	353 他	前平 I	底部	斜条痕	(22.4) (底)	外底：ケズリ 内底：指頭状圧痕	にぶい赤褐	にぶい橙		○			○	○		良好	
42	110	I7	VI	356	前平 I	底部	斜条痕 底部上縦・斜条痕	(23.4) (底)	縦ケズリ	橙	にぶい橙	○				○	○		普通	
	111	G3	V b	389	前平 II	口縁部	口唇状刻み 口縁 2 段押圧 横条痕	-	横→縦ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	○				○	○		良好	
	112	H6	VI	195	前平 II	口縁部	口縁 1 段押圧 横条痕	-	横ナデ 口縁横ケズリ	橙	橙	○		○		○	○		良好	
	113	I10	VI	1083	前平 II	口縁部	口縁 2 段押圧 横条痕	-	横後縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○	○		普通	
	114	G6	V b	129	前平 II	口縁部	口縁 2 段押圧 横条痕	-	横→斜ケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙			○		○	○		普通	
	115	H9	VI	856	前平 II	口縁部	口縁 2 段押圧 横条痕	-	縦ケズリ 口縁条痕後横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	○	○			○	○		普通	
	116	G3	V b	398	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁に 1 段 押圧 横条痕	-	斜→縦ケズリ 口縁横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○		普通	
	117	F5	V b	88	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁に 1 段 押圧 横条痕	(10.0) (口)	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○				○	○		良好	
	118	H10	T1	-	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁に 1 段 押圧 横条痕	-	丁寧なナデ	にぶい橙	灰黄褐	○		○		○	○		普通	
	119	I13	V b	744	前平 II	口縁部	口縁 2 段押圧 横条痕	-	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○				○	○		良好	
	120	H5	V b	453 他	前平 II	口縁部	口縁 2 段押圧 横条痕	(8.6) (口)	丁寧なケズリ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	○				○	○		普通	
	121	I7	VI	355	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁 2 段押 圧 横条痕	-	横ナデ	浅黄～黒褐	にぶい黄褐	○				○	○		普通	
	122	G9	V b	476	前平 II	口縁部	口縁 2 段押圧 横条痕	-	-	浅黄橙	浅黄橙	○				○	○		普通	摩耗
123	H10	VI	917	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁 2 段押 圧 横条痕	-	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	○		普通		
43	124	E5, G4・5	V ab, VI, T1	61 他	前平 II	口縁～ 胴部	口唇押圧 口縁 2 段押 圧 横条痕	(20.2) (口)	縦ケズリ 口縁横ナデ	赤橙	灰白・赤橙	○	○			○	○		普通	スス
	125	H10, I9・10	VI	649 他	前平 II	口縁～ 胴部	口縁 2 段押圧 横条痕	-	縦斜ケズリ 口縁一部ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○	○		良好	剥落
	126	H10	V b	1102	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁 2 段押 圧 横条痕	-	丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○				○	○		普通	
	127	F9	V b	-	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁 2 段押 圧 横条痕	-	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○	○		普通	
	128	H10	V b	1088	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁 2 段押 圧 横条痕	-	-	にぶい黄褐	-			○		○	○		普通	補修孔
	129	I7	V b	343	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁 2 段押 圧 横条痕	-	横ナデ→縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○			普通	
	130	H9	VI	989	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁 2 段押 圧 横条痕	-	横条痕→縦ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				○	○		良好	
	131	H9	VI	533	前平 II	口縁部	口縁 2 段押圧 横条痕	-	縦ケズリ 口縁横ケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙	○				○	○		普通	
	132	F4	V b	96・97	前平 II	口縁部	口唇押圧 口縁 2 段押 圧 横条痕	-	斜→縦ケズリ 口縁横ケズリ	にぶい橙	橙	○		○		○	○		良好	
	133	I6	V b	-	前平 II	口縁部	口唇・口縁に木の実状 押圧 横条痕	-	縦ナデとケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○		○	○		良好	
	134	H13	V b	710	前平 II	胴部	口縁に押圧 横条痕	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙			○		○	○		良好	表面剥脱
44	135	F6	V b	-	前平 II	胴部	口縁に押圧 横条痕	-	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○		普通	
	136	F4	V b	-	前平 II	胴部	口縁に押圧 横条痕	-	-	にぶい橙	にぶい橙			○		○	○		普通	摩耗
	137	G5	V b, VI	152 他	前平 II	胴部	横条痕	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○	○		普通	
	138	I7	VI	350 他	前平 II	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	赤灰	赤灰	○	○			○			普通	コゲ
	139	E18	V b	546 他	前平 II	胴部	横条痕	-	丁寧な縦ナデ	赤	橙		○	○		○	○		良好	
	140	G9	VI	485	前平 II	胴部	横条痕	-	丁寧な縦ケズリ	橙	褐灰	○		○		○	○		普通	
	141	G・H5	V b	264 他	前平 II	胴部	横条痕	-	横条痕→斜ケズリ	灰黄	にぶい黄橙	○	○			○	○		普通	コゲ
	142	I9	VI	721	前平 II	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙			○		○	○		普通	
	143	G4	V b	280	前平 II	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	赤	黒			○		○	○		良好	
	144	G4	V b	273 他	前平 II	胴部	横条痕	-	丁寧な横ケズリ	にぶい橙	褐灰			○		○	○		良好	
	145	G3	VI	388	前平 II	胴部	横条痕	-	丁寧な縦ケズリ	橙	灰赤		○	○		○	○		○	良好
	146	I10	T1	665	前平 II	胴部	横条痕	-	縦ケズリ	赤橙	暗赤灰	○	○			○	○		良好	
	147	H5	V b	322	前平 II	胴部	横条痕	-	丁寧な縦ケズリ	橙	橙	○		○		○	○		普通	内面剥落
	148	H5	V	-	前平 II	胴部	横条痕	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○	○		良好	スス

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調整・文様)	口径 底径高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土						焼成	備考	
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石			長石
44	149	H5	V b	404 他	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	縦ケズリ	赤	赤橙								良好	コゲ
	150	H5	V	-	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	縦ケズリ	橙	橙	○							良好	コゲ
	151	H5	VI	419	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○	○						良好	
	152	H5	VI	414	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						普通	
	153	H5	V b	412	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	丁寧なケズリ	褐灰	にぶい黄褐	○	○						良好	
	154	G4	V b	296	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						普通	
	155	G3	V b	394	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○						普通	
	156	F6	V b	48 他	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	浅黄橙		○						良好	剥落
	157	I6	VI	359	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	ケズリ	赤	赤	○	○						良好	スス
	158	I13	V b	737	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						良好	
159	I9	VI	693	前平Ⅱ	胸部	横条痕	-	縦ケズリ	橙	褐灰	○	○						良好		
160	I5	V b	363 他	前平Ⅱ	胸部	横条痕 底边上斜条痕	-	丁寧な縦ケズリ	明赤褐	赤黒		○						良好	コゲ	
45	161	F6, H5	V b	52 他	前平Ⅱ	底部	横・斜条痕	(8.0) (底)	横ナデ縦ケズリ	橙	にぶい赤褐	○							良好	
	162	H9	VI	992	前平Ⅱ	底部	横条痕後ナデ	(8.0) (底)	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○							普通	
	163	H10	V b	1107	前平Ⅱ	底部	横条痕	(10.6) (底)	ケズリ後ナデ 外底：貝殻押圧後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙								普通	
	164	G3, H4	V b	326 他	前平Ⅱ	底部	横条痕	-	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○	○						良好	
	165	G3	V b	301	前平Ⅱ	底部	横条痕	-	縦横ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○							普通	底に白粉
	166	F5	VI	37	前平Ⅱ	底部	横条痕	10.0 (底)	ケズリ 外底：丁寧なナデ 内底：指頭状押圧痕 後ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○							良好	
	167	F5	V b	77	前平Ⅱ	底部	横条痕	-	横ナデ 外底：貝殻押圧痕後ナデ	にぶい橙	橙	○	○						良好	
	168	G4	V b	309	前平Ⅱ	底部	横・斜条痕	-	斜・縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○						良好	底に白粉
	169	H4	V b	271	前平Ⅱ	胸部	横条痕 底近くナデ	-	縦ケズリ	赤橙	赤		○						良好	
	170	G4	VI	442	前平Ⅱ	底部	横条痕	10.0 (底)	外底：圧痕ナデ消し 内底：指頭状押圧痕	にぶい褐	にぶい橙	○							良好	
	171	F6	V b	71	前平Ⅱ	底部	横条痕	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	浅黄橙	○							普通	
	172	I5	V b	361 他	前平Ⅱ	胴～底部	横条痕 底边上斜条痕	(12.0) (底)	斜ケズリ 外底：ケズリ	橙	にぶい橙	○	○						普通	コゲ
	173	H11	VI	703	前平Ⅱ	底部	横条痕	(12.6) (底)	外底：内底 条痕様ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						普通	
	174	I10	VI	669	前平Ⅱ	底部	横条痕	-	外底：ケズリ 内底：指頭状押圧痕	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○						良好	
	175	H9, I7 ～10	V b, VI, T1	345 他	前平Ⅱ	胴～底部	横条痕, 底边上斜条痕	14.4 (底)	丁寧な縦ケズリ 外底：ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○						良好	
46	176	I14	V b	747 他	前平Ⅲ	口縁部	口縁2段押圧	(11.6) -	口縁は丁寧なナデ 縦ケズリ横ナデ	明赤褐	橙	○	○						普通	同一個体 底に白粉 推定高20 cm
	177	I・J13 SS23	V b	733 他	前平Ⅲ	胸部	上部横条痕 下部縦条痕	9.5～ 10.0	外底：格子状押圧痕 後ナデ 内底：指頭状押圧痕			○	○						普通	
	178	I14	V b	1120 他	前平Ⅲ	底部	底边上横条痕	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						普通	スス
	179	E18	V b, VI	552 他	前平	口縁～胸部	口縁1条の横二枚貝押圧 斜条痕	(12.0) (口)	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○						普通	スス
	180	H9	V b, VI	66 他	前平	口縁部	縦ケズリ	(13.0) (口)	粗い縦ナデ・ケズリ 口縁斜ナデ	赤	赤	○	○						良好	
47	181	G4	V b, VI	291 他	志風頭	口縁部	口縁二枚貝押圧・斜条痕・角部巻貝押圧・2条の斜二枚貝押圧など	-	縦ケズリ 口縁横・斜ナデ	赤	赤	○	○						良好	スス 角筒土器 同一個体
	183	G3	V b	387 他	志風頭	口縁部	口唇押圧 口縁に斜・角部に縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ, 押圧痕 口縁斜ケズリ	黒褐	橙	○	○						良好	角筒土器 スス
	184	G4	V b	297	志風頭	口縁部	口唇押圧 口縁に縦・横貝殻押圧 斜条痕後斜二枚貝押圧 角部に縦竹管様押圧	-	縦ケズリ 口縁横ケズリ	赤黒	暗赤褐	○	○						良好	角筒土器 スス
	185	F4, H5	V b, VI	118 他	志風頭	口縁～胸部	口縁に3段の横二枚貝押圧 斜条痕・縦鋸歯状沈線	-	縦ケズリ 口縁横ケズリ	にぶい黄橙・褐灰	にぶい黄橙・褐灰		○						良好	角筒土器 スス
	186	G4	V b	163	志風頭	口縁部	口唇押圧 横条痕後口縁近く横鋸歯状・角部縦鋸歯状沈線	-	縦ケズリ後丁寧な横ナデ	橙	橙	○							良好	角筒土器 スス
	187	G4	V b	310	志風頭	口縁部	横条痕 口縁近く横鋸歯状沈線	-	斜ケズリ後丁寧な横ナデ 口唇ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○						良好	角筒土器 スス
	188	G4, I6	V	289 他	志風頭	胸部	横条痕・縦鋸歯状沈線	-	丁寧なケズリ	橙	黒褐	○	○						普通	角筒土器
	189	G4	V b	288	志風頭	胸部	横条痕・縦鋸歯状沈線	-	丁寧な縦ケズリ	橙	橙	○	○						良好	角筒土器
	190	G4	V b	300	志風頭	口縁部	口唇押圧 横条痕後口縁に縦二枚貝押圧・2条横沈線	-	縦ケズリ 口縁横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○						良好	角筒土器 スス 補修孔
	191	G3	V b	383	志風頭	胸部	横条痕後二枚貝を縦に2列に押圧	-	丁寧なケズリ	赤	赤	○	○						良好	角筒土器 コゲ スス
192	G4	V b, VI	287 他	志風頭	胸部	斜条痕後3列の縦鋸歯状沈線	-	丁寧なケズリ	橙	橙	○	○						普通		
48	193	H9	VI	863 他	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段横二枚貝押圧 横・斜条痕・3段の楔形突帯・Y字状の腹縁押圧	(31.6) (口)	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○							良好	193～196 は同一個体
	194	G・H9	VI	972 他	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段横二枚貝押圧 横・斜条痕・3段の楔形突帯・Y字状の腹縁押圧	-	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○							良好	

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調整・文様)	口径底径高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土						焼成	備考										
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石			長石	灰石								
48	195	F5, G6	V b	28 他	加栗山	胴部	横・斜条痕・楔形突帯・Y字状の腹縁押圧	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○	○	○	○	○	良好	193～196 は同一個 体								
	196	I10	VI	611 他	加栗山	胴部	横・斜条痕・楔形突帯・Y字状の腹縁押圧	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			○		○	良好						
	197	G・H9, I10	VI, T1	963 他	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝縦押圧	-	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○							○	○			○	良好					
	198	H9	VI	1188 他	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 楔形突帯・突帯間縦貝殻押圧	-	横ケズリ 口縁は横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○								○		○		○	良好				
	199	H6, I10	V b	183 他	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 楔形突帯・突帯間縦貝殻押圧	-	横ケズリ 口縁は横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○								○		○		○	良好				
	200	E5	V b	108 他	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 楔形突帯・突帯間斜貝殻押圧	-	-	にぶい褐	にぶい橙	○										○	○		○	普通	摩耗により 不明		
	201	H9	V b	1238	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 斜条痕・楔形突帯・Y字状縦貝殻押圧	-	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○											○	○		○	良好		
	202	I10	T1	629	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 楔形突帯・突帯間縦貝殻押圧	-	横～斜ナデ	にぶい褐	明赤褐	○											○	○		○	良好		
	203	H9	VI	967	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 横条痕・楔形突帯・Y字状縦貝殻押圧	-	ケズリ後横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○										○	○		○	良好		
	204	H14	V b	334	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 楔形突帯・縦貝殻押圧	-	横ナデ	にぶい褐	にぶい橙	○		○									○	○		○	良好		
	205	E5	攪乱	-	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 斜二枚貝押圧	-	横ナデ	褐	橙	○											○	○		○	普通		
	206	G5	V b	155	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 楔形突帯・突帯間縦貝殻押圧	-	縦ケズリ 口縁横ナデ	橙	橙	○												○	○		○	普通	
	207	G5・6	IV b, V b	197 他	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に3段の二枚貝押圧 斜条痕・楔形突帯・Y字状縦貝殻押圧	-	横ケズリ	橙	橙	○												○	○		○	良好	
49	208	F4・5, H・15	V b, VI	15 他	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に4段の二枚貝押圧 斜条痕→3段の楔形突帯・突帯間縦二枚貝押圧	(30.4) (口)	縦ケズリ後斜ナデ 口縁横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○		○								○	○		○	良好	208～211 は同一個 体		
	209	F4・5	V b	17 他	加栗山	口縁部	口唇押圧 口縁に4段の二枚貝押圧 斜条痕→3段の楔形突帯・突帯間縦二枚貝押圧	(30.4) (口)	縦ケズリ後斜ナデ 口縁横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○									○	○		○		良好	
	210	G・F5	V b	81 他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ後斜ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○		○								○	○		○	良好			
	211	G6, H9	V b	139 他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ後斜ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○		○									○	○		○		良好	
	212	E5, G4, H・15	V b, VI	62 他	加栗山	口縁～ 胴部	口唇押圧 口縁に2段の横二枚貝押圧 斜条痕・3段の楔形突帯・突帯間に縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ 口縁丁寧なナデ	明赤褐	明赤褐	○		○									○	○		○		良好	
	213	G5	V b	229	加栗山	口縁部	口唇に押圧 口縁に斜二枚貝押圧 縦二枚貝押圧・楔形突帯	-	横ナデ	にぶい橙	橙	○											○	○		○		普通	擦切による 補修孔
	214	G6	V b	126	加栗山	胴部	斜条痕・斜二枚貝押圧・楔形突帯	-	横ケズリ	にぶい橙	明赤褐	○		○									○	○		○		良好	
	215	G6	VI	436	加栗山	胴部	斜条痕・斜二枚貝押圧・楔形突帯	-	横ケズリ	褐灰	にぶい橙	○			○								○	○		○		良好	
	216	G9	V b	483	加栗山	胴部	斜条痕・楔形突帯・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○									○	○		○		良好	
	217	G4	V b	279	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○											○	○		○		良好	
	218	H9	VI	1226	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○											○	○		○		良好	
	50	219	I7	V b	430	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○								○	○		○		良好	
		220	H9	V b, T1	52 他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	橙	橙	○		○								○	○		○		普通	
221		G9	V b	480	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	横→縦ケズリ	橙	橙	○										○	○		○	良好			
222		F4	V b	1169 他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○									○	○		○	良好		
223		G4	V b	277	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○											○	○		○	良好		
224		H9	V b	518	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○									○	○		○	良好		
225		I7	V b	433	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙	○											○	○		○	良好		
226		G・H5	V b, VI	173 他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	褐	明赤褐	○		○									○	○		○	良好		
227		H・16	V b, VI	417 他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○		○									○	○		○	良好		
228		H10	VI	701 他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	灰褐	○											○	○		○	良好		
229		G・H9	VI	1169 他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦～斜ケズリ	にぶい褐	にぶい橙	○		○									○	○		○	良好		
230		I9	T1	691	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○		○									○	○		○	良好		
231		I10	T1	1163	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○										○	○		○	良好		
232	H10	T1	1232	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○										○	○		○	良好			
233	H6	V b	465	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○											○	○		○	普通			
234	F6	VI	1	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○											○	○		○	良好	にぶい橙 が縞状		
235	H9	VI	1227	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ→縦ナデ	橙	橙	○		○									○	○		○	良好			
236	G6, H9	V b, VI	120 他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○									○	○		○	良好			
237	E5	V b	112	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	丁寧な斜ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○											○	○		○	良好	スス		
238	H5	V b	457	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	横ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○											○	○		○	良好			
239	G6	V b	135	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○											○	○		○	良好			
240	I10	T2	659	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○											○	○		○	普通			
241	I7	V b	427	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	丁寧な横ナデ	灰褐	灰褐	○	○										○	○		○	良好			

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調整・文様)	口径 底径 器高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土						焼成	備考	
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石			長石
51	242	G6	V b	-	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	擦切による補修孔
	243	H9	VI	952 他	加栗山	胴部	横条痕・斜格子沈線	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○	○	○	○	普通	
	244	G9	V b	-	加栗山	胴部	横条痕・斜二枚貝押圧	-	斜ケズリ	にぶい橙	褐灰	○			○	○			良好	
	245	G9	V b	486	加栗山	胴部	縦押圧で区画後左下がり斜押圧と無文部交互	-	縦ケズリ	にぶい橙	褐灰	○			○	○			良好	
	246	G9	V b	484	加栗山	胴部	縦押圧で区画後左下がり斜押圧と無文部交互	-	縦ケズリ	褐灰	にぶい赤褐	○	○		○	○			良好	
	247	H9	VI	1186	加栗山	底部	斜沈線	-	丁寧な縦ケズリ 外底：丁寧なナデ	橙	橙	○			○	○			良好	
	248	H10	VI	1114	加栗山	胴部	縦二枚貝押圧 底部上縦沈線	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	明赤褐	○	○		○	○			普通	
	249	H9	VI	982	加栗山	底部	斜条痕・縦二枚貝押圧 ・底部上縦沈線	(9.0) (底)	縦ケズリ	にぶい黄橙	橙				○	○			良好	
	250	I7	V b	429	加栗山	底部	斜条痕・縦二枚貝押圧 ・底部上斜沈線	-	横ケズリ	橙	橙				○	○			普通	
	251	G6	V b	136 他	加栗山	底部	斜条痕・縦二枚貝押圧 ・底部上縦沈線	-	丁寧なケズリ	橙	橙		○		○		○		良好	
	252	H9	VI	531 他	加栗山	底部	斜条痕・縦二枚貝押圧 ・底部上縦沈線	(23.0) (底)	縦ケズリ	にぶい橙	明赤褐	○	○		○	○			良好	
	52	253	I9	VI	720	加栗山	底部	縦沈線	9.2 (底)	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ後ナデ	にぶい赤褐	橙	○			○	○		普通	
254		F14	V b	499	加栗山	底部	縦沈線	(11.0) (底)	外底：丁寧なナデ 内底：指頭状圧痕	明赤褐	明赤褐	○	○		○	○		良好		
255		I9	VI	719	加栗山	底部	縦沈線	10.8 (底)	外底：ケズリ後ナデ 内底：放射状にケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○		○	○		普通		
256		H10	V a	1090	加栗山	底部	縦沈線	10.8 (底)	-	明赤褐	明赤褐	○	○		○	○		普通	剥落	
257		G5	V b	219	加栗山	底部	縦沈線	10.0 (底)	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○			良好	
258		H10	VI	1017	加栗山	底部	斜沈線	(9.8) (底)	外底：ケズリ後ナデ 内底：ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○			良好	
259		H10, I6	V, T1	678 他	加栗山	底部	縦沈線	13.4 (底)	内外底：ケズリ後ナデ	橙	橙	○			○	○			良好	
260		H5	V b	59	加栗山	底部	斜沈線	14.4 (底)	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ	にぶい橙	にぶい橙				○	○			良好	
261		H5	-	-	加栗山	底部	縦沈線	13.6 (底)	内底：粗いケズリ後 指頭状圧痕	明赤褐	明赤褐	○			○	○			良好	
262		G6	V b	132	加栗山	底部	縦沈線	(17.6) (底)	外底：ケズリ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○			○	○			普通	
263		F15	V b	889	加栗山	底部	斜沈線	13.0 (底)	外底：ケズリ後ナデ 内底：放射状のケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○		○	○			良好	
264		I10	T1	622	加栗山	底部	斜沈線	16.8 (底)	内外底：ケズリ後ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○		○	○			良好	
265		I6	攪乱	-	加栗山	底部	斜沈線	(17.4) (底)	外底：ケズリ後ナデ 内底：ケズリ	にぶい赤褐	明赤褐	○			○	○			良好	
266		F14	V b	507	加栗山	底部	縦沈線	-	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ	橙	橙	○			○	○			良好	
267		H6	V b	187	加栗山	底部	縦沈線	-	外底：ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○			○	○			普通	
268		F17	V b	574	加栗山	底部	斜沈線	-	外底：ナデ	灰褐	明赤褐	○			○	○			普通	
269		F4	V b	92	加栗山	底部	斜貝殻押圧・底部上無文	-	ナデ	橙	橙	○			○	○			良好	
270	G6	V b	174	加栗山	底部	-	-	外底：ケズリ 内底：ケズリ後指頭状圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○			普通		
53	271	G6	V b	216	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい褐	明赤褐	○			○	○		良好	角筒土器	
	272	G6	V b	217	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○		○	○		良好	角筒土器	
	273	G4	V b	162	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧 底部上斜沈線	-	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○			○	○		良好	角筒土器	
	274	G9	VI	1208	加栗山	胴部	縦二枚貝押圧文 角は横細沈線	-	縦ケズリ	橙	橙	○	○		○			良好	角筒土器	
	275	H6	V b, VI	406 他	加栗山	底部	斜沈線	-	外底：丁寧なケズリ 内底：ナデ	赤	赤	○	○		○	○			良好	角筒土器 底部白粉
54	276	F4, G・H5	V b	94 他	小牧3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段の横二枚貝押圧 縦二枚貝押圧・楔形突帯	-	縦ナデ 口縁丁寧な横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○		○	○		良好		
	277	H9	VI	988	小牧3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段の横二枚貝押圧 縦二枚貝押圧・楔形突帯	-	内外面：丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○		良好		
	278	I7	V b	425	小牧3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段の横二枚貝押圧 貝殻押圧・楔形突帯	-	内外面：丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○		良好		
	279	G・H5	V b	266 他	小牧3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に2段の横二枚貝押圧 縦二枚貝押圧・細い楔形突帯	-	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○		普通		
	280	I7・9	V b, VI	346 他	小牧3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に2段の横二枚貝押圧 縦二枚貝押圧・細い楔形突帯	17.4 (口)	横ナデ	にぶい褐	明赤褐	○			○	○		普通		
	281	I10	VI	655	小牧3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に2段の横二枚貝押圧 縦二枚貝押圧・楔形突帯	-	口縁横ナデ 胴部縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○		良好		
282	H9・10	V b, VI	523 他	小牧3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段の横二枚貝押圧 縦矩形押圧・楔形突帯	22.2 (口)	横ナデ	明赤褐	明赤褐とにぶい黄橙	○			○	○		良好	282～285は同一個体、口縁スズ		

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調整・文様)	口径底径器高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土						焼成	備考		
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石			長石	灰石
54	283	H9	VI	857 他	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・楔形突帯	-	横ナデ	橙	にぶい橙と浅黄橙	○				○	○			良好	282～285は同一個体、283:口縁スス
	284	H9・10	V a, VI	862 他	小牧 3 A	胴部	縦矩形押圧・楔形突帯	-	縦ケズリ	にぶい橙	明赤褐と浅黄橙	○				○	○			良好	
	285	H9	VI	958 他	小牧 3 A	胴部	縦矩形押圧 底部上斜沈線	-	斜ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	286	G・H9, I10	V b, VI, T1	670 他	小牧 3 A	口縁へ胴部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・3段の楔形突帯	(28.0) (口)	丁寧な横ナデ	橙	橙	○	○			○	○			良好	
55	287	I10	VI	624	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 斜条痕・縦矩形押圧・楔形突帯	-	横ナデ	橙	橙	○		○		○	○			普通	
	288	H5	V b	324	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に2段の二枚貝押圧 斜条痕・縦押圧	-	横ナデ	橙	橙	○				○	○			良好	
	289	H5	V b	449	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・楔形突帯	-	横ナデ	橙	橙	○				○	○			良好	
	290	I10	T1	641 他	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・楔形突帯	-	横ナデ	明赤褐	橙	○				○	○			良好	
	291	H5	V b	60	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・楔形突帯	-	横ナデ	明赤褐	明赤褐	○				○	○			良好	
	292	I10	VI	618	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に2段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・楔形突帯	-	丁寧な横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○	○		良好	
	293	G6	V b	205	小牧 3 A	口縁部	口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・楔形突帯	-	-	橙	にぶい橙	○	○			○	○			普通	摩耗
	294	G9	V b	493	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に2段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・密な楔形突帯	-	横ナデ, ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	○			良好	
	295	G9	V b	477	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・密な楔形突帯	-	横ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○			○	○			良好	
	296	H9	VI	951	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧	-	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○				○	○			普通	
	297	G4	V b	374	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・太めの楔形突帯	-	横ナデ	橙	橙	○	○			○	○			良好	
	298	H9	T1	1006	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・楔形突帯	-	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	299	I10	VI	673	小牧 3 A	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横二枚貝押圧 縦矩形押圧・楔形突帯	-	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	○			良好	
	300	G6	V b	148	小牧 3 A	胴部	二枚貝押圧・楔形突帯	-	斜ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	同一個体
	301	I10	T1	1164	小牧 3 A	胴部	二枚貝殻押圧	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	302	I10	VI, T1	623 他	小牧 3 A	胴部	横貝殻押圧・楔形突帯	-	丁寧な縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○			○	○			良好	スス
	303	G5, H・I10	V b, VI, T1	153 他	小牧 3 A	胴部	弧状の横・斜貝殻押圧	-	縦ケズリ	赤	明赤褐	○	○	○		○	○			普通	スス
	304	H6・9, I10	V b, VI, T1	643 他	小牧 3 A	胴部	縦二枚貝押圧・楔形突帯	-	横ナデ	橙	橙	○	○			○	○			良好	
	305	H4	V b	329	小牧 3 A	胴部	縦二枚貝押圧	-	縦ケズリ	にぶい褐	明赤褐とにぶい黄橙色の縞状	○	○			○	○			良好	282 他と同一か
	306	F15	V b	892	小牧 3 A	胴部	横条痕・細い楔形突帯	-	横ナデ	褐灰	橙	○				○	○			良好	
	307	F16	V b	584	小牧 3 A	胴部	横条痕・密な貝殻縦押圧	-	横ナデ	黒褐	にぶい橙	○	○	○		○				良好	
	308	G5・6	V b	147 他	小牧 3 A	胴部	密な縦貝殻押圧 底部上縦沈線	-	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい赤橙	○				○	○			良好	
	309	G5	V b	151	小牧 3 A	胴部	密な縦貝殻押圧 底部上縦沈線	-	縦ケズリ→ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○			良好	
	310	-	I	-	小牧 3 A	胴部	密な縦貝殻押圧 底部上縦沈線	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	褐灰	○				○	○			良好	
	311	G6	V b	58	小牧 3 A	胴部	密な縦貝殻押圧 底部上縦沈線	-	縦ケズリ	にぶい赤褐	褐灰	○				○	○			良好	
	312	H10	V b	1097	小牧 3 A	底部	密な縦貝殻押圧 底部上斜沈線	-	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	313	I7	V b, VI	352 他	小牧 3 A	底部	縦貝殻押圧 底部上斜沈線	(13.0) (底)	縦ケズリ 外底:丁寧なナデ	橙	にぶい橙	○	○	○		○	○			良好	
	56	314	H6, I10	V b, T1	54 他	札ノ元VII	口縁へ胴部	口唇刻み 口縁に斜貝殻押圧 斜条痕・長い楔形突帯	-	斜ケズリ→横ナデ	橙	橙	○	○	○		○	○			良好
315		G9	VI	100	札ノ元VII	口縁部	口唇刻み 口縁に2段貝殻横押圧 横条痕・楔形突帯	-	横ナデ	赤	赤		○			○	○			普通	
316		F6	V a	599	札ノ元VII	口縁部	口唇刻み 口縁に3段横押圧 横条痕・楔形突帯	-	丁寧な縦ケズリ 口縁横ナデ	赤	赤		○			○	○			普通	
317		E16・17	V b	567 他	札ノ元VII	口縁部	口唇刻み 口縁に二枚貝背部押圧 横条痕・短い楔形突帯	-	丁寧な横ナデ	赤橙	赤橙		○			○	○			良好	
318		F16	V b	610	札ノ元VII	口縁部	口唇刻み 口縁に4段貝殻横押圧 横条痕・楔形突帯	-	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○	○			良好	

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調整・文様)	口径 底径高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土						焼成	備考											
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石			長石	灰石									
56	319	G6	V b	119	札ノ元VII	口縁部	斜条痕	-	横→縦ナデ 口縁横ナデ	にぶい褐～灰褐	にぶい褐	○			○	○			良好											
	320	F6	V b	72	札ノ元VII	胴部	口縁斜二枚貝腹縁押圧 横条痕・楔形突帯	-	横ケズリ→丁寧な斜ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○		良好	内は筋状に赤											
	321	F17	V b	541	札ノ元VII	胴部	浅い横条痕・楔形突帯	-	丁寧な縦条痕	赤	赤		○	○	○	○		普通												
	322	H9	V b, VI	524 他	札ノ元VII	胴部	浅い横条痕・楔形突帯	-	縦ケズリ 口縁部分的にミガキ	赤	赤		○	○	○	○		普通												
	323	F14・15	V b	497 他	札ノ元VII	胴部	横条痕	-	丁寧な縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	○		普通												
	324	E5	V b	106	札ノ元VII	胴部	弧状の条痕	-	縦ケズリ	暗赤灰	にぶい赤褐		○	○	○	○		良好												
	325	G4	V b	306	札ノ元VII	胴部	斜条痕	-	縦ケズリ	赤	赤		○			○		良好												
	326	H6	V b	185	札ノ元VII	胴部	細かい横・斜条痕	-	条痕→縦ケズリ 底近くナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○		普通												
	327	G11	V b	757	札ノ元VII	胴部	斜条痕	-	丁寧な縦ケズリ 底近く横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○		普通	コゲス											
	328	H10	T1	679	札ノ元VII	胴部	斜条痕	-	丁寧な縦ケズリ	にぶい赤褐	明赤褐	○			○	○		良好												
329	H9	V b, VI	938 他	別府原	口縁～胴部	8条の横条痕	(13.0) (口)	縦・斜ケズリ	橙	浅黄橙	○	○		○	○		普通	ス												
57	330	I10	VI	639 他	石坂	口縁部	綾杉状貝殻押圧	-	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○	○		普通													
	331	I10	T1	1065	石坂	口縁部	綾杉状貝殻押圧	-	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○	○		普通													
	332	E19	V b	542	石坂	口縁部	斜条痕・2段の横二枚貝押圧	-	丁寧な横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○		○	○		普通												
	333	H5	V a	448	石坂	口縁部	口唇刻み 口縁横・斜二枚貝押圧 綾杉状条痕	-	ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○	○		○		普通	内面は広く剥脱											
	334	H5	V b	446	石坂	口縁部	口唇刻み 口縁横・斜二枚貝押圧 綾杉状条痕	-	縦ケズリ	にぶい橙	褐灰	○	○		○	○		普通	摩耗											
	335	E18	V a	549 他	石坂	口縁部	口唇刻み 口縁3段の二枚貝腹縁押圧	-	丁寧な横ナデ	黒褐	にぶい黄橙		○	○		○		普通												
	336	I10	VI	631	石坂	胴部	綾杉状条痕	-	斜ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○	○	○		普通												
	337	F16	V b	590	石坂	胴部	綾杉状条痕	-	縦ナデ	赤灰	赤黒		○	○		○		普通												
	338	F15	V b	898	石坂	胴部	綾杉状条痕	-	丁寧な斜ナデ	にぶい黄橙	褐灰		○	○		○	○	良好	ス											
	339	I10	T1	626	石坂	胴部	綾杉状条痕	-	丁寧な斜ケズリ	橙	赤灰		○	○		○		良好												
	340	F16	V b	594 他	石坂	胴部	綾杉状条痕	-	丁寧な縦ナデ	赤灰	暗赤灰	○	○		○	○		普通												
	341	F14・15	V b	498 他	石坂	胴部	綾杉状条痕	-	縦ケズリ	橙	橙				○	○		良好	ス、コゲ											
	342	E18	V b	551	石坂	胴部	綾杉状条痕	-	縦ケズリ→丁寧なナデ	橙	褐灰		○	○		○		良好												
	343	E17	V a・b	557 他	石坂	胴部	綾杉状条痕	-	縦ケズリ	橙	黒褐	○	○		○	○		普通												
	344	I10	V b, VI, T1	662	石坂	胴部	櫛目状細沈線による綾杉状	-	縦ケズリ	橙	橙		○	○		○		普通	同一個体											
	345	I・H10	V b, VI, T1	628 他	石坂	胴部	櫛目状細沈線による綾杉状	(8.0) (底)	縦ケズリ	橙	橙		○	○		○		普通	同一個体											
	346	I10	T2	-	石坂	底部	斜条痕や巻貝殻頂突文	-	不明	にぶい黄橙	赤	○	○		○	○		普通	内面赤土貼付											
	347	F17	V b, -	580	石坂	底部	-	-	ミガキ	明褐	黒	○			○	○		普通												
348	F12	V a	793	石坂	底部	巻貝殻頂突文	-	斜ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○		普通	摩耗												
58	349	H9	VI	1175 他	下剝峯	口縁～胴部	横二枚貝腹縁押圧	-	縦ケズリ 口縁丁寧な横ケズリ	明赤褐	明赤褐	○			○	○		普通	同一個体											
	350	I10	T1	724	下剝峯	口縁部		-																						
	351	H9	VI	1172	下剝峯	口縁部		-																						
	352	H10	VI	924	下剝峯	胴部	横二枚貝腹縁押圧 底部上横条痕	-	ミガキ	明赤褐	明赤褐	○			○	○		普通	同一個体											
	353	G11	V b	755	下剝峯	胴部	横二枚貝腹縁押圧	-	ミガキ	にぶい黄	黄灰	○	○		○	○		良好	同一個体											
	354	F11	V b	1049 他	下剝峯	胴部	横二枚貝腹縁押圧	-	ミガキ	にぶい黄	黄灰	○	○		○	○		良好	同一個体											
	355	H13	V b	842	桑ノ丸	口縁部	斜条痕	-	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○		良好	同一個体											
	356	H13	V b	841	桑ノ丸	口縁部	斜条痕	-	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○		良好	同一個体											
	357	G3	V b	-	押型文	胴部	小粒な殻粒押型	-	丁寧なナデ	明赤褐	にぶい橙	○	○		○	○		普通												
	358	F10	V a	753	手向山	胴部	横方向山形押型	-	丁寧なナデ	褐灰	褐灰		○	○		○	○		普通	ス										
359	F10	V a	754	手向山	胴部	横方向山形押型	-	縦ナデ	明褐	明褐		○	○		○	○		普通	下半コゲ											
360	F12	V b	997	手向山	胴部	横方向山形押型	-	ナデ	橙	橙	○	○		○	○		普通	コゲ												
59	361	F5	V b	30	塞ノ神A	口縁部	口唇押圧 口縁に横押圧 5条ほどの横・斜凹線	-	丁寧な横ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○		○	○		普通												
	362	F5	V b	14	塞ノ神Aa	口縁部	口唇矢羽根状押圧 口縁に3段の2～3条横凹線	-	ミガキに近い丁寧な横ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○	○	○	○	○	○	良好	同一個体										
	363	F6	V b	3	塞ノ神Aa	口縁部	口唇矢羽根状押圧 口縁に3段の2～3条横凹線 1・2段目に爪形押圧 丁寧なナデ→縦に網目状燃系文	-																						
	364	F6	V b	4	塞ノ神Aa	口縁部	口唇矢羽根状押圧 口縁に3段の2～3条横凹線 1・2段目に爪形押圧 丁寧なナデ→縦に網目状燃系文	-																						
	365	F5	V b	84	塞ノ神Aa	胴部	横凹線 丁寧なナデ→縦に網目状燃系文	-																						
	366	F4	V b	-	塞ノ神Aa	胴部	縦に網目状燃系文	-																						
	367	F5	V b	82	塞ノ神Aa	胴部	縦に網目状燃系文	-																						
	368	F4	V b	101 他	塞ノ神Aa	胴部	縦に網目状燃系文	-																						
	369	F6	V b	2	塞ノ神Aa	胴部	縦に網目状燃系文	-																						
	370	F5	V b, VI	23 他	塞ノ神A	胴部	粗い横ナデ	-													条痕後ナデ	橙	褐灰	○	○		○	○		良好
371	G3	V b	25 他	塞ノ神A	胴部	粗い横ナデ	-	条痕後ナデ													橙	褐灰	○	○		○	○		良好	壺形土器
372	G3	V b	-	塞ノ神Ab	胴部	縦沈線間に斜縄文	-	縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○		普通	ス												
373	F5	V b	76	塞ノ神Ab	胴部	斜縄文	-	横ミガキ	橙	にぶい橙	○	○		○	○		良好													
374	F16	V a	598	円盤形土製品	完形	無文	径3.2 厚1.0	丁寧なケズリ	明赤褐	明赤褐	○			○	○		普通	半欠け												

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面 (調整・文様)	口径 底径 器高 (cm)	調整 (無記入は内面)	色調		胎土							焼成	備考	
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石			灰石
59	375	SD2	-	-	不明	脚台の 接合部	貝殻ナデ	-	指押さえ後上方向ナ デ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○	○	○	○	普通	台径5.4 cm
	376	F5	V b	-	不明	口縁部	-	-	丁寧なナデ	褐灰	褐灰			○						普通	ス

第8表 縄文時代早期石器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
61	377	E5	V b	114	局部磨製石鏃	2.60	1.86	0.25	1.3	頁岩	
	378	H11	V b	472	局部磨製石鏃	2.59	2.10	0.38	1.5	頁岩	
	379	F5	V b	31	打製石鏃	2.83	1.50	0.30	1.2	玉髓	
	380	D5	V b	117	打製石鏃	2.72	2.00	0.62	(3.2)	チャート	
	381	I10	VI	640	打製石鏃	1.95	(1.13)	0.28	(0.3)	チャート	
	382	G10	VI	909	打製石鏃	(2.20)	(1.50)	0.22	(0.4)	黒曜石	
	383	E5	V b	113	削器	2.85	2.05	0.85	4.7	チャート	
	384	F5	VI	89	石核	2.20	1.90	1.45	4.7	黒曜石	
	385	H9	VI	979	石核	1.22	1.95	1.75	4.4	黒曜石	
386	H13	VI	475	局部磨製石斧	5.30	2.60	0.80	14.9	頁岩		
62	387	I10	VI	619	磨石・敲石類	(10.90)	9.60	4.95	(691.6)	硬砂岩	
	388	G5	V b	245	磨石・敲石類	10.50	6.40	(3.60)	(338.0)	砂岩	
	389	SD6	①	18	磨石・敲石類	13.00	10.92	4.70	1014.1	砂岩	
	390	F8	I	-	磨石・敲石類	11.10	7.30	5.00	571.9	砂岩	
	391	E5	攪乱	-	磨石・敲石類	(11.65)	7.85	4.85	(612.7)	砂岩	
	392	H9	VI	540	磨石・敲石類	(9.40)	7.50	4.35	(342.5)	砂岩	
63	393	I10	VI	637	磨石・敲石類	(15.66)	(9.70)	6.40	(1249.4)	砂岩	
	394	H6	V b	56	磨石・敲石類	(9.58)	(8.58)	(4.80)	(442.7)	砂岩	
	395	G5	V b	251	磨石・敲石類	12.00	(8.20)	6.50	(874.0)	砂岩	
	396	F11	V a	798	磨石・敲石類	(7.10)	8.95	5.30	(404.7)	砂岩	
397	F5	V b	16	磨石・敲石類	(7.20)	6.60	(4.70)	(317.9)	砂岩		
64	398	E5	V b	111	磨石・敲石類	10.10	8.50	4.30	522.2	砂岩	
	399	F5	V b	24	磨石・敲石類	(6.90)	(8.45)	(4.45)	(310.2)	砂岩	
	400	G6	V b	128	磨石・敲石類	11.90	6.42	3.30	328.2	砂岩	
	401	G5	V b	263	磨石・敲石類	(6.60)	(7.90)	(2.40)	(154.1)	砂岩	
	402	G13	VI	1242	磨石・敲石類	(7.90)	10.80	6.05	(595.2)	砂岩	
	403	F5	V b	34	磨石・敲石類	(10.30)	(5.80)	(5.50)	(287.9)	砂岩	
404	F6	VI	51	磨石・敲石類	(7.90)	(6.08)	(4.35)	(225.2)	砂岩		

第9表 弥生時代土器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	器種	部位	調整		色調		胎土							焼成	備考	
								外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石			灰石
65	405	-	I	-	高橋	甕	口縁部	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄灰	浅黄			○		○	○			良好	ス
	406	SD6	①	13	高橋	甕	肩部	横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○	○	○	○			良好	
	407	-	I	-	入来II	甕	口縁部	ヘラナデ	ヘラナデ	橙	橙	○	○	○	○	○	○			普通	磨滅
	408	-	I	-	入来II	甕	脚台部	ハケ縦ナデ後ヘラ ナデ	-	にぶい橙	赤	○	○	○	○	○	○			普通	内面磨滅
	409	大型土 坑I	③	14	入来II	甕	脚台部	縦斜ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	赤	○	○	○	○	○	○			普通	磨滅 粗い土

第10表 古墳時代土器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	器種	部位	調整		色調		胎土							焼成	備考	
								外面	内面	外面	内面	白石	茶石	黄白石	石英	黒石	長石	灰石			
66	410	F8	I	-	辻堂原	甕	口縁部	口縁はハケ横ナデ ハケ斜ナデ	ヘラ横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○			○		○	○	良好	ス
	411	F8	I	-	辻堂原	甕	口縁部	ヘラ縦・斜ナデ	ヘラ縦ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○					○	○	良好	ス
	412	F13	I	-	辻堂原	壺	底部	丁寧なヘラ縦ナデ	縦ナデ	にぶい橙	浅黄	○	○	○			○	○	普通	コゲ	
	413	F8	I	-	辻堂原	高坏	口縁部	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○	良好		
	414	F8	I	-	辻堂原	高坏	口縁部	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	橙	橙	○	○	○			○	○	良好		
	415	F8	I	-	辻堂原	高坏	坏底～ 脚部	ヘラ縦ナデ	坏内：丁寧なヘラ ナデ 脚内：ヘラ 横ナデ 脚幅：丁 寧なナデ	灰白	褐灰		○	○				○		普通	
416	-	I	-	辻堂原	高坏	坏底～ 脚部	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ 脚 内：指押しとヘラ 縦ナデ	浅黄橙	浅黄橙			○	○	○	○	○		普通		

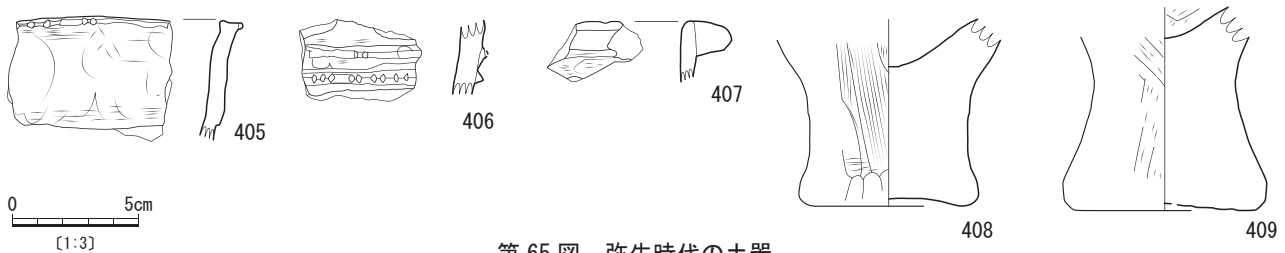
第3節 弥生時代の調査

土器が5点出土している(第65図)。近世の溝状遺構6号と中世の大型土坑1号で各1点出土しているが、ほかの3点は表土で出土している。いずれも甕形土器で、前期後葉の高橋式土器(405・406)2点、中期中葉の入来Ⅱ式土器(407～409)3点である。

405はやや外傾してまっすぐ立ち上がる器形で、口縁端が内外に張り出している。内面は削り出して張り出しているが、外側は貼り付けた低い三角突帯に浅い刻み目が施されている。口縁端は欠損が目立つ。肩部外面は段状となり、下半が薄い。内外ともヘラによる丁寧な横方向のナデ仕上げである。外面にはススが付着している。406は2条の三角貼付突帯がある。上側の突帯は不明だ

が、下側には細かいヘラ刻みが密にみられる。内外とも横方向のナデ仕上げである。白色石・雲母を多く含み、5mmほどの灰色石もある。

407は全体的に欠損、磨滅が目立つ。逆L字状に近い口縁部だが、やや外に向かって傾いている。口唇部の凹線は不明である。内外ともヘラナデ調整である。408・409は脚台で、ともに端部の欠けが目立つが、脚台端直径は408が7.2cm、409が8.0cmである。端部は丸みをおび、あげ底である。調整は408の外面が縦方向のハケナデのあとヘラナデである。409は内外・底ともヘラナデ調整で、外は縦・斜め方向である。外は鈍い橙色を呈しているが、赤っぽい部分もある。胎土は粗く、5mm大の石粒も多い。



第65図 弥生時代の土器

第4節 古墳時代の調査

表土から土器が57点出土している。南へ下降する谷部のF-8区で特に多く出土している。甕形土器39点(口縁部7点、胴部32点)、壺形土器6点、高坏形土器9点、鉢形土器2点、埴形土器1点である。ほとんどが小破片で、図化できたのは7点である(第66図)。

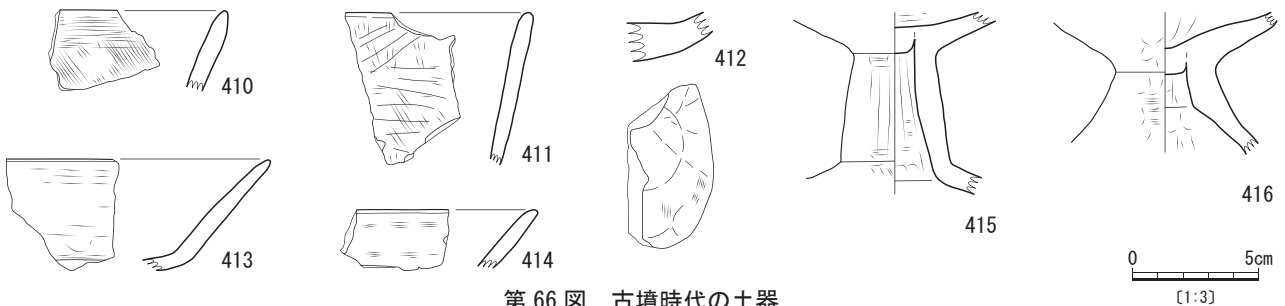
甕形土器(410・411)は口縁部が外傾してまっすぐ伸びるもので、胴部には上下からつまんだ貼付突帯のあるものがある。口縁端は丸みをもっている。410は摩耗が目立つが、外面調整は端部が横方向、その下が斜め方向のハケナデである。内面調整は横方向のヘラナデである。411の調整は内外ともヘラナデで、外面が縦・斜め、内面が縦方向である。410・411ともススが付着している。

壺形土器の底部(412)は安定した丸底で、外面調整は丁寧である。内面はやや赤っぽい。

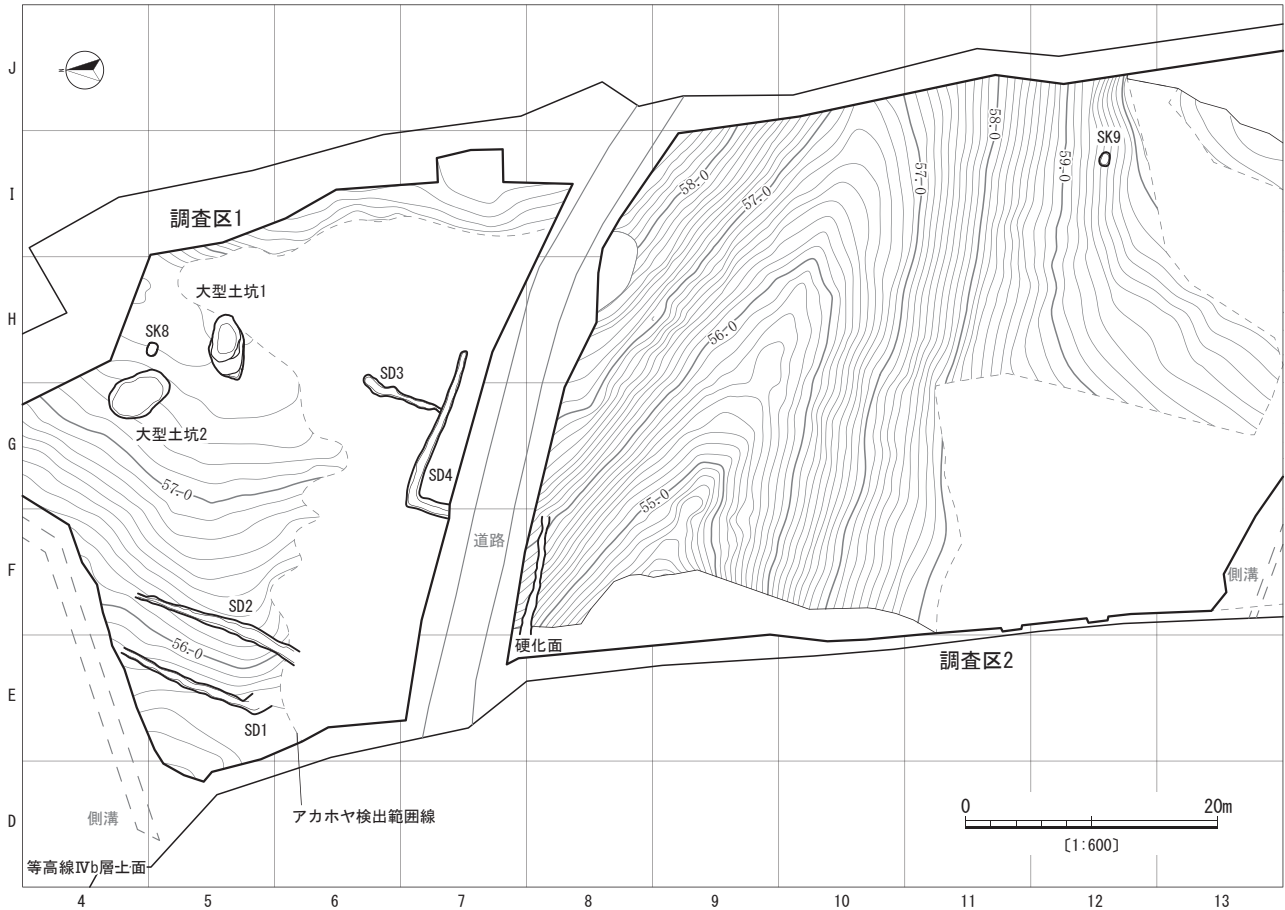
高坏形土器(413～416)は平らな底部と外へまっすぐ広がる口縁部から成る坏部と、短い筒部と外へ広がる

裾部から成る脚部である。413は底部から口縁部の破片で、接合できないが同一個体と考えられる口縁部が他に1点ある。内外とも丁寧な横方向ヘラナデである。414も413と同じような口縁部で、ミガキに近い丁寧な横ナデ調整をしている。415は坏部の底と、脚の筒部と裾部である。筒部は下の方へやや広がる形を呈し、裾部は大きく広がる。坏部と脚部のつなぎは団子状の粘土をはめ込んでいる。筒部外面は縦方向、坏部内面は丁寧なヘラナデで仕上げ、脚部の内面は横方向、裾部はミガキに近いヘラナデである。416も415と似た器形だが、坏部底の中央部はやや凹んでいる。脚部の筒部は短く、坏部の接合部から緩やかに裾部へ広がっている。坏部と脚部のつなぎは415と同じである。内外ともヘラナデだが、外面は横方向、内面は縦方向である。5mm大の灰白色石も含んでいる。

これらは辻堂原式土器に該当すると思われる。



第66図 古墳時代の土器



第 67 図 中世の遺構配置図

第 5 節 中世の調査

1 調査の概要

中世の遺構や遺物は、北側の調査区 1 に集中している。調査区 1 の表土下は畑地造成等による攪乱を受けており、第 67 図における破線以南はアカホヤ火山灰 (IV b 層) より上位が削平されているなど、残存状況が悪い。遺物も土坑や溝の中から出土したものや表土一括がほとんどであり、上面の削平がなければかなり多くの遺物が出土したものと考えられる。

遺構は大型土坑 2 基、土坑 2 基、溝状遺構 4 条、硬化面 1 条が検出されている。大型土坑 2 基と礫を伴う土坑 8 号は H・G-4・5 区付近に近接している。大型土坑 1・2 号間で遺物が接合したことや、土坑 8 号内の礫と大型土坑 1 号内の礫が類似することから、これらの遺構は何らかの関連が考えられる。

溝状遺構 1・2 号は E・F-4~6 区で並行に並んだ状態で、溝状遺構 3・4 号は F~H-6~7 区で交差した状態で検出されており、出土遺物から中世の遺構としたが、近世以後の可能性もある。谷部以南では土坑 9 号の 1 基のみ検出されている。

2 遺構

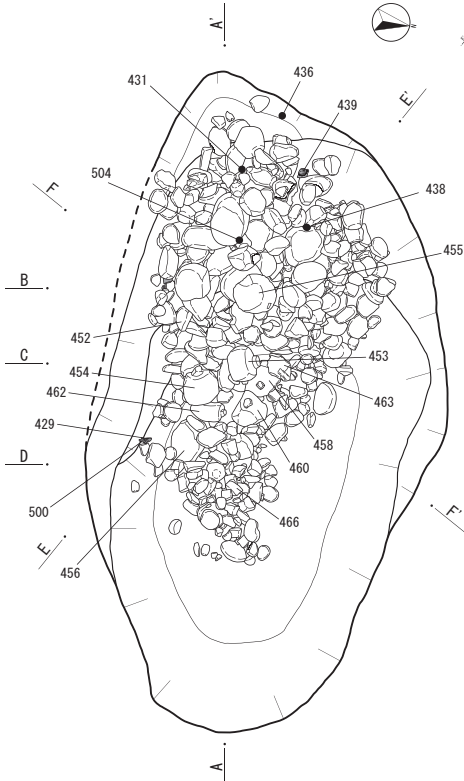
(1) 大型土坑

大型土坑 1 号 (第 68 図)

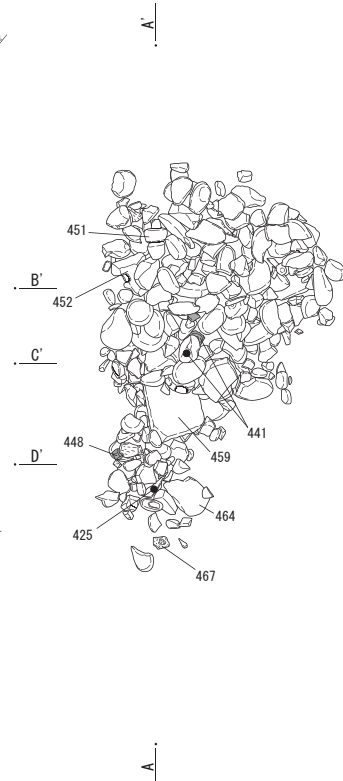
H-5 区の IV b~V 層上面で検出された。検出面より上部は削平を受けている。埋土に II・III 層土が入っていることから、II~III 層付近から掘り込まれたものと考えられる。平面は長軸約 5.2 m、短軸約 3 m の楕円形で、検出面からの深さは約 1 m で、西側にやや緩やかな段をもつ。底面は平坦で、VIII~IX 層まで掘り込まれている。

土坑内からは人頭大など、大型のものを含む大量の礫が出土した。石材は砂岩が多く凝灰岩や軽石も含まれ、ほぼすべてが円礫であり、遺跡の西側下方にある安楽川の河床礫と構成が同じであることから、出土礫は安楽川から運ばれたものと考えられる。遺物は礫に混じった状態で石塔・板碑や石臼、陶磁器等が出土している。埋土内の礫・遺物は埋土 1~3 に含まれ、埋土 4~7 には含まれない (ただし埋土 4 には一部食い込む)。埋土 1~3 中の礫は西側に多く、中央部の深い部分に流れ込むように入っている。また埋土 4~7 は遺構の掘削層と一致することから、この遺構を掘り上げた土と考えられ、位置は東側に偏る。よってこの遺構の掘削後、東側から掘削土である埋土 4~7 が入り、その後、西側から礫や埋土 1~3 が入ったと考えられる。なお礫は集中していることから、人為的に一度に入れられ、その後埋土 1~3

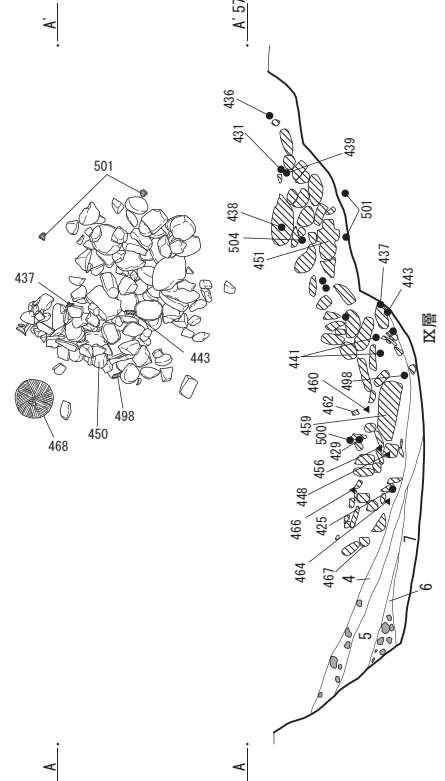
大型土坑1号-1面



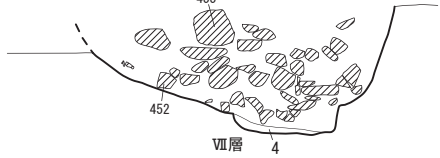
大型土坑1号-2面



大型土坑1号-3面



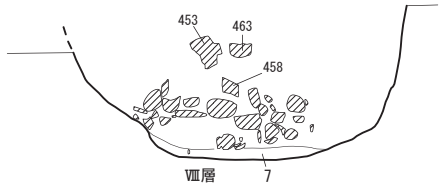
B. B' 57.6m



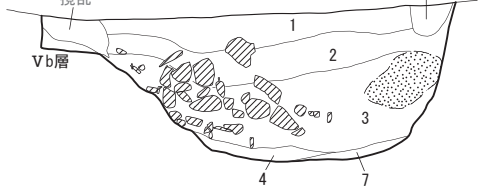
E. E' 57.6m



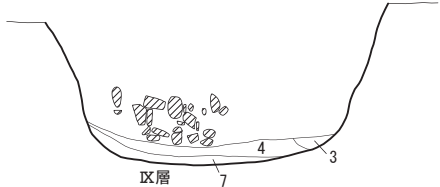
C. C' 57.6m



F. F' 57.6m

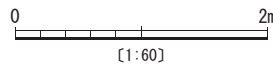


D. D' 57.6m



- 1: 黒色土 (10YR2/1) シルト質埴壤土。粘性弱い。ややしまり有り。
1~5mm大のアカホヤ粒子を10%以下含む。
- 2: 黒色土 (10YR2/1) 埋土1を基本としやや赤みがる。
0.1~5cm大のアカホヤ粒子・ブロックを20%含み目立つ。
- 3: 黒色土 (10YR1.7/1) シルト質埴壤土。粘性有り。ややしまり有り。
1mm大のアカホヤ粒子を若干含む。II~III層基本。
- 4: 黒褐色土 (10YR2/3) シルト質埴壤土。粘性やや有り。しまり有り。
埋土3とV・VI層土が混じる。壁際に5~10cm大のV・VI層ブロックが多い。
- 5: 褐色土 (10YR4/4) シルト質埴壤土。粘性やや有り。しまり有り。
VIII・IX層を基本に5cm以下のIV~IX層がブロック状に混じる。
1mm以下の赤色粒子や炭化物を若干含む。
- 6: 黒褐色土 (10YR2/3) シルト質埴壤土。粘性やや有り。しまり有り。
20cm以下のアカホヤ・サツマブロックを若干。硬質のV・VI層ブロックを30~40%含む。
- 7: 暗褐色土 (10YR3/3) シルト質埴壤土。粘性やや有り。しまり有り。
VI~VIII層の混合土。VIII・IX層土がブロック状に20~30%混じる。

- 凡例 —
- 土器
 - ▨ アカホヤブロック
 - V・VI層ブロック



第 68 図 大型土坑 1 号

が入り、礫間まで入り込んだと考えられる。

大型土坑 2号 (第 69 図)

G・H-4・5区のIV b層上面で検出された。検出面より上位は削平を受けている。遺構の東側と西側の壁面付近は攪乱を受けており、平面は長軸約6m、短軸約2mの楕円形で検出面からの深さは約40cmである。柱穴や焼土等は見られない。床面は平坦であり、V層まで掘り込まれている。遺物は青磁や須恵器、鉄製品が出土している。埋土はアカホヤ火山灰ブロックを含む黒色土である。アカホヤ火山灰ブロックは床面付近に多く含まれ、上位は黒色土が主体である。埋土はほぼ水平に分層できるため、掘り上げて地表面に置かれた掘削土が、地表面の黒色土が主体となり自然流入したと推定される。遺物も床面付近は無く、土の流入に伴い入り込んだと考えられる。

大型土坑内出土遺物

2基の大型土坑からは多くの遺物が出土しており、互いに接合できた遺物もあることから、①大型土坑1号の出土遺物②大型土坑2号の出土遺物③大型土坑1・2号出土の接合遺物と3つに分けて記載する。

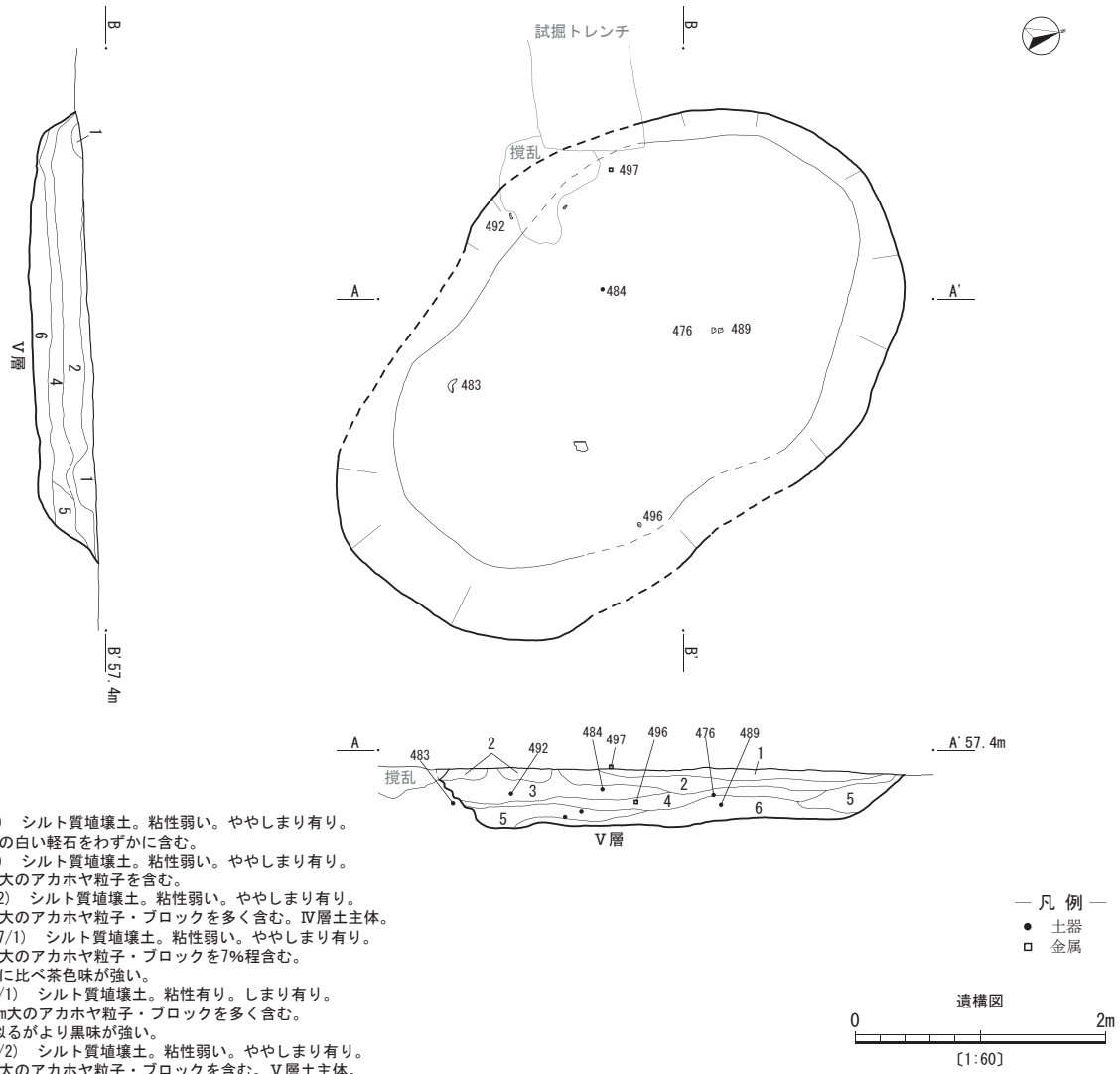
大型土坑1号の出土遺物

(第70図～第73図 417～468)

417・418は土師器で、皿か杯の口縁部である。417は口縁先端に向け細くなり、垂直に立ち上がる。418は幅3mm程度と極めて薄く、やや外反する。

419は土師質土器の鉢である。底部から胴部へほぼ直角に立ち上がり、内面及び底面に回転ナデの痕跡が残る。420は瓦質の羽釜である。胎土は灰白色で、鏝の貼り付け跡が明瞭である。鏝から下にススはみられない。

421は東播系須恵器の捏鉢である。胎土は灰黄色で、口唇付近で内弯する。



- 1: 黒色土 (10YR1/2) シルト質埴壤土。粘性弱い。ややしまり有り。
1～2mm大の白い軽石をわずかに含む。
- 2: 黒色土 (10YR2/1) シルト質埴壤土。粘性弱い。ややしまり有り。
1mm～1cm大のアカホヤ粒子を含む。
- 3: 黒色土 (7.5YR1/2) シルト質埴壤土。粘性弱い。ややしまり有り。
1mm～8cm大のアカホヤ粒子・ブロックを多く含む。IV層土主体。
- 4: 黒色土 (7.5YR1.7/1) シルト質埴壤土。粘性弱い。ややしまり有り。
1mm～2cm大のアカホヤ粒子・ブロックを7%程含む。
埋土1・2に比べ茶色味が強い。
- 5: 黒色土 (10YR1.7/1) シルト質埴壤土。粘性有り。しまり有り。
1mm～10cm大のアカホヤ粒子・ブロックを多く含む。
埋土3に似るがより黒味が強い。
- 6: 黒褐色土 (10YR2/2) シルト質埴壤土。粘性弱い。ややしまり有り。
1mm～5cm大のアカホヤ粒子・ブロックを含む。V層土主体。

— 凡例 —
● 土器
□ 金属

遺構図
0 2m
[1:60]

第 69 図 大型土坑 2号

422・423 は中世須恵器甕の胴部である。422 は矢羽根状、423 は斜格子状のタタキが外面に残る。

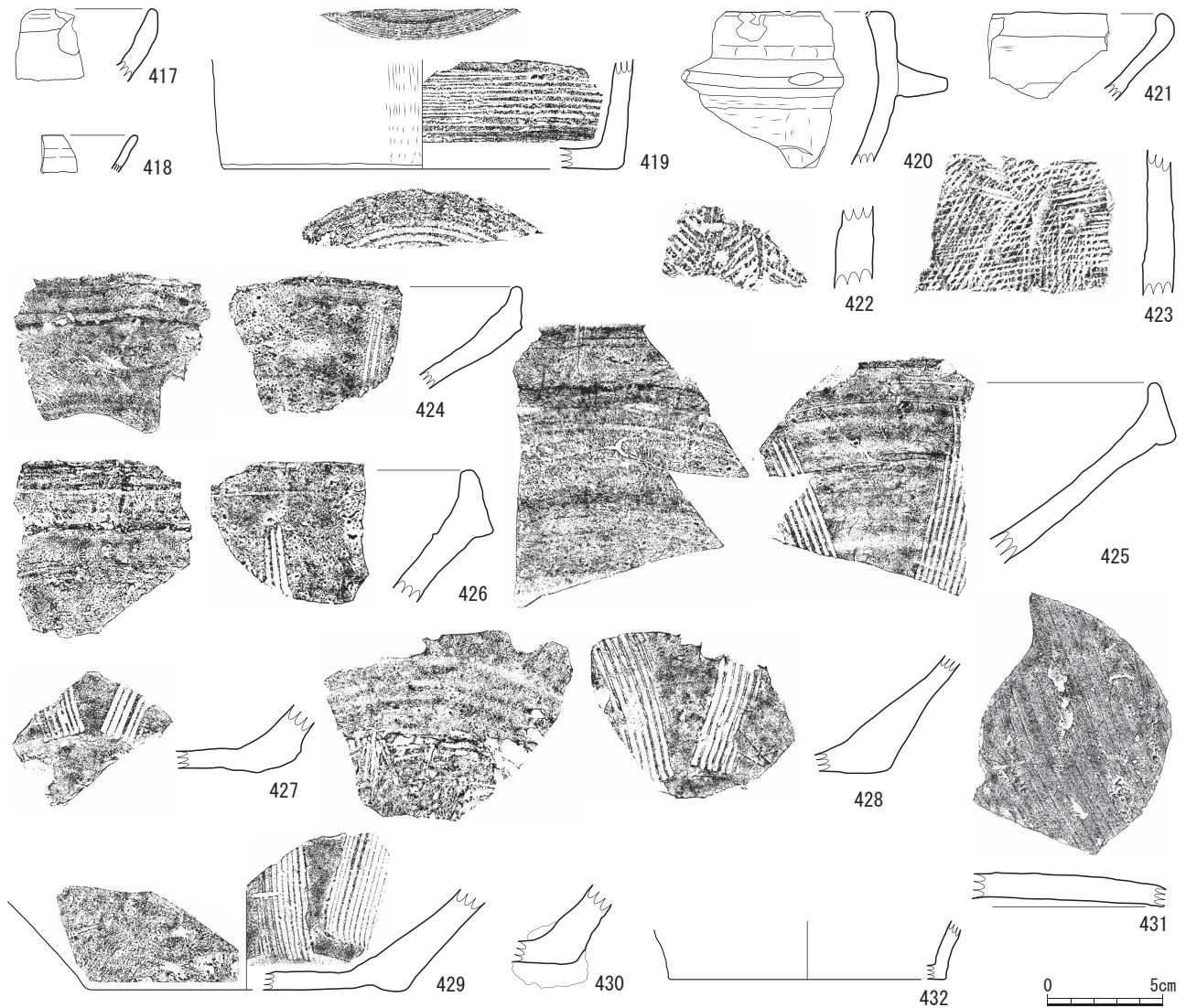
424～431 は備前焼である。424～429 は播鉢で、色調は赤褐色を呈す。424 は口縁が上方に突出する。櫛目は3条のみ確認できる。425・426 は口縁上端と下端の突出が強いもので、425 は8条以上の櫛目が確認でき、櫛目上端付近まで摩耗した使用痕が残る。426 は外面が赤褐色で口縁外面に光沢がみられ、櫛目は4条のみ確認できる。427～429 は底部で、427 は櫛目が1単位5条と7条の箇所がみられ、内面が大変滑らかである。428 は櫛目が1単位7条で、底面に藁状の繊維痕が残る。429 は櫛目が1単位10条で1条が他より細く、底面に淡黄色の粘土が付着している。430・431 は壺の底部である。430 は内外に暗オリーブ色の自然釉がかかる。底面に置台に使用したと考えられる砂入りの硬質土が付着しており、内面にも砂が付着する。431 は底面で、中央が上げ底となり、内面にへラ状の痕跡が残る。

432 は無釉陶器の壺で、薄く褐灰色を呈す。

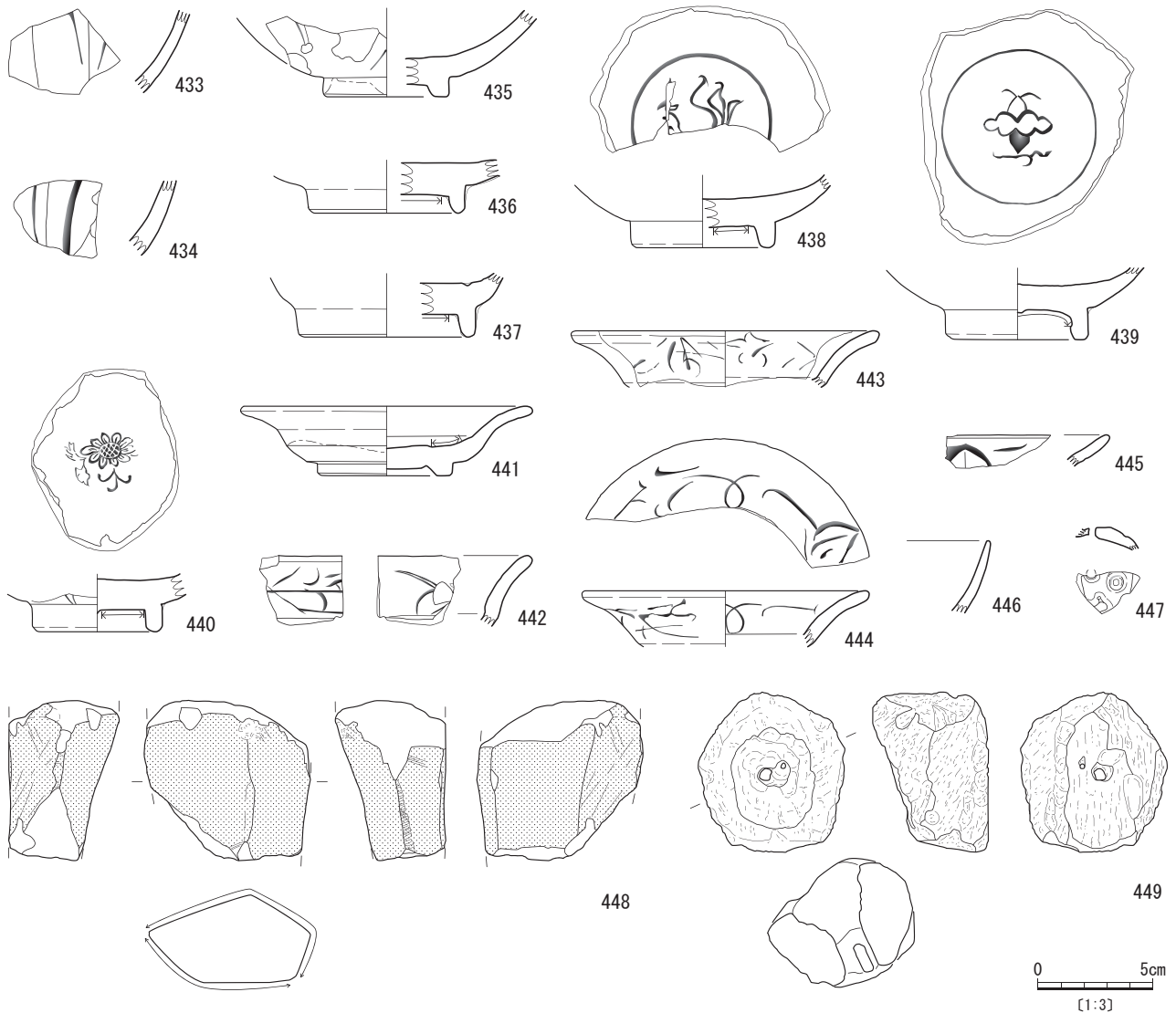
433～445 は龍泉窯系青磁である。433～440 は碗で、433～435 は上田B類に比定され、蓮弁文をもつものである。433 は青緑色を呈し、鑄がみられず、434 は稜で蓮弁を表現している。435 は蓮弁を片切彫で表現しており、畳付の釉は高台内面途中までかかる。436・437 は釉が高台内面までかかり、高台内の釉は掻き取られている。438～440 は底部付近のみ残存しており、見込みに草花文様の印文がみられ、440 は胴部外面に蓮弁と考えられる文様の一部が残る。441～444 は口縁が外反する皿で、441 は体部下半から高台内面まで露胎で、見込みの釉を輪状に掻き取っており、露胎部分は赤橙色の発色がみられる。442～444 は胴部内外面に草花文様の線刻が施されている。445 は外面に蓮弁を持つ、浅型碗の口縁の一部と考えられる。

446 は白磁碗の口縁で、無文である。

447 は円状の孔が1か所あり、凸部に金色の着色が残



第70図 大型土坑1号の出土遺物(1)



第71図 大型土坑1号の出土遺物(2)

る白磁で、人などの形状をした袋物や水滴の一部である可能性がある。

448は砂岩製の砥石で、5面に研いだ痕跡が残る。449は軽石製品で、円錐状に削り抜き、奥に2か所穿孔を施している。

450～467は石塔・石碑と考えられる石製品で、450～460は五輪塔の一部である。

450・451は空風輪で、450は軽石製で空輪が低く、ホゾが比較的大きい。451は凝灰岩製で丁寧に造られており、風輪の上面は外側に傾斜し、空輪は風輪と比較して幅が狭く、側面は稜がみられる。

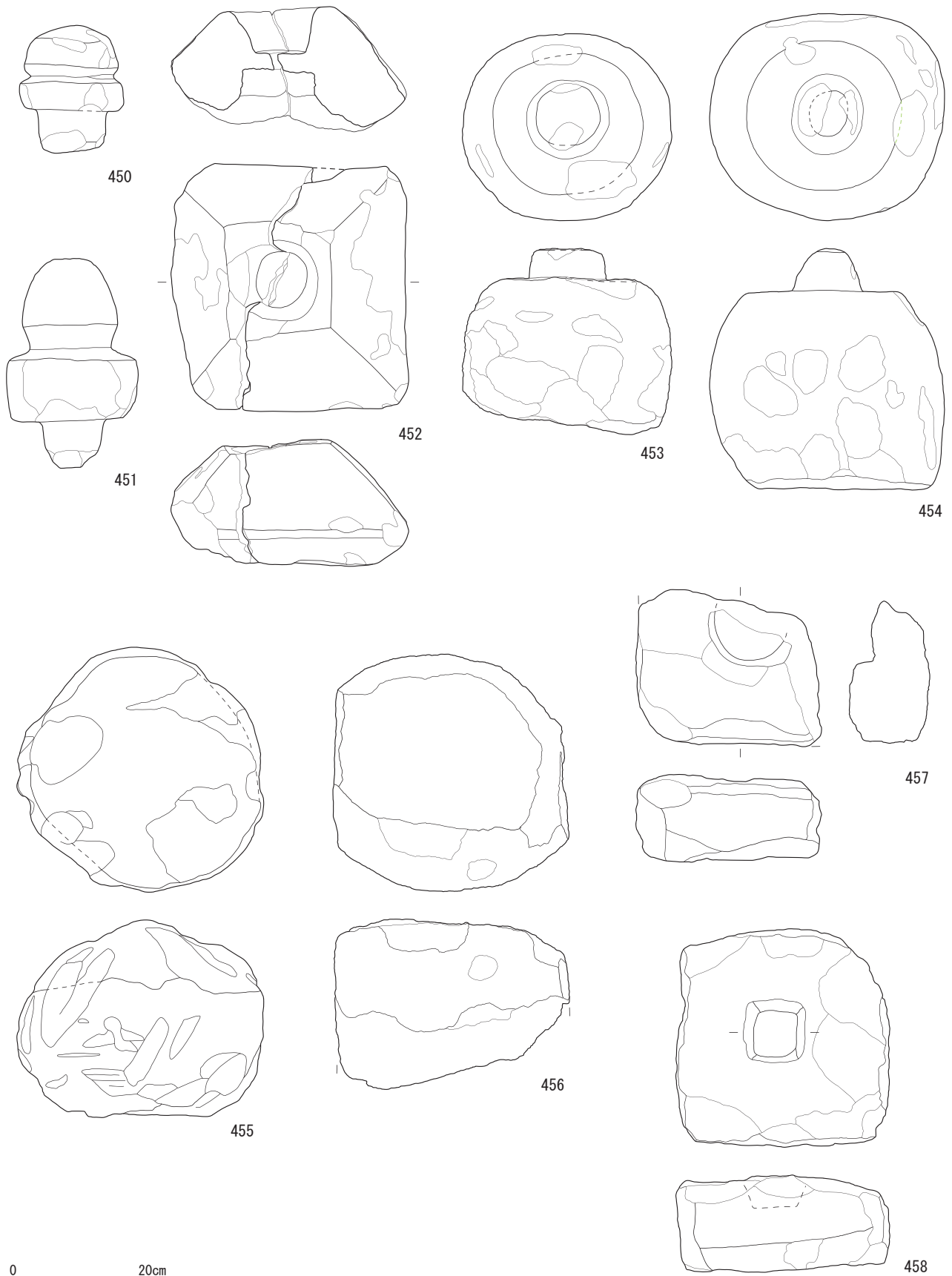
452は凝灰岩製の火輪で、上下両面にホゾ穴がみられる。軒口は反りが無く、下に向かい傾斜する。

453～455は水輪である。453は軽石製で、形状は上面が円形、側面が隅丸方形である。454は凝灰岩製で、ホゾが先端に向け幅が狭くなる。形状は上面・側面とも隅丸方形に近く、側面は左右非対称である。455は破損

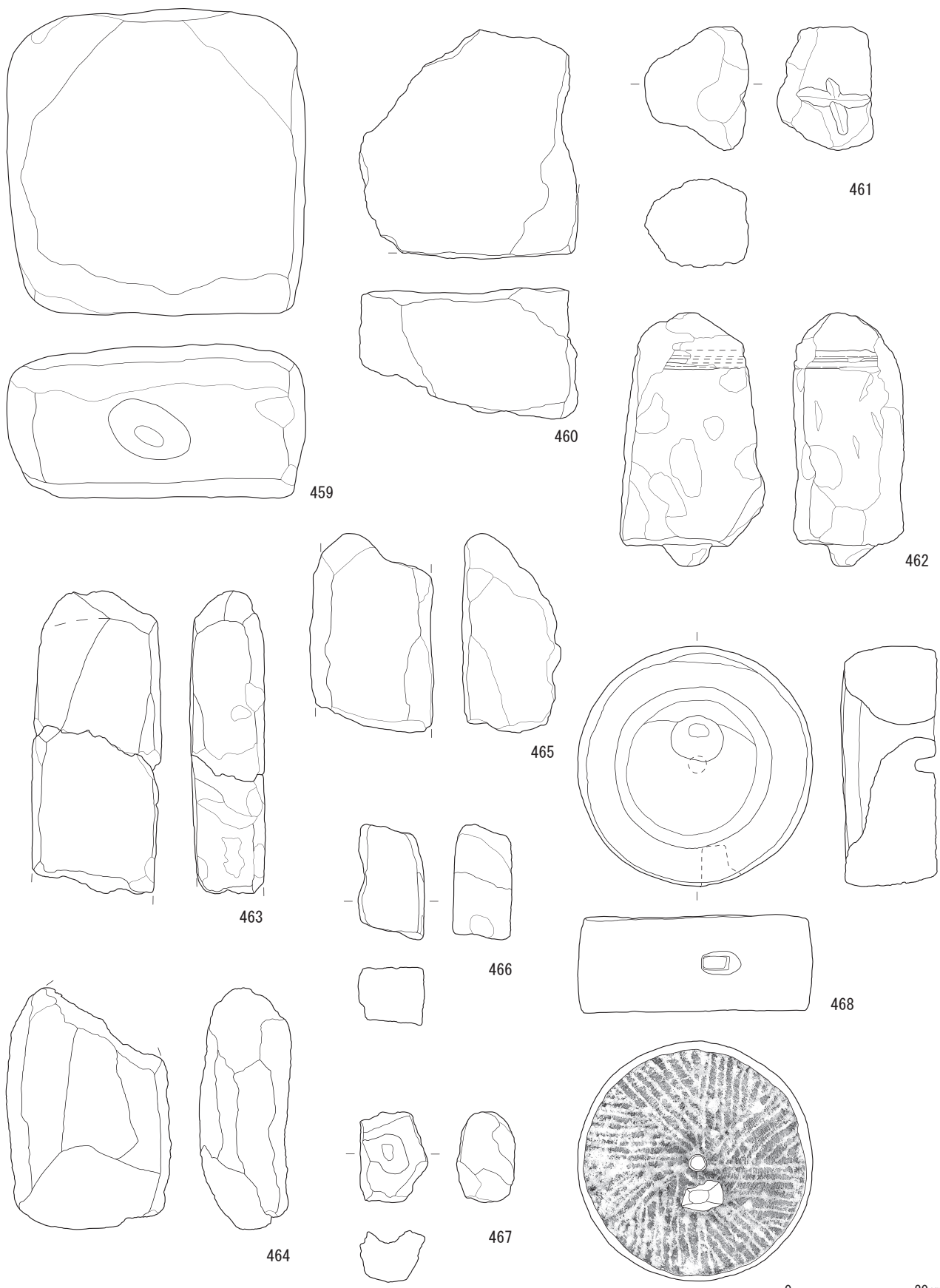
部分が多く、ホゾがあったかは不明である。灰黒色の凝灰岩製で、志布志湾の夏井海岸で見られる石材と類似する。

456～460は地輪である。456は凝灰岩製で、溶結が弱く剥離が激しいため、側面の欠損部が大きい。457は幅約30cmの軽石製でホゾ穴は円形、458は凝灰岩製でホゾ穴は方形である。459は456と同じ溶結の弱い凝灰岩製で、側面に楕円状の凹みがみられ、重量は52kgと重い。460は凝灰岩製で、上面と下面の大きさはほぼ均等である。

461～463は軽石製の板碑である。461は、側面に薬研彫りの一部が残る。462の頭部は三角柱状に加工され、額部に2条の線を正面及び側面に刻んでいる。正面に梵字等の文字はみられない。また、底面にホゾがあるという特徴がある。463は正面及び両側面は丁寧に平坦に加工されている。頭部が三角状になっているが、破損が多く明瞭ではなく、額部の2条線や梵字の刻みはみられな



第 72 図 大型土坑 1 号の出土遺物 (3)



第 73 図 大型土坑 1 号の出土遺物 (4)

い。底面は破損しており、全体の高さは不明である。

464・465は凝灰岩製で破損部が多いが、形状から板碑の可能性はある。

466・467は石塔等の一部と考えられるものである。466は凝灰岩製で、側面が平坦に加工されている。467は軽石製で、石材は461に近く、側面に楕円形の穴がみられる。

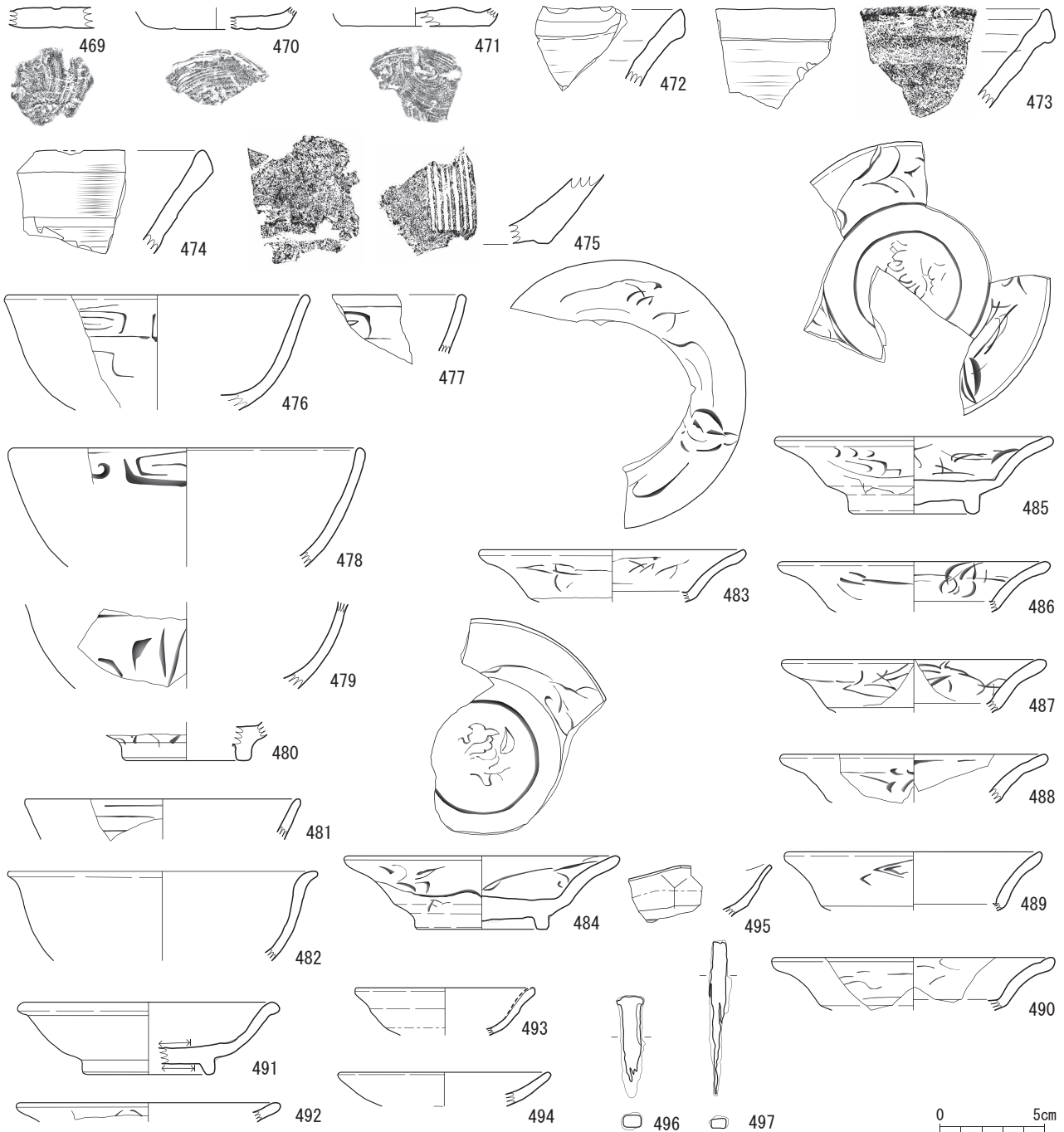
468は石臼の上臼部で、白面は8分割である。

大型土坑2号の出土遺物（第74図469～497）

469～471は土師器の底部である。469は底面，471は底部内面に凹凸がみられ，470は底面に糸切りとヘラ状工具の痕跡が残る。

472～474は東播系須恵器の捏鉢である。472は注ぎ口で，口縁外面に光沢のある釉がかかる。473は口縁端が上下にやや突出し，内面に積み上げ痕が残る。474は外面に回転ハケの痕跡が明瞭である。

475は備前焼の播鉢である。内面は黄白色で，7条の楕目が確認できる。



第74図 大型土坑2号の出土遺物

476～492は龍泉窯系青磁である。476～478は上田C類に比定される、雷文帯をもつ碗である。476は雷文帯の下に一部文様が残し、口縁はやや外反する。477は口縁がやや内弯する。478は黒色が強く、釉が厚いため文様が不明瞭な部分が多い。479は外面に蓮弁、その上に雷文とみられる一部が残る。480は底部で、高台近くに蓮弁の一部が残る。481は口縁外面に横線の文様のみ残る。482は口縁部が外反する碗で上田D類に分類される。483～491は外反する皿である。483～490は体部内面及び外面に草花文か蓮花文と考えられる文様を有する。484・485は見込み部分に花文の印がみられる。491は文様が無く、見込みと高台内は輪状に釉剥ぎがなされる。492は坏と考えられる口縁部で、外面に蓮弁文の上端が残る。

493～495は白磁である。493はやや黄味を帯び、口縁が外反し体部外面下半が露胎の皿で、森田E群に比定される。494は緩く立ち上がる皿の口縁で、森田D群に比定されるものと考えられる。495は多角坏で、体部下面が露胎である。

496・497は断面が長方形をなす角釘である。厚さは、496は8×6mm程度、497は7×5mm程度である。

大型土坑1・2号出土の接合遺物

(第75図～第77図498～510)

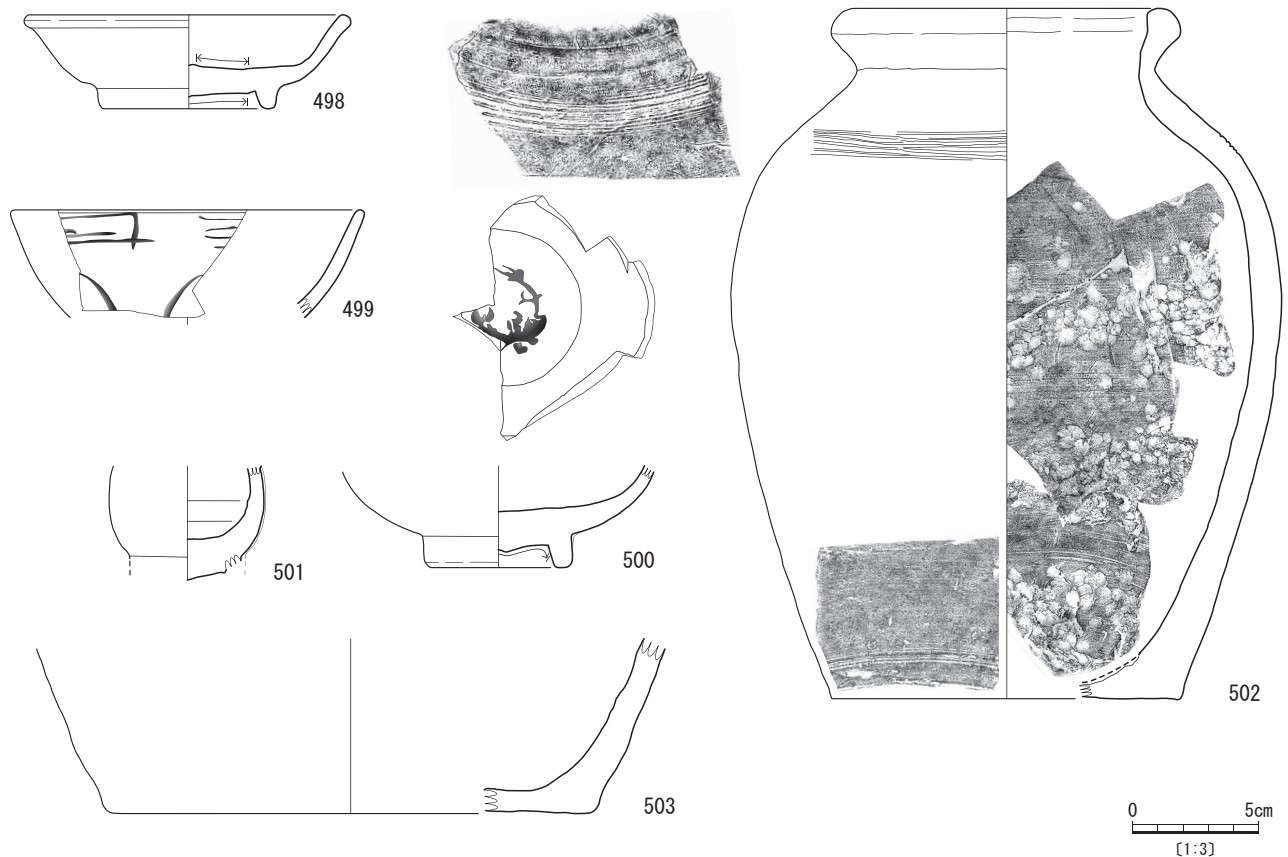
498～500は龍泉窯系青磁である。498は皿で、口縁部がやや外反し、見込みと高台内に輪状の釉剥ぎがなされる。499は上田C類に比定される碗で、外面口縁付近の雷文帯の下に蓮弁文の一部が残る。500は碗で、高台内が輪状に釉剥ぎされ、見込みに圏線と花文の印を有する。

501は青磁の小型台付瓶である。底部は厚みがあり、口縁に向かい薄くなっている。高台内は釉が残る。

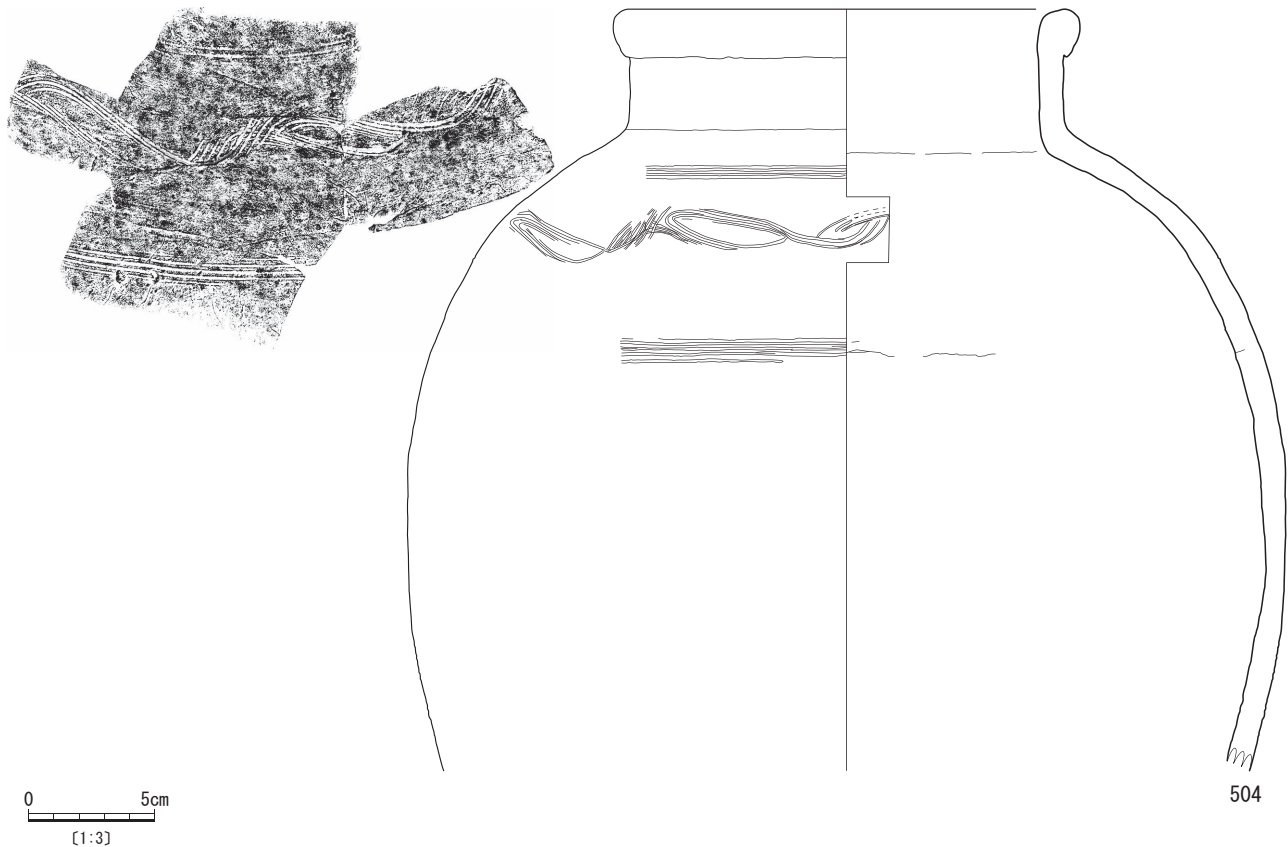
502は備前焼か中国産と考えられる陶器の壺である。肩部に楡状の工具で横方向に浅い沈線を施し、内面は剥離が目立ち、底面は厚さ4mm程度と薄い。

503・504は備前焼の壺である。503は底径19.0cmの底部で、外面は灰白色を呈する。504は玉縁状の口縁で、肩部に楡を用い2条の圏線、その間に交差する波状の文様を描く。

505～510は接合できないが、同一個体と考えられるタイ産暗緑灰釉陶器の四耳壺である。下半部が埋められた時に、二次焼成を受けており、底部近くは火を受けていないが、口縁部から胴下半部まで釉薬が溶けている。口縁は垂直に立ち上がり、最大径18.0cmである。頸部



第75図 大型土坑1号・2号の出土遺物(1)



第76図 大型土坑1号・2号の出土遺物(2)

は最小径10.4cmまで縊れ、最小径部の下に1条の突帯と、耳部の付け根部分が残る。胴部は最大径34.0cmで、底部付近まで釉がかかり、内面に輪積み痕が部分的に残存する。第77図には想定復元図を示す。

(2) 土坑

土坑8号(第78図)

H-4・5区のⅦ層上面で検出された。上位は攪乱を受けている。平面形は整然とした楕円形を呈し、検出面での規模は約110×80cmで、深さは約20cmである。埋土は黒褐色土の単一埋土であり、Ⅱ層もしくはⅢ層土の可能性が高く、上面からの流入土と推測される。側壁に沿うように長径20～30cm、短径10～20cm程度の楕円形の礫が並べられており、東壁沿いは2～3段に積まれている。北側は円礫が置かれていないが、人為的に外されたか、元から無かったかは不明である。約4m南側に礫が多量に入った大型土坑1号があり、類似した礫が入っていることから、関連する可能性がある。

土坑9号(第78図)

I-12区のⅣb層で検出された。上位は攪乱を受けている。平面形はやや不定形な楕円形であり、検出面での規模は約110×80cm、深さは約45cmで、床面はⅤb層付近である。埋土は黒色土にアカホヤ火山灰ブロックが混ざっており、遺構掘削土の一部と考えられる。ほぼ垂直に掘り込まれており、床面は平坦である。遺物は出

土していないが、形状が比較的しっかりしており、埋土が大型土坑と類似することから、中世の遺構と考えられる。

(3) 溝状遺構

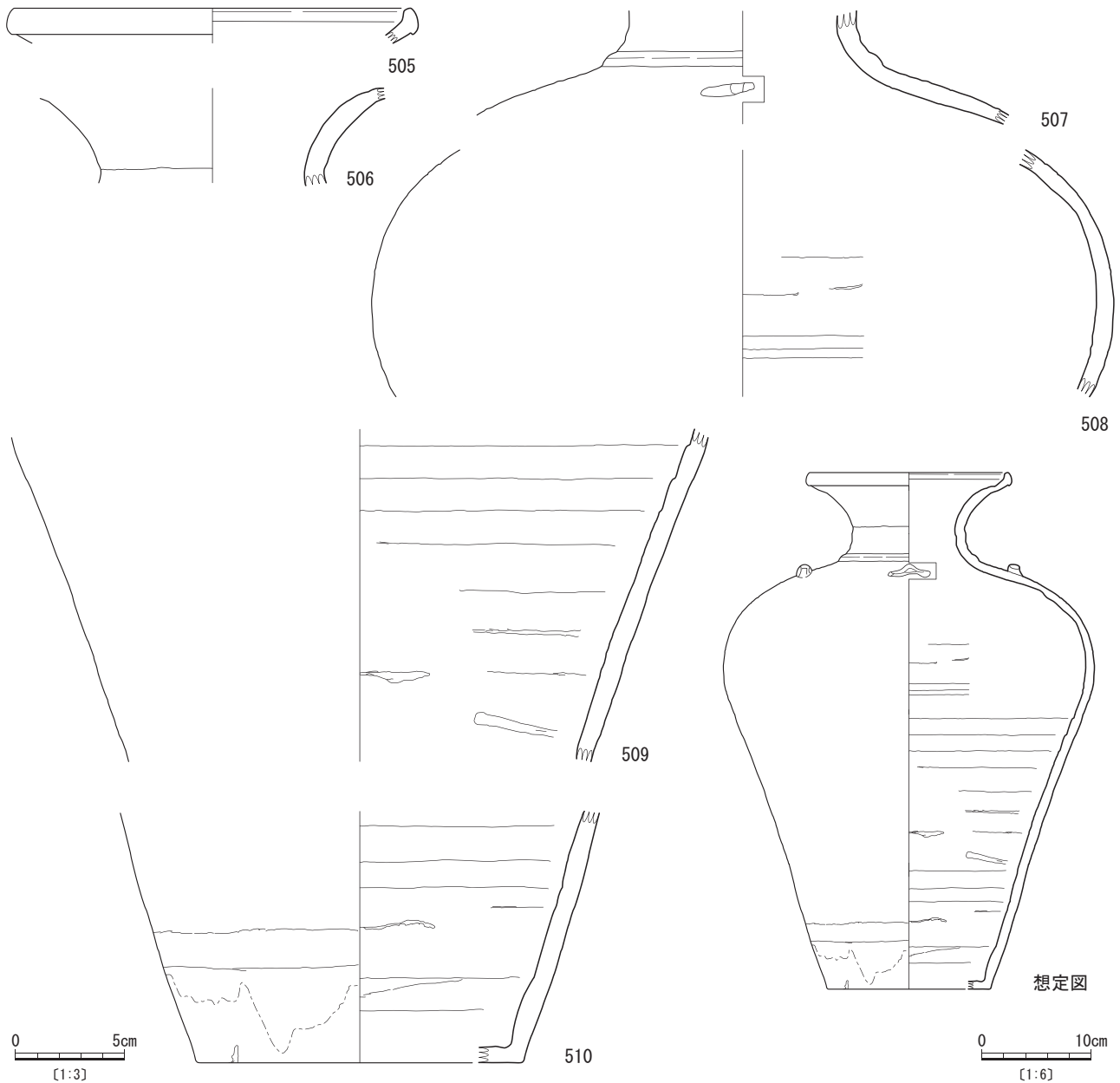
溝状遺構1号(第79図・第80図)

E-4・5区のⅣb～Ⅴ層上面で検出された。上位は攪乱を受けている。北北東から南南西方向へ地形に沿ってほぼ直線状に掘り込まれている。南側で南東方向へ曲がるが、その先は攪乱を受けている。検出できた部分は長さ約12m、幅約50～80cm、深さは約20cmである。特に北側は上部を大きく削平されており、深さは5cm程度しか残存していない。埋土は黒色土にアカホヤ火山灰ブロックが混じっており、遺構掘削土の一部と考えられ、B断面の埋土状況より、標高が高い東側から流入したと考えられる。

埋土内で出土した遺物を2点図化した。511は備前焼の壺肩部で、外面に3条の沈線がある。512は龍泉窯系青磁の碗か杯の外反する口縁部で、体部外面に草花文と考えられる文様がみられる。

溝状遺構2号(第79図・第80図)

E・F-4～6区のⅣb～Ⅴ層上面で検出された。上位は攪乱を受けている。溝状遺構1号に並行し、北北東から南南西方向へ直線状に掘り込まれている。南側は攪乱を受けており、どの付近まで延びるかは不明である。



第77図 大型土坑1号・2号の出土遺物(3)

検出できた部分は長さ約12m、幅約50～100cm、深さは約40cmである。埋土分布をみると、遺構掘削土であるアカホヤ火山灰ブロックと黒色土の混合土が入り込んだ後、地表上の黒色土が入ったものと推定される。埋土1から中世の遺物や破砕した礫が出土している。

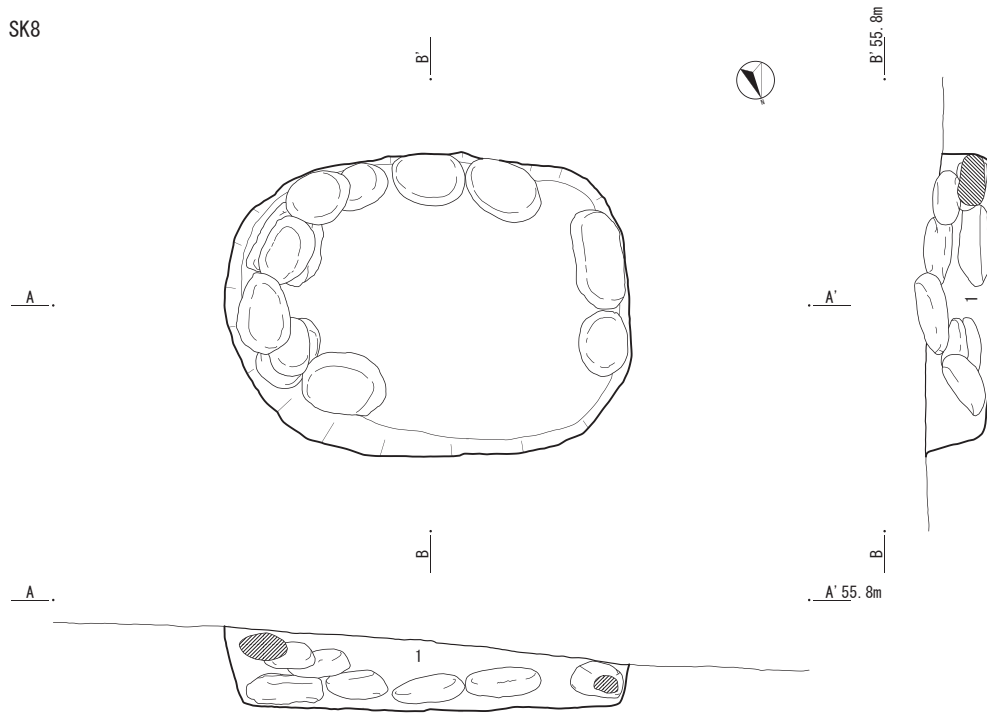
埋土内から出土した遺物を7点図化した。513は東播系須恵器の捏鉢口縁部で、口縁端が上下に突出する。514は瀬戸焼の灰釉陶器で、壺の胴部付近と考えられ、やや緑色を呈した釉がかかる。515は常滑焼甕の頸～肩部で、同一個体の可能性が高い胴部が大型土坑1号から2点出土している。516は備前焼播鉢の口縁部で、赤灰色を呈し、端部が上下に突出する。517は中国産と考えられる陶器瓶の口縁部で、残存部全面に飴釉がかかる。

518は口禿の白磁で、大宰府分類の白磁碗IX類に比定されるものである。胴部下位は無釉である。519は青花で、小野分類の皿B群に比定されるものである。見込みに獅子、胴部外面に唐草文と考えられる一部が残る。

溝状遺構3号(第80図)

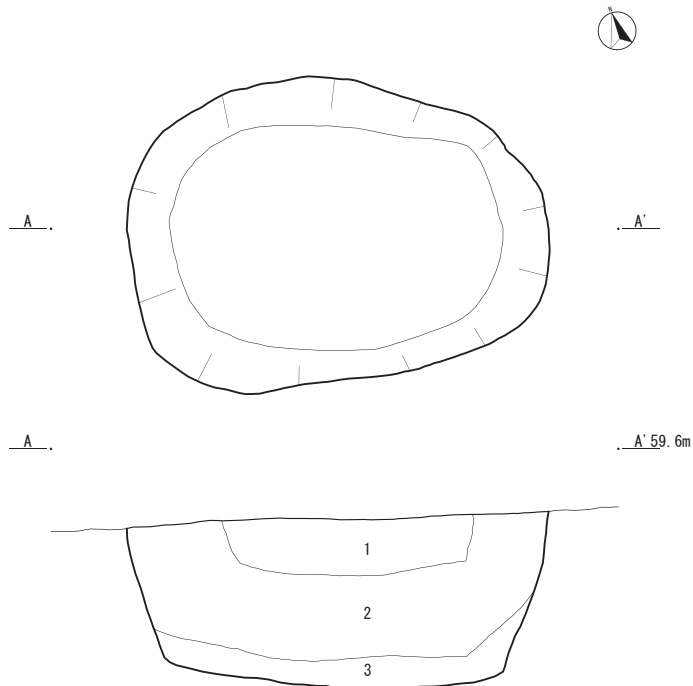
H・G-6・7区のVI層上面で検出された。上面は攪乱を受けている。溝状遺構1・2号に並行しているが、約20m離れているため関連は不明である。南側は溝状遺構4号に切られており、その南側は上部を削平されたためか、検出されていない。残存部分は長さ約6.5m、幅約50～80cm、深さは10cm程度である。埋土はしまりの弱い黒色土で、III層など上部の土と推定される。遺物は出土していない。

SK8

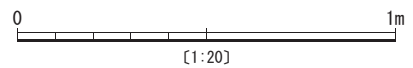


1: 黒褐色土 (10YR2/3) しまり弱い。粘性有り。

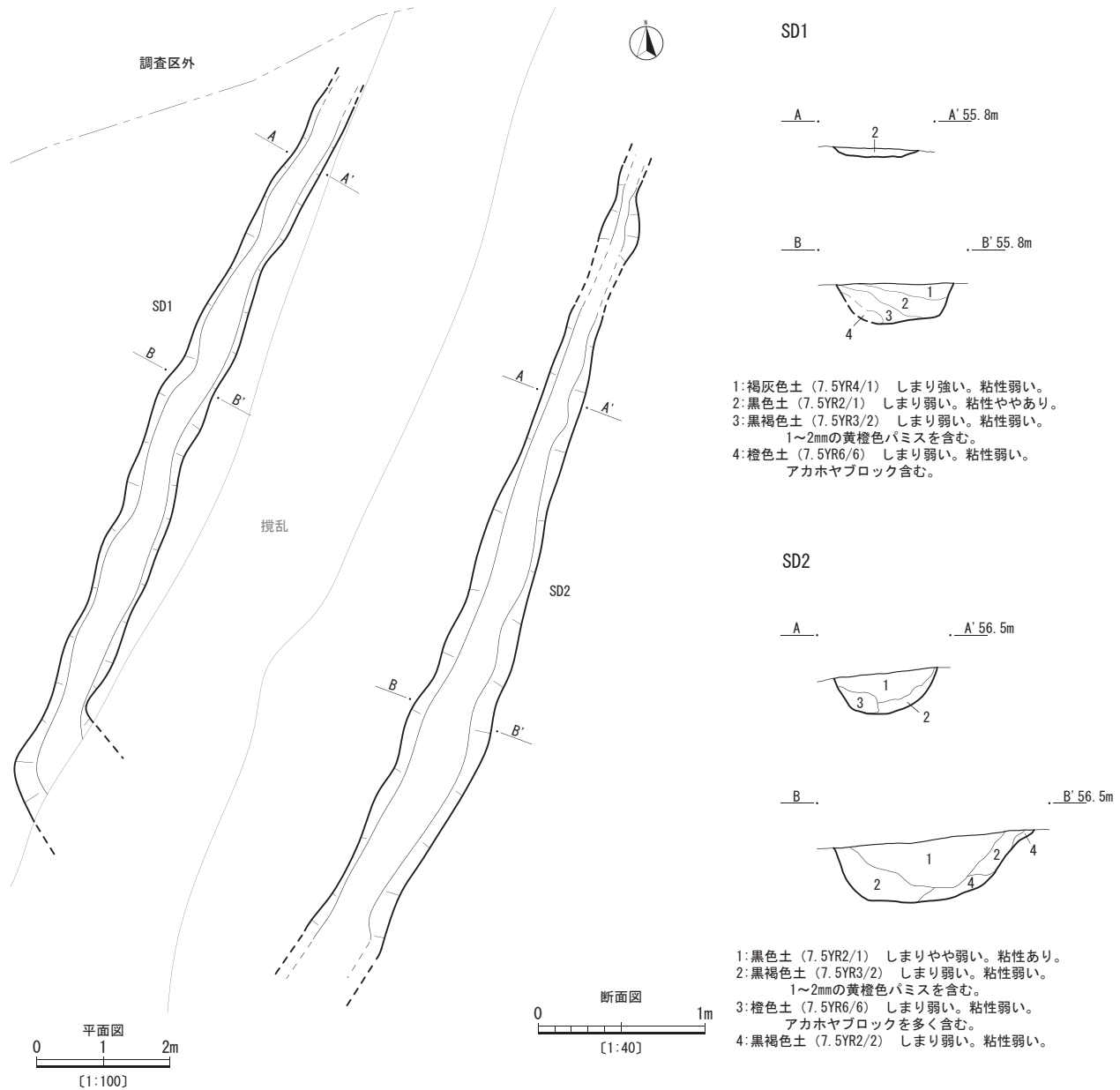
SK9



1: 極暗褐色土 (7.5YR2/3) しまり弱い。粘性有り。1~2mmの黄橙色パミスを多く含む。
 2: 褐色土 (7.5YR4/4) しまり弱い。粘性やや有り。黄橙色パミスを多く、アカホヤブロックを含む。
 3: 褐色土 (7.5YR4/6) しまり有り。粘性有り。



第 78 図 土坑 8 号・9 号



第 79 図 溝状遺構 1 号・2 号

溝状遺構 4 号 (第 80 図)

H~F-7 区の VI 層上面で検出された。上面は攪乱を受けている。溝状遺構 3 号に垂直に、地形に沿って下るように延びている。最も標高が低い西側では、90 度曲がり現在の道路に切られている。残存部分は東西に長さ約 13 m、南北に約 4 m、幅は約 50~100 cm、深さは 10~20 cm 程度である。埋土は茶褐色土を含む黒褐色土でしまりがあり、どの層の土かは不明である。

埋土内で出土した遺物を 4 点図化した。520 は土師器皿の口縁部である。521 は龍泉窯系青磁の碗で、外面に蓮弁文の一部とみられる盛り上がり有する。522・523 は白磁である。522 は口禿皿の底部で、灰白色で見込みに圏線がみられる。523 は森田 D 群に比定される皿で、体部下位が露胎である。

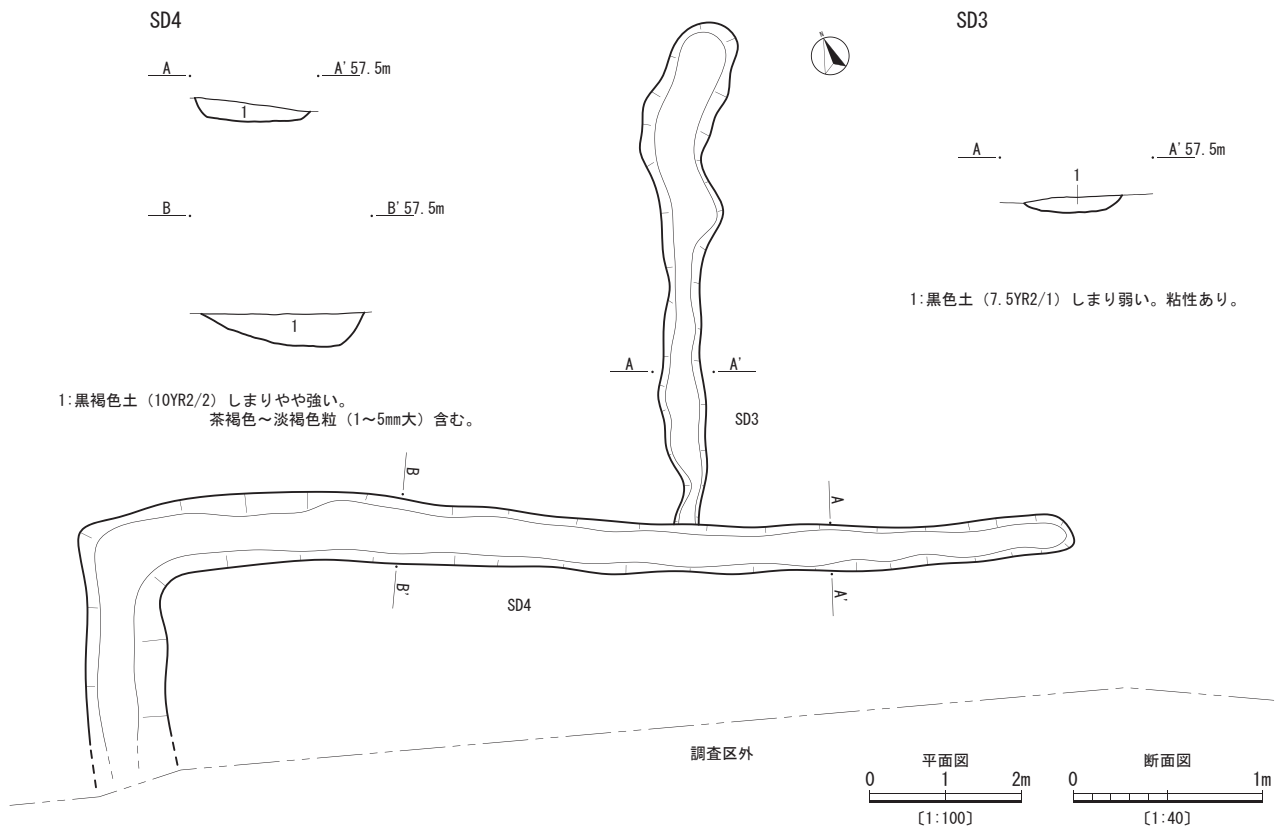
(4) 硬化面 (第 81 図)

F-7・8 区で検出された。幅は 40~80 cm 程度であり、約 9.5 m 程度残存している。上面はほぼ黒色土である。現在の道路に並行し、西側の川へ下るように延びている。中世の遺物が上面で出土しており、中世の遺構としたが、近世以降である可能性がある。

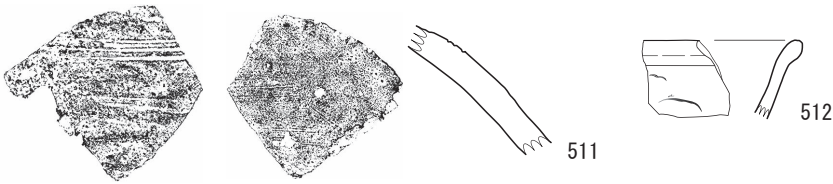
遺物は 1 点出土している。524 は土師器皿であり、底部の切り離しは糸切りである。

3 遺構外遺物 (第 82 図)

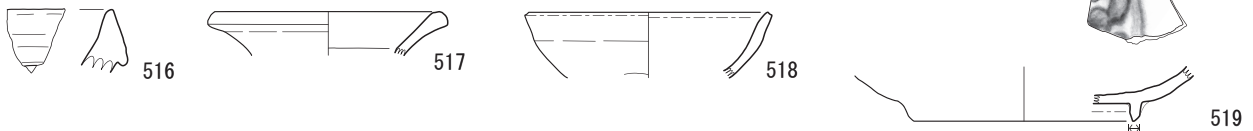
525 は土師器皿の口縁部である。ほぼ直線状に立ち上がり、外面にススが付着している。526 は土師質土器の鍋の口縁部で、外面下方にススが多く付着している。527・528 は東播系須恵器の捏鉢である。527 は口縁下端の突出が弱く、528 は強い。529 は中世須恵器甕の胴部



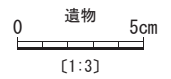
SD1



SD2



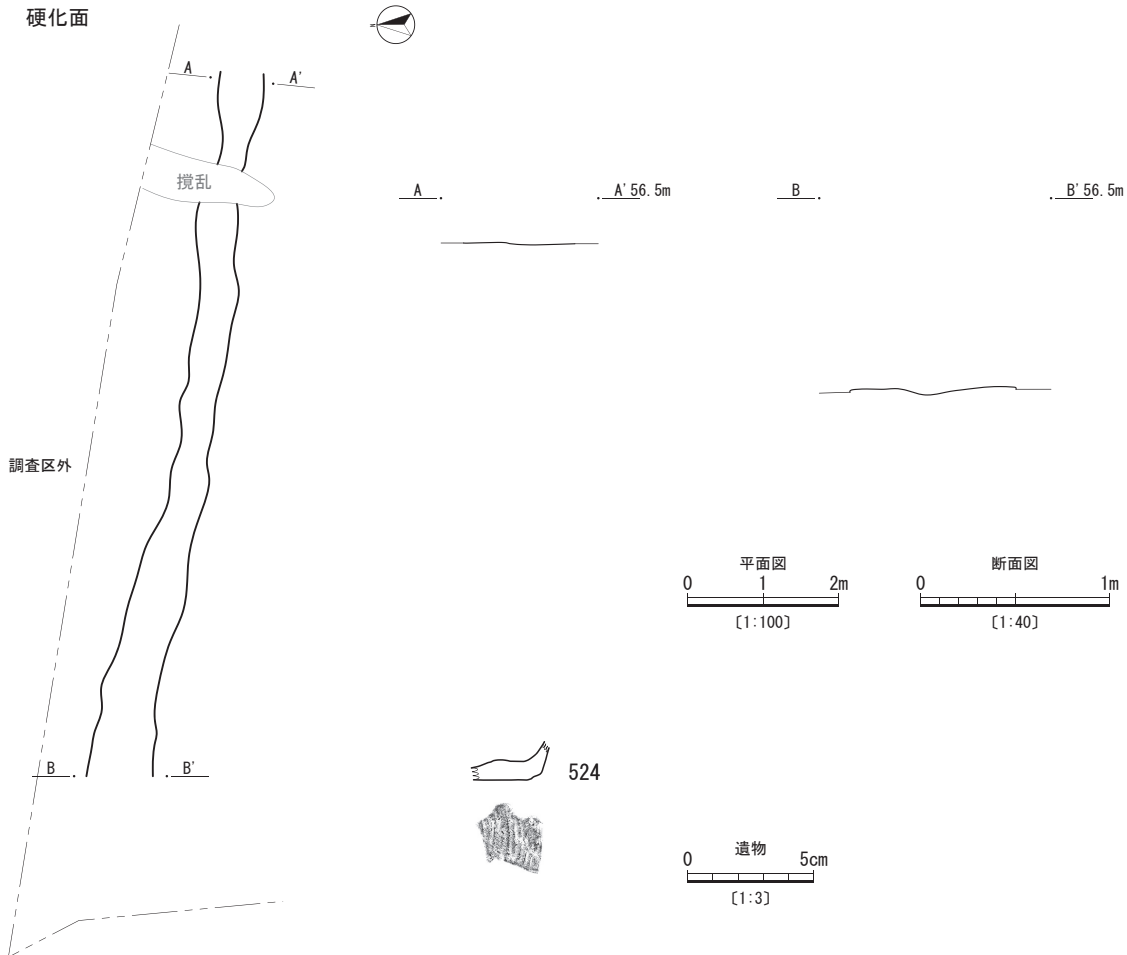
SD4



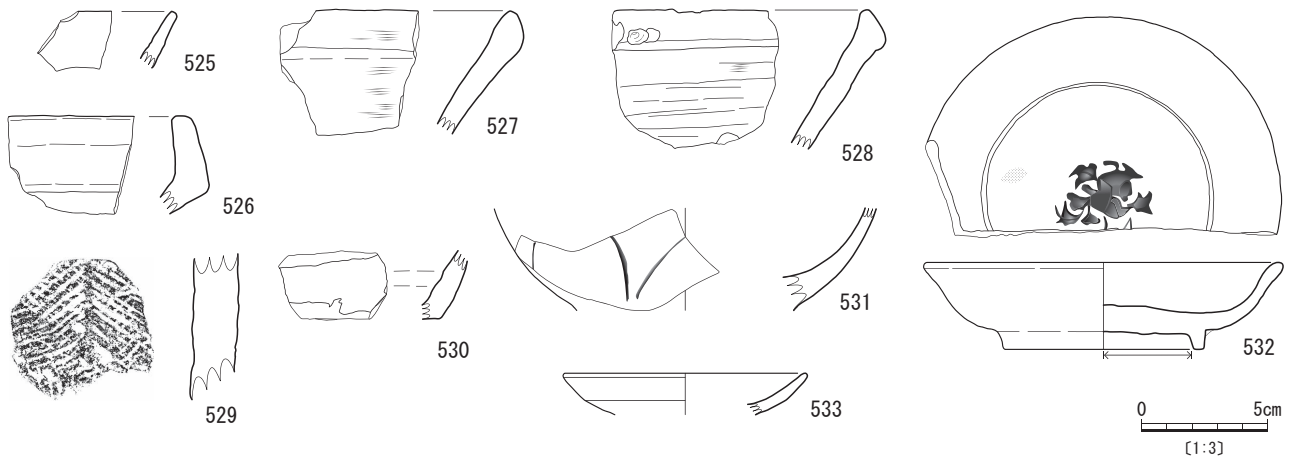
第 80 図 溝状遺構 3 号・4 号と溝状遺構の出土遺物

である。生焼けで土師質であり、外面が赤褐色で矢羽根状のタタキ痕が残る。530は黒釉の天目碗である。底部付近で、底面に釉はみられない。531・532は龍泉窯系青磁である。531は碗の胴部で、蓮弁文と考えられる縦方向の切彫りの文様がみられ、上田B類の可能性ある。

また、回転させ製作した際に残った沈線が文様状に残る。532は口縁が外反する皿で、見込みに圏文や花文の印を有し、見込みに1cm弱の砂目が1か所残る。533は白磁の皿か坏で、体部中位でやや屈曲する。残存部は全面施釉されている。



第 81 図 硬化面と出土遺物



第 82 図 中世の出土遺物

第 11 表 中世遺構出土土師器・須恵器・陶器等観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	調整		色調		白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	焼成	備考							
										外面	内面	外面	内面																	
70	417	大型土坑 1	-	-	土師器	-	皿	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	褐灰	○	○	○				○	○	普通								
	418	大型土坑 1	-	-	土師器	-	皿	口縁部	-	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○					○	○	良好								
	419	大型土坑 1	-	-	土師質土器	-	鉢	底部	(17.4)	丁寧なヘラ縦ミガキ	横回転ヘラナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	○	○					○		良好	外底：回転痕 内底：ミガキ→横ナデ							
	420	大型土坑 1	-	-	瓦質土器	-	羽釜	口縁部	-	口縁横ナデ縦ナデ	縦ナデ	褐灰	褐灰	○							○	○	良好							
	421	大型土坑 1	-	-	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	暗青灰	灰黄	○						○	○	普通	口縁暗青灰							
	422	大型土坑 1	-	-	中世須恵器	-	甕	胴部	-	矢羽根状タタキ	横ナデ	橙	灰白	○	○						○	○	良好	磨滅						
	423	大型土坑 1	①	-	中世須恵器	-	甕	胴部	-	斜格子タタキ	-	にぶい黄	灰黄		○	○					○	○	良好	内面剥脱						
	424	大型土坑 1	④	-	陶器	備前	播鉢	口縁部	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	灰赤	灰赤・浅黄ゴマ	○	○						○	○	良好	楕目不明						
	425	大型土坑 1	①・③	10	陶器	備前	播鉢	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	褐灰・口縁白ゴマ	褐灰	○							○	○	良好	8条以上のかき目						
	426	大型土坑 1	③	-	陶器	備前	播鉢	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	にぶい赤褐 下半灰赤	にぶい赤褐 浅黄ゴマ	○	○						○	○	良好	楕目不明						
	427	大型土坑 1	-	-	陶器	備前	播鉢	底部	-	横ナデ	-	赤灰	にぶい赤褐	○		○					○	○	良好	使用による磨耗 5・7条のかき目						
	428	大型土坑 1	③	-	陶器	備前	播鉢	底部	-	横ナデ	横ナデ	赤褐	にぶい赤橙	○	○	○							○	○	良好	使用による磨耗 7条のかき目 底繊維灰痕				
	429	大型土坑 1	①	6	陶器	備前	播鉢	底部	(13.8)	ヘラ斜ナデ	ヘラ縦ナデ	暗赤褐	赤褐	○	○								○	○	良好	底に淡黄粘土付着 10条のかき目				
	430	大型土坑 1	-	-	陶器	備前	壺	底部	-	-	砂付着	暗赤褐	暗赤褐	○							○	○	良好	内外に自然灰釉 (暗オリーブ) 底に置台付着						
	431	大型土坑 1	①	8	陶器	備前	壺	底部	-	-	-	青灰	褐灰	○	○								○	○	良好	外底：丁寧なナデ、粘土付着 内底：ヘラナデ				
	432	大型土坑 1	-	-	陶器	-	壺	底部	-	横ナデ	横ナデ	褐灰	褐灰	○							○	○	○	○	良好					
74	469	大型土坑 2	-	-	土師器	-	皿	底部	-	-	-	浅黄橙	浅黄橙							○	○	普通	底部糸切り離し							
	470	大型土坑 2	③	-	土師器	-	皿	底部	(6.4)	-	-	橙	にぶい黄橙		○						○	○	普通	底部糸切り離し						
	471	大型土坑 2	③	-	土師器	-	皿	底部	(7.0)	-	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○						○	○	普通	底部糸切り離し						
	472	大型土坑 2	-	-	中世須恵器	東播系	捏鉢	注ぎ口	-	横ナデ	横ナデ	灰 口縁は光沢のある黒	灰 灰白ゴマ	○							○	○	良好							
	473	大型土坑 2	-	-	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	灰	灰	○							○	○	良好							
	474	大型土坑 2	-	-	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	-	ヘラ横ナデ	横ナデ	灰 口縁は暗灰	灰	○							○	○	良好							
475	大型土坑 2	-	-	陶器	備前	播鉢	底部	-	横ナデ	横ナデ	灰褐	灰褐	○		○							○	○	良好						
75	502	大型土坑 1・2	-	-	陶器	備前	壺	完形	(12.0) (13.8) 27.4	横ナデ	横ナデ 車輪状当て具痕	青灰 口縁は暗い	青灰	○							○	○	良好	肩部に楕状沈線 内面剥脱 底近くスス						
	503	大型土坑 1・SD1	⑥	5	陶器	備前	壺	底部	(19.0)	横ナデ	横ナデ	灰白底：赤褐	灰	○	○							○	○	良好	内底ゴマ					
76	504	大型土坑 1・2・SD1・2	①・②・③	大土 1-9	陶器	備前	壺	口縁へ胴部	(17.4)	横ナデ	横ナデ	灰赤、赤灰	暗赤灰	○		○					○	○	良好	肩部に圈線、間に楕状波状文 肩と口縁上面にゴマ						
77	505	大型土坑 1	③	-	陶器	タイ	四耳壺	口縁部	(18.0) (15.0)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗赤灰	暗赤灰	○	○	○							良好	505～510は同一個体とみられる。肩部に低い三角突帯・耳軸は二次的に被熱 胴部下～底面無釉軸は浅黄・灰白・暗オリーブ						
	506	大型土坑 2	-	頸部				暗赤灰				暗赤灰	○	○	○															
	507	大型土坑 2	③	-				肩部				暗赤灰	青灰	○	○	○														
	508	大型土坑 2	①	-				胴部				丁寧なナデ	輪積み痕部分的に残存	暗赤灰	青灰	○	○	○												
	509	大型土坑 1・2	①・③	-				胴部				横ナデ	横ナデ	暗赤灰	青灰	○	○	○												
510	大型土坑 2	-	-	底部	横ヘラナデ	横ヘラナデ	暗赤灰	青灰	○	○	○																			
80	511	SD1	-	-	陶器	備前	壺	肩部	-	横ナデ	横ナデ	褐灰 黄白色ゴマ	褐灰	○	○							○	○	良好	外面に3条沈線					
	513	SD2	①	-	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	緑灰	緑灰	○						○	○	普通	口縁はやや暗い							
	514	SD2	-	-	中世須恵器	古瀬戸	壺	胴下部	-	ナデ	ナデ	オリーブ	オリーブ	○							○	○	良好	胎土灰白						
	515	SD2	①	-	陶器	常滑	甕	頸部	-	横ナデ	ハケ目様	灰白	灰	○							○	○	良好							
	516	SD2	-	-	陶器	備前	播鉢	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	赤灰	赤灰	○	○							○	○	良好						
	517	SD2	①	-	陶器	-	瓶	口縁部	(9.0)	-	-	黒褐	黒褐	○							○	○	普通	内面一部焼きぶくれ・胎土灰色						
520	SD4	-	-	土師器	-	皿	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙											○	○	普通	精製土				
81	524	硬化面	①	-	土師器	-	皿	底部	-	-	-	橙	橙								○	○	普通	底部糸切り離し						

第12表 中世遺構出土青磁・白磁等観察表

挿入番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考
71	433	大型土坑1	-	-	青磁	龍泉	碗	体部	-	連弁	-	明緑灰	灰白	良好	上田B
	434	大型土坑1	③	-	青磁	龍泉	碗	体部	-	鑄連弁	-	オリーブ灰	灰	良好	上田B
	435	大型土坑1	③	-	青磁	龍泉	碗	底～高台部	(5.6) (底)	連弁	-	灰オリーブ	灰	良好	上田B
	436	大型土坑1	①	1	青磁	龍泉	碗	底部	(6.8) (底)	-	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	
	437	大型土坑1	③	18	青磁	龍泉	碗	底部	(7.6) (底)	-	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	
	438	大型土坑1	①	3	青磁	龍泉	碗	底部	6.2 (底)	見込みに圈線と草花印文	高台内無釉	明緑灰	黄味がかった灰白	良好	貫入
	439	大型土坑1	①	2	青磁	龍泉	碗	底部	6.2 (底)	見込みに圈線と草花印文	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	貫入
	440	大型土坑1	①	-	青磁	龍泉	碗	底部	(5.6) (底)	見込みに草花印文	高台内無釉		灰白	良好	
	441	大型土坑1	③	12・13	青磁	-	皿	完形	12.6 5.8 3.0	-	見込み輪状釉剥ぎ・胴下部～高台無釉	灰白	灰白	良好	
	442	大型土坑1	③	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	-	内外草花文	-	オリーブ灰	灰白	良好	上田B
	443	大型土坑1	③	17	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.8) (口)	外蓮花文 内草花文	-	明オリーブ灰	灰白	良好	上田B
	444	大型土坑1	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(13.2) (口)	外草花文 内蓮花文	-	灰オリーブ	灰白	良好	上田B
	445	大型土坑1	③	-	青磁	龍泉	浅型碗	口縁部	-	鑄連弁	-	明オリーブ灰	灰白	良好	
	446	大型土坑1	-	-	白磁	-	皿か碗	口縁部	-	-	-	青味がかった灰白	灰白	良好	
	447	大型土坑1	①	-	白磁	徳化か	-	-	-	-	-	内面無釉	灰白	灰白	良好
74	476	大型土坑2	④	3	青磁	龍泉	碗	口縁部	(14.6) (口)	雷文	-	オリーブ灰	灰白	良好	上田C
	477	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	口縁部	-	雷文	-	明オリーブ灰	灰白	良好	上田C
	478	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	口縁～体部	(17.0) (口)	雷文	-	オリーブ黒	灰白	良好	上田C
	479	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	体部	-	口縁雷文 胴部連弁	-	オリーブ灰	灰白	良好	
	480	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	底部	(6.2) (底)	胴部下連弁	-	オリーブ灰	灰白	良好	
	481	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	碗	口縁部	(13.2) (口)	雷文	-	明緑灰	灰白	良好	
	482	大型土坑2	①	-	青磁	龍泉	碗	口縁～体部	(14.8) (口)	-	-	オリーブ灰	灰白	良好	上田D
	483	大型土坑2	④	6	青磁	龍泉	皿	口縁部	12.8 (口)	外草花文 内蓮花文	-	明緑灰	灰白	良好	
	484	大型土坑1・2	①・④	大土1-4・大土2-7	青磁	龍泉	皿	口縁～底部	(13.2) 6.4 3.5	見込みに圈線と草花印文 内外草花文	高台内に輪状の砂目痕	オリーブ灰	灰白(緻密)	良好	
	485	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁～底部	13.4 6.2 3.7	見込みに圈線と蓮花印文 外草花文 内蓮花文	高台内に砂目痕、釉剥ぎ	灰オリーブ	灰白	良好	
	486	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(13.0) (口)	外唐草文 内蓮花文	-	明オリーブ灰	灰白	良好	
	487	大型土坑2	①	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.6) (口)	内外草花文	-	オリーブ灰	灰白	良好	
	488	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.8) (口)	内外草花文	-	明緑灰	灰白	良好	
	489	大型土坑2	④	2	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.2) (口)	外草花文か	-	オリーブ灰	灰白	良好	
	490	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁部	(13.4) (口)	草花文か	-	明オリーブ灰	灰白	良好	気泡多い
	491	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁～体部	(12.6) (6.4) 3.4	-	見込み輪状釉剥ぎ 高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	
	492	大型土坑2	④	9	青磁	龍泉	坏	口縁部	(12.6) (口)	連弁	-	明緑灰	灰白	良好	
	493	大型土坑2	-	-	白磁	-	皿	口縁～体部	(8.6) (口)	-	外面胴下部無釉	黄味がかった灰白	灰黄	普通	森田E
494	大型土坑2	-	-	白磁	-	皿	口縁部	(10.2) (口)	-	胴下部無釉	緑がかった灰白	灰白	良好	森田D 貫入	
495	大型土坑2	-	-	白磁	-	多角坏	口縁～体部	-	-	胴下部無釉	灰白	灰白	良好		
75	498	大型土坑2	-	-	青磁	龍泉	皿	口縁～底部	12.8 6.8 3.7	-	見込み輪状釉剥ぎ 高台内無釉	明緑灰	灰白	良好	
	499	大型土坑1・2	④	-	青磁	龍泉	碗	口縁部	(14.0) (口)	口縁雷文 胴部連弁	-	オリーブ灰	灰白	良好	上田C
	500	大型土坑1・2	①	大土1-5	青磁	龍泉	碗	底部	5.8 (底)	見込みに圈線と草花スタンプ文	高台内無釉・砂目	オリーブ灰	灰白	良好	
501	大型土坑1・SD1	③	大土1-19・20他	青磁	龍泉	小型瓶	体部	-	-	内面部分的に無釉	緑灰	灰白	良好		
80	512	SD1	-	-	青磁	龍泉	碗か坏	口縁部	-	草花文か	-	オリーブ灰	灰	良好	貫入
	518	SD2	①	-	白磁	-	碗	口縁部	(11.0) (口)	-	口禿げ 胴下部無釉	緑がかった灰白	灰白	良好	大宰府白磁碗IX類
	519	SD2	①	-	青花	中国	皿	底部	(9.2) (底)	見込みに獅子外唐草文	曇付～高台内側無釉	透明釉	灰白	良好	小野分類皿B群

挿入番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径底径器高(cm)	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考
80	521	SD4	-	-	青磁	龍泉	碗	底部	5.6 (底)	連弁	高台内無釉	明緑灰	灰白	良好	
	522	SD4	-	-	白磁	-	皿	底部	5.8 (底)	見込みに圈線	-	黄味がかつた灰白	灰白	良好	
	523	SD4	-	-	白磁	-	皿	口縁～ 底部	(8.0) (3.3) 2.9	-	-	緑がかつた灰白	灰白	良好	

第13表 中世遺構出土石製品観察表

挿入番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
71	448	大型土坑 1	③	11	砥石	(6.9)	7.20	(4.8)	(244.0)	砂岩	
	449	大型土坑 1	-	-	軽石製品	6.9	6.4	5.0	46.2	軽石	
72	450	大型土坑 1	-	⑩	空風輪	18.4	15.0	(13.3)	(950)	軽石	
	451	大型土坑 1	-	⑮	空風輪	30.2	18.9	(17.3)	(7300)	凝灰岩	
	452	大型土坑 1	-	⑪・⑭	火輪	18.2	(34.2)	35.6	(18500)	凝灰岩	
	453	大型土坑 1	-	⑤	水輪	26.8	30.2	26.8	6250	軽石	
	454	大型土坑 1	③	⑧	水輪	34.7	33.8	29.7	38000	凝灰岩	
	455	大型土坑 1	-	⑩	水輪	28.4	35.5	35.2	(17950)	凝灰岩	
	456	大型土坑 1	-	①	地輪	34.0	(34.1)	(24.4)	(22800)	凝灰岩	
	457	大型土坑 1	-	-	地輪	12.6	(26.7)	(22.5)	(5850)	凝灰岩	
	458	大型土坑 1	-	⑥	地輪	10.4	30.8	31.4	5350	軽石	
73	459	大型土坑 1	-	⑯	地輪	22.0	42.6	44.0	52450	凝灰岩	
	460	大型土坑 1	-	④	地輪	18.8	(31.4)	(32.9)	(17150)	凝灰岩	
	461	大型土坑 1	-	-	板碑	(14.8)	(17.7)	(14.8)	(2150)	軽石	薬研彫
	462	大型土坑 1	-	⑦	板碑	36.3	(20.7)	(15.8)	(4050)	軽石	
	463	大型土坑 1	-	③, 一括	板碑	(43.4)	18.6	10.8	(2900)	軽石	
	464	大型土坑 1	-	⑫	板碑か	(34.5)	23.6	13.2	(7750)	凝灰岩	
	465	大型土坑 1	-	-	板碑か	(28.5)	17.8	(14.1)	(7300)	凝灰岩	
	466	大型土坑 1	-	②	不明	16.5	9.5	8.5	1300	凝灰岩	
	467	大型土坑 1	-	⑬	不明	(13.0)	(9.7)	(8.2)	(650)	軽石	
	468	大型土坑 1	④	大土 1-15	石臼	径 33.5 × 34.3		14.0	20800	安山岩	

第14表 中世遺構出土金属製品観察表

挿入番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	部位	大きさ	重量 (g)	備考
74	496	大型土坑 2	④	4	角釘	頭～胴部	残存長 3.9 cm	11.9	頭は長方形
	497	大型土坑 2	①	1	角釘	胴～先端部	残存長 7.3 cm	9.8	

第15表 中世土師器・須恵器・陶器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径底径器高	調整		色調		白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	焼成	備考
										外面	内面	外面	内面										
82	525	-	I	-	土師器	-	皿	口縁部	-	細かいハケ横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○					○	普通	スス 摩耗	
	526	-	I	-	土師質土器	-	鍋	口縁部	-	ハケ横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○					○	普通	外面剥離・スス
	527	F8	I	-	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	褐灰	褐灰	○			○				○	良好	口縁青味がかかる
	528	-	I	-	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	-	横ナデ	横ナデ	褐灰	褐灰	○	○		○				○	良好	口唇部は使用による摩耗 口縁は部分的に光沢
	529	F8	I	-	中世須恵器	-	甕	胴部	-	矢羽根状タキ	ナデ	橙	淡黄	○	○	○			○		○	良好	内面は著しく磨減
530	-	I	-	陶器	天目	碗	底部	-	-	-	暗赤灰	赤黒	○								良好		

第16表 中世青磁・白磁観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径底径器高	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考
82	531	-	I	-	青磁	龍泉	碗	胴部	-	連弁	-	灰オリーブ	灰白	良好	
	532	E6	攪乱	63	青磁	龍泉	皿	口縁～底部	14.2 8.0 3.4	見込みに圈線、草花印文	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	見込みに砂目痕
	533	F8	I	-	白磁	-	皿	口縁部	(9.8) -	-	-	黄味がかつた灰白	灰黄	普通	

第6節 近世の調査

1 調査の概要

近世の遺構はI-6・7区で隣り合った石塔・石碑が1基ずつ、その周辺に土坑が4基、その南側に溝状遺構が1条検出されており、石塔周辺に集中している。遺物も石塔周辺の表土で多数出土しており、供献物など、この石塔に関係のある遺物と考えられる。他にはF~H-12~14区で溝状遺構が1条検出されている。

2 遺構

(1) 溝状遺構

溝状遺構5号(第84図)

I-6~8区のIVb層上面で検出された。上位は削平を受けている。北は調査区域外、南は道路付近まで直線状に延びている。検出できた部分は長さ約13m、幅約80cm、深さは30cm程度である。埋土は黒色土に少量のアカホヤ火山灰が混じっており、遺構掘削土の一部と考

えられる。床面はほぼ平坦である。

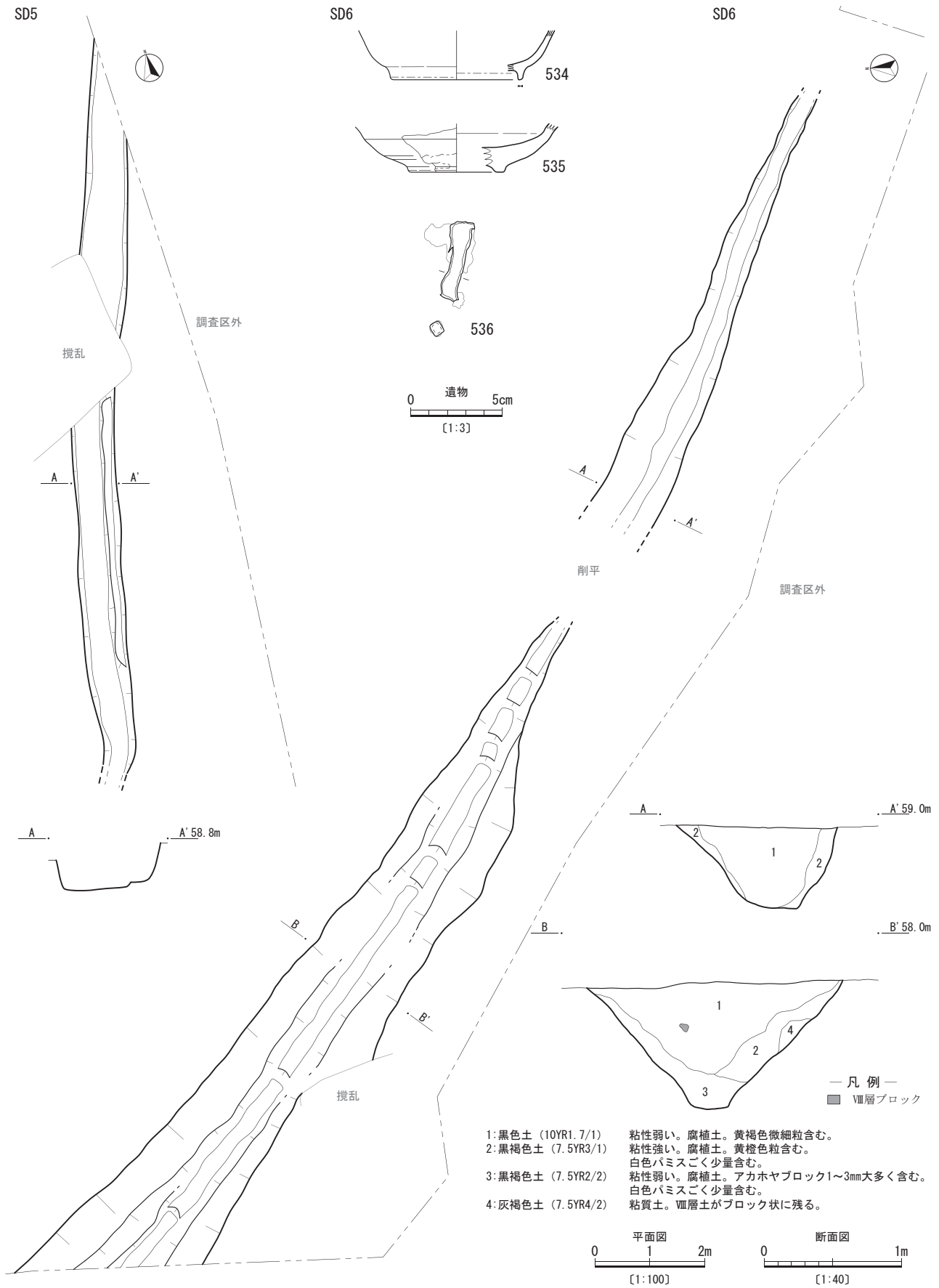
溝状遺構6号(第84図)

F~H-12~14区のVb~X層上面で検出された。上位は東側を中心に大きく削平を受けている。東南東から西北西方向に直線状に延びている。検出面の長さは約25mで、残存度の良い西側は幅約2m、深さは1.0~1.5mで、東側もこの程度の大きさであった可能性がある。断面形状は逆三角形で床面は狭く、埋土はほぼ黒色土であり、下部にアカホヤ火山灰などが混じりあっている。現在の側溝や道路跡と並行であり、床面が階段状になる部分があること、硬化した部分がみられることから、道跡であった可能性が高い。

534は白磁の皿で、森田E群に比定されるものである。535は唐津焼の壺で、内面や外面の体部下半を除き、灰褐色の釉がかかる。536は鉄釘である。角釘とみられ、頭部付近のみ残存する。

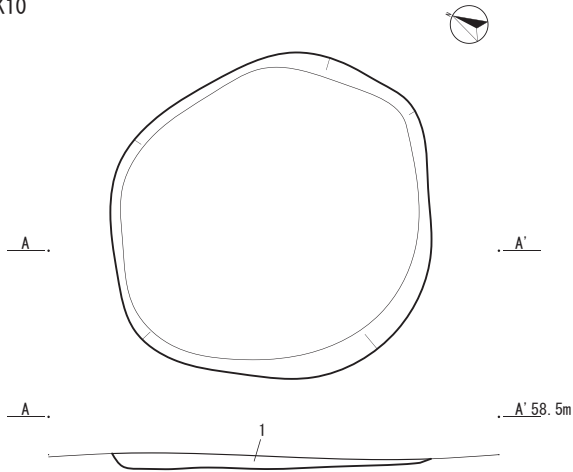


第83図 近世と時期不明の遺構配置図



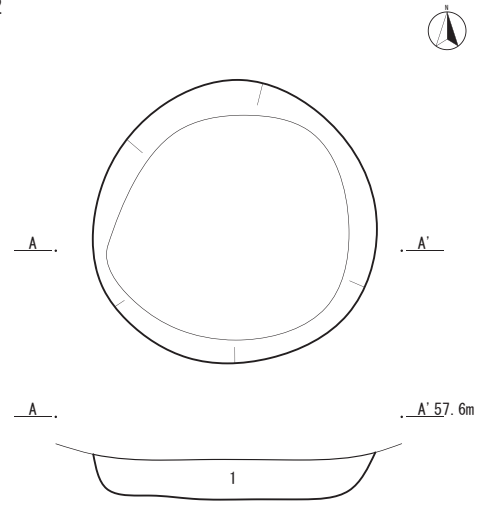
第84図 溝状遺構5号・6号と出土遺物

SK10



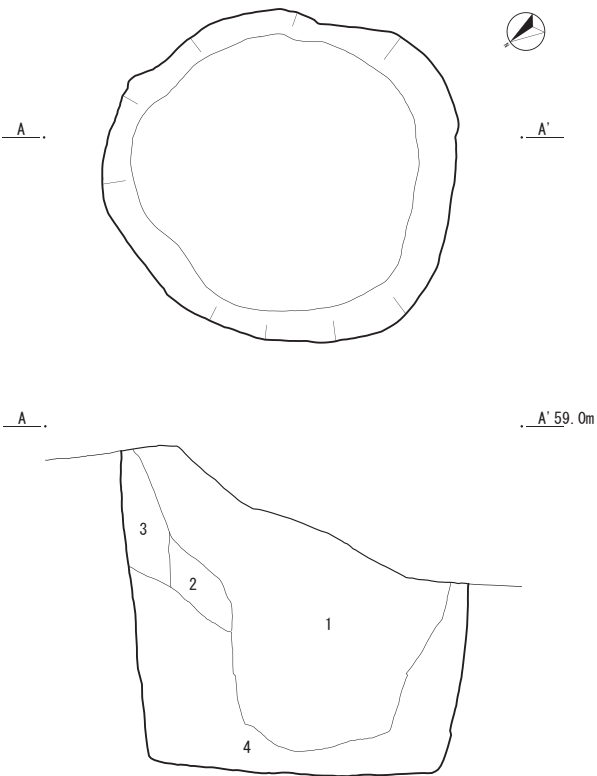
1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり弱い, 粘性弱い。

SK12



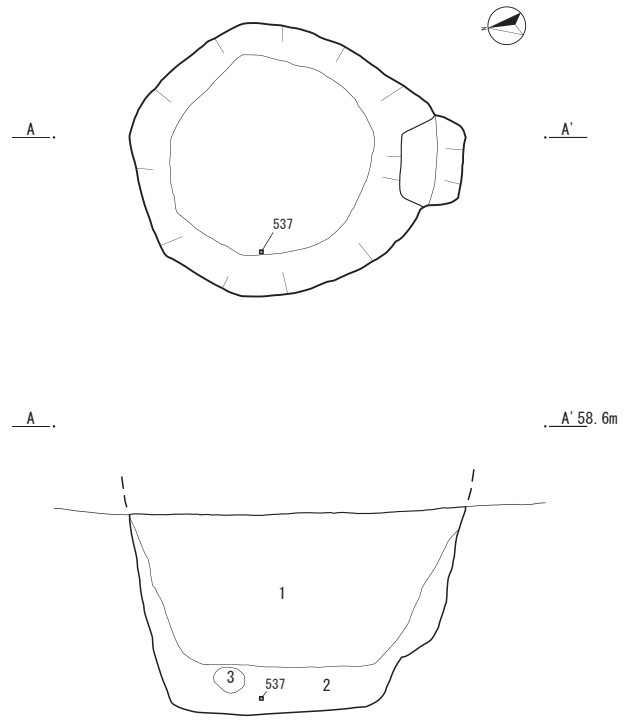
1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり弱い, 粘性弱い。

SK11



1: 黒色土 (10YR1.7/1) しまり弱い, 粘性あり。
 2: 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり弱い, 粘性弱い。白色粒子含む。
 3: 暗褐色土 (7.5YR3/3) しまり弱い, 粘性弱い。
 4: 褐色土 (7.5YR4/3) しまり弱い, 粘性弱い。

SK13



1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり弱い, 粘性弱い。
 2: 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまりややあり, 粘性弱い。埋土1よりやや硬い。
 3: 灰褐色土 (7.5YR5/2) しまりややあり, 粘性弱い。ブロック状に入る。

— 凡例 —
 □ 金属



第 85 図 土坑 10 号～ 13 号と出土遺物

(2) 土坑

土坑 10号 (第85図)

I-6区のIVb層上面で検出された。平面は円形で直径80cm程度である。残存度は極めて悪く、床面より5cm程度しか残らない。埋土は黒褐色土で、II・III層土などと考えられる。遺物はみられず、用途も不明である。

土坑 11号 (第85図)

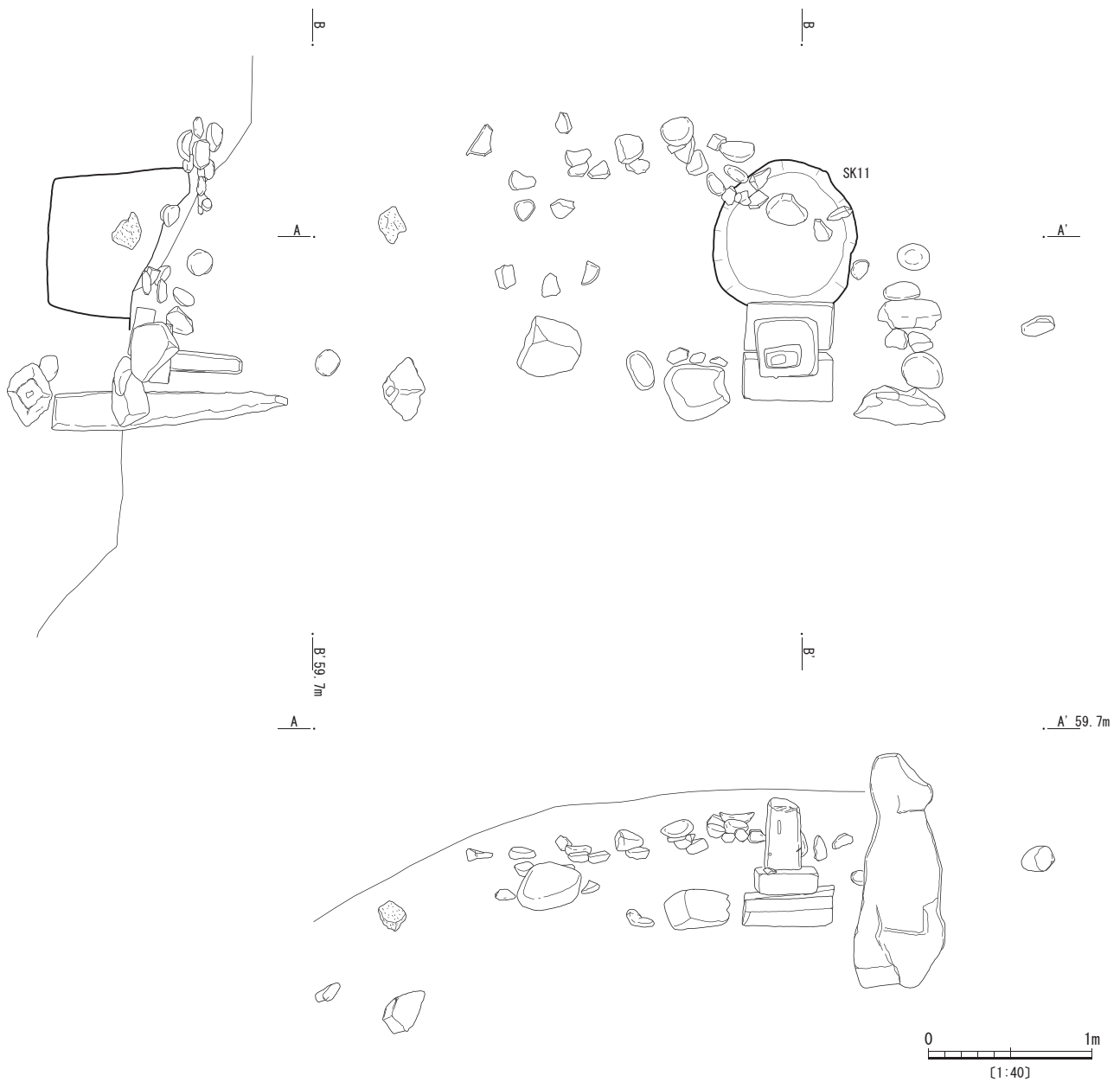
I-6区のIVb層上面において、石塔を取り外した後に検出された。平面は円形に近く、直径は90cm程度で、深さは残存度の良い北側で80cmほどである。VI層付近まで掘削されており、埋土4はIV~VI層土が含まれていることから遺構掘削土の一部、埋土1はほぼ黒色土である。

り、II・III層土など上部の土と考えられる。この土坑は石塔のほぼ真下にあり、土坑の南側は低くなっているが、最初から低かったか、石塔建立時に削平されたかは不明であるが、削平されていた場合は石塔と建立時期が異なると推測される。遺物が出土しておらず、土坑墓であったかなど、用途は不明である。

土坑 12号 (第85図)

I-6区のVII層上面において検出された。付近は削平が激しく、上部のほとんどを失っており、床面から10cm程度しか残存していない。平面はきれいな円形で、直径70cm程度である。埋土はしまりの弱い黒褐色土である。用途は不明である。

石塔



第86図 石塔と土坑 11号

土坑 13 号 (第 85 図)

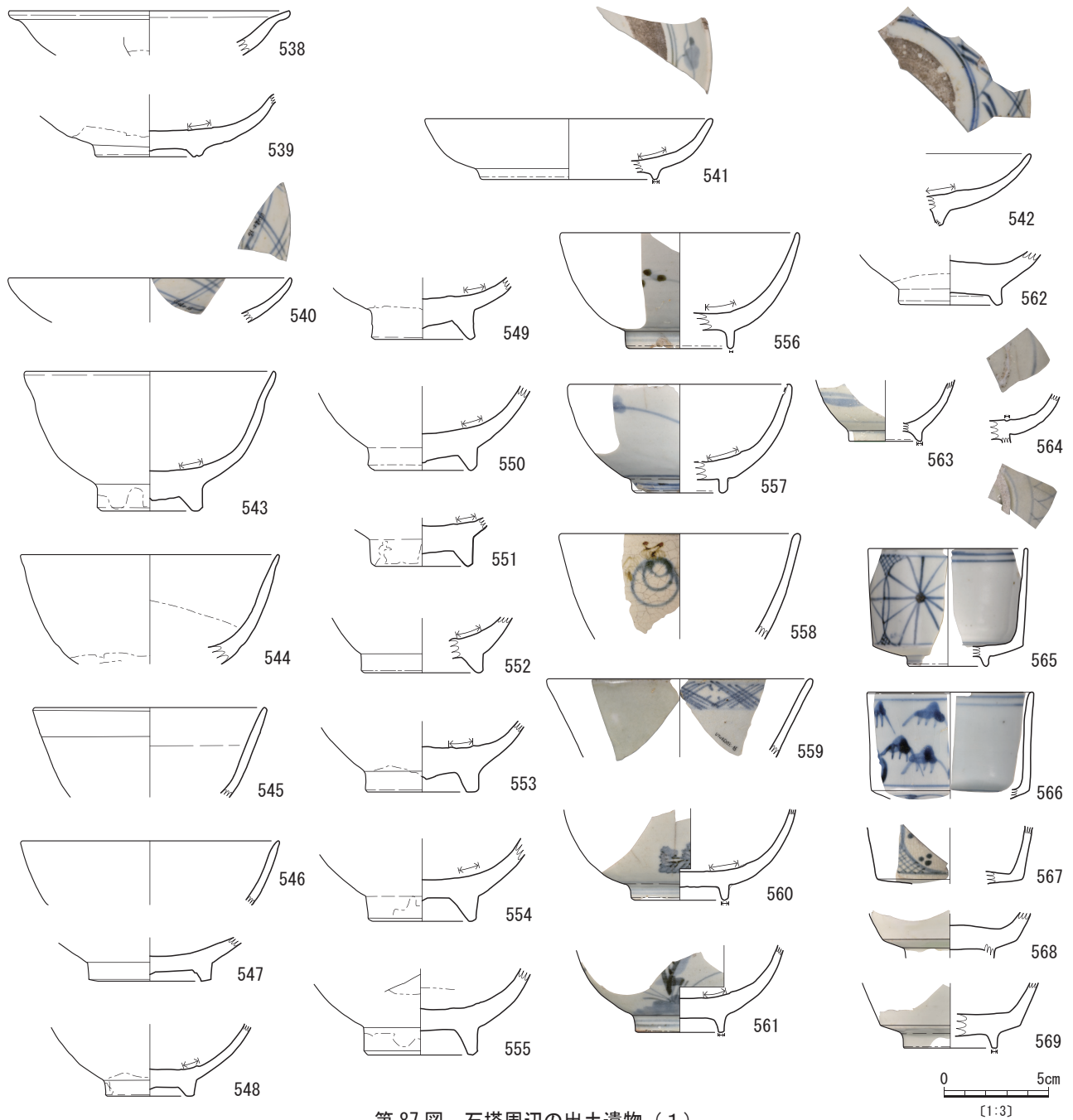
I-6 区の IV b 層上面において検出された。上位は削平を受けている。平面は円形に近く、直径は 80 × 70 cm 程度で、南側に幅 20 cm 程度の段が付く。深さは 50 cm 程度で、段部分は約 40 cm である。埋土中にアカホヤ火山灰は少なく、遺構掘削土の多くは埋め戻しに使われなかったと推測される。埋土 2 中から鉄釘が出土していることから、土坑墓であった可能性がある。

537 は鉄製の角釘で、残存する長さは約 5 cm、厚さ 5 mm 程度で、ほぼ真ん中で 90 度の角度で曲げられている。

(3) 石塔・石碑 (第 86 図)

I-6 区の地表面において、草に埋もれた状態で検出された。3 段に積まれた石塔と板状の石碑が南西側を向いた状態で並んでいる。石塔・石碑の石材は凝灰岩で、どちらも文字や文様は刻まれていない。

石塔は棹石・中台・芝台の三段の加工石で構成される。1 段目の芝台は、約 50 × 30 × 10 cm の長方体の石を 2 点南北に並べて造られており、上面は丁寧に研磨されている。南側の石がやや南に傾いているが、地震等による影響と考えられる。なお、検出時はこの台の上面近くまで埋められていた。2 段目の中台は、約 40 × 40 × 10



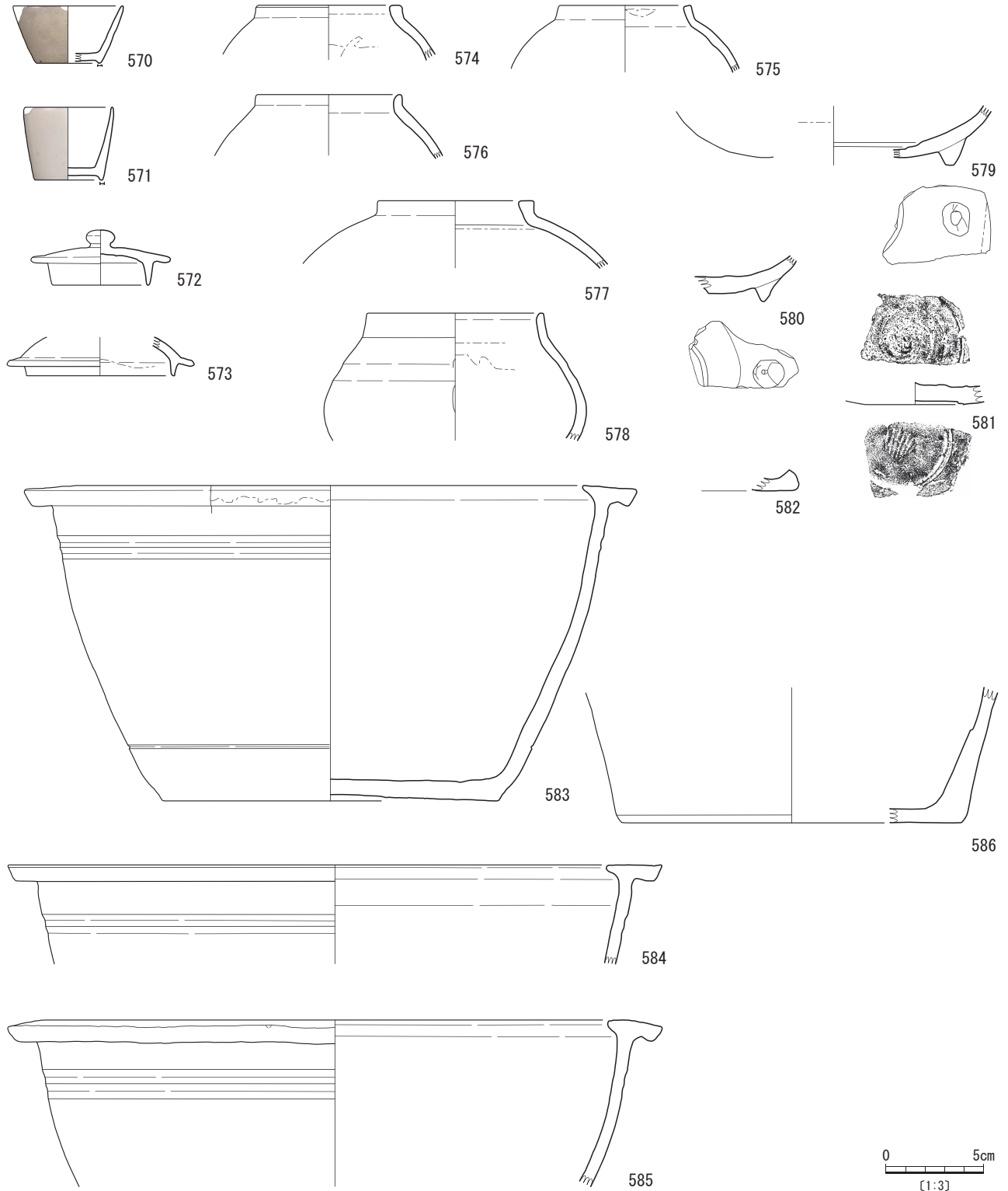
第 87 図 石塔周辺の出土遺物 (1)

cmで、断面は台形に近く、側面はやや雑な仕上がりである。上面中央部には正方形のホゾ穴がある。棹石は約45 × 20 × 10 cmで、角は緩やかに加工されている。

石碑は、下から35 cm部分まで土に埋まった状態で検出された。板状大型石の正面部分を平坦に加工している

が、何も刻まれておらず、石塔や周辺土坑との関連は不明である。周囲には多くの人頭大の礫がみられ、五輪塔の一部や陶磁器等も含まれており、これら石塔・石碑や土坑に関連するものである可能性がある。

これらの石塔について、周辺の民家で聞き込みを行っ



第 88 図 石塔周辺の出土遺物 (2)

たが、由来等は不明であった。地域の重要な供養碑であった可能性が高いため、道路建設予定地端に移設した。石塔や石碑の形態から、近世頃に建立されたと考えられる。

3 遺物 (第 87 図～第 91 図)

ほぼ石塔周辺で出土しており、器種別に分け 71 点を図化した。

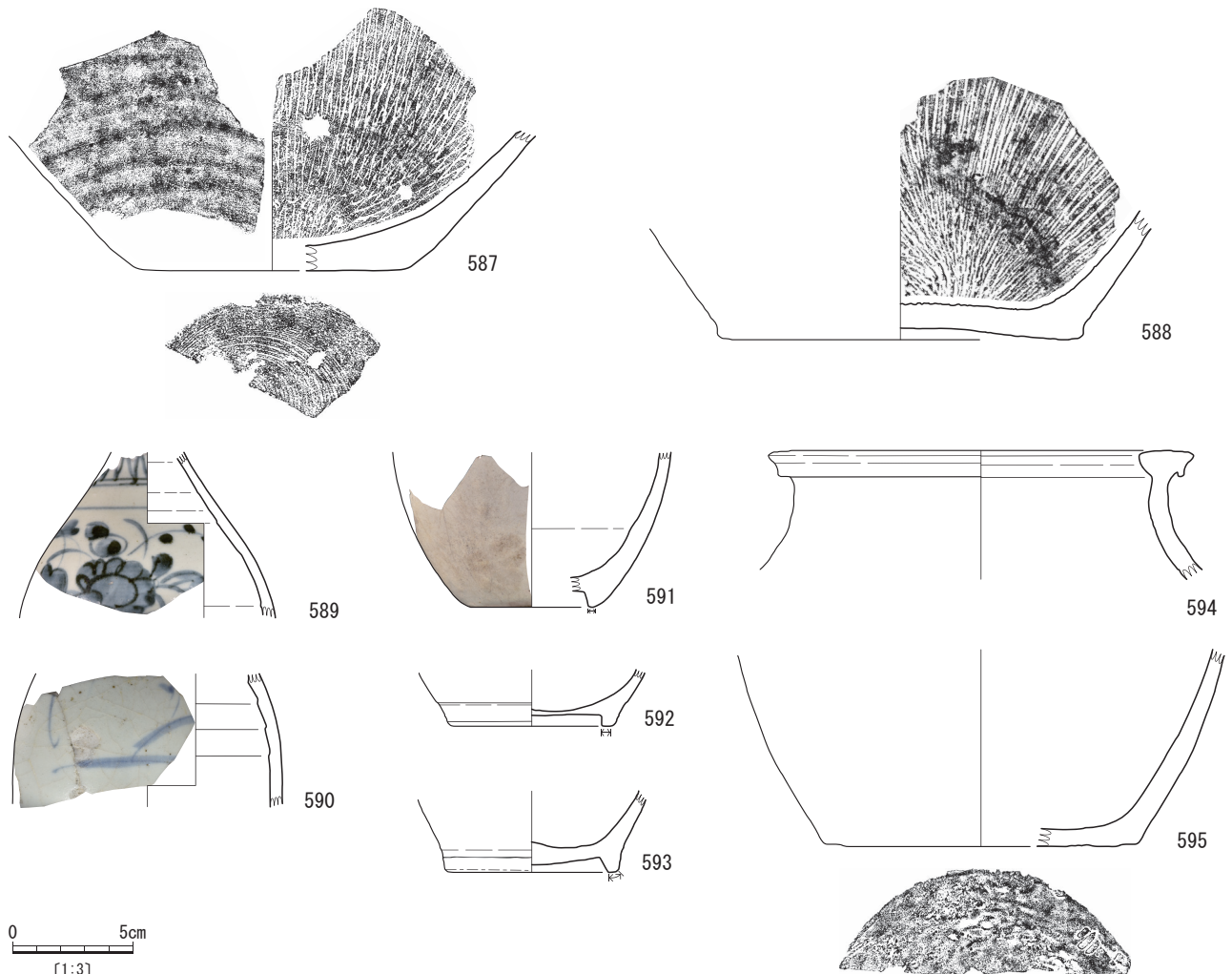
皿・碗 (第 87 図 538～569)

538～542 は皿である。538・539 は薩摩焼龍門司系の陶器で、白化粧土に透明釉がかかる。538 は口縁部で、端部がやや外反する。539 は、白化粧土が底部下位にかからず、見込みは蛇の目釉剥ぎされ、重ね焼きの際の高台痕が残る。540～542 は肥前系の磁器で、540 は口縁部で内面に四方襷文がみられる。541・542 は見込み部分を蛇の目釉剥ぎし、体部内面に 541 は山水文、542 は四方襷文が描かれる。

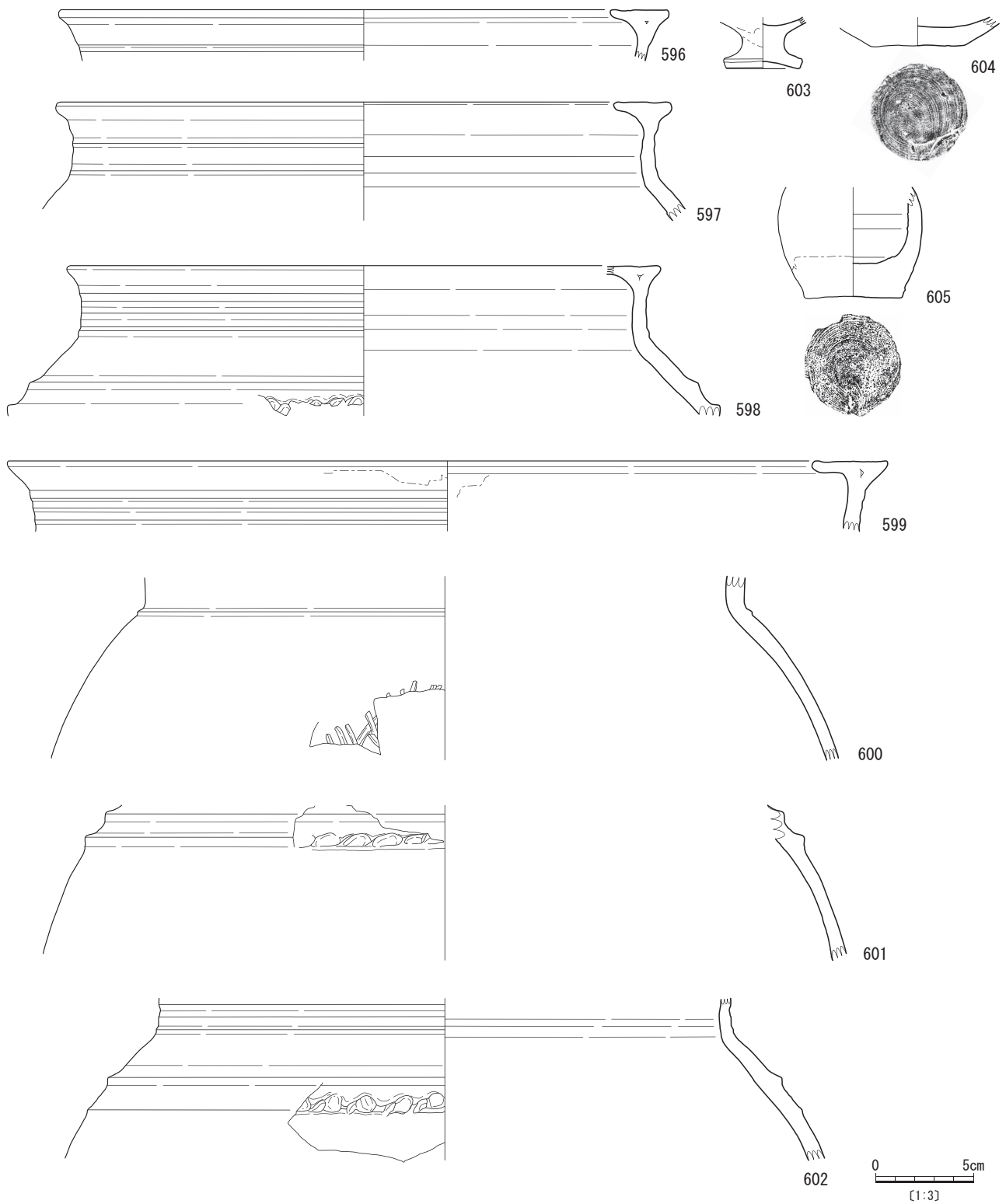
543～569 は碗である。543～555 は龍門司系の陶器である。543 は見込み部分に蛇の目釉剥ぎがなされ、畳付から高台内は露胎である。544～546 は口縁部～体部

で、544 は内面上位と外面の口縁近くから下位まで白化粧土を塗り、施釉している。545 は暗赤灰色で他と比べ黒色が強く、回転ナデの跡が明瞭である。546 は口唇部内面が削られ、先端に向け細くなる。547～555 は体部～底部で、すべて高台付近は無釉で、見込み部分は蛇の目釉剥ぎがなされる。547 は高台削り出し部が高く残っており、段となっている。弱く、間に隙間がみられる。549・550・554 は褐釉のみ体部下位までかかる。

556～569 は肥前系磁器の碗である。556～564 は丸碗で、底部が残存するものはすべて見込みが蛇の目釉剥ぎである。556・557 は外面に草花文が、558 は宝珠が描かれる。559 は口縁まで直線状となり、口縁内面に四方襷文が描かれる。560 は体部外面の下位に圈線、中位に花の印文が 2 か所確認できる。561 は外面に草花文、高台内に圈線と「大明年製」の文字が描かれる。565～569 は筒型碗である。565 は外面に圈線 2 条と菊花文を、圈線と菊花文の隙間に斜格子文を描いている。566 は 2 条の圈線の間に雪持笹文が、567 は残存部位が小さく文



第 89 図 石塔周辺の出土遺物 (3)



第90図 石塔周辺の出土遺物（4）

様は明確でないが、円の中に3つの黒点を数か所に描き、円と圏線の隙間に565と同様の斜格子文を描いている。568・569は底部で、腰部から胴部に向けやや開き、文様はみられない。

小坏（第88図570・571）

570・571は肥前系磁器の小坏である。570は口が開き、やや黄色を帯びた白色を呈す。571は口縁まで垂直気味に立ち上がり、ほぼ白色である。猪口の用途が考えられる。

土瓶 (第 88 図 572 ~ 581)

572 ~ 581 は薩摩焼苗代川産の土瓶である。572・573 は土瓶の蓋で、572 は上面に鉄釉、573 は透明釉がかかる。574 ~ 578 は口縁から胴部で、すべて外面に鉄釉がかかる。574・575・577 は口唇部から口縁内面まで、576・578 は口唇部の釉を掻き取っている。579 ~ 581 は底部で、内面には鉄釉がかかり、外面は無釉である。579・580 は三角錐状で底面が平坦な脚が 1 か所のみ残存する。579 は煤が底面のほぼ全面に付着する。581 は底面に弧状に段が付き、中央に貝目痕が残る。

蓋 (第 88 図 582)

582 は蓋である。口縁部分のみ残存し、上面に鉄釉がかかる。

鉢 (第 88 図 583 ~ 586)

583 ~ 586 は鉢で、586 以外は薩摩焼苗代川産である。583 は高さが 16.0 cm で、口唇部に貝目の跡が残る。584・585 は口唇部は雑な釉剥ぎがなされ、口縁部下の外面に 2 重の沈線が巡る。586 は底部で、産地は不明である。底面にも釉がかかり、内面の調整は良い。

播鉢 (第 89 図 587・588)

587・588 は播鉢である。587 は無釉で赤褐色を呈し、糸切り底で、肥前系陶器の可能性がある。588 は苗代川産で、底部内面際に釉が付着している。

瓶 (第 89 図 589 ~ 595)

589 ~ 593 は磁器の瓶で、589・590 は肥前系で、外面に草花文が描かれる。591 ~ 593 は底部で、591 は外面が灰白色、内面が茶色で回転ナデ跡が明瞭である。592 は外面に透明釉がかかり、丁寧なつくりである。593 は薄く青みがかった白色を呈し、底部付近の外面に 1 条の薄青色の圈線が巡る。594・595 は苗代川産の壺である。594 は口縁部で、口唇部は平坦であり、口縁部は内外に

突出し、外面は凹線風にくぼんでいる。595 は底部で、内外面に鉄釉がかかり、底面に貝目痕が残る。

甕 (第 90 図 596 ~ 602)

596 ~ 602 は苗代川産の甕である。596 ~ 599 は口縁部で、口縁端部を外側に折り曲げて、断面三角形に作るもので、折り曲げた際に小さい隙間ができていたものが多く、いずれも頸部付近に 1 ~ 2 条の凹線が巡る。599 は内面へ向け口縁の突出が強く、口唇部に釉がほぼ全面に残っている。600 は胴部に幅 2 ~ 3 mm 程度の工具で縦や斜方向に釉を掻き落とし、何らかの文様を描いているが、一部のみしか残存しないため詳細は不明である。598・601・602 は肩部に 1 条の突帯と、その下に縄状突帯が巡る。

仏具等 (第 90 図 603 ~ 605)

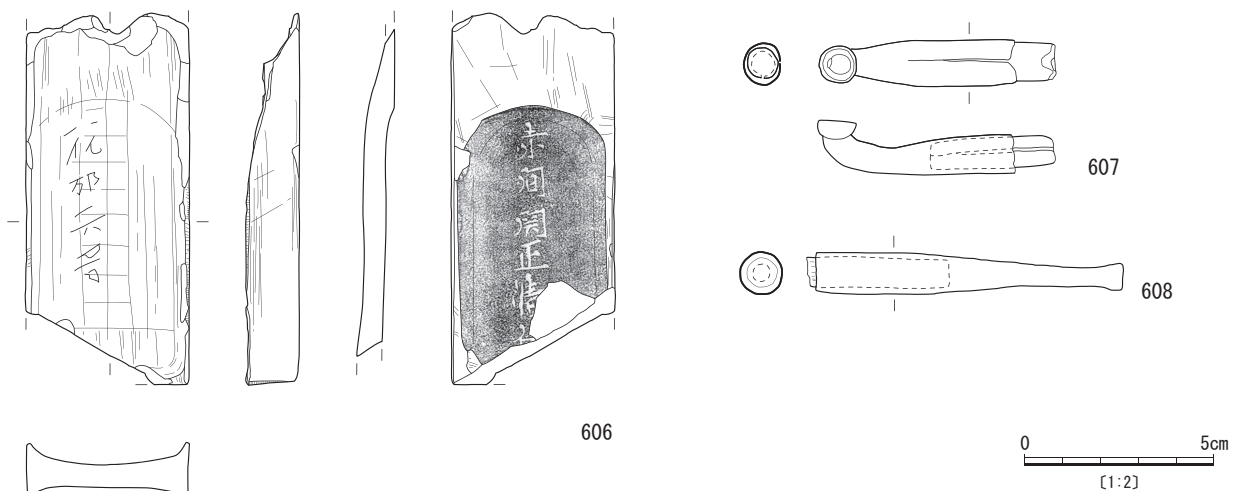
603 ~ 605 は龍門司系の陶器である。603 は高坏の形をした小型の陶器で、仏飯器としての使用が考えられる。604 は灯明皿で、見込みにゴマ目が残る、外面は無釉である。605 は底部糸切りの仏花瓶で、外面に黒釉がかかる。

石硯 (第 91 図 606)

606 は石硯で、底面に「赤間関正清作」の文字が明瞭に刻まれており、山口県下関市の赤間産と考えられる。また、陸部には使用時に刻んだ梯子状及び 4 文字の判読不明の文字が残る。

煙管 (第 91 図 607・608)

607・608 は煙管 (キセル) で、607 の雁首 (頭部)、608 の吸口 (尾部) と共に、木製の羅字片がそれぞれに残り、中央部は欠損している。青銅製で、首部と火皿の間に補強帯は無く、首部の弯曲が弱く直線的であることから、比較的新しい 18 世紀後半頃に製作されたものとみられる。



第 91 図 石塔周辺の出土遺物 (5)

第17表 近世石塔周辺出土陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考
84	534	SD6	①	2	白磁	中国	皿	底部	(7.0) (底)		畳付無釉	灰白	灰白	良好	森田E群
	535	SD6	①	6	陶器	肥前系か	壺	底部	(5.2)		胴下～高台無釉	灰利-ア～灰白	灰褐	良好	唐津
87	538	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	皿	口縁部	(13.4) (口)		内外面	白化粧土・透明	にぶい褐	良好	
	539	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	皿	体部	5.2 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	白化粧土・透明	にぶい橙	良好	18c 後半
	540	-	I	-	磁器	肥前系	皿	口縁部	(13.6) (口)	四方禪文	内外面	透明	灰白	良好	
	541	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	皿	口縁～ 底部	(13.8) - 2.9	山水文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付無釉	透明	灰白	良好	
	542	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	皿	口縁～ 底部	-	四方禪文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	透明	灰白	良好	
	543	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	(12.0) 5.0 6.7		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	極暗赤褐	橙	良好	18c 後半
	544	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 体部	(12.4) (口)		見込み釉剥ぎ	白化粧土・褐釉	にぶい赤褐	良好	18c 後半
	545	-	I	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 体部	(11.2) (口)		内外面	暗赤灰	灰褐	良好	
	546	-	I	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 体部	(12.4) (口)		内外面	褐	にぶい赤褐	良好	
	547	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	5.8 (底)		残存部無釉	-	にぶい赤褐	良好	18c 後半
	548	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	4.3 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	暗赤褐	にぶい橙	良好	18c 後半
	549	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	(5.0) (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	黒褐	にぶい褐	良好	18c 後半
	550	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	4.6 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	黒褐	にぶい橙	良好	
	551	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	4.8 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	暗褐	にぶい赤褐	良好	
	552	E5	攪乱	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	(5.7) (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付無釉	暗オリーブ褐	黄灰	良好	
	553	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	5.4 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内外無釉	褐	灰褐	良好	
	554	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	5.2 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	暗赤灰	にぶい橙	良好	
	555	石塔周辺	-	-	陶器	龍門司	壺	口縁～ 底部	5.4 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内外無釉	白化粧土・褐釉 極暗褐～褐	にぶい褐	良好	
	556	E4・E5	攪乱	-	磁器	肥前系	丸碗	口縁～ 底部	- 4.8 5.5	草花文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付無釉	透明	灰白	良好	
	557	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	丸碗	口縁～ 底部	(4.6) 5.2	草花文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付無釉	透明	灰白	良好	
	558	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	丸碗	口縁部	(11.4) (口)	宝珠	内外面	透明	黄味がかつた灰白	良好	貫入, 18c 後半
	559	E5	攪乱	-	磁器	肥前系	丸碗	口縁部	(12.6) (口)	四方禪文	内外面	外面青磁 (明緑灰)	灰白	良好	
	560	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	丸碗	胴部～ 底部	4.6 (底)	圏線・花 の印文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	透明	灰白	良好	波佐見か
	561	F13	攪乱	-	磁器	肥前系	丸碗	胴部～ 底部	4.2 (底)	草花文・ 高台内 「大明年 製」	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	透明	灰白	良好	18c 後半
	562	E5	攪乱	-	白磁	肥前系	丸碗	底部	(5.0) (底)		胴下～高台無釉	緑灰	灰白	良好	見込みに砂目跡 内野山か
	563	-	I	-	磁器	肥前系	丸碗	底部	(3.4) (底)		畳付無釉	透明	灰白	良好	
	564	石塔周辺	-	-	陶器	肥前系	丸碗	底部	-		見込み釉剥ぎ	透明	灰白	良好	
	565	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	筒型碗	口縁～ 底部	(7.6) (3.8) 5.6	圏線・菊 花紋	畳付無釉	透明	灰白	良好	
	566	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	筒型碗	口縁部	(7.8) (口)	圏線・雪 持笹文	内外面	透明	灰白	良好	
	567	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	筒型碗	胴～腰 部	-		内外面	青灰	灰白	良好	貫入
	568	石塔周辺	I	-	磁器	肥前系	筒型碗	底部	-		内外面	灰白	灰白	良好	
	569	G6	攪乱	-	磁器	-	筒型碗	底部	(4.4) (底)		畳付無釉	白磁釉	灰白	良好	
88	570	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	坏	口縁～ 底部	(5.6) 3.4 2.9		内外面	灰白	灰白	良好	
	571	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	坏	口縁～ 底部	4.6 3.4 3.7		畳付無釉	灰白	灰白	良好	19c
	572	-	I	-	陶器	苗代川	土瓶の蓋	完形	7.2 (口) 2.8		外面受け部～ 内面無釉	オリーブ黒	暗灰黄	良好	
	573	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	土瓶の蓋	受け部	(9.6) (口)		内面無釉	白化粧土に透明釉 灰	灰	良好	
	574	-	I	-	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(7.2) (口)		口唇～内面口縁無釉 内面胴下部無釉	暗赤灰	にぶい赤褐	良好	

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の 色調	焼成	備考
88	575	-	I	-	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(6.8) (口)		内面口縁無釉	黒褐	にぶい赤褐	良好	
	576	E4	攪乱	-	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(7.4) (口)		口唇無釉	暗褐	明赤褐	良好	
	577	J13	攪乱	-	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(8.0) (口)		口唇～内面頸部まで 釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	そろぼん玉型
	578	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(9.0) (口)		内面頸部無釉	黒褐	にぶい赤褐	良好	
	579	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	土瓶	胴～底 部	-		底部無釉	灰オリーブ	にぶい赤褐	良好	18c 後半 底部 スス
	580	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	土瓶	底部	-		外面無釉	暗灰黄	橙	良好	
	581	-	I	-	陶器	苗代川	土瓶	底部	5.0 (底)		底部無釉	暗灰黄	明赤褐	良好	底部に貝目
	582	-	I	-	陶器	苗代川	土瓶の蓋	口縁部	-		内面釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	583	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	鉢	口縁～ 底部	(31.3) (17.2) 16.0		口唇部釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	18c 後半 貝目痕
	584	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	鉢	口縁部	(33.4) (底)		口唇部釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	585	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	鉢	口縁部	(33.4) (口)		口唇部釉剥ぎ	灰オリーブ	にぶい赤褐	良好	
	586	石塔周辺	-	-	陶器	-	甕か鉢	底部	(17.4) (底)		底面にも釉	灰	にぶい赤褐	普通	
89	587	石塔周辺	-	-	陶器	-	播鉢	胴～底 部	(11.4) (底)		-	-	にぶい赤褐	普通	底部糸切り離し
	588	石塔周辺	攪乱	-	陶器	苗代川	播鉢	胴～底 部	(14.8) (底)		底部無釉	オリーブ黒	暗赤褐	良好	19c 以降
	589	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	瓶	頸～胴 部	-		内面一部無釉	透明	灰白	良好	
	590	石塔周辺	攪乱	-	磁器	肥前系	瓶	胴部	-		内面無釉	透明	灰白	良好	
	591	石塔周辺	-	-	磁器	肥前系	瓶	底部	(5.4) (底)		内面・壘付無釉	灰白	灰白・にぶ い橙	良好	波佐見か
	592	H13	I	-	磁器	-	瓶	底部	7.0 (底)		内面無釉	灰白	灰	良好	
	593	E4・5	I・ 攪乱	-	磁器	肥前系	瓶	底部	(7.2) (底)	圏線あり	壘付釉剥, 内面無釉	灰白	灰白	普通	
	594	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	壺	口縁部	(17.6) (口)		口唇部釉剥ぎ	黒褐	灰褐	良好	
90	595	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	壺	胴～底 部	(13.0) (底)		内外面	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	貝目痕 18c
	596	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	甕	口縁部	(31.0) (口)		内外面	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	18～19c
	597	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	甕	口縁部	(31.0) (口)		口唇部釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	598	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	甕	口縁部	(30.2) (口)	縄状突起	口唇部釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	599	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	甕	口縁部	(44.8) (口)		口縁内外一部無釉	オリーブ黒	赤灰	良好	18～19c
	600	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	甕	頸～胴 部	-	掻き落と し文	内外面	オリーブ黒	にぶい黄褐	良好	18c 後半
	601	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	甕	胴部	-	縄状突起	内外面	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	602	石塔周辺	-	-	陶器	苗代川	甕	胴部	-	縄状突起	内外面	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	603	E4	攪乱	-	陶器	龍門司	仏飯器	底部	3.8 (底)		底部無釉	白化粧土・褐釉 暗オリーブ褐	灰	良好	
	604	E5	攪乱	-	陶器	龍門司	灯明皿	底部	4.8 (底)		外面無釉	褐	灰白	良好	底部糸切り離し 見込みにゴマ目 痕5か所有り
605	石塔周辺	-	-	陶器	元庵院	仏花瓶	底部	5.0 (底)		外面胴下部・内面無 釉	黒褐	にぶい赤褐	良好	底部糸切り離し	

第 18 表 近世石塔周辺出土石製品観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
91	606	E4	攪乱	-	硯	(9.80)	4.30	1.40	(69.2)	頁岩	

第 19 表 近世石塔周辺出土金属製品観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	部位	大きさ	重量 (g)	備考
84	536	SD6	-	16	角釘	頭部	残存長 4.5 cm 厚さ推定 6 mm	11.8	
85	537	SK13	-	1	角釘	最先端	残存長約 2 cm 釘同士が附着している。 木質が残存。	2.3	2 点の釘が附着 木質が残存
91	607・608	-	I	-	煙管	完形	火皿 (口径) 1 cm 高さ 0.5 cm 雁首 5.1 cm 最大厚 1.2 cm 吸口 8.1 cm 最大厚 1.15 cm	(607) 7.8 (608) 11.8	18c 後半頃と推定 (古泉氏の分類)

第7節 時期不明の遺構

杭列 (第92図)

F-5・6区のIVb層上面で検出された。この付近は比較的ピットが多くみられ、そのうち並んだものを杭列とした。南側の杭列1号・2号とも東西に並び、すぐ西側の溝状遺構1・2号と直交する。ピット間の間隔はほぼ1.8m程度で一定であるが、2号の西側2基のピット間のみ1m程度と短い。大きさは、平面で1号が約20～30cm、2号が約25～35cm、深さは1号が約20～45cm、

2号が約30～55cmであり、2号の方が大きく深い。これは1号上面がより削平を受けているためであると考えられる。ピットの底面はほぼ標高56.3m付近で一定である。埋土はアカホヤ火山灰を含んだ黒色土で、1号より2号の方がより多く含んでいる。埋土中に遺物や炭化物は含まれておらず、時期は不明である。



第92図 杭列1号・2号

第5章 自然科学分析

集石遺構内から出土した炭化物について、平成30年度にパリノ・サーヴェイ株式会社、令和元年度に株式会社パレオ・ラボに放射性炭素年代測定の委託を行った。以下にその分析結果を掲載する。なお、報告書刊行における集石号名の変更に伴い、分析時の号名も報告書と同様に變更し、順序も号数どおりに變更している。

第1節 出土試料の自然科学分析（年代測定） パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、集石7号、集石10号、集石16号、集石17号、集石19号から出土した炭化物5点である。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。

液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。

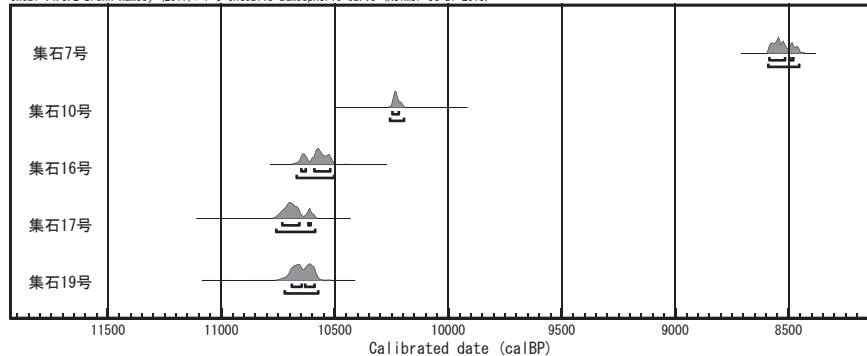
放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3（Bronk, 2009）を用いる。較正曲線はIntcal13（Reimer et al., 2013）を用いる。

第20表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状 (種類)	分析 方法	測定年代 yrBP	δ13C (‰)	暦年較正用	暦年較正年代				確率	Code No.	
						年代値					pa1-	YU-
集石7号	炭化材 (コナラ亜属 コナラ節)	AAA	7750 ± 25	-27.09 ± 0.46	7751 ± 27	σ cal BC 6636 - cal BC 6567	8585 - 8516	calBP	0.490	pa1- 11601		
						cal BC 6544 - cal BC 6531	8493 - 8480	calBP	0.192			
						2σ cal BC 6641 - cal BC 6505	8590 - 8454	calBP	0.954			
集石10号	炭化材	AAA	9075 ± 30	-29.50 ± 0.65	9075 ± 31	σ cal BC 8297 - cal BC 8269	10246 - 10218	calBP	0.121	pa1- 11602	YU- 8754	
						cal BC 8308 - cal BC 8246	10257 - 10195	calBP	0.251			
						2σ cal BC 8719 - cal BC 8554	10668 - 10503	calBP	0.954			
集石16号	炭化材 (コナラ亜属 コナラ節)	AAA	9355 ± 30	-27.67 ± 0.59	9357 ± 29	σ cal BC 8699 - cal BC 8679	10648 - 10628	calBP	0.490	pa1- 11604	YU- 8756	
						cal BC 8641 - cal BC 8571	10590 - 10520	calBP	0.192			
						2σ cal BC 8719 - cal BC 8554	10668 - 10503	calBP	0.954			
集石17号	炭化材 (コナラ亜属 コナラ節)	AAA	9450 ± 30	-26.64 ± 0.53	9452 ± 30	σ cal BC 8783 - cal BC 8707	10732 - 10656	calBP	0.490	pa1- 11605	YU- 8757	
						cal BC 8668 - cal BC 8658	10617 - 10607	calBP	0.192			
						2σ cal BC 8809 - cal BC 8638	10758 - 10587	calBP	0.954			
集石19号	炭化材 (カヤ)	AAA	9415 ± 30	-23.52 ± 0.61	9416 ± 29	σ cal BC 8741 - cal BC 8697	10690 - 10646	calBP	0.490	pa1- 11603	YU- 8755	
						cal BC 8682 - cal BC 8640	10631 - 10589	calBP	0.192			
						2σ cal BC 8772 - cal BC 8624	10721 - 10573	calBP	0.954			

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。4) AAAは酸-アルカリ-酸処理を示す。5) 暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。8) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017): r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)



第93図 暦年較正結果

3. 結果

結果を第20表と第93図に示す。測定年代は集石7号が7750 ± 25yrBP, 集石10号が9075 ± 30yrBP, 集石16号が9355 ± 30yrBP, 集石17号が9450 ± 30yrBP, 集石19号が9415 ± 30yrBPであった。

第20表には較正した暦年代も併記する。暦年較正は、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、その後訂正された半減期(14Cの半減期5730 ± 40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代は、集石7号が8590 ~ 8454 calBP, 集石10号が10257 ~ 10195 calBP, 集石16号が10668 ~ 10503 calBP, 集石17号が10758 ~ 10587 calBP, 集石19号が10721 ~ 10573 calBPである。集石16号, 集石17号, 集石19号の年代値の範囲は重なる。集石7号, 集石10号はそれ以降の値を示している。

材同定の結果は集石7号がコナラ亜属コナラ節, 集石16号がコナラ亜属コナラ節, 集石17号がコナラ亜属コナラ節, 集石19号がカヤであった。

調査所見によると、縄文時代早期の遺構が検出されているとされ、今回の年代測定結果はすべて縄文時代早期の年代の範囲内に入り、調和する結果である。

引用文献

Bronk Ramsey, C., & Lee, S., 2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730.

Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hafidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55,

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
Zaur Lomtadze・小林克也

1. はじめに

鹿児島県志布志市の宇都上遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、集石遺構である集石1号, 集石3号, 集石5号, 集石7号, 集石8号, 集石29号から出土した炭化材各1点の、計6点(試料No.1~6: PLD-38829~38834)である。いずれの試料も、最終形成年輪は残っていなかった。

測定試料の情報、調製データは第21表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ, コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代, 暦年代を算出した。

3. 結果

第22表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比(δ13C), 同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代, 第94図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代(yrBP)の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差, 標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い(14Cの半減期5730 ± 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。14C年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

以下、14C年代および2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。なお、暦年代と縄文土器との対応については、小林(2017), 工藤(2012), 新東(2008)を参照した。

集石1号の試料No.3(PLD-38831)は、14C年代が9345 ± 35 14C BPで、2σ暦年代範囲は8720-8540 cal BC(92.2%)および8509-8487 cal BC(3.2%)の暦年代

を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石3号の試料 No. 5 (PLD-38833) は、14C年代が 9275 ± 35 14C BP で、 2σ 暦年代範囲は 8622-8422 cal BC (87.7%), 8407-8389 cal BC (2.3%), 8381-8349 cal BC (5.4%) の暦年代を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石5号の試料 No. 4 (PLD-38832) は、14C年代が 9515 ± 35 14C BP で、 2σ 暦年代範囲は 9125-8998 cal BC (40.1%) および 8924-8737 cal BC (55.3%) の暦年代を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石7号の試料 No. 1 (PLD-38829) は、14C年代が 9375 ± 35 14C BP で、 2σ 暦年代範囲は 8746-8561 cal BC (95.4%) の暦年代を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石8号の試料 No. 2 (PLD-38830) は、14C年代が 9445 ± 40 14C BP で、 2σ 暦年代範囲は 8833-8621 cal BC (95.4%) の暦年代を示した。これは、縄文時代早期前葉に相当する。集石29号の試料 No. 6 (PLD-38834) は、14C年代が 8505 ± 30 14C BP で、 2σ 暦年代範囲

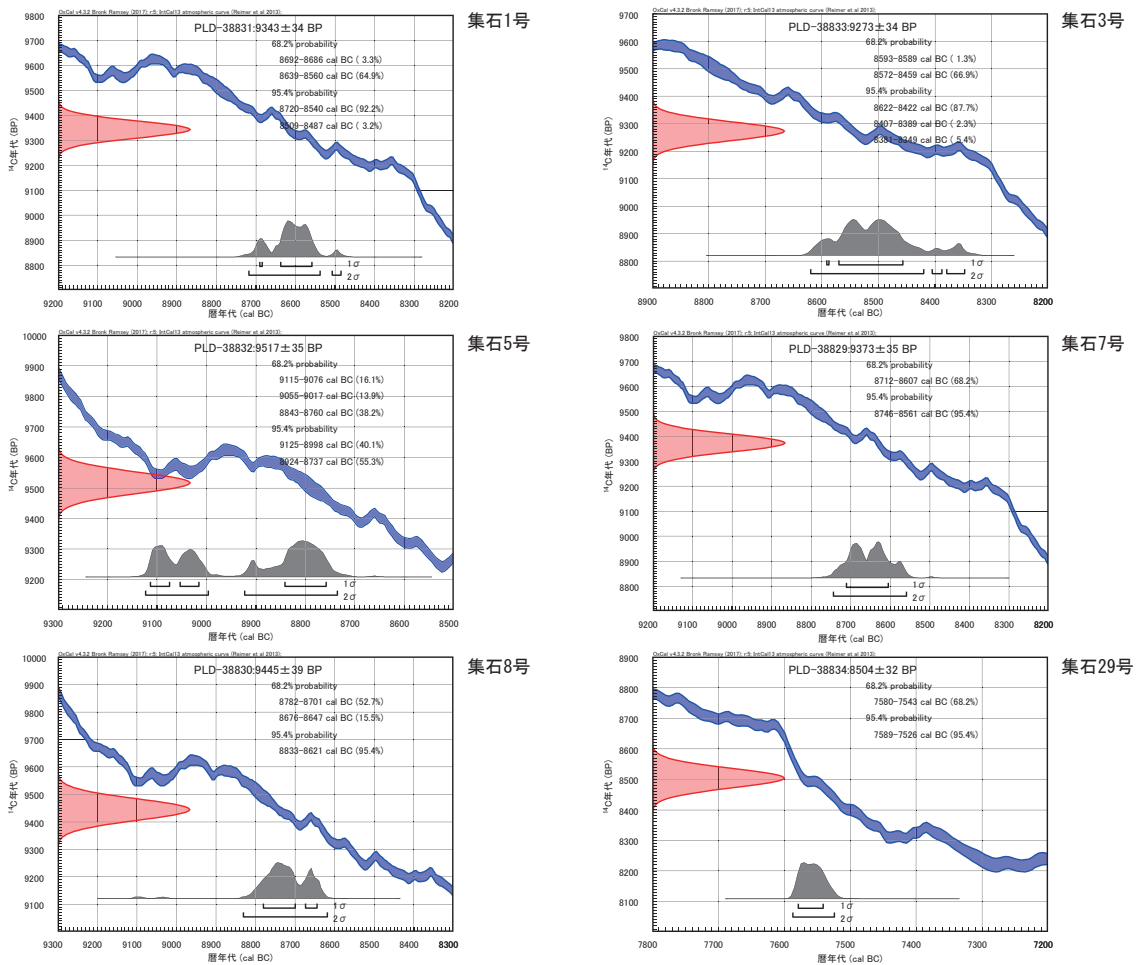
は 7589-7526 cal BC (95.4%) の暦年代を示した。これは、縄文時代早期中葉に相当する。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—。263p, 同成社。
 工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—。373p, 神泉社。
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J.,

第 21 表 測定試料および処理 (全試料同じ)

試料データ	前処理
種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)



第 94 図 暦年較正結果

Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13

Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869–1887.

新東晃一 (2008) 早期南九州貝殻文系土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 186–193, アム・プロモーション.

第 22 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-38831 集石 1 号	-28.80 \pm 0.15	9343 \pm 34	9345 \pm 35	8692–8686 cal BC (3.3%) 8639–8560 cal BC (64.9%)	8720–8540 cal BC (92.2%) 8509–8487 cal BC (3.2%)
PLD-38833 集石 3 号	-26.08 \pm 0.14	9273 \pm 34	9275 \pm 35	8593–8589 cal BC (1.3%) 8572–8459 cal BC (66.9%)	8622–8422 cal BC (87.7%) 8407–8389 cal BC (2.3%) 8381–8349 cal BC (5.4%)
PLD-38832 集石 5 号	-25.96 \pm 0.20	9517 \pm 35	9515 \pm 35	9115–9076 cal BC (16.1%) 9055–9017 cal BC (13.9%) 8843–8760 cal BC (38.2%)	9125–8998 cal BC (40.1%) 8924–8737 cal BC (55.3%)
PLD-38829 集石 7 号	-28.60 \pm 0.18	9373 \pm 35	9375 \pm 35	8712–8607 cal BC (68.2%)	8746–8561 cal BC (95.4%)
PLD-38830 集石 8 号	-30.76 \pm 0.22	9445 \pm 39	9445 \pm 40	8782–8701 cal BC (52.7%) 8676–8647 cal BC (15.5%)	8833–8621 cal BC (95.4%)
PLD-38834 集石 29 号	-26.11 \pm 0.14	8504 \pm 32	8505 \pm 30	7580–7543 cal BC (68.2%)	7589–7526 cal BC (95.4%)

第 3 節 宇都上遺跡出土遺物の化学分析

鹿児島県立埋蔵文化財センター

本遺跡出土の土器について、双眼実体顕微鏡による形状観察及びエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による成分分析を行った。

1 試料

表面に塗布または付着している赤色粒子 土器 2 点

2 観察・分析方法

(1) 形状観察

以下の機器を使用して、形状を観察し撮影を行った。

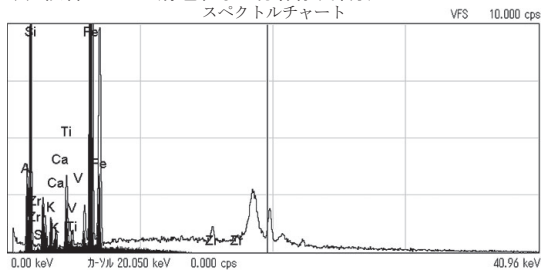
双眼実体顕微鏡 (ニコン製 SMZ1000) での 8 ~ 80 倍観察

(2) 成分分析

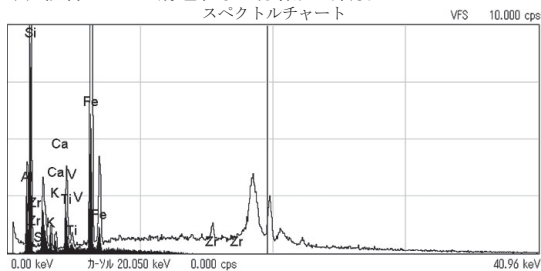
エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (堀場製作所製 XGT-1000, X 線管球ターゲット: ロジウム, X 線照射径 100 μm) を使用し、次の条件により分析を行った。

X 線管電圧: 15/50kV 電流: 自動設定

(1) 試料 No. 305 (赤色粒子の付着有り部分)



(2) 試料 No. 305 (赤色粒子の付着無し部分)



第 95 図 成分分析結果

測定時間: 200 秒 X 線フィルタ: なし

試料セル: なし パルス処理時間: P3

定量補正法: スタンダードレス

赤色粒子の付着している部分と付着していない部分の分析を行い、比較した。

3 結果

試料の蛍光 X 線分析スペクトルチャート (成分分析) と FPM 定量結果の 1 例である。

4 考察

蛍光 X 線分析の結果から赤色粒子を分析すると、鉄の成分であり、場所によって差が生じた。赤色粒子の付着の有無によるものであり、付着有の部分の方が鉄の濃度が高い。このため、土器 (試料 2 点) に付着する赤色粒子は鉄を成分とする赤色顔料であり、双眼実体顕微鏡による形状観察により、針状結晶は見られなかったので、パイプ状ベンガラではなく、鉱物由来のベンガラと考えられる。

第 23 表 FPM 定量結果

元素	ライン	FPM 定量結果	
		強度 (cps/mA)	質量濃度 (%)
アルミニウム	K	36.32	21.16
けい素	K	139.91	52.15
硫黄	K	1.46	0.19
カリウム	K	17.51	2.48
カルシウム	K	9.04	1.04
チタン	K	69.77	1.98
バナジウム	K	1.87	0.04
マンガン	K	41.59	0.66
鉄	K	1539.93	20.18
ジルコニウム	K	20.17	0.13

元素	ライン	FPM 定量結果	
		強度 (cps/mA)	質量濃度 (%)
アルミニウム	K	29.88	23.13
けい素	K	107.3	61.92
硫黄	K	0.57	0.13
カリウム	K	9.58	2.4
カルシウム	K	6.22	1.26
チタン	K	54.14	2.78
バナジウム	K	2.19	0.08
鉄	K	386.67	8.18
ジルコニウム	K	14.97	0.12

第6章 総括

ここでは、検出遺構・出土遺物が多い縄文時代早期・中世・近世について記述する。

第1節 縄文時代早期

1 遺物

(1) 年代等

型式別の出土量を比較すると、前平式土器が最も多く、加栗山式土器が続く、この2型式で大半を占める。このことから調査区付近では、早期前葉において主に活動が行われたと考えられる。また早期中葉から後葉にかけては出土量が少なく、周辺の遺跡では多くみられることから、この時期はごく短期間の活動にとどまったか、時期による選地の違いなどが考えられる。

(2) 縞状を呈する土器

小牧3A式土器の282～285、305は、内面の色調が浅黄橙色と赤褐色に分かれる。これらは同一個体と考えられるため、未実測分も含め、写真図版22内に掲載した(ただし、図版22内の下の2点は別個体)。

蛍光X線分析(第5章第3節)によると、内外面とも赤褐色の部分は浅黄橙色の部分より鉄分の反応が強く出しており、鉄分(ベンガラ)を含む液体を塗りつけたと考えられる。

顔料は、内面全体に渡って横縞状に塗られている。口縁部の下位及び底部から3cm程度上位には幅広く、それらの間は幅1cm程度の細めの線が引かれている。これらの線が横方向に輪状に数回塗られたか、あるいは螺旋状を呈するのか、詳細は不明である。口縁部の内面は、全面に塗布した後、上位の縦幅2cm程度を工具で横方向にナゲ消している。口唇部は顔料が部分的に塗られている。外面については、焼成時に火を直接受けたためか内面よ

りかなり不明瞭である。285は外面も横方向に塗られているが、内面と同様であったかは不明である。断面を観察すると、顔料が塗られていない部分の中がアンコ状に黒色化しているが、赤褐色に塗られた部分は黒色化が極めて弱い。これは鉄分が黒色化を弱めた結果と推測される。顔料は何らかの文様を意図した可能性があるが、破片のため、全体は不明である。類似例として、口縁内面上位に赤色顔料(ベンガラ)を塗布する資料が、日置市の稲荷原遺跡や上山路山遺跡などにあり、型式はいずれも岩本式土器となっている。

2 遺構

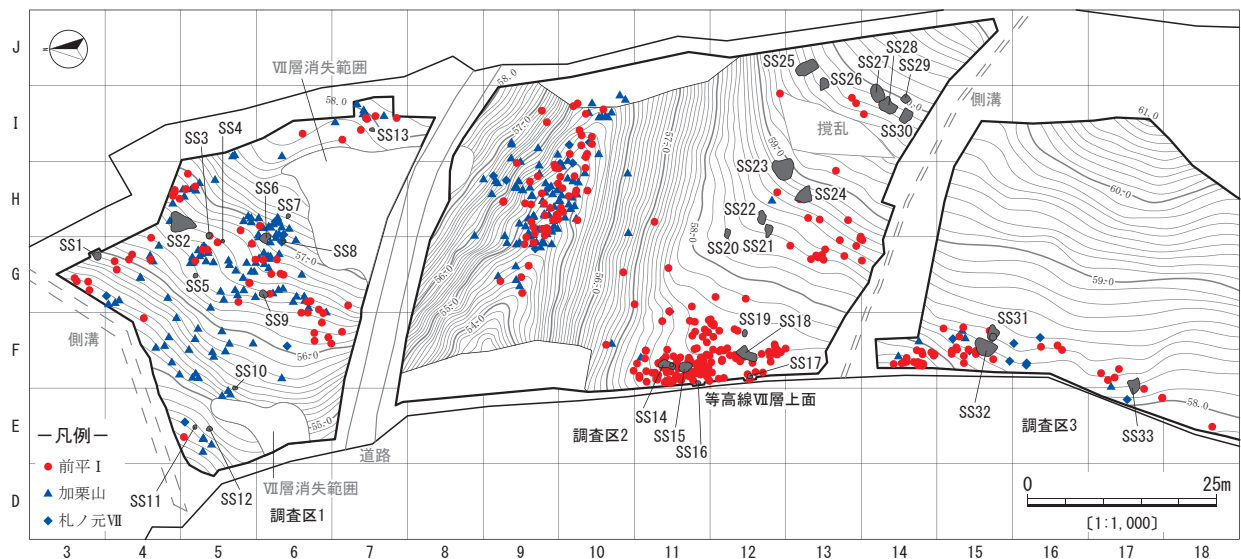
(1) 分布

遺構は、集石33基と土坑7基及び落とし穴が検出されている。集石は主に調査区1～3に分かれており、遺物分布図(第96図)と比較すると、調査区1は加栗山式土器、調査区2は前平式土器I類、調査区3は札ノ元VII類土器が多い。礫は安楽川から8～10区の谷部を通り運んだと考えられ、早期前葉の頃、調査区2→1→3の順で主な活動場所が変更されたことが推測される。

(2) 集石の年代

集石内から土器や炭化物が出土しており、年代を考える参考となる。出土した土器の型式及び炭化物の較正年代値(2σ暦年代)を第24表に記した。遺構内遺物は、調査区1は加栗山式土器、調査区2は前平式土器I類、調査区3は前平式土器I類・札ノ元VII類土器が主体となっており、遺物分布とはほぼ一致する。

土器型式ごとの放射性炭素14年代値と較正年代値は立神倫史・小林謙一両氏によりまとめられている(立神・小林2019)。それによると較正年代値は、前平式土



第96図 縄文時代早期集石・遺物分布図

器は 11,080 ~ 10,565calBP, 加栗山式土器は 10,775 ~ 10,230calBP で、札ノ元Ⅶ類土器は数が少ないため、年代値はない。調査区 1 内の集石内炭化物は 6 基分の資料があり、較正年代値は、集石 5 号のみやや古くなっているが、ほぼ加栗山式土器の年代と重なる。ただし集石 7 号のみかなり新しい年代が出たため、別試料で 2 回目の測定を実施すると、ほぼ他試料と近似した測定結果が得られた。調査区 2 内の集石内炭化物は 4 基分の資料があり、較正年代値は 3 基は前平式土器の値にほぼ一致するが、集石 29 号の 1 基のみは新しい早期中葉となる値が出ている。調査区 3 では炭化物が出土した集石はなく不明である。

このように、土器型式ごとの放射性炭素 14 年代値と較正年代値の分析成果と本遺跡出土土器を比較すると、やや異なる部分もあるが、大きな相違点はみられなかった。

(3) 土坑等

土坑については谷部の南側にあたる 12 ~ 14 区にやや集中して検出された。形状は楕円形が多く、15 ~ 30 cm 程度の深さである。埋土はⅥ層土主体で、いずれも遺物や炭化物を含まない。集石に近いものが多く、調理施設に関連する可能性も考えられる。

H-13 区において 1 基のみ検出した落とし穴は、東側が攪乱を受けており、攪乱箇所にも他の落とし穴が存在した可能性がある。埋土が他の土坑と異なり、Ⅴ a 層上位部分の性質であったことから、早期後葉頃の遺構と考えられる。周辺の集石はすべて早期前葉のものであり、早期後葉には狩猟場として利用されていたと推測される。なお、落とし穴の上部から磨製石鎌が出土したが、落とし穴がほぼ埋没したところに入りこんだものであり、落とし穴と時期が異なる可能性が高い。

3 周辺遺跡との関連

宇都上遺跡が立地する安楽川下流域では、他にも多くの縄文時代早期の遺跡がある。そのうち調査された遺跡は、宇都上遺跡より 1 km 北側の緩斜面に位置する稲荷上遺跡、本遺跡の対岸で、安楽川・尾野見川の浸食を受けた瘦尾根の台地上に位置する稲荷迫遺跡、隣接した台地縁辺部に位置する高吉 B 遺跡、その南側の台地上に位置する船迫遺跡である。その遺跡ごとの遺構・遺物型式の概略は第 25 表のとおりである。

周辺域を外観すると、早期前半は最も河川に近く標高が低い宇都上遺跡・稲荷迫遺跡や高吉 B 遺跡の台地縁辺部で集石等を利用した調理場として、早期後半は高吉 B 遺跡・稲荷上遺跡などで調理場として、また台地上の船迫遺跡は石鎌が出土しており、狩猟場であったと考えられる。

縄文時代早期の遺跡は安楽川上～下流域でくまなくみられるが、前～晩期は下流域に多くなるため、早期にお

いて河川近くの段丘から台地縁辺部へ移動し、下流域では定住化したと推測される。なお、いずれの遺跡でも堅穴建物跡などは 1 軒も検出されていないが、遺物や集石の量から定住していた可能性が高く、調査区外に存在すると推測される。

第 24 表 炭化物年代測定結果と遺構内土器型式

	集石	測定社※1	測定値※2		遺構内土器
調査区 1	1号	バレオ	10670-10490	cal BP (92.2%)	加栗山
	2号				加栗山
	3号	バレオ	10572-10372	cal BP (87.7%)	加栗山
	5号	バレオ	11075-10948 10874-10687	cal BP (40.1%) cal BP (55.3%)	加栗山
	6号				加栗山
	7号	バリノ	8590 ~ 8454	cal BP (95.4%)	加栗山
		バレオ	10696-10511	cal BP (95.4%)	
	8号	バレオ	10783-10571	cal BP (95.4%)	
	9号				加栗山
	11号	バリノ	10257 ~ 10195	cal BP (95.4%)	
	12号				前平
	調査区 2	14号			
15号					前平
16号		バリノ	10668 ~ 10503	cal BP (95.4%)	前平
17号		バリノ	10758 ~ 10587	cal BP (95.4%)	前平
18号					前平? 下剥峯
19号		バリノ	10721 ~ 10573	cal BP (95.4%)	
23号					前平
24号					前平
25号					前平
調査区 3	29号	バレオ	9539-9476	cal BP (95.4%)	
	31号				札ノ元Ⅶ
	32号				札ノ元Ⅶ
	33号				札ノ元Ⅶ

※1 測定会社は、「バリノ」はバリノ・サーヴェイ、「バレオ」はバレオ・ラボを示す。
※2 なお、バレオ・ラボの測定結果では、B C 値のみの記述であったため、1950 をプラスし B P 値として用いている。また、80%以下の値はカットしている。

第 25 表 周辺遺跡の遺構と土器型式

遺跡名	縄文早期の遺構	土器型式別の遺物量						
		前平	加栗山	石坂	下剥峯	手向山	平橋	塞ノ神
稲荷上	集石 3 基	×	×	×	×	×	△	△
稲荷迫	集石 64 基・連穴土坑 3 基・土坑 2 基	◎	◎	○	△	○	△	△
宇都上	集石 33 基・土坑 7 基・落とし穴 1 基	◎	◎	△	△	△	△	△
高吉 B	集石 141 基・連穴土坑 4 基・土坑 8 基	△	△	◎	△	◎	△	◎
船迫	なし	×	×	×	△	×	×	×

◎多い ○やや多い △少ない ×なし

第 2 節 中世

1 遺物

(1) 遺構内遺物等

中世の包含層は、後世の攪乱によって完全に削平されている。またタイ産陶器や青磁皿のように、完形に近い個体が出土したものもあるが、多くの遺物は一部のみの出土であることから、遺構の上部も削平されたと考えられる。このように、中世の遺物は、遺構内における上部以外と表土出土のものに限られる。

遺構内遺物を見ると、大型土坑 2 基の埋土内には石塔類とともに土師器・青磁・白磁・備前焼播鉢などが出土しており、これらはほぼ 15 ~ 16 世紀代の資料である。このうち青磁皿・碗などの輸入陶磁器や備前焼・常滑焼など、他地域からの搬入品が多く出土している。

一方、これらの出土品の中には、小破片ながら古瀬戸

壺，東播系須恵器捏鉢，口禿白磁皿，鎬連弁青磁碗など，13世紀後半頃のものも含まれている。

溝状遺構1・2号の遺物は大型土坑に比べ少ないことから，溝が造られた時期に大型土坑の上部が破壊され，当時の表土に含まれていたものが溝に入り込んだ可能性もある。

(2) タイ産四耳壺

1個体と思われるタイ産暗緑灰釉四耳壺が大型土坑から出土している。底・胴下部以外は二次的に火を受けて釉が溶けており，下部が地中に埋められた状態で火を受けたと考えられる。また，この四耳壺以外に二次的に焼けたものはないことから，この壺だけは他の遺物と離れた場所に置かれていたと推測される。

時期について，吉岡康暢氏によると，タイ産陶磁器の移入は大きく第一段階（14世紀後半～16世紀前半）と第二段階（16世紀後半～17世紀前半）に分かれ，四耳壺は15世紀前半～中葉に移入のピークを迎える（吉岡・門上2011）。その大部分は沖縄で出土しており，南九州でも少量であるが出土している。これらは南九州において，中世の商人が沖縄島との通商を介し，直接または間接的に中国陶磁に随伴して流入したようである。南九州では中世の拠点港湾をひかえた場所に出土する傾向がみられ，志布志はその一つでもある。四耳壺は志布志市内では，宝満寺遺跡や高城遺跡で出土している。

(3) 五輪塔

大型土坑1号内より出土した五輪塔については石材で分類できる。やや硬質の白色系溶結凝灰岩である451・452・454・459は一体と考えられ，水輪にホゾをもち火輪と連結させる南九州に多い形態で，14世紀代のものと推定される。軽石製の450・453も一体のもので，熊本や鹿児島島の五輪塔の特徴をもつ水輪の最大径が中心部より上位にくるナツメ型で，15世紀代のものと推定さ

れる。やや赤みがかった軟質の溶結凝灰岩である456・457・460は地輪で，小型化の傾向がみられ，16世紀代と推定される。

2 遺構

(1) 大型土坑

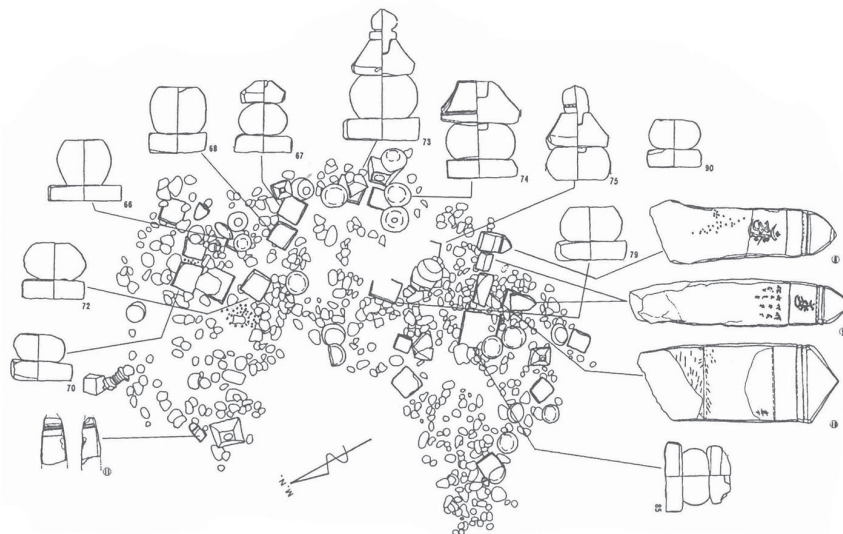
大型土坑1号内には多くの礫が入っている。礫の位置から，西側から石塔や陶磁器などの遺物とともに一気に投げ入れられ，その後埋め戻されたと考えられる。よって周囲に礫を敷いた石塔群が西側のG・F-5区付近に建立されていたが，なんらかの事情で破壊され，この土坑に廃棄されたと推測される。石塔群の周囲に礫が敷かれた例は多く，宮崎市山内石塔群跡（第97図）などがある。石塔群がこの付近にあったと仮定した場合，時期不明としている杭列が極めて近くで検出されており，何らかの関係がある可能性がある。

大型土坑2号の埋土内には石塔や礫が含まれておらず，陶磁器等のみである。このことから，大型土坑2号は1号より後に掘り込まれ，埋没過程で地表面に残存していた遺物片や，木製品など植物質のものが入ったと推測される。

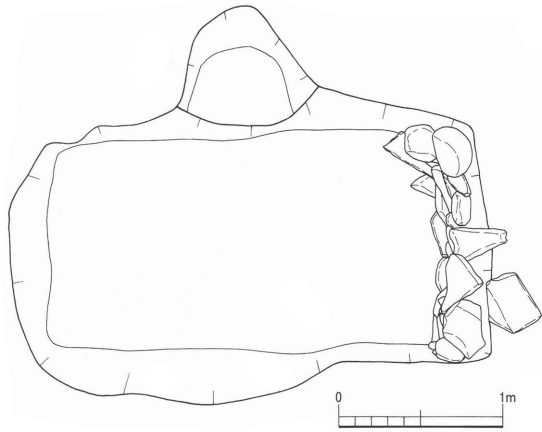
(2) 礫を伴う土坑

土坑8号は，他の土坑が素掘りであるのに対し，周囲に礫を2段以上積んだ様子が見える。このような礫を伴う遺構の例として，県内では大崎町永吉天神段遺跡における火葬土坑1号があり，主体部の側面に角礫が3～4段重ねられている。また未報告であるが，鹿屋市小牧遺跡でも検出されている。

側面に礫を積み，床面に礫を敷き詰めた土坑としては，始良市の市頭C遺跡や鹿屋市領家西遺跡があり，いずれも内部に被熱を受けた跡がみられる。隣接する宮崎県都城市では，床面に礫を敷き詰め，側面に礫を積み上げた土坑が加治屋B遺跡・鶴喰遺跡で1基ずつ検出されてい



第97図 宮崎市山内石塔群の例



第 98 図 鶴喰遺跡 22 号土坑

る。また、床面に礫を敷き詰めた土坑が加治屋B遺跡で2基、西側の側面のみ礫を積み上げた土坑が都城市鶴喰遺跡で1基検出されている。宮崎県えびの市の北田遺跡では、床面に円礫を敷き詰めた土坑が1基検出されている。

類例をみると、床面に礫を敷き詰め、側面に礫を積み重ねる土坑は、その多くが被熱を受け、炭化物などもみられるため、火葬土坑墓もしくは土坑墓の可能性が考えられる。床面のみに礫を敷き詰める土坑も同様である。宇都上遺跡のように、側面の一部に礫を積み上げる例は鶴喰遺跡で1基みられたのみで（第98図）、ほとんど例がない。なお、鶴喰遺跡では鉄釘も出土しているため、土坑墓の可能性が高い。

また、大型土坑1号に廃棄された石塔は、土坑8号の上にあった可能性があり、その場合、土坑8号の上に積み重ねられていた礫や石塔を大型土坑1号内に入れたこととなり、石塔は墓塔であったと考えられる。このように類例や検出状況をみると、土坑8号は土坑墓の可能性が高く、墓の一部であったと判断することができる。

（3）溝状遺構・硬化面

溝状遺構は4条検出されており、地点により1・2号と3・4号の2つに大別される。1・2号はほぼ北から南に直線状に伸びており、等高線に平行である。大型土坑出土の遺物と同時期の遺物が含まれることから、大型土坑と近い時期と想定される。大型土坑は石塔群が破壊された頃に造られており、その後当地が畑などに作り替えられた際の区域境の可能性もある。3号は1・2号と平行であり、同様の用途が考えられる。4号及び硬化面は、現在の道路とほぼ平行であり、旧道の一部の可能性が考えられる。

第3節 近世

1 土坑及び石塔・石碑

土坑4基及び石塔・石碑（第86図）はI-6区に集

中している。土坑10・12号は底面付近しか残存していないため、用途等は不明である。11・13号については、埋土断面に桶状の痕跡がみられたこと、13号の埋土内に鉄釘が入っていたことから、土坑墓の可能性が高い。

石塔・石碑については、文字が刻まれておらず詳細な年代は不明であるが、土坑との位置関係から、15～16世紀頃にそれまで建っていた五輪塔などの石塔を廃棄し、その場所に新たにこれらの石塔・石碑を建立したと推測される。ただし、このような石塔・石碑は近世に建立される場合が多いことから、近世において、過去に五輪塔などの石塔があった場所で、供養等の意味で新しく建立された可能性がある。周辺から18世紀後半頃の遺物が出土することから、少なくともそれ以前に建立されたと考えられる。

遺物は、仏具など供養塔に供えられたと考えられるものがみられるが、播鉢・鉢・甕なども多いため、近くに日常用具の捨て場もあったと推測される。

2 溝状遺構

溝状遺構は2条検出されている。5号については、供養塔に近接し、底面が平坦であることから、供養塔への道として使用されていたと考えられる。6号は、底面に階段状の段があること、現在の側溝や道路と並行であることから、河川から台地上へ上がる際の道路などの用途が考えられる。

（参考文献）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2009『領家西遺跡 天神平溝下遺跡』

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（141）

2012『稻荷迫遺跡』

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）

2014『船迫遺跡・高吉B遺跡』

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（180）

鹿児島県教育委員会（公財）埋蔵文化財調査センター

2018『永吉天神段遺跡3 第2地点-2 古代・中世・近世編』

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（17）

始良市教育委員会

2013『市頭A遺跡 市頭B・C遺跡』

始良市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

志布志町教育委員会

1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

2003『稻荷上遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（32）

宮崎県都城市教育委員会

2007『鶴喰遺跡（中世編）』都城市文化財調査報告書第79集

2008『加治屋B遺跡（平安時代～近世編）』

都城市文化財調査報告書第86集

中世墓資料集成研究会 2004

『中世墓資料集成-九州・沖縄編（2）』

吉岡康暢・門上秀叡 2011『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社

立神倫史・小林謙一 2019「鹿児島県における縄紋時代草創期～早期の年代測定事例-土器付着炭化物を中心に-」『研究紀要年報 縄文の森から』第11号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（204）
主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

宇都上遺跡

発行年月 2020年3月
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811
印刷所 濱島印刷株式会社
〒899-0052 鹿児島市上之園町17番2号
TEL 099-255-6121 FAX 099-259-1629

